KAIZO

改造

八月號

1925


色澤鮮明——永久不變の
プラトンインキ
RED WRITING
PLATO
舶來品に優る
プラトン
萬年筆

ANIMASA

das erste kausal wirkende und per os gegebene
organotherapeutische Mittel gegen

Arteriosklerose

動脈硬化症

の治療劑・腦溢血豫防劑として近時
醫界の愛用頗る盛んなる……

内服用脈管臟器製劑

アニマザ

幼若動物の血管内膜及中膜より抽出せる成分

血管の自然防禦物質に對する臟器親和性を徐々に發現せしむるここにより原因的に作用し、頭痛・眩暈・不眠・倦怠等の自覺的症狀を消失せしめ、昂進せる血壓を低下し、肉體的及精神的作業能力を改善す。

普通一錠づゝ一日三回食間にこれを與へ、一クールは一ヶ月以上三ヶ月までとす、從來注射劑として行はれたる諸種の治療劑に優り、内服藥なるを以て用法簡便、何等の有害作用を認めず、患者に苦痛と不快とを與へずして適用し得べし。



左の實驗報告書あり總代理店あて御申越次第送呈す
(一)、臟器製劑アニマザとその血壓低下作用に關する實驗
(二)、動脈硬化症に對するアニマザの臨床實驗

總代理店　東京本町　株式會社　田邊元三郎商店
關西發賣元　大阪道修町　田邊五兵衛商店



改造 八月號目次



◇長崎高等商業學校教授 伊東勇太郎氏新著◇

好評 五版

文檢受驗用 英語研究者のために

（四版亦々賣切五版出來）

四六判最上美本 全一冊三百餘頁 正價金貳圓 送料十二錢

▼▼炬火は挑げられた!! 英學生の研究方針▲▲

英語研究の暗路を照す燈明は輝き出た。

無方針の勉學は徒勞に終る而も從來最少の時日を以て最大の實效を舉ぐる勉强方法を明示せる書なく英學生は空しく暗中模索の狀態であつた。本書出て初めて英語界多年の渴望は充されたと謂ふべきである。本書は中學卒業後獨學三箇年で文檢に合格するだけの實力のつく勉强の方法を懇切に說き各年次に付て研究の態度目標方法を叙べ讀むべき書物の內容程度價値筆致を示し行文流麗にして津々たる趣味を含み一般英文學愛好者高等諸學校學生の趣味の讀物とするも不盡の妙趣卷を措く能はざるものがある一般英語英文學研究者の必讀書なり。

◇市川一郎氏譯著◇

大好評 新刊

高尚なる理論を平易に講義せる 哲學概論

（眞に自ら哲學せずには居れぬ眞面目な初學者の侶伴）

菊判最上製美本 全壹冊五百餘頁 正價金四圓八拾錢 送料十八錢

本書はフレッチア博士の原書を譯補せるもので內容は用語の簡潔にして平明なるは勿論吾々各自が日常屢遭遇する所の經驗を例證として講述し眞に自ら哲學せずには居られぬ眞面目なる初學者をして毫も失望せしむる所が無い。煩雜無味なる哲學的知識の押賣を事とする從來の類書に依つて充されざる人々は速に本書に就て自家內心の深奧なる要求を滿足せしむ可きである。―（哲學研究初步として必讀書）―

芭蕉 奥の細道評釋 小林一郎著 壹圓八拾錢 送料十二錢

新撰 徒然草講義 石川誠著 貳圓五拾錢 送料十八錢

性慾教育の研究 羽太鋭治著 正價金參圓 送料十八錢

活動寫眞と教育 中澤美治著 正價金貳圓 送料十二錢

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき『カロツト』の効力

三月五日の讀賣新聞はポー梨の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバツトではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バツトの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ様になるので不知不識の間に身體を悪くしてゆくものである。

煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものではない。

所が玆に面白い一つの禁煙方法がある。『カロツト』を口にすれば煙草を用ふるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく、適量の朝鮮人蔘の精氣を含んで居るから、根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き精涼な甘味は軽い刺戟と快感を長く口中に殘して之れを口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて煙草を吸ふ氣にはなれない。殊に口中の悪臭又は食後や夜中に口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する效力がある。但しこれは眞劍に煙草をやめようとする人でなければお勧め出來ない何故なら、再び煙草がまづくて吸ふ氣になれないからである。これは實業之日本社あたりでも實驗してこの效力に驚いてゐるのでもわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病、消化不良その他禁煙したら屹度治り肥つて來ると感じてゐる方は是非之のカロツトを試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

改造社運動叢書

〔改訂版〕

梅澤親光著

（四六判上製）

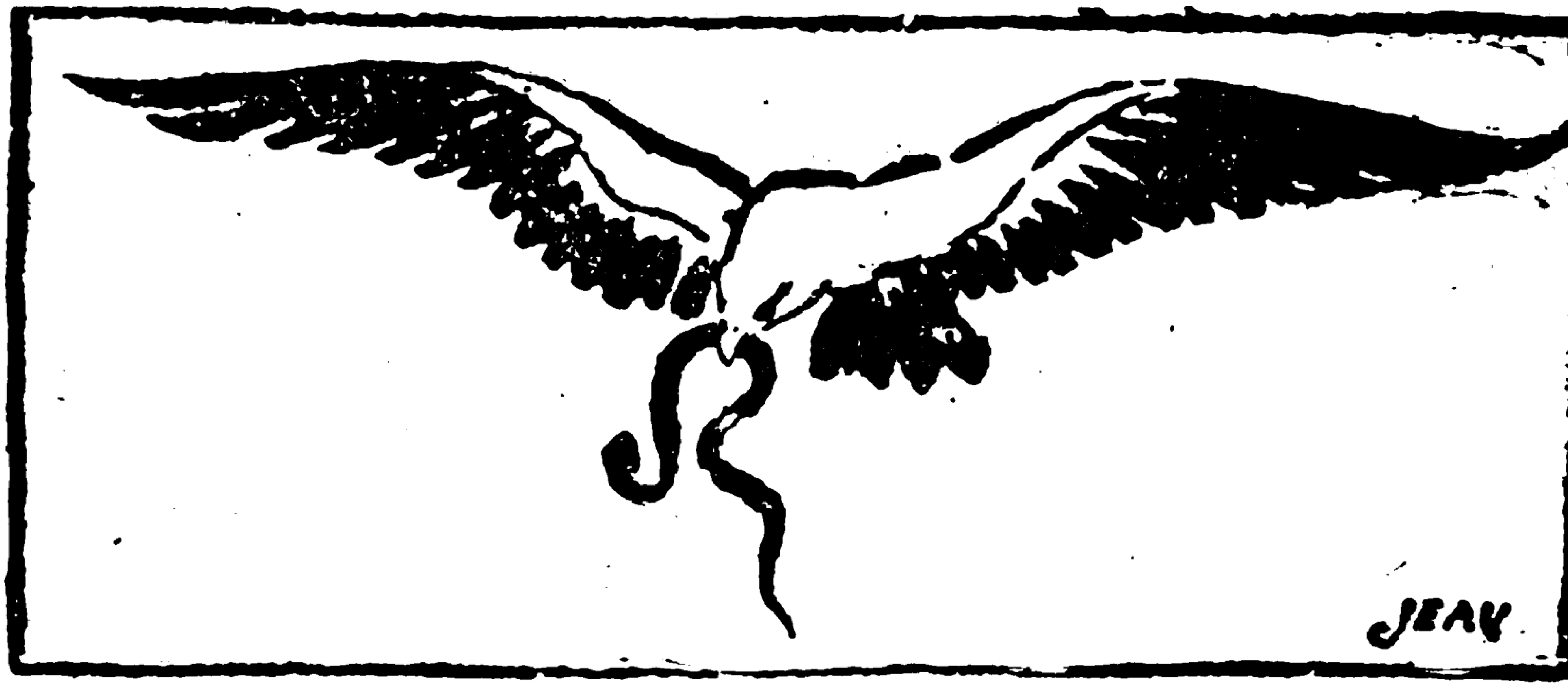
定價貳圓　送料二十錢

水泳

水泳界の權威梅澤氏が、一般水泳者のためにかいた我國で唯一無二と云つていい遊泳子の好侶伴。今までは水泳が科學的に取扱はれなかつたが、氏は新式の水泳術を科學的に、系統的に纏めて海洋男子のために、大に蘊蓄を傾けた。

著者	書名	判型・價格
熊谷一彌著	テニス	四六判上製　定價二圓三十錢　送料二十二錢
香山蕃著	ラグビー	四六判上製　定價二圓五十錢　送料二十二錢
三宅大輔著	野球	定價二圓八十錢　送料二十二錢
平井左門著	山岳スキー	定價二圓五十錢　送料二十二錢
野口源三郎著	オリンピアへの旅	定價二圓五十錢　送料二十二錢

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京二〇四八



(八月號)

支那問題に對する問答

A　どうだ、この頃の英國政府の狼狽さ加減は。あれだけ日英同盟を邪魔物扱ひにしながら近頃は日本の御機嫌ばかり取つてゐるやうに見えるが。

B　フム。日本政府は大得意だらうテ。おれは狡猾な、そして、拜金宗の英國の愛國主義は嫌ゐだが、今となれば何だか窮鳥懐に入るの感があるネ。

A　大きなことを云ふなよ。

B　なにが大きなことだ！

A　一體君はなぜ支那が最初に於て經濟斷交を日英二國に行ひ、後で單に英國だけに狭めたかを知つてゐるか。

B　フム、それはわかるよ。

A　君は七月上旬にチエンバーレンから幣原に向つて支那問題に對して何とかうまい話があつたといふことを新聞で見たらうナ。

B　見たよ、あれは一體どうした譯だ、日英が協調して不平等條約を撤廢せず飽まで强硬に支那に於ける優越權を手强く擁護すると云ふにあるかネ。

A　サア、そこは天機洩らすべからずだネ。しかしだ、君は支那政府が結局英國だけに經濟斷交したのはどう云ふ原因か矢張りわからぬのだネ。

B　さあ、わからぬともないがネ。先づ何とかせんと欲せば馬を倒すの類かネ。

A　そこだ。一體日本人は大馬鹿だよ。支那が英國に鋒を轉換したらもう大厄でも免れたやうに大平樂を並べてゐる。英國が屈從すれば一番困るのは英國でなくして日本の立場ぢやないか。

B　これは驚いた、君は大した帝國主義者だネ、矢張りいろ〱の特權を永久

に他人の領土に認めたいと云ふのだネ。

A　そう見られても止むを得ないさネ、しかし我國の資本は君も御承知の通り紡績業だけにても二億三千萬を南支に投資しておるのだぜ。

B　そうかネ、その二億三千萬圓がどうしたのだ。

A　英國の態度一つで、我が南滿や、山東の問題にも波及するやうになるよ。そうなると中支南支に投資した總ての巨額もフイになるよ。

B　勿論、山東や南滿の問題に波及するさ、それがどうした。

A　どうしたもあるものか、一旦我國がロシアや獨逸の如く支那領土に於て何等の特權もない國となつたときは日本の立場は支那に於てどうなると思ふ。

B　どうもならないさ、全體が平等になつて支那とは此上なき友人となるさ、君は一體資本家としての頭ばかり働きすぎるよ、そして帝國主義の提灯持ちばかりして。

A　それなら君に問ふが、君は米國の今回の問題に對する横紙破りは許してよいと云ふのか。

B　ウム……米國の世界支配慾は君以上に嫌ゐだがネ。

A　支那の學生達は愛國の至情から純な立場であくまで國權回復のために努力しておるのは否めない、それはラッセルやヂユウイを北京に招聘したやうな氣持ちだらうが、しかし今回の恐ろしい點火者は日英をいぢめるためにやつたのだ。それにロシアにしても陰では糸を引いてゐるとの噂もあるし、その間の消息は君にもわかるだらう。

B　そうかネ、外來の不正と抗爭するのは愛國心の發露に待つより他はない。今回學生達の運動は純理に立脚した運動と思ふ。

A　それでは君も愛國主義者かネ、今のままで推移して行けば今後十年間に日本の紡績業は奇麗薩張り支那から一掃されて仕舞ふよ。今でさへ日英の紡績額を合算しても支那人經營の約三分の一の額もないから。

B　ナーニ、支那人はそんなに政治にこだわらず、實業は實業として立派に提携して行けるよ。

A　いや、强ち出來ないとは云はぬ、しかし之から支那人が國際資本に對する反感が酷くなるから困難だと思ふネ。君は

支那の勞働者が最近に於て學生連と聯盟して軍閥を倒し、帝國主義者を一掃して天下をとる時機が來ると豫想するか。

B　ウム………

A　ナル程支那の勞働者は百數十萬あらう、しかし現在の狀態ではなかなか天下取りなどは豫期されないヨ。それに支那人は大體に於て個人主義拜金宗が多いから大團結はなかなか出來まい、そしてそれが愛國心で團結して對外的に勢力を振ふとは今の處、豫期されないネ。

B　それでは學生連の運動もさうといふのか。

A　先づさうだ、支那の新人や學生は日本の新人と違つて皆が國權派である、愛國的行爲をする。此等の徒は不平等條約を撤廢さへすれば、直ぐに熱心なる國家主義者、帝國主義者に早變りして我國に反逆するのだらう。

B　それは間違つた解釋だ。支那の學生は國際主義者が多い、不平等條約を撤去しさへすれば、斷じてそう云ふことはない。所で田中義一の產業立國なぞは支那に對してどうしやうと云ふのだらう。

A　それは問題外だ。まだその內容は定まつてゐないのだらう。仙臺邊で產業立國の內容を問詰められて味噌をつけたぢやないか。

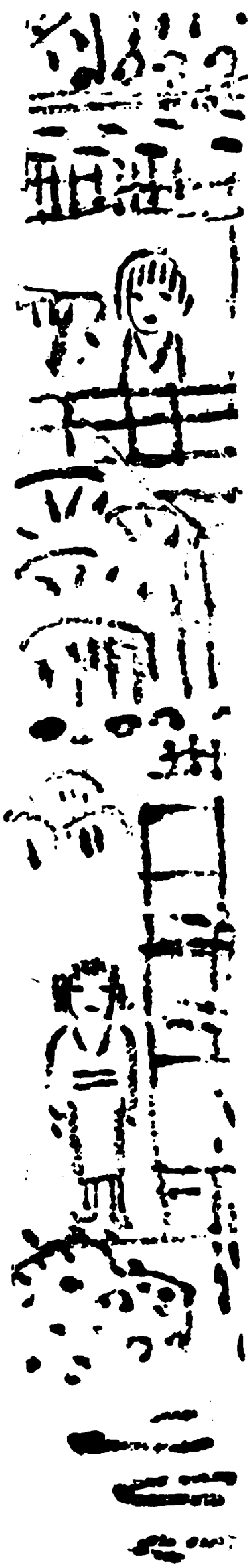
B　そうすると何か、支那問題に對して日本政府は一體どうすればよいと云ふのか。そして君は此際支那ロシア獨逸と提携して歐米の帝國主義を片つ端から擊破する痛快事は欲したくないかネ。

A　どうも困つたネ、それは。しかし英國と協調すれば、支那からはボイコットさ、イヤそれ以上さ。單獨行動をとれば後では退嬰主義で反動團體に威張らるる不思議の現象を生むことを覺悟すべきだよ。

B　何にしろ日本は少數資本家を基調とした政策を此際斷乎として一擲して多數民衆を基調とした政策の確立を急がねば駄目だね。そして我資本家の外國企業をもつと取締る必要があるネ。俺は此際は列國に先んじて支那に對し大度量を示すべきだと思ふ。日本は、日本の前途から打算して米へ與すべきか、英と協調すべきか、こんな利害は超越し、あくまで尊敬すべき獨立國として支那を强國に仕立た方が國際的正義が永久に保持せられる所以だと思つているが。

A　イヤ、そうでない、結局は力の問題さ。日本は日本で日本のいいと思ふ方向に進むより仕方はないといふ結論かネ。

B　そんな實力が日本にはあるかい………



無產政黨運動の基調としての新政治意識

――『新政治意識の倫理的基礎』續篇――

大山郁夫

一　新政治意識の究明の必要

無產政黨の諸問題を論ずる場合には、當然それの行動の指導力となるべき新政治意識の問題を閑却してはならない。といふのは、まづ第一に、我國の無產階級解放運動が最近に於て漸次に政治行動の肯定の態度へ轉換して來たことは、少くともその運動の關係者たちの側に於ける意識的考慮の結果に外ならないものである。世界大戰中から我國の無產階級解放運動は、政治行動を採用すべきか否かに就いて、岐路の前に立つてゐた。そして一時は、勇敢にそれの否定の方向へ一と足踏み出しさへした。けれども、その後の社會的經濟的諸關係の推移は、無產階級運動をして、一應そこから立

ち戻つて、新に政治行動肯定の方向を擇ばしめた。かういふ風に、それは明に意識的行動であつた。無論、さうした行動の基礎となつた意識そのものを生ぜしめた動力の少くとも一つが、右の社會的經濟的諸關係であつたといふことには間違ひがないから、我々はそれを一つの歷史的必然性の問題として、その見地からそれを因果律的に取扱ふことが出來る。が、我々の該問題に對する觀察が、たださうした外廓の模索だけに止まつた切りで、それ以上に一歩も出ないことになるとすると、我々の說明は畢竟、唯物史觀上の常套語の繰返しにすぎないものに終らなければならないことにならう。で、若し我々が端的に該問題の內面に肉薄して、それの核心を抉ぐり出さうとするならば、我々は單にその意識と、それの發生の動力となつた社會的經濟的諸關係との間に橫はる因果關係を檢討するだけに止らないで、そこから更らに前方に突き進んで、直接にその意識そのものの內容の深みにまで徹しなければならないのである。

更らにまた、無產政黨が一般社會に向つてその存在の理由を主張するためには、それがそれ自身の行動の基礎に置いてゐるところの新政治意識を明示しておくことが、縱し絕對的に必要でないまでも、少くとも有利であり、合目的的である。既成諸政黨は、普選實施後の政界に處するための對應策として、頻りに勞働立法とか、社會政策的立法とかを民衆に約束してゐる。彼等は、さうすることに依つて、無產政黨の出現の必要を出來るだけ稀薄にしようとしてゐるのである。少くとも、さう見せかけようとしてゐるのである。けれども、無產政黨の出現の必要は、それに依つて毫も增減されるものでない。それは畢竟するに、その根本に於て有產階級の政治的生存表現の機關に外ならない既成諸政黨の因つて以て立つところの政治意識と、本來無產階級の政治的生存表現の機關であることを以て生命とする無產政黨の因つて以て立つところの政治意識とが、全然その本質內容を異にするところから來てゐるものである。この點は、無產政黨がそれを聲明すると否とに拘はらず、苟くも無產政黨が名實相應するものであることを期する限りは、當然さうあるべ

意符のことであるには違ひないが、しかし無産政黨としては、それ自身の出發點に於て、それを特に強調するのを得策とする理由がある。そしてその理由は、その新政治意識の本質内容の問題と共に、以下漸次に私の論題とならうとしてゐるものである。

二　政治意識に關する一般的問題（上）

——政治意識の理知主義的解釋——

しかし無産政黨の政治意識の問題を論述する前に、私はまづ、一般に政治意識と呼ばれるものに關する或る根本問題に觸れておくことを必要と考へる。

從來の政治思想に於て、政治意識に關して示された立場の主要なるものとして、我々は少くとも二派のそれを擧げることが出來る。その一つは、政治意識を全然理知主義の問題として見てゐるものである。他の一つは、寧ろ前者に對する反動として起つたもので、それは人間の政治行動の源泉を、その無意識生活の裡に求めようとしてゐるものである。けれども、我々の新政治意識觀は、それらの何れからも解放されたければならないものである。

政治意識を全然理知主義の問題として見る立場は、殊に第十八世紀の西ヨーロッパ諸國に於て全盛を極めた自然法學派の解釋から系統を引いて來てゐるものである。この立場に即する觀察者たちは、人間の政治行動のすべてを理知的打算の產物として解釋することから出發したものである。彼等はその見地から、國家起源に關しては『契約說』を主張し、國家政治の動きに關しては『觀念の勝利』を力說した。かくして彼等は、或は自由平等若しくは民主々義の『觀念』

や、或はこれに胚胎した立憲主義の『論理』や、或は三權分立の『原則』や、或は人民主權の『公理』や、或は二大政黨互立主義を基調とする憲政の『常道』などと言つたやうな、かうした種類の樣々の觀念をば、人間生活に超越して存在する永遠不變の『自然法』を反映するものだとして、そしてそれらのすべてが——若しくはそれらの或るものが——各個人の政治行動を支配し指導すべきものだとし、また實際究極に於てそれを支配し指導するものだと說いたのである。しかも彼等は、さうした樣々の觀念の根源である『自然法』を解釋するものは畢竟各個人の理性に外ならないものだと考へてゐたところから、政治行動の根源としての政治意識をも、さうした理性の機能に根ざしてゐるものとしたのである。彼等はそれ故に、政治意識の問題に關しては、理知主義者であつたと同時に、また個人主義者でもあつた。

かうした政治上の理智主義的・個人主義的見解が、政治學說史上に於て、今日では最早、無殘に破壞しつくされたその形骸を留めてゐるばかりのものとなつたまでの經過は、玆に詳說する限りでない。殊更私自身は、曾て拙著『政治の社會的基礎』に於てその問題を幾分詳細に論述した記憶があるから、重ねてそれに觸れる必要がないやうにも感じる。が、幾分差し當つての間に合はせにといふ意味で、極めて手短にいへば、それは一方に於ては、學說上の問題として、一般の理知主義の破綻と運命を共にし、他方に於ては、實際政治上に於ける經驗事實の科學的觀察から、その妥當性を覆されたのである。取り分けこの際直接に我々の關心の標的となるものは、實際政治上に於ける經驗事實の科學的觀察が、政治意識は決して各個人の理知的打算の產物でなく、各政治的集團の集團的生存上の利害感から展開した心的機能だといふことを教へたといふ一點である。もとより、さうした政治意識が、それの所有者の政治行動を有効に激發するためには、それが一つの規範を賦與し得る活きた力となるまでの心理過程を必然的に伴ふものであるから、それはさうした段階に達した時には、或る倫理的意味を帶びてゐるものと見ることが出來るものであることは、たしかに事實であ

る。そしてそこに、政治意識の本質を討究する深い意味もある。が、その場合でも我々は、それがそれの根源に於て、或る政治的集團の集團的生存上の利害感から湧き出たものであることを忘れてはならないのである。またこの場合、我々が生存上の『利害感』といふのは、決して侮蔑的意味を含んだ習俗的用語法に依つてゐるのではないことも、無論のことである。寧ろ、政治意識が政治行動を激發する活きた力となるまでに生長し得るのは、何よりもそれが生存上の利害感に根ざしてゐるといふ事實そのものから來てゐるものだと言はなければならないのである。

理知主義者たちは、右の一點を誤解して、政治意識の全部を各個人の理知的打算から出たものだとしたのである。人間の一切の行動――政治上の行動をも含めて――を促す最終の動力は、決して理知の上に求め得られるものではない。それは寧ろ、感情若しくは感情から發達した意識の裡に存してゐるものである。もとより理知は一切の行動を有効にするために、偉大なる役割を果たす。理知の統制なき行動が屢々盲目的努力に終るといふやうなことは、始終我々の日常經驗の上に現はれて來ることである。殊に理知は、事物の因果關係を見究はめる機能の唯一の帶任者である。科學はこの機能から生じる。そして、科學はあらゆる意味に於て行動の補助者であるといふことは、一般に熟知されてゐる通りである。が、それにも拘らず。一切の行動の最後の動力は感情生活若しくは意識生活に內在してゐるものである。そして政治上の行動だけが、獨りそれの例外をなしてゐるといふやうなことが、あらう筈もない。

理知が意識生活から獨立して存してゐるものか、それともそれに附隨して存してゐるものかの問題は、見方に依つて何うとも言へることであらう。が、それを孰れかに決定することは私の當面の任務でもなければ、また玆に至重の關係がある譯でもない。假りに理知が意識生活の一部を構成してゐるものとして見られるにしても、それの全部を構成してゐるものとして見られるものでないといふことだけは確かであり、またそれが行動の最終の動力でないといふことも、

我々の日常經驗から、無論のこととして主張し得られることである。そして、それを言ふだけで私の今の用は足りるのである。

三　政治意識に關する一般的問題(中)

――政治行動と無意識の心理――

理知主義的・個人主義的政治思想と因果的に密接に交渉したフランス革命が、政治的社會的諸制度の上に空前の大破壞をなし遂げた直後に於て、或る濃厚な反動的革命の空氣が、ひと頃第十九世紀初頭の西ヨーロッパ諸國の上に周く漂うた。その時に當つて、この趨勢と相呼應しつつ、あらゆる學術の分野の上にも、一種の反動的傾向が勃然として擡頭した。そしてそれは、政治學說の方面に於ては、理知主義的・個人主義的思想の結晶としての契約說や、及びそれの實際的適用としてフランス革命を花やかに彩つた『人權宣言』や、アメリカ合衆國の新國家組織を基礎づけた成文憲法やに對する深刻なる否定、若しくは激烈なる反駁となつて現れた。かうした反動的政治思想の流れは、先づ第一に、イギリスに於けるバークの反革命論の雄辯なる叫びに依つて導き入れられ、續いてフランスの側に於けるボナールや、メーストルや、ドイツの側に於けるハラーや、スタールなどの、屢々キリスト教の神觀を混じた一種の復古主義若しくは傳統主義を通じて益々その影響の波及區域を擴大し、遂に同じドイツのサヴイニー一派の學徒に依つて開拓された歷史派の法學の上に於て、更らに一層その深さをも加へ、かくしてそれは、壓倒的の力強さを以て學界を縱斷しつつ、堂々と濶步するまでに立ち至つたのである。

かうした傾向の代表者たちに共通した一の立場は、人間の政治的行動を導く力は、人生改造を目標として行はれる少

數の先覺者たちの熟慮や計畫でなくて、多數國民の心の奥に潛むところの傳統的精神——時としては、見えざる神の手に依つて人の心の畑に植ゑつけられたものだと言つたやうな調子で說かれさへしたところの——である、といふ一點の上におかれてあつたのである。それは一と口に言へば、政治過程の動力としての無意識の心理の强調である。即ちそれに於ては、人間の政治行動の源泉は、白日の光の下に眼ざめて働く理知の上に在るのでなく、暗闇の深みの中に盲目的に業をする本能の上に存してゐるのである。慣行の制度に對する說明の出來ない愛着心。舊來の權威に對する本然的な畏敬心。新しき改革の試みに對する無差別的な猜疑心。——かうした樣々の心の働きこそ、民衆の本能の裡に培はれてゐるものであつて、そしてそれはまた同時に、傳統的精神であり、史的精神であり、國民的精神である。で結局、民衆の政治行動を最も力强く支配するものはかうした民衆の本能であつて、それの理知ではない。と、かういふのが、彼等に共通の中心的論點だつたのである。かくてサヴィニー一派に在つては、國家の法律は、國語と同じく、國民精神（volksgeist）の表現であるとさへ主張された。

かうした見方が、政治學說の進步に對して、或る重要なる貢獻をしたといふ事實までを、我々は拒まうとしてゐるものではない。即ちそれはまづ第一に、歷史を以て偉人とか大立法者とかの業績とする物語り風の傳統的史觀の誤を訂正して、歷史の流れを大衆運動の動きと見る社會史觀の端緒を開いた。同時にそれはまた、實際政治の進行の上に於ける傳統習慣の偉力に關して、無論偏頗的にではあつたが、兎に角それが見たところだけは、的確に見究めた。何よりもそれは、理知主義的・個人主義的政治思想の難點に向つて、痛烈なる打擊を與へたことに依つて、それを徹底的に破壞することに成功した。

けれども、その成功の限界は、さうした範圍内だけに限られてゐたのであつて、そしてそれから先きのものは、我々

の政治思想に於ては、到底受け容れられない種類のものから成立つてゐたのであつた。殊に『國民精神』の表現を法律の上に見たサヴィニー一派の立場は、支配階級の社會的・政治的・經濟的利害感を餘りにも露骨に曬らけ出すのを常とする現代立法機關の行爲を見慣れてゐる我々の結論とは、到底調和する餘地がありさうにもないのである。更らにまた、政治意識の問題を中心として考へて見ても、一般の反動的若しくは歷史派的傾向の代表者たちが、政治行動の源泉を民衆の本能の上に求めて、それの促進要素としての意識生活の意義を餘りに過少視したやうなことも、その根本に於ては矢張り、政治意識の問題を理知主義の問題として見たといふことから來たものだ、と言はなければならぬ。如何にも彼等が力說した通りに、政治過程を動かす最初の——そして最後の——力は理知でもなく、また理知の働きとしての熟慮でも計畫でもない。が、それかといつて、政治過程の上に於ける一切の事件が、本能の衝擊といふやうな、無意識生活の源泉から流れ出るものばかりだといふやうな主張は、實際政治上の經驗事實の科學的觀察に依つて、裏切られるものである。政治過程の上に於ける創造行爲は、多くの場合に於て意識的目的設定の下に於てなされるものである。もとより、さうした意識の發生が、更に他の或る先行原因に依つて激成されたり、決定されたりする關係は、科學的に論證し得られるものであるといふことは、我々には拒めない事實である。そこに、決定說（determinism）に立脚する社會科學の成立つ基礎もあれば、またそこに、人間の意識がその生存を決定するのでなく、人間の生存がその意識を決定するのだ、といふ唯物史觀の主張が肯定され得る素地もある。そして、さうした見地から、或る政治意識の發生の過程を視察することが有意義なことであるといふことには、我々に於て毛頭異論があらう筈がない。が、それと同時に我々は、一旦その政治意識が發生した以上、それの能働的作用を中心としてそれの創造性を觀察するといふ立場の成立もまた可能であるといふことを、極力主張しようとするものである。否、それは單に可能であるばかりでなく、少くとも或る場

合には非常に大切でさへある。殊更ら實際問題として、新興無產政黨の因つて以て立たうとしてゐるところの新政治意識に直面して、しかもそれの創造性を高揚する必要にさへ迫られてゐることを感じてゐる私たちは、そのことの大切さを、一層痛切に體驗しつゝあるのである。

最後に、歷史派の法學が傳統的精神の働きを強調しつゝあつた間に、いつしか現狀謳歌論の陷穽に落ち込むことに依つて、意識的に若しくは無意識的に、支配階級の統治上の目的に奉仕する結果に終つたことは、私には拒めない事實のやうに思はれる。この派の學徒らは、社會組織及び社會的諸制度の——若しくは全般の社會生活樣式の——過去に於ける進化に眼を掩はうとしたものではない。けれども彼等は、それらの現狀に對する彼等の說明に於ては、著るしく保守的な立場を固守したのである。そこに彼等の救ひ難き矛盾がある。即ち、或る意味から言へば、進步若しくは進化こそは、人類生活上の不斷の傳統だともいへるのである。そして、傳統をかう解釋するときは、傳統主義もまた必ずしも保守主義に陷る約束がある譯でもなく、從つて進步主義の敵となる宿命を擔うてゐる譯でもない筈である。けれども一般に傳統主義といはれるものは、過去に於ける進步を認めながらも、現在の狀態に對しては、これから先きの進步を否定若しくは妨害する態度を示す。ヘーゲルはその辯證論法のコケおどし的の大がかりな武器を振り廻はすことに依つて、この論理上の難關を見事に切り拔けたと思惟した。殊に彼は、彼の時代のプロシアの國家生活の上に、すべての過去からの歷史的進步の綜合を認め、それを極度に崇高化することを躊躇しなかつた。この點に關して、後代の諸家によつて幾度となく引用されて來たところの、例の『現に實在するもの、それは道理のあるものだ』(Wss wirklich ist, das ist vernünftig) といふ彼の言葉は、最も特徵的なものとすべきである。そしてかうした現狀謳歌論が、大體に於て、そのまゝ一般の歷史派の法學者たちに傳承されたのである。けれども 無限の過去から連續して來た進步が、また無限の

未來に向つても繰返されることをしないで、現代でバッタリ行き止まりになるといふやうなことは、單なる一片の論理に依つて證明し得られるものでない。從つてそれは、客觀的事實の證明を要求する科學的社會思想に於て、その承認を拒絕されたのは、是非もない次第である。のみならず、實際問題としては、社會生活の上に常に新らしき未來を創造しようとする幾多の社會的戰士からは、さうした意味の傳統主義は、彼等の進行の途上に橫はる一つの『躓きの石』として、まさに一蹴し去るべきものとして見られてゐるのである。

尙ほまた、政治の分野に於ける人間の無意識的行動の實例として、革命の際に於ける市街戰などの場合が、殊に群集心理學者たちの手に依つて、屢々引合ひに出される習はしがあることは、一般に熟知されてゐる通りである。ル・ボンの『群集心理』などは、この點に關して最も典型的なものの一つである。いかにも、さうした場合に於ける大衆の躁狂的集團行動は、恰度、颱風とか地震とかの自然現象のやうに、意識的によりは寧ろ無意識的に演ぜられるものである。けれども、かうした現象は、平常的のものであるよりは寧ろ異常的のものであり、常住的のものであるよりは寧ろ瞬間的――でなくとも短時間的――のものである。しかも我々が、單に市街戰といふやうな、殺倒的に起る一時的現象を離れて、革命をそれの發端から終結までの比較的に長い時間に亙つて觀察するとき、我々はそこに陰に陽に活躍するところの意識的諸要素が重大な役割りを努めるといふ事實を見逃がすことが出來ないのである。のみならず、市街戰の場合に見られるやうな、大衆が瞬間的若しくは短時間的に演ずる躁狂的集團行動にしても、意識の無意識化及び無意識の意識化といふやうな　我々の日常生活上の經驗事實に於てよく觀察される心理過程を通じて說明されるのでなければ、到底その眞相が摑み得られるものでもない。

四　政治意識に關する一般的問題（下）

——政治意識の新解釋——

自由學派の一明星であるクラッベ（オランダのライデン大學に於ける國法學の教授）が、法の發達に於ける意識生活の意義を論じた中に、次の言葉が發見される。——

『我々の生活の列車に滿載される樣々の思惟や、感情や、本能やの積荷は、或るより高き文化への進步に對して、有力な障碍を構成する。しかしながら、恰度個々人の生活が精神の解放の瞬間を知ることがある通りに、人類もまた、より高き生活への向上的努力に際して、改革の時期を知ることがある。それは、歴史の桎梏からの精神の解放戰が戰はれる時期であり、單純に歴史的に完了したといふに過ぎないもの（Das bloss historisch Gewordene）の重荷の振り落しが試みられる時期である。恐らく、我々は今や再び、さうした時期の初頭に立つてゐる。が、それは兎に角、歴史的に完了したものにばかり呼び掛けることを能事とするやうなわざは、我々人間の精神的素質の誤認を表白するものであつて、そしてそれは結局、既に活きた精神的內容を失つた生活秩序までをも、强ひて維持しようとする努力に赴くもの——若しくはさうした努力に導くもの——である。この點に關して如何なることをなすべきかを我々に示し得る唯一の試金石は、現在活きて居る世代の人々の意識生活である。そして、それによつて始めて、法の分野に於ける歴史的に完了したものもまた、若しそれから出て來る規範が、現在最も有力に行はれてゐる正義意識及び正義感から見て法的規範として承認され得る場合には、尙ほ引續いてその効力を保有してゐるものであることを主張することが出來るのである。』（H,krabbe,*Der mderne Staatsidee*, Haag,1919, P. 212.）

クラッペのこの穏健清澄な立言は、本來、法の分野に於ける意識生活に關聯してなされたものであるが、我々が政治意識の問題を考察する際にも、それから大切な要點を教へられることが甚だ多くあるのである。で私は、右の引用をした機會に於て、本文の主題に關する私の狙ひどころが、全體の上から見て、クラッペのそれとは可なり懸け離れてゐるにも拘らず、しかも尙ほ彼からの示唆に負ふところが少くないことを書き加へておく義務を感じる。（右に引用した一節を含むクラッペの『近代國家觀』の思想の進み方の概要は、拙著『現代日本の政治過程』の補論中で紹介的に論述しておいた。）

我々の政治生活に於て、我々に何をなすべきかを教へ、且つそれに依つて我々の行動を激發するものは、我々の政治意識である。ただこの點に關して一言注意しておきたいことは、私が『政治意識』と言ふときには、私はその言葉をそれの最廣義に於て用ひてゐる、といふ一點である。殊に私は、前に言つておいた通りの、無意識行動の意識行動化、及び意識行動の無意識行動化の心理的過程をも念頭に置いて、政治意識の問題を論究してゐるのである。

一般の教育の場合に於ても、無意識行動の意識行動化といふことが非常に重要視されてゐることは、言ふまでもないことである。それは、最も廣い見地からいへば、教育といふものの全部だとさへもいへるであらう。『教育』といふ邦語に相當する西洋諸國の言葉の多くが『抽き出すこと』といふ意味を含んで居るといふことは、ありふれた教育論などの上に於ても、繰り返し説明されてゐることである。それは、無意識若しくは潜意識の暗闇の裡に包まれてゐる心的能働力を、意識の明るみへ持ち出すといふことを意味するものと解釋することも出來るのである。かうした物の言ひ方は、或は心理學者の立場から非常に非專門家的な説明様式のやうに受け取られるかも知れないが、兎も角私がそれに依つて

何ういふことを意味してゐるかだけは、大體は諒解され得ることと思ふ。

我々が無意識行動の意識行動化を重要視するといふ主張は、或る意味に於て人間の行動の大部分が無意識行動から成立つものと言ひ得られるといふことの認識と矛盾するものでないばかりでなく、それは寧ろ、そのことの認識のために一層生命のある主張にさへなるものである。少くとも、我々が我々自身で非常に重大だと思惟する或る目的のために我々の行動を統制しようと企圖する場合には、我々は必然的にさうした結論に導かれるのである。從つて、我々が無産政黨運動の目的のために、無産階級的政治意識の喚びさましを重要視するのは、他の方面に於て官僚政府が官僚式教育の普及に腐心したり、既成諸政黨が彼等のブルジョア式政治意識の宣傳に沒頭してゐると、その狙ひどころこそ、まさに正反對の方向を指してゐるものであるにも拘らず、その行き方に於ては別に變つた點がないのである。

だが、我々が無意識行動の意識行動化といふ時には、我々は、その裏側の意識行動の無意識行動化といふことをも、同時に我々の眼中に置てゐるものである。そして、これは、或ひは私の素人考へかも知れないが、私は少くとも、前者の極端まで登りつめたものが屢々後者になるものだ、とも言へると思ふ。兎に角私から見れば、これらの二つの心的過程は、截然と相互から區畫された範疇の中へ別々に入れられるべきものではないのである。この點に關して私は、フランツ・オッペンハイマーがその近著の一つの或る箇所で、次の通りに述べてゐることを思ひ出す。即ち彼は言ふ。『意識された目的行動が、意識された意志を伴はないで働くところの自働的行動にまで、段々と轉換して行くことは、我々の常に實見することである。一例を取つていへば、我々は自宅から我々の仕事場までの、日々通ひ馴れた遠い岐れ岐れになつてゐる路を、深思に耽りながら、何うして到着したかをも知らないで通つて行くことがある。この場合には、我々の「潛意識」が、間違へずに我々を導いたのである。』(Franz Oppenheimer. *System der Soziologie*, 1. Pd, 1. Halbband

Jena, 1922, pp.194-5.) かうして、意識行動は、それが無意識行動化（自働的行動化）するまでになつた場合に於て、最もよくそれ自身の目的を達した譯になるのである。

だが、時としては、意識行動が無意識行動化したために、却てそれ自身の目的を裏切られる結果に陥る場合もある。オッペンハイマーはまた、その點にも觸れてゐる。即ち彼は尚ほ續けて言ふ。『時としては、かくして得られたところの、即ち目的行動から反射行動に化成されるまでになつたところの、その自働的行動が、却て目的背反的に、換言すれば、意識された意志がさうあることを欲しない筈であらう通り進行することがある。このことの最好適例は、西ヨーロッパ文明に化育された各男子が、比較的に我々に近い時代に獲得した一種の自働的行動の上に見られる。それは彼が椅子に掛けてゐる際に手から物を取り落した場合には、必ず自働的に兩膝を打ち合はせてそれを受け留める習慣を持つてゐることを指していふのである。ところが婦人はそれに反して、同樣の場合に兩膝を廣げることは、一般に知られてゐる通りである。この取り落したものを受け留めるといふ同一の目的の達成のために正反對の行動に出でしめる要因は、全く服裝の相異といふことに繋がつてゐるものに外ならないものである。この自働的行動は、それを抑止しようとする意志を以て如何ともすることが出來ないものであり、從つてそれは不可抗力を具備してゐるものである。そこで、男が女裝したり、女が男裝したりしてゐるのを看破しようとするには、その男若しくは女の膝の上に何物かを投げつけて、その反應を試めして見るのが、最も確實な方法である。それどころでなく、男子がたとへば生の鷄卵のやうな砕け易い物を手から辷べらせた場合も尚ほ、彼は兩膝を打ち合はせる。それこそ、最高の目的背反だ。といふのは卵は、砕けるし、ヅボンは汚されるしといふ始末だからである。(Oppenheimer. op. cit., p. 195.)

右に述べた診斷を考慮のうちに入れて政治意識の問題を考察するとき、我々は始めて、一方に於ては政治生活に於ける無意識行動を無視するといふやうな片手落な仕業から免れることが出來ると共に、他方に於てはまた、無意識行動を意識行動と沒交渉に取り扱ふといふやうな盲目的態度に陷ることを防ぐことも出來るのである。と同時に我々はまた、理知主義的政治思想の誤謬を攻擊しながらも、それが政治的に新世界を創造しようとする努力の上に於ける意識生活の意義に一太刀打ち込んでゐるその功績を認めることも出來れば、また歷史派の傳統主義的政治思想の缺點を指摘しながらも、それが政治過程に於ける無意識心理の働きの強さに一指を觸れてゐた手際を稱揚することも出來るのである。

要するに、上來說述した通りの廣い意味に於ける政治意識は、我々が政治生活に於て何をなすべきものかを我々に示し、かつそれに依つて我々の政治行動を衝擊する心的活動である。それは更らに、我々の政治行動に規範を與へる力であり、我々の政治生活の進路を照明する光である。從つて我々が我々自身の政治意識を喚びさまさないで居る場合には、政治的に我々の上に働き掛ける他のものの政治意識の支配下に來なければならないことになるのである。即ちその場合に、若し我々が拱手無爲の狀態を守つてゐると、彼等は我々の意向に頓着なく思ふがままの活躍を演ずるし、また若し我々が偶ま何等かの行動に出ようとするときには、我々は不知不識の間に、彼等の政治意識の欲する通りの方面に動いてゐるやうな結果に陷り易いのである。それ故に、若し我々が我々自身の手で政治生活を通じて新しき世界を創造しようと企圖するならば、我々はその目的に相應する我々自身の政治意識を眼ざめしめておかなければならない。それ故にまた、無產政黨が政治的に或る新らしき未來を目指して進む限り、それは先づ、大衆の間に無產階級的政治意識を喚びさますことに努力することを必要とする。かういふ譯で、無產政黨運動に於ても政治教育事業が必要になつて來る

し、更らにまた、その政治教育事業に於ては、無產階級的政治意識の促進といふことが、それの中心的位置におかれるべきものになつて來るのである。

五　政治意識の論理性

A　集團生活と集團意識

いふまでもなく、政治現象は一の集團的現象である。個人主義的政治思想に於ては、政治現象の單位を個人としてゐるが、それは明かに間違つて居る。政治現象の單位は、一の政治的集團である。それ故に、或る政治意識は、或る政治的集團の集團的生活から生ずる集團意識の一つの現はれである。けれども、集團意識を現實に意識する具體的當事者は、全一體として見られた集團そのものではなくて、その集團に屬する各個人である。この點に於て、個人主義的政治思想は、全體に於て間違つてゐながらも、たしかに問題のある一面を正しく見てゐるものとすることが出來る。けれども、集團意識もしくは集團心（group-mind）を論ずる人々の中には、全一體としての集團そのものが集團意識を現實に意識する具體的當事者であるかのやうに說きたてるものがある。さうすると、恰かも全一體としての集團そのものに一つの腦のやうなものがあつて、それが現實にその集團意識を意識する作用をなしてゐるもの丶やうに說かなければ、結局辻褄の合はないことになる。そこでたとへば、國家を一の有機體と見る古來の學說の中には、君主とか立法部とかを國家の腦の地位へ据ゑ附けようとしたものが多くあつた譯である。が、かうした見方は、所謂擬制的もしくは比喩的な見方に過ぎないものであつて、明かに科學的な見方ではない。尤も同じ有機體說でも、ハーバート・スペンサー一派の社會有機體說は、具體的中樞神經の所有者であるところの各個人だけを現實の意識の主體と見ることに依つて、その

離點を完全に免れてゐるが、しかしその代りに、それは集團的意識を見ないといふ他の一方の極端の缺陷に趨つてゐる。集團意識は單なる架空的の想像物ではなくて、的確に實在する一の心的現象である。更らにまた、その集團意識は集團生活から不可抗的に發生するものであるが、しかしそれを現實に意識する具體的當事者は各個人である。そしてこの關係は、社會心理過程の討究上の一重要問題を構成するものである。

　集團意識を現實に意識する具體的當事者が、各個人であるといふこととの認識は、形式上同じ集團に屬してゐる多數の個人の中に於て、或るものは集團意識を強く意識してゐるが、或る他のものはそれを弱くしか意識しないでゐるし、更らに或る他のものはそれを全然意識しないでゐるといつたやうな、屢々我々の觀察に上つて來る一の現象の認識と調子を合はせてゐるものである。多くの社會觀察者たちは、殊に階級意識の場合に於て、さうした客觀的事實の上に最大の注意を集中することを常とする。『無産階級中の眼ざめざる部分』といふやうな頻出の表現は、無産階級中に地位を占めてゐながらも、無産階級意識に眼ざめないでゐる多數者の存在の認識に關聯して發される言葉である。ところが他方に於て、集團意識は集團行動に規範を附與する力のあるものだといふ前提から、集團意識の一範疇であるところの階級意識は、階級的行動に規範を與へるものだといふ推論が生じて來る。それ故に、我々はこれらの二つの命題の結合から出發して、無産階級解放運動に於て、無産階級中の眼ざめざる部分の縮小化——若しくはそれと同意語であるところの無産階級意識の普遍化——といふことが、一の喫緊の必要事とされてゐることの決して偶然でないことを理解することが出來るのである。同樣に我々はまた、無産政黨運動に附帶する政治教育事業に於て、無産階級的政治意識の促進といふ事が、非常に重要視されなければならないと述べた私の前言を、この際再びこの着眼點から繰返すことが出來る。我々は更らに、この同じ着眼點から、かうした運動に於て、對個人的啓發事業が、對集團的教化事業よりも閑却さ

れていいといふ譯がない、といふことを、當然のこととして强調することが出來るのである。

B　政治と生活

政治意識は、全般の生活意識の一部である。それは、生活意識の政治生活への現はれである。從つてそれは、その根源に於て、全般の生活意識に依つて、支持され統制されるものである。我々が、我々の生存上の利害感から出た或る特殊目的を政治生活に於て達成しよう決定するとき、そこに我々の生活意識が政治意識の形に於て發動する機緣がある。かうした關係に於て、我々の政治意識は、我々の生存上の利害感と不可分的に聯繫されてゐるのである。しかも政治現象は一の集團現象だといふことの結果として、前にも述べた通りに、我々の政治意識は、我々の集團的生存上の利害感に密接に交渉してゐるものだといふことが主張し得られるのである。もとより、さうした集團的生存上の利害感といつたところで、それを直接に體驗する具體的當事者は當該集團に屬する各個人に外ならないものであることは事實であるが、しかしその利害感そのものは、集團生活に羈絆して發生したものであるとする以上、それは適當に集團的生存上の利害感と呼ばれることが出來るものである。——かういふことは、前に詳說したことの多少諄々しい反復になる嫌ひがないでもなからうが、しかし私は、私の論述を今一步前方に進める前に、再びそれを回想して、最終的にでもそれを玆に明記しておくことが、必ずしも無目的な業ではないと考へる。

いふまでもなく、政治生活は、全生活の上から見れば、それの些やかな一部分にすぎないものである。しかも我々の生存上の利害感から生じた或る特殊目的は、必ずしも常に政治生活を通して達成され得るものとは限つてゐないばかりでなく、寧しろ反對に、政治生活と沒交涉なものが無數に存在するといふ方が正當である。また、それらの特殊目的中には、政治生活を通じて達成される見込もあるが、同時に他の方面の通路に沿うて達成される見込みもあると思惟されるや

うな種類のものもある。さうした場合に、さうした特殊目的が政治生活を通じて達成されるのが有利であるか、それとも他の方面の通路に沿うて達成されるのが有利であるかの問題は、全然事實問題であつて、そしてそれを決定する直接の當事者は、我々の生活意識に外ならないものである。そこに我々は、意識の能働的作用の一面を認めるのである。我々は、一方に於ては、意識をそれの發生の過程から見て、それが他の先行原因に依つて制約され、決定されてゐる關係を指摘することが出來るが、同時に他方に於ては、それのかうした能働的作用を中心として見て、それの能働的決定力若しくは創造性を高揚することも出來るのである。

かういふ見地から言へば、政治生活は、それ自身で目的を構成するものでなくて、それは本來他の目的のための手段を構成するものである。無論、當初は手段として政治生活に入り込みながら、いつの間にかそれを目的として日々の活動に從事するやうになると言つた種類の手合ひが非常に多くあることは事實である。卽ち職業的政治家の場合に於て、かうした目的轉換――少くとも部分的の――の實例が、誰れにも算へ切れないほど頻出して來る。そして、それは例外なく、政治を生活から遠ざける結果を持ち來たす。が、それにも拘らず、政治生活は、本來――そして最も多くの場合に於て――他の目的の手段である。かくして、たとへばブルジョア政治は、縱しそれの上に眼まぐろしく起つて來る劇的場面の連續が、屢々それの本質を蔽ひ隱くすことがあらうとも、その核心に於ては、依然ブルジョアジーの階級的生存上の利害の擁護若しくは推進を目的とする政治生活であるといふことには變りがないのである。また、政治生活は斯様に或る目的に對する手段であるが故に、個々の場合に於てそれを採用すると否とは、その目的の主體の自由選擇に依つて決定されるものである。それ故に、曾て階級的解放運動の手段としての政治行動を否定したプロレタリアートが、今日に及んで新たにそれを肯定する態度に出直ほさうとも、それに決して何等の矛盾がある譯ではないのである。

○ 行動規範としての政治意識

我々が或る特殊目的を政治生活を通して達成しようと努力するか否かは、我々の生活意識の自由選擇の範圍内におかれてある問題だといふことは事實である。が、しかし、我々の生活意識が一旦政治生活に就くことを決定した以上は、そこに我々の政治意識が活躍する舞臺が現はれて來るのである。そしてそれは、何よりも先づ、政治生活に於ける我々の行動の規範として、我々に何を爲すべきかを示し、更らに我々の實行意志を激發して、それを不斷に推進する活きた力となつて働くのである。

けれども、或る特殊の政治意識が我々の前に掲げる行動規範が持つ拘束力は、一方に於てはその政治意識そのものの特質によつて、また他方に於ては我々自身の生活意識の狀態によつて、その强度の上に樣々の差異が生じて來るものである。手短かにいへば、その政治意識が我々自身の生活意識と一致するとき、若しくはそれが我々自身の生活意識そのものとなつたとき、それは政治生活に於ける我々の行動規範として、最大の偉力を發揮する可能性を持つことになるのである。私は以下しばらく、この關係を考察してみる。

ブルジョアジーの支配の下に於て發達した政治生活から湧き出て、且つ永くそれを支持する力となつてゐた政治意識が、今日に於て段々と、その行動規範としての力を失ひつつあることは、掩ふべからざる一傾向である民衆側に於ける刻々その範圍の擴まりつつある一部分は、明かにそれに向つて不信任の態度を表白するやうになり、またそれ以外の部分も、次第にそれに對して一應頭をかしげてみることを學びつゝある趨勢が現はれてゐる。併て政治意識の無差別的排斥の標榜の下に政治行動否認の叫びが擧げられたことも、現に別種の新政治意識を基調とする無産政黨組織の運動が進

擁しつつあることも、皆一樣に、ブルジョアジーのイデオロギーの政治的表現としての政治意識の頽勢を反映してゐるものでなくて何であらう！

多くの人々は、ブルジョアジーは今尙ほその勢力の絶頂にあるから、――且つまた彼等の政治意識は彼等が擁する巨大な金力及び權力の支持を受けてゐるから、彼等は尙ほ今後不定の期間に亙つて、政治的實權の把握者としての地位を持續するであらうことを確說する。如何にもブルジョアジー――我國のそれを含めての――は、少くとも外見上は、今日も尙ほその勢力の絶頂にあることは事實である。そして、絶頂に在るといふことは、やがて下り坂に向ふといふことの豫示だといふやうなことを强調するのは、少くともこの場合無目的なことである。更らにまた、彼等が、現に巨大なる金力及び權力を擁してゐることを誰が疑はう！ しかも彼等は、それらのものの支持に依つて、現に確實に政治的實權の把握者として立つてゐる。けれども、我々がさうしたこととのすべてを認めたところで、ブルジョアジーの政治意識が、それ自身に政治生活に於ける行動規範としての偉力を、今日尙ほ完全に保有してゐるといふ主張を肯定する譯合にはならないのである。否！ それどころか、政治意識が行動規範としての偉力を完全に維持してゐる間は、金力や權力などの支持が必要視される根據は毛頭ないのである。一般的に行動規範としの力といふものは、その本質上、いふまでもなく倫理的性質のものである。それ故にそれが金力や權力などと言つたやうな外的な力の支持を必要とするやうになつたといふことは、それがそれの倫理性を失つた――若しくは失ひかけた――ことの徵證である。換言すれば、それはその行動規範が行動規範でなくなつた――若しくはなくなりかけた――ことを表示するものである。即ちこの場合には、その行動規範は、惰性的に尙ほ行動規範としての外形を保有してゐながらも、その實質を失つて――若しくは失ひかけて――ゐるのである。だからこそ、それはそれ自身の倫理性にそれの拘束力を托するだけに滿足しないで金力や權力

などの外的の力からの支持に信頼するやうになるのである。

古來の東洋流の政治思想に於て、『無爲にして化す』といふ標語が掲げられてあつたことは、この點から見ても非常に意味の深いことである。それは、爲政者が民衆の上に課する政治意識が、それ自身の倫理性に依つて、何等の外的の力の介入なしに、極めて自然的に民衆に受けられると言つたやうな境地を目指してゐるものと解釋されることが出來るのである。これに反して、爲政者が民衆の上に課する政治意識に當初から倫理性が缺けてゐる場合には、—若しくはそれが段々とそれの當初の倫理性を失ひかけて來た場合には、——爲政者は兵力とか、警察力とか財力とかを以て、極力その缺陷を補塡しようと試みるものである。古來の歴史の上には、かういふことを示す實例が無數にある。殊に各時代の東西各國の專制政治の支配が、軍隊若しくは警察の手に依る權力の赤裸々なる表示に依つて特徴づけられて來たことは、今更ら言ふだけ野暮であらう。だが近代のブルジョア政治の支配下に於てはその點が少くとも表面上幾分か緩和されてゐることは事實であるが、しかし、その代りに、莫大な財貨が政治上に通用されるやうになつて來たのである。そしてそれは、世界が今日尙ほ實見しつゝある現象の一つである。待合政治、利權交換政治、資本主義的侵略政治買收、脅迫、籠絡、詐欺等による選擧區の腐敗化。……かうしたもののすべては、——恰度治安維持法が權力政治の表象である通りに、——金力政治の標識でないものはない。

こんなことを書きつづけてゐては切りがない。しかしそれは、もうこれで充分だらう。いづれにしても、政治意識の行動規範としての力は、それの倫理性に基くものであつて、そしてそれの倫理性の程度は、究極に於てそれが我々の生

活意識に適合してゐるか否かに依つて判定されるものである。私はこの點を、今少し論じ進めて行かう。

六　行動規範の倫理性と生活意識

若し我々が、或る行動規範の力はそれの倫理性に基くものであつて、そしてまたそれの力が強いことは、それの倫理性の豐富なことを指し示すものだといふ前提を承認するならば——それが承認されなければならないものだと私に考へられる通りに、——我々に與へられるすべての行動規範の倫理性の程度は、それが我々の生活意識に適合してゐるか否かに依つて決せられるものだといふことは、自明のことであるやうに思はれる。といふのは、我々の行動を決定する最初の——そして最後の動力は、我々の生存上の利害感であつて、そしてその利害感が最も明確化したものが我々の生活意識だからである。更らにまた我々が人類としての我々の眞の生存上の利害を最も確實に感得するときには、その時の我々の生活意識は、そのまま直ちに、あらゆる意味に於て倫理性を帶びた我々の行動規範となるのである。それはたとへば、ドイツの一派の社會學者たちの所謂『我々意識』（Wir-Bewusstsein）の極度に擴大されたものであり、またクロポトキンの所謂『相互扶助』の原理の人類的に延長されたものである。

我々に與へられる或る行動規範は、それが我々の生活意識に適合したものである場合ほど、一層多分にそれの倫理性を示すものだといふ主張から出發した我々は、そこから更らに一歩を進めて、或る行動規範は、それが我々の生活意識そのものの中から直接に迸しり出たものである場合に於て、最も多分にそれの倫理性を示すものだ、と推論することが出來るのである。我々が我々自身の生活意識を眠ざめしめないでゐるときには、我々の外部から我々に向つて動き掛ける人々もしくは人々の集團の生活意識を、そのまま我々自身の行動の規範とする場合がある。さうした場合でも、我々

自身の生活意識が完全に眠つたままの狀態に於て持續される限りは、別に何等の破綻もなしに濟むものである。また、我々の生活意識が徐々に眼ざめしめられかかつた場合でも、その我々の生活意識が、我々に向つて働きかける對手の生活意識と大した差異のない場合には、――換言すれば、彼等から我々に與へられる行動規範が、大體に於て我々の眼ざめしめられかかつた生活意識にも適合するものである場合には、――縱しそこに幾分の破綻が見え始めても、それでも大したことにならずに濟む可能性がある。だが、最後に我々の充分に眼ざめしめられた生活意識が、最早明白にさうした行動規範を否定するやうになつた曉には、そこに始めて決定的の大破綻が豫期される素地が出來て來る。無論、その時には、我々の對手は、權力とか金力とかの强制力を以て我に迫つて來るであらう。さうした强制力の使用は、我々の對手の生活意識に於て肯定されるべきものとされるのが普通である。のみならず、若し我々が我々の對手から與へられた行動規範の朦朧から全然醒め切らないでゐるやうな點を幾分でも保有して居るならば、それは我々自身の生活意識に於てさへも、幾分か肯定されてゐるやうな形になつて存續するであらう。けれどもさうした狀態は、我々自身の生活意識の眼ざめが進むだけづつ、次第々々に取り除かれて行つて、遂には我々の生活意識が、我々の對手から我々に向つて與へられた一切の行動規範――右の强制力使用の倫理觀を籠めての――を全的に否定するやうにさへなるのである。若しさうした場合でも尙ほ、我々が我々の對手から我々に向つて與へられた行動規範に對して服從意志を持つてゐるものとするならば、それはそれの倫理性の認識からではなくて、我々の對手が用ひ得る强制力に對する恐怖心からでなければならぬ。しかしながら、その恐怖心すらも、そのうちには徐々に薄らいでゆく傾向があることを免れないものである。が、いづれにしても、そこまで來ると、我々の隱れたる、若しくは顯はれたる反抗心がそれに續いて發生することが、避け難き勢ひとなつて來るであらう。その反抗心の發生こそは、我々が最早他人から與へられる行動規範に滿足しないで、我々自身

の生活意識の中から直接に、我々自身のための行動規範を抽き出すやうになる傾向の始まりを標示するものである。

さうした形勢が一旦發生し始めると、それは何等かの有力な障碍に出會はない限り、止め度もなく伸びて行く傾向を示すのが普通である。即ち我々はそれから先き、我々自身の生活意識に從つて我々自身のための行動規範を自律的に設定する方向へ、ますます深入して行くやうになるのである。そして、さうした行動規範は、當然のこととして我々自身の生活意識と符合したものであるだけに、それは我々の義務意識を最も有力に喚びさますものとなり、從つてそれはまた、我々に取つて最大の倫理價値を示すものとなるのである。畢竟するに、我々自身の生活意識が眼ざめしめられてゐる限り、我々のための行動規範の倫理性の審判者は、我々自身以外のものでないのである。尤もこの場合に於ける『我々』の實體は、個々の場合に於ける社會心理過程の進み方によつて、或は『集團我』若しくは『階級我』である場合もあり、或は『社會我』若しくは『人類我』である場合もある。いづれにしても、社會意識の進化につれて、『各人は萬物の尺度だ』といふ古代ギリシアのソフイスト一派のドクマの適用され得る範圍が段々と縮小して行く傾向のあることは事實である。そして、現在に於ける社會意識の進化の段階に於ては、我々は或る種の諸問題に關して、我々の現實の生活意識を『人類我』の上にまで延長することが出來るのである。それ故に、少くともその範圍内に於ては、この『人類我』の行動規範の倫理價値を標準として、『集團我』若しくは『階級我』のそれの倫理價値を判定しようといふ立場の成立も、決して不可能ではないと言へるのである。ただこの點に關して幾分注意すべきことは、階級的對立が全幅の現實性を帶びて我々に臨んでゐる限りの範圍内に於ては、我々の『人類我』の生活意識は、苟くもそれが現實性を帶びてゐるものである限り、當然『階級我』を通り越して到達されるべきものであつて、それるを飛躍して到達されるべきものではないのである。

行動規範の倫理性と、現實の生活意識との關係については、我々はクロポトンキから最も多く敎へられる。彼はその舊著の『相互扶助』及び同書の續卷と見なされるべき未完成の遺著の『倫理學』に於て、人間の倫理の現實的根源を求めて、それを人間の――更らに溯源的にいへば群居動物の――社會的本能から必然的に發生する相互扶助感、公正感及び自己犧牲心の上に發見してゐるのである。私は今私に、彼の論點を詳述する追のないことを遺憾とするが、ただ筆の序に、彼の人類へのかたみとも言ふべきものであり、且つまた無產階級倫理の基礎の設定への彼の最後の試みとも見做すべきものである右の『倫理學』の邦語譯が、幸にも最近に及んで二組も世に出たことを附記しておく。

七　無產階級的政治意識

我國の無產階級は、過去の長期間に亙つて、政治的に全然受働的地位におかれてゐたところの結果として、それ自身の政治意識を發達せしめる機會を持たなかつた。そこで我國の無產階級及び準無產階級ともいふべき社會層を構成してゐる大衆の或る部分は、官僚及び既成諸政黨から彼等に向つて與へられる政治意識を、彼等が理解し得る限りに於て攝取して、それを彼等の政治生活に於ける行動の規範とした。『富國强兵』とか、『國利民福』とか、『憲政擁護』とかの標語は、機會のあつた度每に、彼等の耳に叫び入れられた。そして彼等は、それに依つて昂奮し、それに依つて盲動し、時としてはそれによつて、我を忘れて熱狂し、狂奔した。そして、すべてのさうしたことの結果は、ただブルジョアジーの政治的支配の確立に導くばかりであつた。

かうした狀勢の上に幾分かの變動が見え出したのは、世界大戰中に於て、我國の勞働階級が、徐々に――だが確實に――無產階級的生活意識に眼ざめしめられる傾向が見え始めてから後のことであつた。彼等はその頃から、ブルジョア

政治が彼等の階級的生存の利害感と正反對の方向に動いて居ることを覺り始めた。それは概括的に言へば、ブルジョアジーの階級的生活意識に對する彼等の全般的否認の政治的方面への現はれであつたことは無論である。それから如何にして一時政治行動否定の傾向が現はれ、また次いで如何にしてそれが最近の無産政黨組織運動へ轉換するやうになつたかの理論上の説明は、簡單ながら、既に前に掲げておいた。

今や我國に於ても、無産階級政黨が、それの階級的生活意識に根ざす新政治意識を提げて、政治的に猛然として擡頭しようとしてゐる。その政治意識が既成諸政黨を指導する政治意識と根本的差異を示さうとする徴候が既に歴然と現はれてゐるのは、それぞれの階級的生存上の利害感が根本的に背反し、從つてそれぞれの階級的生活意識が根本的に相乖離してゐるからである。疑ひもなく、既成諸政黨は無産政黨がそれの綱領の中に掲げようとしてゐる諸項目を、事情の許す限りに於て、縱し形式的にでもせよ横取りするであらう。否、彼等は既に現にさうしつつある。それは、無産階級の階級的生活意識から出た諸般の主張や要求が、現代社會の民衆の大部分の生活意識に於て、より多く倫理價値を帶びたものと見られてゐる事情が、彼等既成諸政黨の眼にも、流石に餘りに明白に映じてゐるからである。けれども、かうした彼等の僞善の假面といへども、ブルジョアジーの階級的生存上の利害の政治的表現機關としてのそれの本來の性質を蔽ふことが出來ないには決まつてゐる。そのことの最も顯著な標識は、それがそれ自身の本質上、ブルジョアジーの階級的生存上の利害代表機關として終始する必然性があるにも拘らず、依然として國民代表の看板の下に隱れてゐる事實の上に見られる。それに反して、新興無産政黨は、既にその出發點から、それが實質上、無産階級の階級的生存上の利害代表機關であることを率直に標榜して立つた。そこに新興勢力としてあらゆる物質上の弱味に憑かれてゐる無産政黨だけが持つところの、精神上若しくは倫理上の强味がある。

無產政黨は縱しそれがブルジョアジーの政治意識を根本に於て肯定しないにもせよ、苟くもそれが一政黨として立つ以上は、少くともそれの議會行動の關する限り、合法的立憲的に進退するといふ必要に制約されるであらうことは、無論である。また無產政黨は、縱し終極に於て合法的立憲的手段に依つて政權をそれ自身の手に奪取する日を目指して進むにせよ、當分の間は、建設的地位に於てよりは、寧ろ批評的地位に於て、それの政治的活動に從事するであらう。けれども、無產政黨が縱し如何なる行動に出ようとも、苟くもそれが無產政黨として續く限りは、それの行動が無產階級的生存上の利害感から出る政治意識に依つて統制されるであらうことは、いふまでもないことである。

それ故に、無產政黨は、何よりも殊に經濟上の方面に於て無產階級が受けて居る一切の不公正を除くことに、その全力を集中するであらう。この方面に於て、無產政黨が終極の目的とするものは、無產階級の經濟上及び社會上の全般的解放であるに相違ないが、それへ到達するまでの道程として、それは樣々の社會立法を要求するであらう。この點に於ける無產政黨の立場と、同樣の主張をする既成諸政黨のそれとの相異點は、一は直接に階級的生活意識から來る要求を代表するに反して、他は外的事情の壓迫への讓步を反映するといふことの上におかるべき必然性があるのである。

また無產政黨は、社會上の方面に於て、或は婦人の社會的地位の向上とか、或は敎育上の機會均等とか、或は婦人及び未成年者及びその他の社會的弱者への各種の保護とかと言つたやうな、矢張り、無產階級的生活意識から直接に自然的に流れ出る諸般の要求を議會に持ち出すのであらう。同樣に政治的方面に於ては、それは軍國主義や、金權政治や、警察國家主義的政治に向つて、議會で最も痛烈なる叫びを舉げるであらう。それは金力や、權力や、及びその他の一切の强制力の政治上に於ける過度の表示は、無產階級的生活意識から見れば、ブルジョアジーの政治意識の倫理性の缺陷を補塡するための糊塗的手段としか見えないからである。かう見て來れば、現在無產政黨運動に於て、第五十議會を殆

んど全會一致の姿で通過した治安維持法が、それの發途の血祭としてかのやうに鎗玉に擧げられつゝあるのは、單なる一片の自由主義の問題として見るには、餘りに深刻な意味を藏てゐるものだといはなければならないのである。

以上は、無產政黨が早晚議會で絶叫するであらうことが豫期され得る諸項目中の極めて少數の例を算へ立てたものにすぎないが、しかしそれらのものだけから見ても、無產階級的政治意識から如何なる種類の要求が自發的に出て來るかの見當がつくであらう。かうした種類の要求は、無產階級自身の立場から見て、充分に豐かな倫理價値を保有してゐるものであることは無論であるが、更らに我々が我々の着眼點を人類的立場の上に移動せしめて、そこからそれらを眺めてみても、我々は矢張り同じ結論をしない譯には行かない。もとより、無產階級がさうした要求を提出するのは、特に人類的立場からと言つてさうするのでなく、どこまでも無產階級的立場からさうするのであることは、いふまでもないことである。といふのは、今日のやうに、階級對立が社會生活上の最も顯著な現實として儼存してゐる時代に於て、階級的立場を措いて直ちに人類的立場から實際的要求を提出することに依つて、或る具體的効果を擧げようと企てるやうなことは、餘りに亂暴な事實の無視であり、餘りに無鐵砲な論理の飛躍だからである。けれども、人類生活の遠き過去から推積して來た一切の不公正の階級的負擔者である無產階級は、それ自身の手でそれを取り除くのでなければ、全的にそれ自身を解放することが出來ない運命の下におかれてあるものであつて、そして無產階級がそれ自身のために、それ自身の手でそれを取り除くことは、結極人類生活上の不公正の推積を撥無することになる必然性があるのである。この意味に於て、無產階級の解放は、人類の解放といふことと同意語と見られることが出來るのである。無產政黨の因つて以て立つところの新政治意識の倫理基礎は、畢竟かうした一點の上に求められなければならない。で、我々が我々の見地をそこに置いて今一度クロポトキンの『倫理學』を顧みるとき、我々は他の點に關して彼に同意し難い多くのものを持つにも拘らず、この一點に關しては、それから非常に貴重な多くの教訓を得ることが出來るのである。ただ私は、今はこの點を示唆するだけに止める以上に、時間の餘裕を持たないことを遺憾とする。(完)

小作問題の歸趨

澤村康

一

我國の小作問題は小作紛爭の頻發に依つて先づ世人の注意を促した。されば我國に於ては小作問題と言へば直ちに小作紛爭を連想し甚しきに至りては小作問題とは即ち小作紛爭の問題に外ならずと考ふる者も在る程である。然し乍ら、理論上から言へば小作問題と小作紛爭とは必ずしも表裏の關係にあるものでは無く、小作問題は小作紛爭の有無に關らず存在し得るものである。例之、「アメリカ」合衆國に於ては農業地の面積頗る廣く小作人は自由に其の小作地を選擇することを得るが爲にその多くは一二年位の短期の契約を結んで或る一定の農場を小作し其の地力枯渇するときは更に他の農場を小作し、斯くて各地主の間を轉々として渡り歩くと謂ふ話であるが、地主も亦多くは小作料を目的として土地を所有する者では無く、寧ろ地價の騰貴を待つて之を有利に賣却することを目的とする投機者流であるから、長期小作は土地を賣却する場合に障害を生ずと謂ふ見地から矢張り短期小作を歡迎して居る始末である。されば「アメリカ」では我國に於けるが如く地主小作人間に小作に關する紛爭を生ずと謂ふことは無いが、斯國の農政學者は矢張り小作問題を論議して、現在の如き短期小作では小作人はやゝもすれば掠奪農法を行ふのみならず土地改良の如きは地主も小作人

も之を行はずして國土は年々荒廢するばかりであるから國家は成る可く長期小作を奬勵して永く一定の農場に土着せしむる様に仕向けねばならぬ。そして土地改良を奬勵するが爲めには英國の小作法等に倣ひて小作制度を合理的に改革し小作人に對しては小作地改良に對する賠償請求權を附與する必要があらう等と論じて居る。故に「アメリカ」では小作紛爭は無いが小作問題は立派に存在して居るのである。

右の如き次第であるから我國に於ても小作問題と小作紛爭とは決して不可離の關係にあるものでは無い。換言すれば小作紛爭が發生した場合に於て初めて小作問題が生ずるものでも無く、又小作紛爭の鎭定を以て直ちに小作問題の解決と言ふこととも出來ない。従つて余りに小作紛爭を重く視て小作問題と小作紛爭とを同一視するが如きは小作問題の本質を忘れたるものなりと謂はねばならぬ。蓋し理論上から謂へば小作紛爭の發生するは其の基礎たる小作制度に何等かの欠陥あることを示すもので其は恰も地震の發生が地下の構造に弱點あることを示すが如きものだから、問題とすべきは根本の小作制度にして個々の小作紛爭の如きは謂はば第二義的の意義を有するに過ぎないからである。即ち小作紛爭なるものは常に一定の小作制度を基礎として發生するもので如何なる小作紛爭も其の根本の原因は凡て小作制度の欠陥に在りと謂ふことが出來る。故に學者が「我國の小作紛爭の原因」と題して或は「凶作に因る小作料の減免」或は「込米の存廢」或は「小作料の永久減額」等各種の事項を鹿爪らしく列擧するも、夫等は要するに小作紛爭の動機を示すに過ぎざるもので決して其の根本の原因を語るものではない。そして農政上の問題とすべきは謂ふ迄も無く小作紛爭の根本の原因にして決して其の個々の動機に非ることは極めて明白な事理である。

如斯く予は小作問題とは要するに小作制度の問題であると信ずるものであるが然らば小作制度の問題と謂ふは一體何を意味するのであるかと謂ふ疑問が起る。然し乍ら、之は前述の「アメリカ」合衆國に於ける小作問題の説明に依りても

知り得るが如く、簡單に謂へば農業を振興せしむる上に於ては現在の小作制度を如何に改革するを妥當とするやと謂ふ問題である。されば予の立場から謂へば小作問題とは寧ろ勸農政策の問題にして、決して世人の謂ふが如く直接に農業收益の公平なる分配を目的とし又は小作紛爭の鎭壓豫防を目的とする問題では無い。唯、農業收益の分配が甚しく公平を欠き又は其の他の事由に依りて小作紛爭が續發するやうでは到底農事振興の目的を達し難いから小作問題の解決策と謂へば、實際上、分配問題に最も留意する必要あり、又、小作紛爭の鎭壓豫防と謂ふことを考へる必要があるに過ぎ無いのである。夫れと同時に亦、予の立場から謂へば、假令、小作紛爭は發生せずとするも若し小作制度に何等か不合理の點ありて夫れが爲めに農事の改良發達を妨げらるゝが如きことあらば小作問題は明らかに存在するものにして偶々、小作人が團結して或る種の行動に出でたりや否やと謂ふことは決して小作問題の成立に直接の關係を有するものではあり得無い。

二

小作問題は小作制度の合理化を目的とする問題である。されば現行小作制度に何等かの欠點ありて、夫れが爲めに農事の振興を害せらるゝが如き處ある場合には小作問題は常に必ず存在するものにして小作紛爭の有無の如きは多く問題とする所では無い。

小作問題の意義にして右の如しとするならば、小作問題は當然、小作制度の改革に依りてのみ解決せらるる問題である。されば昨年政府が小作調停法を制定したる際、一部の輿論が之に滿足せず實體法を改めずして單に手續法のみを制定したるは何故であるかと非難したるは即ち此の意味に於て正當である。實體法たる賃貸借の規定が現行法通りである

ならば、假令、小作紛爭の解決手續を簡易ならしめた所で、其は現行小作制度に些の紛更をも齎らすものでは無いから問題は一向解決せらるべき筈がない。如斯きに滿足するは徒らに小作紛爭の解決に急にして根本たる小作問題の解決を忘れたるものなりと謂はねばならぬ。

小作問題が小作制度の問題たる限りは、地主の小作人保護施設と謂ふことも根本の解決策からは隨分縁の遠いものである。大眞面目で此の種の保護施設を奬勵して居る地方農會の人々又は之に傾從せる特志なる少數地主の人々には洵に言ひ難きことではあるが、由來、地主と小作人とは其の利害關係を全く異にせるものである。勿論、之は獨り地主小作人の關係のみに限らず、現在の制度に於ては一切の經濟取引の兩當事者は何れも已れを利せんとする念慮を有するものだから、必ず相互に其の利害を異にして居るものである。故に地主が特に小作人保護の施設をなすとするも其は結局は地主の立場から見て損の行かざる範圍内に於ての保護施設であつて決して自ら損をして迄も小作人の保護を盡すと謂ふことは無い。又、假令、左様な特志の地主が居た所でそれは要するに極端なる例外であつて之を以て凡ての　期待することは出來ぬ。加之、地主の中には小作人保護の念慮等は毛頭も無く、ひたすら小作料の增徴のみに腐心する「經濟人」も決して少く無いのだから、地主の小作人保護施設と謂ふことは敢て極力排斥する必要は無いかも知れぬが、要するに地主の任意に行ふべきもので旨く行つた所で單に小作紛爭を緩和する位ひの效果しか有たぬものである。

殊に現今我國の小作人の欲する所は小作關係に伴ふ各種の權利である。小作人は現在の小作制度の下に於ては全く地主の恩惠の下に土地を耕作せるもので、一度地主との間に行違ひを生ずるならば地主の爲めに何時立退を命ぜらるるかも分らぬ狀態にある。斯かる不安定の地位にある小作人が偶々地主より立退を命ぜらるること無く永く其の耕作を續けて居るならば其は偏へに地主の恩惠に依るものである。地主は何時にても隨意に小作人を逐出すことを得るのであるか

ら夫れを逐ひ出さずに小作させて置くと謂ふことは地主の側から謂へば確かに一つの恩惠であらう。然し乍ら人間は他人の恩惠に依て生活するを快しとせざるものであり又、他人の恩惠に依りて生活する場合には其の恩惠の繼續する間だけしか生活出來ぬと謂ふ關係にあるため日常大なる不安を感ずるものである。されば今や目覺めたる小作人は恩惠を排して權利を要求する。即ち確固たる小作權を要求するに至る。之に對して若し地主が更に小作人保護施設と稱する恩惠を賣らんとするならば其は恰もパンを求むる者に砂利を給するが如きもので單に小作人を侮辱する丈けの話である。故に眞に小作人を保護せんとするならば小作制度の改革に依りて小作人に確固たる權利を保護しなければならぬ。然らざれば問題は永久に解決される見込は無い。

小作紛爭は常に一定の小作制度を基礎として發生するものであるから、假令、如何なる小作紛爭が勃發したところで之を以て直ちに當事者たる地主、又は小作人の責に歸することは出來ない。例之地主の中に極めて横暴なる者が居て、夫れが爲めに小作人の憤激を買て大事を生じ延いては近隣の地主も迷惑を蒙むる樣なことが起つたとしても夫れは現在の小作制度が存續する限りは如何とも爲し難きことで必ずしも其の地主が惡いとは言へない。寧ろ如斯き地主の横暴を許容する現行小作制度が惡いと謂ふべきである。されば小作人の立場から言つても打破すべきは惡地主には非ずして惡制度である。現在の小作制度の下に於ては地主は小作地に對し殆んど絶對の支配權を有するのであるから地主が其の支配權に從つて或は小作料を増徴し又は小作人を追放するとするも其は地主の側から謂へば法律上當然の權利を行使したまでで別に遠慮は要らぬ譯である。又、實際、世の中には利益の爲めには全然遠慮を爲さざる者が決して少くないのだから之を矯めんとするならば始めから制度の上に於て遠慮を強制する樣にしておくのが一番有効な方法である。換言すれば個別的に無遠慮な地主を打破するのでは無く一般的に「地主の無遠慮を許容するが如き現在の小作制度」を改革す

ることが根本の解決策であると謂はねばならぬ。

三

小作問題は小作制度の欠陥に因する問題であるから其の解決には是非共、小作制度を改革しなければならぬ。然し乍ら、若し一歩を進めて小作制度其のものを全廢することが出來るならば問題は一層徹底的に解決せらるるであらうとも考へらるる。世に小作問題の對策として自作農創定論を主張する者あるは即ち之が爲めである。

自作農創定論に付ては我國には少くも二個の誤解が行はるる樣に思はるる。其の第一は自作農創定と内地植民とを混同することであり、其の第二は自作農創定を以て單に若干の小作人に對して向上の機會を與ふる制度であると考ふることである。先づ第一の點に付て考察するに之は主として理論上の問題ではあるが自作農創定と言ふは現在の小作人を其の儘自作農に進ましむることであり、内地植民と謂ふは人口稀薄なる大農場地方に他所から農民を移して新たに小農場を設定する政策である。されば前者は專ら農企業の形式を變更することを目的とするものであり後者は主として農企業の規模を縮少することを目的とするものである。何事も目的が違へば手段が異るもので自作農創定と内地植民とは其の根本の目的が違ふから自ら其の手段が異る。即ち、自作農創定の場合には現在の小作人をその儘自作農に進ましむるものであるから全然人を動かす必要はなく單に其の小作地の所有權を地主から小作人に移せば良いのであるが、内地植民の場合には新たに小農場を設定するのであるから是非共、他所から小農場希望者を連れて來なければならない。されば自作農創定の場合には「如何なる小作人」を自作農に進ましむべきかと謂ふ問題は起る筈がなく理論上に於ては凡ての小作人を自作農に進ましむべしと謂ふことに歸着するのであるが、内地植民の場合には成る可く「小農場の耕作に適

する者」を選れて來ねばならぬから、之に該當すべき者の資格を嚴しく定めて置く必要が起る。所で「小農場の耕作に適する者」と謂ふことになると農業經營に關して多少の知識經驗を有するのみならず、新たに小農場の經營を始めるのであるから相當の經營資本を有することが必要となる。加之、設定したる小農場を自作地として交付する場合には勿論、政府又は其他に於て相當の低利資金を貸付することが是非必要ではあるが、夫れと同時に小農場希望者に對しても其の代價の $\frac{1}{4}$ 又は $\frac{1}{3}$ 位を即時に提供せしむることとして毫も差支へは無い。されば內地植民の場合には假令、或る意味に於ては自作農創定に類する樣な方法を採るとしても、小農場取得者の資格に關しては一定の財産上及び其の他の條件を定むることを得るのであるが自作農創定の場合には全部の小作人を自作農に進ましむるのであるから小作人の財産狀態等に拘泥して其の資格を制限することを許さない。又、內地植民の場合には設定すべき小農場の面積に付ては當然一定の制限があるべきだが自作農創定の場合には小作地を自作地に變ずるのであるから面積の制限と言ふことは頭から考へられない。尙其の他、兩者の區別に關しては硏究すべきことが少く無いが夫等は何れ他の機會に述ぶることとして兎に角、兩者を混同することが理論上、正當に非ること、從つて海外の事例を硏究する場合にも良く兩者を混同せざる樣注意すべきこと及び兩者を混同して立案するときは自作農創定の眞の目的を達し難きに至ることを玆に一言して置く。

次に第二の誤解たる自作農創定の意義に付て一言するに、自作農創定と謂ふは決して單純に自作農を創定することを目的とするものではない。若し自作農創定を以て單に自作農を創定することを目的とするものと解釋するならば、百人の小作人の中から優秀なる者一人を選んで之を自作農に進ましむることも立派な自作農創定である。そこで世間には自作農創定とは若干の小作人に對して向上の機會を與ふる制度であると考へる者も出て來る譯だが、夫れは自作農創定で

は無く寧ろ優良小作人奬勵制度とも謂ふべきものである。勿論如斯き優良小作人奬勵制度に對して自作農創定と謂ふ名稱を與ふることは人々の勝手であるが、玆に論ぜんとする自作農創定は小作制度の全廢を目的とするものであるから多數の小作人の中から小數の優秀者を選んで之を自作農に進ましめた所で夫れは決して自作農創定とは謂へない。即ち自作農創定と謂ふは小作制度の全廢を期するもので「耕さざる者は土地を所有すべからず」と謂ふ新原則を確立せんとするものである。蓋し耕さざる者が土地を所有して居ては到底小作人を自作農に進ましむることが出來ぬからである。されば自作農創定は當然、不勞地主の全廢を伴ふもので決して地主側の人々から双手を擧げて歡迎せらるべき性質のものでも無く、又、地主側から自發的に實行せられ得るものでも無い。今我國に於て自作農創定と云へば極めて穩健なる社會政策であると稱して地主、學者、政治家等から盛んに謳歌されるのであるが其は恐らくは自作農創定の眞意を誤解又は曲解して不勞地主の存在を許容しつゝ小數の優良小作人を自作農に進ましむるが如きことを考へて居るに違ひ無い。然し乍ら斯樣な方法では多數の小作人はいつ迄も小作人として殘るのであるから小作問題は殆んど永久に解決される筈が無い。されば若し強いて斯樣な極めて不徹底なる方法で自作農の數を增加させようと考へるならば是非共、一方に於ては多數の「賣殘りの小作人」の爲めに小作制度の改革を實行する必要がある。即ち、我々は「自作農創定か小作制度の改革か」と謂ふ問題に對して兩者を併用すべしと謂ふ答案を得ることになり更に一歩を進めて論ずるならば「小作制度の改革」は是非必要なりと謂ふ結論に達することとなる。然し之では何の爲めに自作農創定を行ふのか分らなくなる譯だから、苟くも自作農創定に依りて小作問題を解決せんとするならば結局、小作制度の全廢を旗印としなければならない。尤も多數の小作人の中から若干の優秀なる小作人を選んで之に對して自作農に向上する途を與ふることも之を繰返して行ふならば最後には小作制度を全廢することになるであらうと言ふ人もあるかも知れぬが夫れは當面の問題に對

して余りに悠々過ぎる話である。

四

自作農創定に依りて小作問題を解決せんとするは小作制度の全廢に依りて小作問題を絶滅せんとするものである。されば若し眞に此の政策を遂行せんとするならば少くも二個の要件を充すことを工夫しなければならぬ。即ち第一は成る可く短期間内に全部の小作人を自作農に進ましむること及び第二は地主をして必ず其の所有地を賣らしむることである。蓋し一部人士の唱ふるが如き方法にて每年少しづつ自作農を增殖して行く場合には全部の小作人を自作農に進ましむるには二百年又は三百年の長年月を待たねばならぬことになるのであるが、不幸にして我國の小作人には左樣な長命の者は居らぬから如斯きは多數小作人の立場から謂へば全然、自作農創定を行はざると同一である。されば眞に自作農創定に依りて小作問題を絶滅せんと欲するならば出來る丈け短期間内に其の目的を達する樣に努めねばならぬ。夫れと同時に又、假令、極めて短期間内に自作農創定を完了するが如き計畫を樹てた所で、若し地主が其の所有地を賣却せぬと謂ふ場合には其の計畫は當然行きつまるわけであるから、是非共、凡ての地主をして其の所有地を賣却せしむる樣にしなければならぬ。

併、自作農創定を極めて短期間内に完了すると謂ふことは實際上、如何なる意味を有するかと謂へば、つまり、其の政策遂行の爲めに莫大なる經費を要すと謂ふことに歸着する。蓋し如何なる方法を以て自作農創定を行ふとするも全部の小作人を自作農に進ましめんとする場合には如何にしても國家又は地方公共團體から小作人に對して土地の買入代金を低利年賦で融通してやらねばならぬのであるが、若し之を永き期間に亘りて除々に實行するならば或る小作人に資金

を貸付してから其の償還金の入つて來るのを待つて之を次の小作人に貸付すると謂ふ樣に悠々と資金の運轉を圖ることが出來るのであるが之を短期間内に實行せんとする場合には斯樣に同一の資金を繰返して運用することが困難だから勢ひ多額の經費を必要とする次第である。所が實際問題としては多額の經費を必要とすと謂ふことは自作農創定の最大障害であつて、殊に我國の如き財政上の余裕無き國に於ては到底採用することの出來ぬものとなるのである。

次に地主をして必ず其の所有地を賣却せしむると謂ふことは直接又は間接に地主に對して其の所有地の賣却を強制することを意味するものであるが、直接に強制すると謂ふは公益上の必要を理由として地主の所有地を收用することであり間接に強制すると謂ふは地主をして進んで其の所有地を賣却せしむる樣に仕向けることである。之を海外の事例に徴するに、大戰後「ルーマニア」に行はれたる自作農創定の場合に於ては政府は法律を以て一人の地主の所有し得べき最高面積を原則として百「ヘクタール」と限定し此の限度以上の土地は全部國家に於て之を收用することを得るものと爲し又、外國人の所有地、十年以上引續き小作せしめたる者の所有地、及び各種團體の所有地に付ては國家は寸毫も余さず之を收用することを得るものと定めて、政府は事實上、不勞地主の所有地を全部、強制收用することを得るものとした。斯くて「ルーマニヤ」の土地改革に於ては政府は強制力を以て地主の所有地を根こそぎ收用し之を適當の大さに分割して農民に對し其の收用價格の半値段で賣渡したのであるから其の手續は理論上には極めて常識的なるものであるが、反之、千八百七十年來引續き「アイルランド」に行はれたる自作農創定の場合には政府は間接強制の方法を實行したので其の手續きは余程興趣あり參考となるものである。即ち「アイルランド」の自作農創定に於ては政府は唯、小作人に對して資金を融通するだけで小作地の賣買は原則として凡て之を地主小作人間の自由契約に一任したのであるが夫れと同時に政府は相當小作料の決定に依りて次第に小作料を下落せしむる方針を採り、之に依りて一般的に土地の價

格を下落せしめ間接に地主の土地賣却を强制することとしたのである。されば地主は若し其の所有地を永く小作に附しておくならば獨り小作料が下落するのみならず夫れに伴ひて土地の價格も益々下落して非常なる不利益を受けることとなるから成る可く早く之を賣却してしまわねばならぬと謂ふ事情に迫られる。斯くて「アイルランド」に於ては地主の方から進んで小作地の賣却を申出でることとなり自作農創定は頗る圓滑に理想的に進行したのである。

併、我國に於ては「ルーマニヤ」式に依りて地主の土地を直接に收用するを可とするか又は「アイルランド」式に依りて地主の土地賣却を間接に强制するを適當とするか、若くは、更に適切なる手段を研究すべきかと謂ふ問題は他の各種の事項と關聯して決すべき問題であるから其の詳細は他日、自作農創定法を研究する場合に譲ることとして次に注意すべきは其の土地の價格を如何に定むべきかと謂ふ問題である。蓋し農業地の價格には賣買價格と收益價格との二種ありて、前者は後者よりも幾分高きを普通とするのであるが殊に我國の如き土地崇拜の國に於ては其の間の開きは頗る大きい。そこで自作農創定の爲めに地主の土地を小作人に移す場合には其の土地の代價は之を賣買價格を標準として定むべきか又は收益價格を標準として定むべきかと謂ふ問題が起る。勿論地主側の人々は必ず賣買價格を標準として其の代價を決定すべきであると主張するであらうが若し此の論を容れるとなると自作農創定は結局、不可能となる虞がある。其の理由は種々あるが主なるものを擧ぐるならば第一、に賣買價格を標準とすれば國家は小作人に對して必要以上の資金を融通しなければならなくなり財政上の困難は益々大となる。第二に小作人は其の土地を買入れるが爲めに其の土地の生産力に相應せざる程の過大なる負債を爲し年々の收益では到底、其の元利を支拂ふことが出來ず遂には折角買入れた土地も之を他に轉賣せねばならぬ樣になる。第三に土地の賣買價格なるものは需要供給の關係に依りて定まるものであるから若し賣買價格を標準として地主の土地を買上げるたらば其の價格は自作農創定の進行と共に益々騰貴して其の

政策は當然行き詰まらざるを得ざることとなる。

自作農創定の爲めに土地の價格が騰貴すると謂ふ事は最も注意を要する問題である。多くの農政學者は此の點に付ては甚だ無頓着の樣であるが若し賣買價格を基礎として自作農創定を行ふならば少くも其の騰貴を防ぐだけの工夫は樹てねばならぬ。然らずして、唯、自作農創定は頗る可なりと謂ふ單純なる考へで國家又は地方團體が小作人に對して土地代金を低利で融通することにしたならば其は土地市場に有力なる買手を出現せしむる譯であるから必ず地價を騰貴せしめる。土地の價格が騰貴すれば國家又は地方團體は經費不足の爲めに豫定の目的を達することが出來なくなり、小作人は小作地買入れの爲めに不當に高い代金を支拂ひ其の負債償還に苦しむことになる。斯くて國家も小作人も不利益を受け利するは獨り地主のみとなる。「耕さざる者は土地を所有すべからず」と謂ふ新原則の上に立つべき自作農創定論が我國に於ては不思議に地主側の人々から提唱されるのであるが其は全く彼等が自作農創定によりて土地の價格の騰貴することを豫想するが故である。それと同時に小作人側の人々が自作農創定とは地主の土地賣盡策であると非難するも矢張り同一の見解に立つものである。或は又、多くの學者、政治家等が自作農創定を以て最も穩健なる政策なりと主張するのも恐らくは同樣に地價の騰貴に依りて地主の利益を保護し得ることを前提とせるものであらう。然し乍ら之等は何れも誤りである。如斯く土地の價格の騰貴することは必然に自作農創定の進行を妨ぐるものであつて、其は恰も自轉車に乘りて無限の山道を走せ登らんとするが如きものである。されば眞に自作農創定を遂行せんと欲するならば先づ其の最大障害たる地價の騰貴を打破する政策を樹てねばならぬ。地價の騰貴を豫想しつゝ之を打破すべき何等の對策も無くして唯、漫然と自作農創定を主張するが如きは世を誤り人を愚にするも甚しきものである。

五

自作農創定が必然に土地の價格を騰貴せしむべきことは理論上、極めて明白なることであるが歐洲には現に其實例もある。即ち「プロシヤ」に於ては千八百八十六年以來今次の大戰勃發に至るまで引續き東部邊境の「ポーランド」化を打破する目的を以て專ら「西プロシヤ」及び「ポーゼン」の二州に小農場設定の政策を行ひ「ポーゼン」市に殖民委員會と稱する官廳を設置して主として「ポーランド」人の手から土地を買取り之を獨逸農民に年賦にて賣却し之に依りて獨逸民族の自作農を增殖せんと企てたのであるが、土地の價格につきては何等の制限をも設けざりし爲め、該政策の進行と共に地價は非常なる勢にて騰貴し政府は幾度か其の經費を增額したければならなかつたのである。次に、殖民委員會が實際に支拂ひたる所によりて地價騰貴の模樣を示せば左の如し（Buchenberger, Agrarwesen und Agrarpolitik, Bd. I. S. 417）

年次	一「ヘクタール」の價格	同指數
一八八六年	五六八マーク	一〇〇
一八九〇	六五六	一一六
一九〇〇	一、六二三	二六六
一九一三	一、八二一	三二一

勿論、農業の純收益が增加し之に伴ひて地價が騰貴したのなら問題は無いが政府が大規模なる土地買上げ政策を採りたるが爲めに單純に要需供給の法則に依りて地價が騰貴したのでは土地買上げの政策は當然年と共に行き詰まらざるを

得ない。「プロシヤ」に於ける此の東部邊境の民族政策が能く顯著なる成績を示すこと能はざりしは決して單り「ポーランド」民族の有力なる對抗政策に遭遇した爲めばかりではなく實に其の根底には如斯き地價の騰貴と謂ふ一大原因がよこたわつて居たのである。

右の如き次第であるから自作農業創定の場合に於ては如何なる意味に於ても地價の問題が最も重要なるものである。地價の問題には一言半句も觸れずして徒らに自作農創定を唱ふるが如きは假令、學者の主張であるとするも其は正に地主の土地賣逃策の代辯に過ぎない。そこで實際問題として土地の價格は之を如何に定むべきか又其の騰貴は之を如何にして防止すべきであるかと謂ふに、「ルーマニア」に於ける自作農創定の場合に於ては土地の收用價格は之を一九一七年乃至一九二二年の相當小作料を標準として耕地に付ては其の四〇倍以內又牧場に付ては其の二〇倍以內に於て裁判所が之を決定するものと定めた。茲に相當小作料と稱するは一九〇八年の小作法に依りて各地に設置せられたる特別委員會が各五年の期間を定めて決定したる小作料である。予は不幸にして「ルーマニア」の小作法に通ぜぬので其の相當小作料が從來の競爭小作料に比して如何なる割合を以て增減したりやと謂ふことは之を說明することを得ぬのであるが、兎に角大戰後「バルータ」の著しく下落したる場合に從來の相當小作料を標準として土地の收用價格を定めたのであるから其の價格が極めて廉かりしことだけは疑ひ無き所である。英人「ベン」(三)が其の著「農業經濟の基礎」に於て「ルーマニア」の土地改革は土地沒收なりと謂へるも全く之が爲めである。されば「ルーマニア」に於ては土地は其の賣買價格によりて收用されたのでは無く恐らくは收益價格以下の價格で收用されるものであらう。殊に法律を以て其の價格を嚴重に制限したのであるから地價の騰貴と言ふことは全く問題にならない。されば、世に「ルーマニア」の土地改革を指して農制革命と呼ぶ者あるも決して過言ではない。

次に「アイルランド」の自作農創定に於ては政府は唯小作人に對して資金を貸付するだけで土地の價格の決定等には全然之を當事者の自由契約に一任したのであるが、政府が資金を貸付する場合に付ては法律上一定の制限が設けられてある。即ち、小作人は政府に對して其の借入金を三分の利息と五厘の償却金とを合せて毎年三分五厘づゝ六十五年六ケ月に亘りて完濟するのであるが（千九百九年の土地法に據る）、政府は其の年々の賦拂金が從來の相當小作料よりも一割乃至四割廉き場合に限り小作人に對して資金を貸付することが出來ることになつて居る。之は直接には資金貸付の場合を制限するものであるが間接には土地の價格を制限するものである。蓋し「アイルランド」に於ては裁判所は地主又は小作人の申請あるときは其の小作地の相當小作料を決定する權限を有して居るのであるが其の相當小作料は實際に於て從來の競爭小作料に比し著しく低廉なるのみならず、裁判所は毎十五年目に相當小作料を改定する權限を有し其の度毎に益々之を低落させて居るのである。そこで地主は永く小作地を所有して居れば益々小作料を下落せしめらるゝばかりであるから一日も早く之を賣却したいと思ふのであるが、小作人は固より之を買ふ金を持たぬから是非共政府から資金を借りなければならぬ。すると政府は右の規定を盾にして從來の相當小作料が假りに百圓であるとするならば其の土地の價格の三分五厘が百圓よりも一割乃至四割廉くなければ資金を貸す譯にゆかぬと言ふ。斯くて地主は小作地を所有して居れば小作料を下げられるし又、之を賣らんと欲すれば其の價格を制限せらるゝと謂ふことになり進退共に利を摑むことを得ざるに至る。予が「アイルランド」の自作農創定を以つて極めて興味ありと謂へるは實に此の點である。

斯くて「アイルランド」の自作農創定に於ては政府は相當小作料の決定によりて間接に地主の土地賣却を強制し又其の相當小作料を標準として土地の價格を制限し且相當小作料の決定に依りて地價の騰貴を防止し否進んで之れを下落せしめて居るのである。「ルーマニヤ」の自作農創定に於ても土地の收用價格は相當小作料を標準として決定せられたるこ

とは前に述べた通りであるが、斯く歐洲に於ける二大小作問題國たる「アイルランド」と「ルーマニア」とが期せずして何れも相當小作料を基礎として土地の價格を制限したることは一見偶然の現象に過ぎざるが如くにも見ゆるが、ひるがへつて考ふるに土地の價格と小作料との間には相互に密接なる關係があるもので、地價が上れば小作料が上り又小作料が下れば地價が下るを普通とする。されば若し自作農創定を圓滑に行はんと欲せば兎に角地價の廉きことを前提としなければならぬのであるから、先づ相當小作料の決定に依りて一般的に小作料を廉くすることが必要となる。故に此の意味に於て「ルーマニア」の土地改革が先づ「小作組合の公認」と「相當小作料の決定」とに始まりて最後に「自作農の創定」に依りて段落を告げたることは洵に至當の順序にして「アイルランド」の土地政策が「相當小作料の決定」と「自作農の創定」との裏表から攻め立てたのと比べて決して單純なる偶然とは言ひ難い。

自作農創定の場合に於ける土地の價格の問題を論じて予は遂に「相當小作料の決定」を必要なりと謂ふ結論に達した。實は余が悠長に自作農創定論を批判したるは全く此の結論を誘導せんが爲めであつて余の信ずる所に依れば「自作農の創定」は「相當小作料の決定」ありてのみ始めて能く行はれ得るものである。「相當小作料の決定」によりて一般的に土地の價格を下落せしめ又益々之れを下落せしむる方針を操りてこそ「耕さざる者は土地を所有すべからず」と謂ふ自作農主義が確立さるるのである。

「相當小作料の決定は」謂ふ迄も無く「小作制度の改革」の最大使命の一つであるが之に關しては我國の學者の間にも少からぬ異論があるかと思ふので尚他の機會に詳細に論じなければならぬと考へるが兎に角「相當小作料の決定」が自作農制定の前提要件である限り「小作制度の改革」は自作農創定の先驅を爲すべきもので、自作農の創定は――思ひ切つた沒收政策を採らざる限りは――決して「小作制度の改革」と離れて單獨に成立し得べきものでは無い。予が自作農

創定を論じて「相當小作料の決定」に及びたるは正に這個の眞理を鮮明せんが爲めであつた。

六

自作農の創定は其の根底に於て不勞地主の全廢を目的とするものだから、此の意味に於て此の政策は確に現代の土地制度に對する根本的の變革を主張するものである。されば自作農創定を以て極めて穩健なる政策なりと唱ふる人々は或は自作農創定の眞意を理解せざるものか又は可なりの進歩思想を抱けるものと謂はねばならぬ。自作農創定を嘲笑する者の中には今の樣に土地の價格の高いときに小作人は如何にして土地を買ふことが出來るか、假令、政府が低利資金を融通するとしても小作人は到底、之を返濟することを得ないであらうと論ずる者もあるが之は今の不當なる地價を基礎として自作農創定を行ふものと考へ、そして、それを自ら大いに非難して居るのであるから謂はば愚問愚答と謂ふべきである。或は又、自作農創定は大いに可なるも、一方に於て之を維持する方策を樹てねば恰も底無き桶に水を注ぐが如きもので徒らに國帑の濫費に終るであらうと論ずる者もあるが、既に幾度か繰返して述べたるが如く、自作農創定とは「耕さざる者は土地を所有すべからず」と謂ふ新原則を確立せんとするものであるから自作農維持の政策と稱するも其は要するに右の原則の一適用に過ぎない。蓋し自作農が小作農に沈落するとすれば其は「耕さざる者」が土地を兼併したる結果に外ならぬからである。されば眞に「耕さざる者は土地を所有すべからず」と謂ふ新原則が確立さるるならば自作農相互の間には土地の賣買が行はれて或は農場の規模が大となり又は小となることはあつても自作農が小作農に陷ると謂ふことは到底あり得べきことでは無い。自作農創定は當然自作農維持を伴ふべきものであると主張する人々は其の主張の眞の意義に付て尙一段の考察をなすべき義務がある。

自作農創定は小作制度の全廢を旗印とするものであるから、若し此政策が眞に完全に遂行さるゝならば小作問題は當然雲消霧散するであらうことは極めて明白である。されば余は自作農創定の理論上の効果に付ては些の疑をも抱かざるものであるが其の實行方法に付ては尙研究すべきことが頗る多い。然し今、其の實行方法を論ずることは本論の目的とする所でも無く又、海外に於ける類似の政策を充分調査した上で結論を下すべきものであらうとも信ずるから、其の研究は凡て他の機會に讓ることゝして玆には單に自作農創定の場合には先づ土地の價格を下落せしむることが先決要件であることを强調するに止めて置く。そして土地の價格を下落せしむるには先づ小作料を下落せしむることが必要であり、小作料を下落せしむるには小作制度を改革して相當小作料決定の制度」を樹立することが必要であることを主張する。されば余の信ずる所に依れば前にも述べたるが如く「小作制度の改革」は假令、自作農の創定に依りて小作問題を解決せんとする場合に於ても尙、依然として必要なる手段であつて、自作農創定と言ふ看板を掲げて「小作制度の改革を避けんとするは、眞に自作農創定を實行する意志なきか又は自作農創定に關して深き考察を迴らさざるものなるかと思ふ。

如斯く予は自作農創定の理論上の効果に付ては些の疑ひをも抱かざるものであるが政策論としては尙、一歩を進めて國家は果して自作農創定と謂ふが如き巨費を要する政策を强いて實行する必要ありや否やと謂ふことをも考へて見ねばならぬ。蓋し自作農創定論なるものは其の終局に於て小作制度の全廢を期するものであるから其の主張の理論的基礎を爲すものは凡ての小作制度を以て常に必ず忌むべきもの排斥すべきものなりと爲すにあるに違ひ無い。之れは農政學者の好んで論ずる自作小作の優劣論に基くもので「アーサー、ヤング」が「所有權の魔力」を云々して以來、殆んどすべての農政學者が恰も申し合せたるが如くに國民經濟上自作は小作よりも常に必ず優れるものなりと主張せるに因るもの

である。國民經濟上、自作は小作よりも常に必ず優れるものなりと謂ふことが眞實ならば自作農創定は農業の發達を期する上に於ては是非とも實行せねばならぬことになるのであるが其は果して事實であらうか。

多くの農政學者が國民經濟上、自作は小作よりも常に當然優れるものなりと主張するは主として小作には次の如き欠點ありと謂ふことを論據とせるものである。即ち小作の場合には農民と土地との關係一時的なるが爲めに農民は其の期間内に出來るだけ多額の收益を擧げんとして掠奪農法を行ふ。之れは特に小作期間の終了する前年に於て最も著しい。同一の理由に依り小作の場合には農民は土地改良を行はぬ。蓋し土地改良は其の効果久しきに亘るものだから短期間内に其の利益を實現することは困難なるのみならず、土地改良はやゝもすれば、小作料の値上げ、小作契約の解除等によりて地主の爲めに無償にて沒收せらるゝ虞があるからである。尙小作の場合には小作人は何時、地主の爲めに小作料を增徵せられ又は其の契約を解除せらるゝか分らぬので施肥深耕等の方法にて集約經營を爲すことも稀である。或は地主の爲めに種々なる點に於て小作地の利用法を制限せられて小作人は自由に其の經營の組織を定むることが出來ぬと謂ふ欠點もある。

尙其他種々なる事項を擧ぐることを得るであらうが簡單に謂へば一般に小作の欠點と稱せらるるは凡そ右の如きものである。そこで然らば小作には何故に如斯き特殊の欠點が伴ふのであるかと謂へば夫れは自作の場合には農民は自己の所有地を耕作するのであるから其の土地との關係は永久的で土地を愛惜する念强く又自ら土地の收益の全部を取得することを得るものだから各種の方法を以て出來るだけ其の經營を集約ならしむるが反之、小作の場合には農民は他人の土地を耕作するものだから其の土地に對する關係は一時的で之を愛惜する念少く又やゝもすれば地主の爲めに小作料を增徵せらるる虞があるから農事改良に冷淡なのであると謂ふのである。そして、それだから自作の利點は「所有權の魔

力」に基くもので農業を振興し農事改良を奬勵するには是非共、小作を廢して自作農創定を行はねばならぬと謂ふのである。

然し乍ら右の所論は決して正當なるものではない。蓋し世の農政學者が「小作の欠點」として擧ぐる所は何れも「不合理なる小作制度」の弊害を指摘せるもので決して凡ての小作制度に隨伴するものでは無いからである。即ち小作の場合には土地を荒廢し土地改良を怠り又は集約經營を行はざる弊ありと言ふも夫等は何れも農民と土地との關係が一時的なることを前提とし又、地主の爲めに小作料が任意に增徴せられ得ることを前提とせるものである。されば若し小作制度を改革して農民と小作地との關係を永續的ならしめ又、地主の不當なる小作料値上げを禁壓することとしたならば右の如き「小作の欠點」は當然消失する筈である。然るに、從來の學者が此の點を看過して漫然自作の優越を說きたるはそもそも如何なる譯であるか。若し國を肇むるに當りて自作と小作との何れを設定すべきかと謂ふ問題に逢着するならば勿論、何人と雖、自作の優れるを說きて其の設定を主張すべきであらう。然し乍ら今既に農業地の半ばが不勞地主の所有に歸したる時に當りて濫りに自作の優越を說くが如きは、所謂、高遠の理想を說いて眼前の問題を傍觀するの態度にして斷じて國の農政を論ずるものとは謂ひ難い。況んや其の所謂、自作の優越なるものが事實に於ては殆んど全く現行小作制度の弊害を示すものに過ぎざるに於てをや。

されば予は所謂、自作農創定論の論據は決して正當なるものに非ずと信ずるもので此の意味に於て予は自作農創定の無用を主張するものである。換言すれば自作農創定に依て達せんとする目的は「小作制度の改革」に依つて一層容易に且安價に達成し得るものなりと考ふるものである。即ち從來の農政學者が「小作の欠點」と稱したる事項は何れも不合理なる小作制度の弊害を示すに過ぎざるもので、若し現行小作制度を改革して凡ての小作人に對し「小作權の安定」と

「相當小作料の決定」とを保證し且つ其の他必要なる各種の權利を付與したならば小作人の地位は當然、自作農と區別するを得さるに至り、土地を荒廢し又は土地改良を怠るが如き弊害は必ず消失するに至るであらうと信ずる。故に予は國家は必ずしも巨費を投じて自作農創定を行ふ必要無く先づ「小作制度の改革」によりて當面の問題を解決し然る後に内外の情勢に鑑みて理想的なる土地制度の確立に努むるが順序であらうと思ふ。

七

予は自作農創定の場合に於ても先づ其前提要件として小作制度を改革すべしと主張するものであるが、夫れと同時に自作農創定に依りて達せんとする目的は「小作制度の改革」に依りて一層容易に且安價に達成し得るものなりと主張するものである。其の次第は既に述べた通りであるが要するに予の立場から謂へば「小作制度の改革」は自作農創定の有無に拘らず是非實行せねばならぬことで殊に我國の如く著しく小作の多い國に於ては先づ小作制度を合理化するに非れば農業上の諸問題は到底之を解決することを得ざるものなりと考ふるものである。早い話が外米輸入關税の問題にした所で現在の米納小作料制度が維持さるる限りは決して直接に農業及び農民の保護を目的として之を解決することは出來ぬのである。

「小作制度の改革」を主張し「小作法の制定」を力說するものは、當然、現行小作制度に何等か不合理の點あることを主張するものである。蓋し現行小作制度にして充分合理的なりとすれば何等の改革をも爲すべき必要なきが故である。尤も我國の小作制度に不合理の點ありと謂ふことは予の立場から謂へば各地に小作爭議の續發することが何よりの證據で特に問題とするには足りぬのであるが事の順序として茲に此の點を一言するならば余は我國の現行小作制度を以て明

かに不合理極まるものなりと信ずるものである。但し予が合理又は不合理と謂ふは全然農事の改良發達を目標としての話で決して直接に地主又は小作人の便益如何を標準とするものではない。即ち、農事の改良發達を阻害するが如き小作制度は凡て不合理なるもので予の理想とする所は其の不合理なる點を矯むるにある。されば予の立場から謂へば小作制度を改革したる結果、地主が利益を得るや又は小作人が多く利得するやと謂ふことは全く第二義的の問題で謂はば偶然の事情に依て決まると謂つても良い。

そこで右の如き立場から我國の現行小作制度を批判するならば予は第一に小作料の著しく高きことを擧げねばならぬ。小作料が高ければ小作人は當然經營資本の欠乏に苦しむこととなるのであるが之れは謂ふ迄もなく農事改良の最大の妨げである。此の理は少しく農業經營に通ずる者は何人も否定することを得ざる筈だが我國の農業經濟學者は不思議に「土地資本の經費」と謂ふことには無頓着である。余は今、農業經濟學上の議論を爲すことを控へるが要するに農業經營には各種の經費を必要とするのであるが農業經營を集約ならしむるには成るべく流通資本を多く使用しなければならぬ。即ち農業經營費の内譯を百分比に表して見て肥料代、飼料代、種子代、等の流通資本が比較的多きを占むることが必要である。所が小作料として總收益の半分以上も支拂はなければならぬ樣な狀態では農業經營費の過半は「土地資本の經費」に充當せられ肝心の肥料代等は著しく欠乏することを免れぬ。之れ余が小作料の高きことは農事の改良發達を妨ぐる最大原因なりと主張する所以であるが更に一歩を進めて論ずるならば小作料の高きことは實は小作制度の不合理を判斷する最も正確なる計量器なりと謂ふことも出來る。夫れは何故かと謂へば凡て小作制度不合理にして地主が不當の權力を掌握するが如き場合には其の弊害は結局、小作料の增徵と謂ふ形を以て具體化して來るからである。例之、農事振興の立場から見て最も忌むべきは小作人の小作權の不安定なることであるが、之は何人も知るが如く結局は小作料

の増徴と謂ふ所に其の姿を現はして來る。即ち小作期間の極めて短き場合又は全く小作期間を定めずして地主に何時にても之を解約し得るが如き場合には、小作人は永く耕作を繼續し得るの保證なきため到底農事改良を爲すことを得ざるのみならず時としては進んで掠奪農法を行ふと謂ふ弊害があるのであるが、小作人としては決して之に滿足して居る譯では無く理想としては成る可く小作期間の永きこと又は永久的なる小作權を有することを欲するのである。然るに地主は原則としては決して此の小作人の要求を喜ばず出來る丈け小作期間を短くし又は全然期間を定めずして何時にても解約し得る樣にしておくことを欲する。それはそもそも何故であるか。地主は決して將來自ら耕作することあるべきを豫想して長期小作を嫌ふのではない。實は將來、度々小作料を増徴すべきことを豫想して成るべく長期小作を避けんとするのである。即ち小作期間の短きこと又は全然期間を定めずに小作すると謂ふことは決して夫れ自身を目的とするものでは無く全く小作料の増徴を目的として地主が強力なる權利を留保しおくにある。余の論旨を疑ふ者あらば試みに我國の農政學者が「小作期間の問題」に付て如何に論じて居るかを驗べても見よ。學者は必ず「小作期間長きに過ぐるときは時の經過と共に小作料が相當ならざるに至るであらう」と言ふ。例之、河田博士は其の著「農業勞働と小作制」に於て「小作が長期の契約の下に行はるる場合に於ては、小作人は其の小作地に對して改良を加へ其の生産力を培養すれば、それが爲めに生ずる生産上の利益は自己の所得となるが故に、其の經營者の權利が十分に法律的に又事實的に保障せられてある限り、土地に對して改良を加へ、其の生産力を維持し又增進せしむることに意を注ぎ力を盡すべきは當然である」と言つて大いに長期小作の利益を主張せられ乍ら直ちに「然るに又あまりに小作契約期間が長きに失しても、それがために他の弊害が生じて來る恐れがある。即ち土地生産の狀況や、一般農業經濟の狀態やが、向上繁榮する狀態にある時には、小作契約の長きに失するために小作料その他の小作條件が段々と變化する時勢に適合すぬこととな

り、地主が其の期間に於て不利益を被らざるを得ざることとなる。それに又諸般の狀況が沈衰に向ふ時期に際しては小作人は堪ゆ可からざる苦痛を嘗めることとなるのを免れ難い」とて此度は長期小作を排斥して居らるる。つまり小作期間が長ければ時の經過と共に小作料が或は高過ぎることになり又は低過ぎることになると言はれるのだが實際問題としては長期小作は常に地主側の方で嫌ふのであるから、結局長期小作の欠點と謂ふは其の期間の繼續する限り地主は小作料の增徵を爲し得ざるに至ると謂ふことに歸着する。換言すれば小作期間の長短と謂ふことは決して夫れ自身に意味があるのでは無く、全く小作料增徵の頻度を決定すると謂ふことに其の根本の意味があるのである。されば我國に於けるが如く、全然小作期間を定めず地主は何時にても小作人を追放し得ると謂ふ制度の下に於ては小作料の增徵は理論上、全く制限なく每年行はれ得るもので、小作料は常に小作人の支拂能力の最高限度迄達し得らるる。予が小作權の安定ならざることは結局、小作料の增徵と謂ふ形に於て其の姿を現はすものなりと謂ふは正に此の意味である。其の他或は小作人が「小作權賣買の自由」を有せざること又は「小作地改良に對する賠償請求權を有せざること」等は同樣にして悉く小作料の增徵又は小作人の搾取と謂ふ所に其の最後の結晶體を見出すことが出來る。「不當小作料の取締に關する問題」「小作權の安定に關する問題」「小作權の自由賣買に關する問題」等は後に詳論する積りであるから茲に深入りすることを避けるが要するに我國の小作制度は之等の點に於ては全く昔の「アイルランド」の小作制度と同一である。其の昔「アイルランド」の小作人は小作制度改革の爲めに土地同盟を組織して「相當小作料」「小作權の安定」及び「小作權の自由賣買」なる三個の要求を提出し、英國政府は遂に之れを容れて劃時代的なる一八八一年の土地法を制定したることは、小作問題史上有名なる話であが、我國の小作制度も正に之等を鑑として改革に着手すべきである。

極めて簡單ではあるが予は右の如き二三の理由を擧げただけでも「小作制度の改革」を主張する根據は充分であると

思ふ。唯、一言すべきは「小作制度の改革」を主張することは決して「小作人組合の發達」を無用視する意味では無いと言ふことである。「アイルランド」に於ける小作法の制定が主として小作人の同盟運動に依りて促進せられたることは人の知る通りであるが、一度小作法が制定せられたる後と雖、尙、小作人が有力なる團體を組織せるや否やに依りて其の成績が著しく分るることは英國又は獨逸に於ける小作運動の實情が之を示して居る。されば、小作人組合が有力に確實に發達することは「小作制度の改革」の前提要件であるとも言へるし、又、「小作制度の改革」をして有終の美を發揮せしむる所以であるとも言へる。予は小作人組合の發達を以て我國の農業を進歩せしむる槓杆であると信ずるもので決して之を無用視するものでは無い。唯、小作人組合の運動は小作人の自助手段であつて必ずしも之のみに期待を懸くることを得ぬから、國の農政を論ずる者は進んで一個の見解を持し輿論の開發に努むることが必要であると思ふのである。蓋し如斯きは國の農政を進歩せしむる所以でもあり又小作人組合に對して其の行く可き途を示し其の發達を促す所以でもあらう。

八

予は小作問題の對策としては專ら「小作制度の改革」を主張するものであるが世には更に一歩を進めて土地を國有にすべしと論ずる者もある。經濟思想としての土地國有論は決して小作問題の對策として唱へらるるものでは無く或は社會主義の一適用として主張せられ又は社會主義類似の立場から不勞所得の防止を目的として主張せらるるものであるが我國では小作問題に關聯して種々な方面から時々唱へらるる様である。

土地國有論に關しては其の主張の論據、實行方法等に付いて特殊の研究を爲すべき必要があらうが、唯之を小作問題

の解決策として考へた場合には僅かに謳歌する程の價値ありとは思へない。何故かと言へば、土地を國有にすると謂ふことは要するに全部の農民を國有地の小作人に化してしまうことを意味するのであるが、其の場合には小作料は之を如何にして決定するのであるか、又、小作人の小作權は之をどの程度まで認むるのであるか。若し之等の點が凡て現行小作制度を其の儘踏襲せるものであるとしたならば、小作人の地位は依然として不安定にして小作料は盛に增徵せられ各地に小作紛爭は續發し農事改良の如きは全く顧みられざるに至るであらう。されば土地國有によりて小作問題を解決せんと欲するならば是非共、現行小作制度と異る小作制度を樹てねばならぬ。然し乍ら、若し斯樣にして小作問題が解決せられたりとするならば其は土地國有の効果では無くして小作制度を改革したるが爲めの効果である。故に理論上からは土地を國有にする必要無く單に現行小作制度を改革すれば充分なりと言ふことに歸着する。尤も土地國有を主張する者の中には農業の社會化を論據とする者もあらうが之は小作問題とは全く別論である。

更に又、世には小作問題を以て專ら地主小作人間に於ける農業收益の分配に關する問題なりと見て、其の原因は畢竟農業收益の僅少なるにありと說く者もある。小作問題を單純なる分配問題と見ることが如何に淺薄皮相の短見であるかと謂ふことは姑く問はぬこととして、然らば農業收益僅少なりと謂ふはそも／＼如何なる理由によるかと問へば、其は農業經營の規模過少なるが爲めであると言ふ。つまり、小作問題は小作人の經濟が頗る貧しいことから發生するものだが、其の原因は小作料の高きが爲めに非ずして農業經營の規模が小さ過ぎるからだと謂ふのである。之は洵に地主の爲めには都合よき議論で此の主張が通るならば地主は未だ／＼いくらでも小作料を增徵する事が出來る。恰も小作人の境遇不良なるは小作料高きが爲めに非ずして米價廉きが爲めなりと論ふ一部論者の主張と同一の効果を持つものである。倘、小作問題は農業經營の規模過小なることに原因すると說く者は其の當然の歸結として是非共、農業經營の規模を一

般的に擴張する方策を樹てねばならぬ。そこで唱へらるゝは海外移殖民論である。話は頗る景氣良く發展するが海外移殖民論と謂ふは今の日本の境遇では要するに新たに殖民地を獲得することを目的とするもので見樣に依ては暗々裡に侵略的軍國主義を意味するものとも謂へる。斯くて小作問題は遂に小作人救濟の名に於て侵略的軍國主義の口實に供せられる。

我國の農業經營の規模が一般に極めて小なることは明かなる事實であり又、夫れが爲めに農民の經濟の貧弱なることも明かなる事實である。然し乍ら、農業經營の規模小なりと謂ふ事は當然小作料を過重ならしむる原因となるもので大いに「小作制度の改革」を主張する論據にはなるが、決して現行小作制度を辯護する理由にはならぬ。「アイルランド」及び「スコットランド」の周密地方は特に過小經營多くして農民の境遇不良なるを以て有名なる所であるが、英國政府の夫れに對する政策は「小作制度の改革」と「經營規模の擴張」との二者を併用するものであつた。されば予は決して「經營規模の擴張」を無用視するものでは無いが、此の、事のみを說いて「小作制度の改革」を無視するが如きは斷じて正當の議論に非ずと信ずるものである。理論上から言つても元來農業經營の規模又は組織と謂ふが如きは何れも小作制度の上に咲く花である。根底たる小作制度不良なるとき如何にして良き「經營の花」を咲かしむることが出來るか。其の昔「アイルランド」は小作制度の不良なりしことに於ても世界に冠たりしものだが、農民の海外移住の多かりしことも世界に有名なるものであつた。斯くて「アイルランド」に於ては農業經營の規模は年と共に自然に擴大されたのであるが其は農業經營が集約より粗放に移りたるだけの話で、夫れだけでは決して農民の經濟を改善することは出來なかつた。されば農民の海外移殖を說く人は「海外に移住する者」の爲めにも「內に留る者」の爲めにも是非共「小作制度の改革」を主張する責任があらう。

以上述べたるが如く予は徹頭徹尾、小作問題とは小作制度の合理化を目的とする問題であり、夫れに對する政策は「小作制度の改革」にありと主張するものであるが其の結果として然らば一體現行小作制度の如何なる點を如何に改革すべきであるかと謂ふ問題が起る。之に關しては予は先づ順序として諸外國に於ける小作法の規定を調査し其の成績を參考と爲したる上、我國の現行小作制度の實情に照らして「小作料の問題」「小作權の問題」等順次に改革論の內容を鮮明せねばならぬと思ふが既に餘りの長文となりたる故、夫等は一切之れを次の機會に讓ることとする。（完）

何故に日本資本主義經濟は行詰つたと云ふか

高橋龜吉

一　資本主義經濟の行詰とは何か
二　一時的の不景氣か資本主義經濟の行詰か
三　我が資本主義經濟從來の發達原因の消滅
四　我が資本主義經濟の海外發展の見込なし
五　對內的に新に我が資本主義經濟衰亡原因の發生
六　對外的に新に我が資本主義經濟衰亡原因の發生

一　資本主義經濟の行詰とは何か

日本の資本主義經濟は、果して已に行詰つたか否かと云ふとは、そも〳〵如何なる指標によつて判斷し得るか。無駄な議論を除くために、先づ、この點を明にしておく必要がある。それについて、第一に注意すべきことは、資本主義經濟行詰の指標を、資本家の利益勘定の惡化に求める誤謬である。例へばどの事業も引合はない、儲からないと云ふ場合が到達し、事業が衰退するを見て、玆にその國の資本主義經濟は行詰つたと考ふるが如きである。併し乍ら、資本主

義制度の存續する限り、斯る場合に於ては、資本家は、一般的事業の整理と共に、就中、極力賃銀を引下げ、勞働時間を延長し、人員を整理し、或は又保護關税其他によつて、或る期間の後ちには必ずや再び事業を引合ふ基礎に引戻さではおかないものである。されば、資本家の利益勘定の行詰に、資本主義經濟行詰の指標を求むる限り、永久に資本主義は行詰ることなく、假令行詰狀態が起るにしても、それは過渡的な一時的現象たるに過ぎない。第二に注意すべきことは、その國の資本主義經濟が行詰つたと云ふことは、必しもその國の經濟が絶對的に行詰つたと云ふことを意味するものではないと云ふ點である。即ち、玆に我が資本主義經濟が行詰つたと云ふ場合には、それは、資本主義制度に依存する限り、日本の經濟は行詰つたと云ふ意味であつて、資本主義制度以外の組織乃至方法によれば、尙ほ發展の餘地あることを多分に豫測してゐるものである。第三に注意すべきことは、資本主義の行詰は、それ自身によつて、資本家の搾取的位地、支配的位地を、必すしも覆すものではないと云ふことである。否、資本主義の行詰に直面せる場合に於ける資本家のさうした位地は、社會主義的經濟原則を部分的に資本家の利益のために採用することによつて、維持されることが多い。要するに、資本家の搾取關係の改廢の如何は、資本主義經濟の行詰と云ふ經濟的事實に即して、無產階級が階級的にどれだけ覺醒し、團結し得るか否かによつて定るものであつて、いま私の論文の示さんとする資本主義經濟の行詰と云ふ事實とは、最も密接な關係はあるが、しかし全く別種な運動を必要とするものである。

然らば、資本主義經濟が果して行詰れるか否かの具體的な指標は、之を如何なる社會現象に求むべきであるかと云ふに、私の信ずる所によれば、之を次の三點に求むべきである。

（一）資本主義制度の下に於ける民衆の生活程度の向上か已に行止るか、乃至は進んで生活程度の低下と云ふ現象が出現すること。

(二)資本家の利益を中心にして、すべての經濟活動の指針を定めることが、間接に社會の福祉と一致する時代が去つて、却つて、それが社會の福祉に反するに至ること。

(三)(二)の民衆の生活程度の低下を阻止するためには、一般的乃至は部分的に資本主義的原則(就中、營利主義、私有財産權の尊重)を更改して、社會主義的經濟原則に依存せねばならなくなること。

斯く、資本主義行詰の指標を三點に分けたわけは、云ふ迄もなく、單に說明の便宜上さうしたに止つて、要するに、資本主義制度の社會的機能が、已に發展するだけは發展しつくして老衰期に入り、いまや、社會の發展上却つて桎梏となるに至つた一つの事實の三側面に外ならない。從つて、三者は相互に有機的關係にあるもので、(一)あれば必ず(二)あり、(三)あるの理である。先づ、以上三點に就いて少しく註釋する。

(一)資本主義經濟が行詰つたか否かを判斷する、最も基本的な指標は、その制度の下に於て、民衆の生活程度が、尚ほ發展の余地あるか、或は已に行詰り乃至は低下するに至つたか否かである。若しも、資本主義制度の下に於て、民衆の生活程度が尙ほ向上せられつゝある限り、資本主義制度は未だ決して行詰らず、その限り又、資本主義制度の崩壞は決して起らない。しかし乍ら、一度び、その制度の下に於て、民衆の生活程度の向上が行止り、乃至は進んで低下するに至れば、その制度は玆に行詰つて、之を打開せんとする運動が起るのである。例へば、之を德川封建制度の榮枯盛衰について見よう。

德川幕府の樹立、その封建制度の確立は、いかにも武士階級の跳梁を作起したが、しかし乍ら、そのため、民衆は戰國時代の亂世から免かれて、所謂天下泰平の時代を現出した。その結果、この德川封建制度の當初に於ては、一國の生産は激增し民衆の生活程度は向上し、所謂、元祿や文化文政の驕奢な生活を賄ひ得るに至つたのである。が併し、その

封建制度の末期に於ては、已に生産は衰微し、生活程度は低下し、國中到處に生活難を主因とする墮胎其他の惡風が盛行するに至り、封建制度の行詰れることが愈々明かとなつた。この時に於て、民心は倦みて亂を思ひ、王朝の過去を慕つて尊王論の勃興を見、遂に、維新革命を導くに至つたのである。いま、封建制度が、その當初に於て、如何に長足の進歩を社會に齎らしたか、それにも拘らず、一定時の後に於ては、その制度が却つて社會の桎梏となつて、封建制度をして、愈々行詰らすに至つたかの狀を、最も端的に示すために、當時の人口の消長を左に表示する。

徳川封建制下の人口表

慶長八年（西暦一、六〇三）	×一八、〇〇〇、〇〇〇人
元祿十六年（同　一、七〇三）	×二六、〇〇〇、〇〇〇
享保十一年（同　一、七二六）	×二八、五〇〇、〇〇〇
天保四年（同　一、八三三）	×三〇、〇〇〇、〇〇〇
天保五年（同　一、八三四）	△二九、七〇〇、〇〇〇
弘化三年（同　一、八四六）	△二九、四〇〇、〇〇〇
明治五年（同　一、八七二）	三三、一一〇、〇〇〇
同四十年（同　一、九〇七）	四八、八一九、〇〇〇
大正元年（同　一、九一二）	五二、五二三、〇〇〇

（備考）　×印は當時の石高一石につき人口一人と推算せる人口である。×印は幕府の人口調査に、その調査より洩れたる武士階級其他を諸大家の說を綜合して、大約二百萬人と推算して加算したるもの。△印は同じく右を二百五十萬人と推算して加算したもの。明治以降の人口は政府の調査に從ふ。

即ち、徳川幕府樹立後約百年間（慶長より元祿間）に於ては人口八百萬人、約四割四分五厘（一年平均八萬人、四厘

四毛五絲）を增加したが、次の百三十年間（元祿より天保）には、已にその增加率四百萬人、約一割五分四厘（一年平均三萬八百人、約一厘一毛八絲）に激減し、封建制度の生產增加の機能甚しく鈍れることを看取し得る。而して德川封建制度はこの天保時代に於て頂點に達し、爾後維新革命に至る迄約三十五年間、人口は寧ろ減少乃至停頓狀態を續けた。之れ即ち、德川末期に於ける封建制度が已に老衰して、いまや當時の人口を養ひ得ず（その中には天災其他による原因も多少手傳つてゐるが）、民衆の生活程度の低下を極端まで强ひるに至れる事實の反映である。封建制度の經濟はこの時に於て、全く行詰つたのである。飜つて、いまの我が資本主義經濟に於ても、斯る狀態が已に起り、乃至は之を明かに豫見し得る事實が現はれたる場合に於ては、我が資本主義經濟が愈々行詰るに至つた確證である。然るに、後に詳述する如く、日本の資本主義經濟には、いまや已に斯る民衆の生活程度の低下、生活難等が永久的に襲ひ來つてゐる。之れ私が、日本の資本主義經濟が行詰つたと云ふ基本的理由である。さり乍ら、この我が資本主義經濟の行詰は、我が經濟の絕對的行詰ではないことは、例へば封建制度の行詰が、維新の資本主義的社會革命によつて打開せられ、爾後三十五ケ年間（その前の三十五ケ年間は人口は停頓乃至減少した）に表示の如く、約千六百萬人、約四割八分の人口を激增し、且つ生活程度それ自身も著しく向上せることによつて容易に看取し得るであらう。

資本主義經濟が行詰つたか否かを判斷する第二の指標は、已述の如く、資本家の利害を中心にして、すべての經濟活動の方針を決定することが、最早社會の福祉と一致せざるに至れるや否やである。そも〳〵、資本主義制度が、資本家の利害を中心にして組立てられ、それを動力として、今日の文明を見るに至つたわけは、さうすることが當時の社會狀態から云つて、間接ながら、最もよく、社會一般の利益と合致したからである。いかにも、かゝる制度の下に於て、最も多大の利益を贏ち得たものは資本家であつた。がしかし、民衆の利益も亦、程度の差は無論あるが、一般に少からず增

大し得たのであつた。併し乍ら、資本主義經濟が或る發達の階段に達すると、今度は、資本家の利益を中心にして働く動力が、間接に社會の進歩發達を齎らすと云ふ作用は消滅して、却つて、資本家の利益を圖ると云ふことは、常に、民衆の生活を壓迫し、社會の進歩發達を阻むと云ふ結果を伴ふに至る。この時に於て、從來の如き資本家本位のものゝ見方は時代錯誤となり、無產階級本位のものゝ見方、考へ方のみが、社會の進歩發達に貢獻し得るものとなる。云ふ迄もなく、斯る社會狀態が出現せば、其國の資本主義經濟は行詰つたと云ふ證據である。然るに、いま我が社會は、已に、斯る事情に直面してゐる。しかし、この點に關しては、こと專ら、政策に關聯することで、別に他日、無產政黨の綱領として研究する積りであるから、この論文に於ては之れに出來るだけ觸れないことにする。が、いまその例として、一二の事實を擧示せんに、昔の我が輸入關稅其他の保護は、幼稚產業を發達する作用をなし、延いて、民衆の生活程度の向上を齎したが、今日の保護關稅其他の所謂產業保護は、內地の已成產業に獨占的位置を與へて、それに關係せる資本家の懷中を肥すに過ぎず、少しも、產業の發達に資する所はない。否、そのため、却つて生活費の騰貴を齎らし、民衆の生活を壓迫する作用をなしつゝある。更に、資本主義の發展期に於ては、投資階級の存在によつて、我が產業の發達は著しく促進せられた。が、今日に於ては、本誌六月號拙稿「有產階級の奢侈と我が產業の行詰」に詳述せし如く、投資階級に利子や配當を支拂はんがために、却つて、我が產業は行詰に面しつゝある。又、今日の日本經濟の行詰を打開するためには、資本主義制度に依存する限り、勞銀の低下、勞働時間の延長等に訴ふる外なく、現に資本主義的に行詰れる英國炭坑業は、その行詰打開のため、いま、賃銀引下と勞働時間の延長（七時間制より八時間制へ）を坑夫側に強要しつゝある。斯くの如く、これ等資本家を引合ふ狀態におくためには、或は收入の形に於て、或は勞働時間の形に於て、民衆の生活程度を低下するより外に仕方のない時代となつた。因に資本主義發展期に於ては、資本家が引合ひ繁榮すること

は、延いて、程度の差はあるが、民衆の生活を、向上せしむる作用をなしたのであつた）以上の他、この種の事實は、いまや之を枚擧するに遑のない程である。

尤も、以上の如き民衆の生活程度の低下が起つた場合には、之に反抗する力、之を避けんとする力が勃興して、生活程度を再び舊位地乃至それ以上に回復せんとする運動の起るが常である。若しも、左樣な回復が、資本主義的原則の下に於て行はれ得る限り、未だその國の資本主義は行詰つてゐない證據である。例へば、不景氣の場合に於ける一時的な生活程度の低下が、景氣の回復すると共に再び舊位地に復するが如きその著例である。さり乍ら、左樣な生活程度の回復、乃至は生活程度の低下の阻止と云ふことが、行はれるには行はれ得るにしても、そのためには、社會主義的經濟原則――例へば非營利主義又は社會的に組織化されたる經濟活動等――を全部又は部分的に利用せねばならない、と云ふ狀態が生じたる場合には、之れ明かにその國の資本主義經濟が行詰つた確證である。然るに、いま、日本に於ては、現在の經濟的危機を打開する途は、或は電力、銀行、食料就中米穀、住宅等の公營であるとか、非營利的に社會の利益のため産業技術及科學の進歩發達を圖るとか、金融、生産、販賣制度を全國的に組織化すとか云ふが如き、專ら、資本主義的原則に反する社會主義的經濟原則を部分的乃至は全般的に採用する外にない。併し、本論文に於ては、主として、資本主義的原則に基く日本の經濟が、如何に行詰つてゐるかの現狀を示すに止め、その行詰打開に關する政策についての研究は、已述の如く之を他日無産政黨の綱領を研究する際に讓る考へであるから、右に述べたる以上に、この點については觸れないことにする。

二　一時的の不景氣か資本主義經濟の行詰か

いま、日本の經濟が稀有の不振に沈淪し、多數の失業者と、新生産軍の甚しき就職難と、一般の多大の收入減とによる生活程度の低下に襲はれてゐることは、茲に改めて說明する迄もなく、明々白々な周知の事實である。問題は、斯樣な現象は、これ迄幾度か經驗した、資本主義制度に不可避な、併し一時的現象に過ぎない周期的不景氣に基く單なる普通の出來事であるか、乃至は日本の經濟が資本主義的に行詰つた永久的現象――資本主義經濟制度に依存する限り――である否かである。資本主義制度を信奉する者には、無論、今日のこの經濟不振及生活難は一時的の現象としか見へない。それは恰も、幕末に於て、當時の支配階級たる武士、及び無自覺なりし農工商等の被支配階級が、當時の行詰を、封建制度の續く限り永久的のものであるとは夢にも考へず、徒らに彌縫をこととしたのと少しも異る處はない。

いかにも、今日の我が經濟の行詰は、資本主義經濟に不可避な一時的現象である「不景氣」に多かれ少かれ原因してゐると云ふことに間違はない。さり乍ら、若しも、この行詰が單なる「不景氣」に、專ら原因するに止るものであるならば、景氣さへ回復せば、この經濟行詰は打開せられると云ふ事實が、茲にいま指摘せられ得る筈である。然るに、實際に於ては、我が資本家並に政府と雖も、周期的不景氣さへ經過せば、我が經濟は今後再び從來の如く發達し得ると確信するに足る何等の基礎をも發見し得ないのである。之れ、いまの資本家的既成政黨に何等國民に希望を與へ得る經綸なく、資本家の産業發展策と云へば、きまりきつて、既存産業に對する保護關稅、乃至は勞働賃銀の低下の要求以外にない所以である。

然るに、反對に、いまの一時的不景氣が去るも、資本主義的制度に依存する限り、我が經濟は到底現在の行詰を脫し得ないと信ずべき根本理由は、いま少からず之を發見し得る。即ち茲に私が、日本の資本主義經濟は已に行詰れりと斷ずるわけである。いま私は、その理由を次の項目に分つて詳述するであらう。

一、從來の我が資本主義經濟發達の根因がいまや已に消滅せること、
二、海外發展の望みなきこと、
三、對內的に新に我が資本主義經濟行詰の積極的原因が累積せられたこと。
四、對外的に新に我が資本主義經濟行詰の積極的原因が發生したこと。

三　我が資本主義經濟從來の發達原因の消滅

我が國の資本主義經濟は、過去僅か五十ケ年內外の短時日間に、周知の如く、驚くべき長足の進步を遂げた。按ずるに、我が經濟が資本主義的に斯く長足なる發達を遂げ得たわけは、云ふ迄もなく、之を可能ならしめた特殊の經濟事情がこれ迄存在したからであつて、これ等の特殊事情なかりせば、假令日本人如何に優秀なる素質を有するとも、到底斯る長足の進步は遂げ得られなかつたのであつた。玆に特殊の經濟事情とは即ち次の三點である。

（イ）歐米に於て多大の犧牲と數世紀の時間とを費やして、發達し精練琢磨せられた科學及技術を、そのまゝ移植模倣して急速度に我が資源を開發し得たこと。

（ロ）輸入關稅其他の保護政策によつて、容易に內地向產業を資本主義的に發達せしめ得たこと。

（ハ）賃銀低廉にて、勞力を多く要する產業に於て容易に外國の競爭に勝ち得たこと。

然るに、今日に於ては、（イ）は已に、資本家の算盤に引合ふ限り、開發されつくし、歐米の科學及技術の單なる移植模倣によつて我が資源の開發され得る余地は今や全くないと云つて大過ない狀態である。例へば鐵道も一巡引合ふ限りは建設せられた。鑛山炭山等もこの上開發の余地はない。一言にして云へば、我國はいま、從來の如く歐米の科學及技

術の移植模倣によつて利用し得る限りの資源を利用し盡して、いまや、利用すべき資源の涸渇せることに苦んでゐる。いま我が資本主義經濟は、之を譬へば、一の鑛山の開發によつて、從來急速度の發達をなせる町が、その鑛山の鑛脈が開發せられるだけは開發せられた後ちに於て、急にその町の發達が行止るか、乃至は進んで衰微するに至れるにさも似てゐる。

更に、（ロ）の保護によつて容易に發達し得たる內地向の資本主義的產業は、いまや已に發達の飽和點に達し、寧しろ、生產過剩に惱めるものが少くない狀態である。いま茲に之を詳示する紙面を持たないが、例へば、その代表的のものとして綿絲紡績業、人造肥料業、モスリン業、造船業等の數種事業の生產設備の過剩を擧げるだけで容易に之を想見し得るであらう。果して然らば、今後の我が資本主義經濟の發達は、專ら之を海外販路の擴張に俟たねばならないわけである。然るに、元來、資本主義經濟の對內的發展は、輸入稅其他の保護によつて、容易に之を達成し得るが、海外發展には斯る庇護なき上に、輸出先に於ける保護關稅其他の重荷を逆に負擔せねばならず、勢ひ、資本主義經濟の對外發展には、特殊の條件を必要とするものであるが、その條件は後述する如くいまの日本には發見せられない。兎に角、從來、專ら對內的に長足の進步を遂げたる日本の資本主義經濟が、對內相手で飽和點に達したる後ちに於ては、茲に一應の行詰に面することは、誰にも容易に理解せられるであらう。

最後に（ハ）の賃銀の低廉と云ふことは、これ迄、我が資本主義經濟の最も有力な武器であつた。此の武器に由つて、外國の資本主義的產業と競爭して、或は國內より輸入品を驅逐し、或は海外中立市場乃至は競爭國の市場に、販路を擴張することが出來たのだ。例へばその最も代表的なものは綿絲紡績業の如きである。然るに、この我が勞力の低賃銀と云ふ武器は、最近、就中歐洲戰後に於て失はれ、今や我が賃銀は昂騰して、戰前に比し最も割高の位地を示してゐる。

斯くて、從來、盛んに海外に輸出し得たる粗工業品、手工品等、専ら低賃銀の勞力を多く喰ふ産業は、戰後、各方面に於て輸出難に陷り、進んでは内地市場迄海外品に壓迫せらるるに至つた。又、從來、低賃銀を基礎にして有利に經營し得られたる事業にして、いまや、高賃銀のためにその經營の困難に陷れるもの枚擧に遑なく、就中その顯著なるは、銅、石炭其他の鑛業である。而して、この賃銀の暴騰は、いかにも、その一部分は勞働階級の生活程度の向上に基くものであるが、その少からぬ部分は、後述するが如く、有産階級の國力不相應な奢侈に根因するものである。

以上之を要するに、我が資本主義經濟從來の急速なる發達は、已述三つの特殊事情に專ら根因するわけであるが、今日に於ては、これ等の特殊原因は已に消滅して、今後、從來の如き條件にて、我が資本主義經濟の發達を期待し得ざることを誰しも看取するに難くないであらう。之れ即ち、私が、日本の資本主義は行詰つたと見る第一段の理由である。

四　我が資本主義經濟の海外發展の見込無し

その國の資本主義經濟が前項の如く、對内的に發展し盡せる場合、英米獨佛等の如き先進資本主義國が採れる第二段の發展策は、進んで對外的に産業の發達を圖ることであつた。であるから、若しも日本の資本主義經濟に、この第二段の海外發展の見込ある限り、前記の如き對内的行詰は、實は左程問題ではないのである。然るに、いま、日本の資本主義經濟には、この海外發展の見込が殆んどないのである。その最も重要なる理由として、私は次の三點を玆に舉げる。

(イ)對外發展に必要な資源のないこと。

(ロ)世界は已に帝國主義的に分割され盡して、この上、日本の帝國主義的發展の餘地なきこと。

(ハ)已に世界は帝國主義末期に到達して、政治力に依頼する獨占時代(資源及販路等の)に轉入し、領土狹少なる日

本資本主義經濟の活動範圍は、極度に制限せられてゐること。

その國の產業が、外國の輸入關稅、運賃、保險料等の負擔に打勝つて、外國との競爭に對抗しつゝ海外に販路を開拓し得るためには、安價に且つ豐富に貨物の生產されることを何よりも必要とする。そのためには、云ふ迄もなく、優秀な技術と熟練とによつて動かされてゐる生產設備を必要とするが、しかし、人力の差には限りがある。今日のこの交通自由な社會に於て、永く、他國よりも遙かに優秀な生產技術や設備を獨占することは到低出來ないことである。そこで、その國の產業が海外市場の競爭に打勝つて、販路を廣く外國に發展し得るか否かは、今日に於ては、その國にそれに相應する資源を有するか否かと云ふ、天然の差異に專ら依存するものである。現に、いま、海外發展をなし得てゐる先進資本主義國の實際を顧るに、何れも、現代產業の基本資料たる鐵、石炭石油乃至は化學工業原料なる苛性加里、鹽等を豐富に生產する諸國に限られ、これ等の原料に欠乏せる諸國、例へば伊太利、スペイン、ホルトガル等は國內相手の產業の飽和點に達したる後ちは、その資本主義的發展は大體に停頓してゐる。顧みて、我が日本の實狀を考ふるに、いま、我が資本主義經濟は、その海外發展に必要なこれ等の資源に殆んど惠まれてゐない。事實、我が輸出の七八割は、生絲、綿絲布等の纖維品によつて占められてゐるが、いまや、生絲業も絹布業も、紡績業も、その對外發展の望は已に峠を起しつゝある。少くとも、この上、對外發展をなし得る期待は殆んどない。しかも、現在に於てすら、その綿絲布の輸出の多くは、ダンピング的性質を少からず含み、對內品よりも遙かに安價であるを常とすると云ひ、更に生絲の如き、その養蠶に從事する者の收入は、到底、今日の日本人の生活程度を維持するに足りないものである。斯樣のわけであるから、今日の我が資源に賴つて、日本の經濟が資本主義的にこの上對外的に發展しようなどと期待することは、嚴肅なる現實を直視しつゝある者には、到底出來ないことである。

斯る場合、その國の民衆に殘されたる進步的對策は三つしかない。その第一は新に技術及び科學の發達を圖り、或は產業の組織を改革して、今日の科學や技術乃至は產業組織では、未だ利用し得ざる自然の資源を新に有利に利用することである。しかし乍ら、玆には詳論の餘裕を持たないが、斯る技術及科學の進步乃至は產業組織の改革と云ふことは、他の機會に無產政黨の綱領の研究に於て詳論し得るであらう如く、（その大體は極めて不完全の形に於てではあるが拙著「末期の日本資本主義經濟と其の轉換」東京白楊社發行參照）いまの資本主義的原則に依存しては到底出來ないことであつて、その實現を圖るためには、社會主義的經濟原則を利用せねばならない。

こゝに於て、代表的な先進資本主義國は、何れも第二の手段によつて、その資源の欠陷を滿たす手段に訴へてゐる。第二の手段とは即ち植民地獲得その他によつて外國に於ける資源を奪取することである。所謂帝國主義的發展に賴る方法である。英國、戰前の獨逸等の資本主義的海外發展は、實にこの帝國主義の賜である。日本亦、既往に於ては、臺灣、滿州、朝鮮、樺太等の植民地乃至は半植民地を獲得して、その資本主義經濟の發展に少からず貢獻したのであつた。現に、我が國の多くの軍國主義者、國權伸張論者、愛國者等保守派の抱懷する我が資本主義經濟行詰の打開策の多くは、即ち、この帝國主義論である。がしかし、斯樣な帝國主義的方法によつて、いまの我が資本主義經濟の行詰は、果して、打開し得られるであらうか否か。

なる程、未だ時代が、互に未開國の武力征服に熱中してゐた當時に於ては、日本資本主義經濟の行詰を、帝國主義的方法によつて打開しやうとする希望は豐かにあつた。日本が、かつて、臺灣、滿州、朝鮮、樺太等の植民地を獲得し得たわけは、即ち、斯る時代の潮流に乘じたからであつた。さり乍ら、ものにはすべて『その時代』がある。「その時代に乘ずれば容易に出來ることが、その時代を逸しては仲々實行の出來ないのが歷史の數へる所である。例へば、中世紀時代

の海上貿易は、海賊の別名であつたことは、東西ともに、歴史の明示する所である。しかし乍ら『その時代』を過ぎて後ちは、海賊としての强弱によつて、海上貿易の覇を競はんとするが如きは、世界を敵とする覺悟のない限り夢想だも出來ないことである。又、我が歴史を顧るも、所謂、戰國時代に於ては、隣國を征服して、その領土を擴張すると云ふことは、日常茶飯時の出來事であつた。しかし乍ら、德川幕府の下に封建制度が確立した後ちに於ては、一小弱の隣國を征服することすら、之をなすには日本全國を敵として戰ふ決心のない限り、之を敢行することは出來なんだ。それと同じく、いかにも『植民地爭奪時代』に於ては、武力によつて、競つて容易に帝國主義的發展を遂げ得たが、しかし、今日に於ては、世界の未開國は已に列强の間に分割されつくして、列强はいま何れも、この現狀を維持することに、最大の利害の一致を見出してゐる。斯る時代に於ては、恰も戰國時代から德川幕府時代に轉入したるが如く、新に他國の領土を爭奪して帝國主義的發展をなさんとするには、今度は、被征服國のみならず、世界全體を敵として戰ふだけの決心のない限り容易にその政策を實行することは出來ないのである。現に、夫の歐洲戰爭はこの種の帝國主義的衝突の著例である。又、我がシベリア出征が當初の目的に反して何等の領土的擴張を爲し得なかつた失敗の根因も之れである。又我が帝國主義者が、歐洲戰爭中のドサクサに獲得し得たと信じた對支二十一ケ條、膠州灣、等が戰後に於て蹉跌した原因も玆に在る。斯樣のわけで、實は、今日に於て、我が資本主義經濟の行詰を帝國主義的發展によつて打開せんとするが如きは、僅かに一雄藩たるの力しかなきものが、德川幕府の盛時に於て、戰國時代のそれのごとく、弱小の隣國を征服して、自藩の發展を圖らんとするの愚に少しも異ならない。之れ、近來、就中シベリヤ出征失敗以來、我國に於ても、軍國主義者の氣燄の一向に揚らない所以である。

以上の如く、海外發展に必要な資源なく、且つ、帝國主義的發展の見込もないとせば、殘る唯一の我が資本主義的海

外發展策は、國民の技能を磨き、勤勉節約し、擧國一致産業の生産費を低下し、以て、出來るだけ優秀の製品を、出來るだけ安價にて供給する第三の方法を採るに在る。現に我が多くの所謂識者は、この點を力説してゐる。しかし乍ら、今日の帝國主義末期の世界に於ては、斯樣な資本主義行詰の打開策も、實は、いまの我が國には殘されてゐないのである。云ふわけの第一は先進資本主義國の歴史に從ふと、此際、日本の資本主義經濟が甦生し得る方法は、所謂商工立國政策を採用して、先づ、その農業を犧牲にすることである。即ち、農産品を出來るだけ安くする政策をとり、斯くすることによつて、生活費を低下し賃銀を引下げて、資本主義的産業の生活費を低廉にする方法に訴へるのである。現に、英國の資本主義經濟が採つた方法はさうであつた。所で、一國の資本主義經濟が、斯樣な手段を採用し得るためには、先づ(一)外國から廉價に食料其他の農産品を輸入し得る見込が立つ上に、(二)そのため荒廢すべき農村の人口を、海外に移民する捌け口がなくてはならない。然るに、(一)に對してはいま、兎にも角にも、何とかその供給が得られるにしても少くとも(二)の移民については、現に帝國主義的列强が、その領土を我が移民に閉ざしてゐるために、我が國民の移民すべき土地はいま、全くないと云つて大過ない。斯樣な事情のため、資本主義謳歌者のよく主張するが如き、商工立國政策によつて、我國が從來の如き資本主義的發展を續けようとするが如きことは、いまの國際的位地から云へば、全く夢想に過ぎない。現に、英國の如き、最近、その資本主義經濟の行詰るや、從來の如き農業犧牲政策を改めて、勞資兩政黨共に農業開發政策の必要を認めつゝある。

斯くて、我が資本主義經濟に殘されたる唯一の行詰打開策は、刻苦勉勵して技能を磨き、組織を改善して、粗工業より精工業に移り、製品の質と値段とに於て、他國と競爭する外にない。併し乍ら、然らば刻苦勉勵、よい商品を、安く供給し得れば、これで、我が資本主義經濟の行詰は凌駕し得られるかと云ふに、これについては、先づ已述の如く、資源

がないと云ふ欠點がある。假りに、資源のなきは輸入品に仰ぎ、之を加工輸出することによつて、之を補ひ得るとしても、今日の國際商業戰は、よいものを安く供給し得れば、それで勝てると云ふが如き單純のものではない。いかにも、資本主義初期の時代に於ては、よいものを安く供給するものが、競爭に勝つと決まつてゐたものである。しかし、現在の資本主義經濟の特色は、自由競爭時代を經へて獨占時代に入つたことである。商品の品質や値段の自由競爭から轉じて、强大な資本の力によつて、原料や生產設備や販路やの獨占を競ふ時代となつたのだ。最早、安いよい品を供給し得るものゝ勝つ時代は過ぎて、出來るだけ强大の資本で、出來るだけ多くの原料や生產設備や販路を獨占し得るものが勝つ時代である。この時代に於ては、出來るだけ惡いものを出來るだけ高く賣りつゝも、獨占さへなし得れば勝つのが商業の秘訣である。之れは、單に國內商業上の出來事ではなくて、國際經濟戰上の出來事でもある。しかも、國際經濟戰に於ては、巨大なる資本の力による獨占の外に、政治的力による獨占が橫行してゐる。即ち、いまや、各國の帝國主義的政策は、自國の資本主義產業に其原料と販路とを獨占さすために、或は原料供給に關する差別的取扱、或は保護輸入關稅、或は特惠關稅等の方法によつて、政治的に外國商品を露骨に驅逐する時代に進展してゐる。之れ他國の移民排斥と全くその性質を同ふする帝國主義の獨占的正體の現はれである。斯る時代に於ては、如何に優秀な貨物を如何に廉價に供給し得るにしても、そのため、當該輸入國又はその植民地本國の資本主義產業を壓迫する憂ある場合に於ては、資本主義の對外的發展は之を期待することは出來ないのである。何となれば、斯る場合には政治的壓迫によつて競爭力を殺がれるからである。現に、いま我が紡績は印度に於てこの壓迫を英國より受け、我が絹布は五割の輸入稅のため米國に輸出し得る見込なく、我が船舶業は、沿岸航路禁止及び噸稅その他の差別的對遇のため發展の見込がない。蓋し、本國及び植民地共に極めて狹少なる我が日本の如きは、斯る露骨なる獨占期に入れる帝國主義時代に於ては、資本主義

的には手も足も出ないのである。(之を打開する途は反帝國主義運動を起す外にないが、それは資本主義精神に基いては實現し得る見込はない)

以上の如く、我が資本主義經濟の對外的發展は、先づ必要の資源のなきために、次いで、之を補ふ帝國主義的發展の絕望なるために、加ふるに、帝國主義的政策が露骨にその正體を現はして資源及販路の獨占政治に進展したるがために、いまや、之を期待することは殆んど出來ない事情に在る。之れ、私が、日本の資本主義經濟が行詰つたと云ふ第二段の理由である。

五　對內的に新に我が資本主義經濟衰亡原因の發生

以上第一段及び第二段の我が資本主義經濟の行詰原因によつて、少くとも、我が資本主義經濟がこの上、發展の餘地なきに至れることは、大體に了解して戴けたことと思ふ。さり乍ら、若しも、我が資本主義經濟行詰の原因が以上に止るならば、人口の年々の增加に基く壓迫を姑く外にすれば、我が資本主義經濟は、なる程積極的に民衆の生活程度を向上さすことは出來ないが、尙ほ、現在の生活程度だけは之を維持し得る筈である。しかし乍ら、實際に於ては、以上二つの段階に於ける資本主義的行詰原因の外、我が資本主義經濟は、積極的に、その產業の衰退を招きつゝある事情に襲はれてゐる。その一は對內的であり、その二は對外的であるが、前者は本項に於て以下述べんとする所であり、後者は次項に於て示さんとする所のものである。

我が資本主義經濟が、積極的にいまその產業の衰微を招きつゝある對內的原因は、思ふにいろ〳〵ある。がその中、或る原因は、資本家の聰明の如何によつて、資本主義經濟の下に於ても或點まで之を除去し得るものであるが、或る原

因は、資本主義經濟の存續する限り、永久的に之を除去し得ないものである。私が玆に、新に我が資本主義經濟行詰の原因の發生と云ふ場合に於ては、云ふ迄もなく、後者の永久的原因を意味するものであつて、前者を包含するものではない。例へば、いま我が資本主義經濟を進んで衰微せしめつゝある對內的根本原因は、思ふに左の四點に包括せしめ得るが、その中、前二者は資本主義制度の原則內に於ても、或る點まで之を矯正除去し得る性質のものであるが、後二者は、資本主義經濟の原則に依存する限り永久的に除去し得ない性質のものである。

一、政治組織の老朽

二、帝國主義的經費負擔の過重

三、既存資源の老衰

四、資本主義的寄食階級の負擔の增大

（一）元來、從來の官僚政治、中央集權制度は、維新革命後、歐米の資本主義的文明を移植模倣することによつて、社會の進步發達を促進し得る時代の政治形態であるが、今日の我國は、已述の如く、已に模倣時代に行詰つて、我が天然自體の實情に即した經濟的發達を期する以外に、行詰打開の途はない事情に在る。從つて、この新事情に適應する政治を行ふためには、從來の我が政治組織を一新する必要がある。之れ「政治組織の老朽」と稱する意味である。又（二）の帝國主義的經費負擔の過重とは、軍備の過大より來る租稅の過重、及び軍事上の見地に基く食料其他の自給政策より來る物價騰貴の形態に於ける負擔の增大を意味する。これ等二者は無產政黨の綱領研究上からは少からず興味ある點であるが、しかし、以上二原因とも、我が資本主義經濟の行詰原因としては、左程根本的な性質のものではないから、玆にはこれについてはこれ以上觸れない。

いま、我が資本主義經濟を積極的に衰微せしめつゝある原因として、玆に特に註釋に値するものは、前記（三）及（四）の二點であるが、先づ（三）の既存資源の老衰について云ふ。玆に、既存資源の老衰とは、從來、我が資本主義經濟を現に哺くんで來た資源が、已に全體として老衰しつゝある事實を指すのであるが、いま說述の便宜のため、之を鑛産、農産に大別して見ることにする。先づ、最も目立つ我が資源の老衰は、鑛産に於てである。例へば、我が鑛産中、最も代表的にして全體の鑛産額の八割餘（大正十一年現在）を占むる石炭と銅とについて見るに、左表の如く、生産は減少し、輸入は增し、輸出は激減しつゝあつて、その資源の老衰しつゝあることを最も端的に示してゐる。

内地石炭需給表（單位千佛噸）

	内地産出高	輸入高	輸出高
大正二	二一、三一五	五七六・七	三、八七〇
五	二二、九〇一	五五六・一	三、〇一六
六	三六、三六一	七一三・〇	二、八一三
七	二八、〇二九	七六七・七	二、一九七
八	三一、二七一	七〇五・二	二、〇一六
九	二九、二四五	八〇九・九	二、一四六
一〇	二六、二二〇	七八九・六	二、四〇六
一一	二七、七〇一	一、一八七・二	一、七〇四
一二	二八、九四八	一・七一二・八	一、五八六

内地銅需給表（單位英噸）

	内地生産高	輸入高	輸出高

大正二	六五、九七四	三八一	四二、三四六
五	一一一、五六二	二、三二五	五七、三九七
六	一一二、三八四	一四、〇八一	七一、〇九二
七	九五、四五五	一、〇六八	三一、五五三
八	八一、八六五	二七、五七〇	一九、一三二
九	六四、九六四	二二、五四〇	五、一五六
一〇	五二、五ガ三	一二、八九一	九、〇二三
一一	五三、七八〇	二二、一六七	四一〇
一二	五九、九三五	六、五四八	四七六

しかも、實際に於ては、石炭にしても銅にしても、從來よりも多大の勞力と機械費とを掛けて、且つ品質に於て低下しつゝあるものを採掘しつゝあり、加ふるに、銅の如きは、大正十年以來、輸入關稅百斤一圓二十錢を七圓に引上げて保護を厚くせる結果が尙ほ且つ表示の如くである。以て、我が鑛業資源の老衰しつゝある實際が、表面の生産數量減に現はれたるよりも遙かに著しきものであることを容易に看取し得るであらう。

農産に於ても亦、我が資源の老衰は著しい。蓋し、農地耕境の低下、報酬遞減の法則の作用は、いまや、我が農業の生産力を少からず低下せしめつゝあるのである。斯くて、いま、內地に於ける農業作付反別は、米、馬鈴薯、葉煙草、桑の四種を除き、其他の重要農産は何れも皆、大正七年以來減退しつゝある。例へば左表を見よ。

內　地（北海道を除く）作付反別增減表（△印減）

	大正二年	大正七年	大正九年	大正十一年	七對十一年增減
米	二・九九九・八千町	三、〇二六・一千町	三、〇四四・七千町	三、〇三九・〇千町	一二・九千町

大麥	六一七・五	五二五・七	五三三・一	四九八・六	△二七・一
稞麥	六八七・四	六一〇・六	六三四・五	五七八・七	△三七・三
小麥	四六三・四	五五六・四	五一五・〇	四八六・六	△七九・八
大豆	三九六・〇	三七九・二	三七三・一	三五〇・八	△二八・四
小豆	八七・九	八五・一	八四・〇	八一・〇	△四・一
粟	一七五・六	一四九・二	一四〇・六	一二六・七	△二二・五
稗	五一・五	四六・六	四五・四	四〇・八	△五・八
黍	一五・五	一三・三	一二・八	一一・一	△二・二
蕎麥	一三一・八	一一七・七	一一二・九	一〇二・一	△一五・六
玉蜀黍	三六・〇	三六・〇	三七・〇	三五・三	△〇・六
甘藷	三〇七・三	三一四・〇	三一八・八	二九九・二	△一四・八
馬鈴薯	四〇・四	四七・八	五二・七	四九・九	二・一
菜種	一〇八・五	一〇一・六	一〇〇・三	八四・二	△一七・四
葉煙草	三一・五	三四・四	三七・六	三九・五	一五・一
桑	四五〇・九	五〇八・一	五三三・六	五二七・八	一九・七
茶	四九・〇	四九・七	四八・一	四五・六	△四・一

この他、玆には紙幅の餘裕なきため詳示し得ないが、林産に於ても、水産に於ても、有ゆる方面に於て我が資源は減退しつゝある。云ふ迄もなく、このまゝである限り、これ等資源の老衰に從つて、我が資本主義經濟は、今後益々衰微する外に行く途はない。

我が資本主義經濟を積極的に衰微せしめつゝある次の根本的資本主義行詰の原因は、前記（四）の資本主義的寄食階

級の負擔の增大である。顧るに、維新革命の當初から日清戰爭前後にかけては、我が社會には、資本主義的寄食階級は未だ殆んど無かつたと云つて大過なかつた。當時に於ては、封建的寄食階級たる武士階級の廢滅によつて、國民はその生産の上前（ウハマヘ）をはねられると云ふことから、殆んど免かれ、それだけ、生産費を安くしながら、生活程度を向上することが出來たのであつた。然るに、爾來約三十年間に於て、我が資本主義經濟は、奢侈にして無爲な多くの寄生階級を背負はされるに至つた。例へば、維新以來最もよく活動せる分子の多くは、已に、この時に於て老境に入り、老後を驕奢な――此時盛んに活動せる當時以上に驕奢な――生活に養つてゐる。しかも、その子孫は、今度は働かずに、生れながらその驕奢な生活をなしつゝある。斯樣な事實が、實業家の間にも、政治家の間にも、軍人、官吏、學者等の間にも、全國到處に於て、鼠算的に蔓延するに至つたのだ。云ふ迄もなく、彼等の無爲にして驕奢な生活を賄ふためには、我が資本主義經濟は、或は租稅の形に於て、或は利子配當の形に於て或は各種の地代家賃等の形に於て、或は手當賞與等の名名に於て、その費用を負擔せねばならない。從つて、これ等の資本主義的寄生階級が數に於て多くなればなる程、質に於て驕奢の程度が強くなればなる程、勞働階級に支拂ひ得る賃銀は減少し、しかも生産費は高くなるわけであつて、我が資本主義經濟はいよ〳〵衰微しつゝあるのである。歷史に於て、ローマが驕奢に倒れ、徳川封建制度が奢侈に亡びたと云ふことは、成程その表面に現はれた形式は異るか、しかし、その實質に於ては、いま、我が資本主義經濟を蝕みつゝある有産階級――資本主義的寄生階級――の驕奢と全く意味を同じうする歷史的出來事である。しかし、この點については、私は、本誌六月號の拙稿「有産階級の奢侈と我産業の行詰」に於て詳論したばかりであるから、玆にはこれ以上の說明を右論文に讓ることにする。以上が私の我が資本主義經濟が行詰つたと云ふ第三段の理由である。

六　對外的に新に我が資本主義經濟衰亡原因の發生

我が資本主義經濟の行詰は、更に、後進資本主義國の競爭のために、外部からも亦、その衰亡を促進されつゝある。元來、日本從來の資本主義經濟は、已に闡說せる如く、專ら、低廉なる賃銀を武器として、其の上に築かれたものであつた。勢ひ、その產業は、職工の熟練を余り必要とせず、精巧な機械を要せずして、低廉なる勞力さへ豐富にあれば、容易に生產し得る粗工業たるを常とした。我が資本主義的產業の輸出品が主として、生絲、太絲綿絲、粗綿布、燐寸、石鹼。銅塊又は銅錠、等であつたわけは即ち玆に在る。然るに、もと〳〵、斯樣な程度の產業は、多少の資本と豐富にして低廉なる勞力さへあれば、如何なる國に於ても、或る機會さへ得れば、容易に發達し得る性質のものである。所が、歐洲戰爭は、賃銀極めて低廉なる支那其他の後進國に對し、この種產業の發達に絕好の機會を與へ、之を出發點として、粗工業の隆盛を見るに至つた。

云ふ迄もなく、此等後進國の粗工業の發達によつて、最も大なる競爭に襲はれたものは日本であつた。何となれば、他の先進資本主義國の產業は、多くは、熟練を必要とする精工業に已に進んでゐるので、支那其他の粗工業の發達は、直接、大なる競爭者として作用はしなかつたのであるが、日本の資本主義經濟は、未だ尙ほ、粗工業時代に彷徨してゐたので、最も強く、その競爭を受けたのであつた。その結果、これ迄、支那に輸出しつゝあつた、巨額の粗工品が支那競爭品のために販路を失ひ、進んでは、日本內地の市場迄、支那競爭品のために奪取せらるゝに至つた。例へば、その最も代表的なものは、綿絲、燐寸、石鹼、雜貨類の如きにして、從來、我が對支輸出の大部分を占めてゐた此等の商品は、特殊の事情に基く例外を除き、いまや、その對支輸出は殆んど消滅するに至つてゐる。又、從來、歐米及び東南洋

方面に輸出しつゝあつた我が雜貨類にして、支那競爭品のため驅逐せられ、我が輸出の激減しつゝあるものも少からずある。

加ふるに、歐洲戰爭後、從來不平等極る關税のために、産業の發達を著しく阻害せられて來た後進國に於て、關税權の回收乃至は輸入税率の引上げ等の運動勃興し、之を煽ふるに、米國の如き後進帝國主義國が、その對外發展のために、先進帝國主義國の已存繩張の破壞の意味に於て、大にこの運動を援助した。斯くて、從來、日本の資本主義經濟にとつては、殆んど唯一の自由競爭の市場であつた支那に於ても、近く、關税の引上げによる産業保護は、いよ／＼實現せられることとなつたのである。その曉に於ては、我が資本主義經濟は、いよ／＼支那産業の發達に脅威せられざるを得ない位地に在ること申す迄もない。

斯る場合、我が資本主義經濟に殘された唯一の活路は、已に闡説せし如く、我が産業を粗工業より精工業化して、熟練に於て、支那産業の企及し得ざる精巧品を生産することである。歐洲の先進資本主義國が、後進國の産業發達の競爭に對抗して、よく今日まで、その資本主義經濟の發達を維持し得た方法は即ちこれであつた。事實、いま、我が産業、就中、支那産業の競爭を最も強く受けつゝある産業部門に於ては、斯樣な精工業化への移化運動は已に或る程度迄は實行せられつゝある。例へば、その最も代表的なものは、綿絲紡績業であつて、太絲より細絲へ、綿絲より綿布へと進みつゝある。

さり乍ら我が資本主義經濟の斯樣な精工業化を完成するには、先進歐米諸國との、更に激しい競爭に打勝つてのみ之を期待し得るのであるが、第一にそれが非常に困難である。蓋し、我が産業は、熟練を外にするも、機械費に於て、利子に於て、原料の多くに於て、販路に於て、歐米に比し少からず不利の位地にあるからである。がしかし、若しも、障

害が單にそれだけに止るならば、我が國民の覺醒と努力の如何によつて、之を凌駕し得る見込もある。然るに、害は、世界の今日の帝國主義政策の基調は、先進資本主義國何れもが已に生産設備の過剩に苦しみつゝある事實と相俟つて、已述第四項に於て詳述せし如く、政治的に資源と販路とを、自由産業のために獨占することに在る。斯樣な時代に於て、刻苦勉勵を唯一の味方にして、精工業に於て、歐米の競爭に打勝たんとするは、譬へば、赤手空拳の小商人が、汗と筋肉とを唯一の頼みに、今日のこの獨占的資本主義時代に於て、三井や三菱の獨占事業と競爭し奮闘せんとするにさも似てゐる。いかにも、聞いても語つても、男々しい物語りであるが、しかし、悲哉、それでは勝算は少しもない。いかにも、斯樣な奮勵によつて、難局を打破した昔話しは資本主義發展の世界史の中にある。しかし、それは、世界の資本主義經濟が、未だ、今日の如く獨占時代に進化せず、自由競爭の戰國時代を通過しつゝあつた當時の出來事である。それは、極端の例をとれば、今日の銃砲火の發達せる戰場に於て、信長時代の勇ましい戰さばなしを語つたり聞いたりすると、その效果に於て同じである。

果して然らば、我が資本主義經濟は、後進資本主義國の産業の發達につれて、その競爭に打ち勝つ活路を精工業の發達に見出すことは、極めて難事である。少くとも、後進資本主義産業の發達による壓迫を、今後、大なり小なり、益々痛感するに至ると云ふことに疑問の余地はない。現に、英國の如き資本主義王國すら、いま、この苦痛に惱んでゐるの有樣だ。以上が、私の我が資本主義經濟が行詰つたと云ふ第四段の而して最後の理由である。

在歐通信（第四回）

夏の英國

河合榮治郎

R君

（一）

僕は七月の始め、ウッドブルックを去て、スコツトランドへの旅に上つた。

英國の夏は決して暑くない、此年の夏は例外に暑い日が數日續いて、ロンドン人は息を切らして弱つたといふことであるが、一般に英國では、春先のとんでもない時に、非常に暑い時があり、さうかと思ふと夏の最中にストーブに火を焚いたりする時がある。英國には四季の差別がまるでないとは、よく我々の云つた事である。然し夏でなくては往けない所もあり、夏でなくては開かれない施設もある。英國の夏を如何に送るべきか、之が一つの問題である。

是非共夏の間に往つて欲しいのは、スコツトランドとイングリツシユ・レーク・ヂストリクトである。八月のスコツトランドと湖畔地方は余りに雜踏する、時としてホテルが滿員で何所を探しても泊れないことがある。靜に此の淸境を味はんとするならば、僕は六月か十月の始めを御勸めする、遲くとも七月の上旬、早くとも九月一杯である。一體に英國全體の旅行のプランを作るならば大體、五つ通りの地方があると思ふ。第一はスコツトランドと湖畔地方、之は夏でなくてはならない。第二にマンチエスター、リバープール、リーツ、シエイフィールド等の工業地方を一巡することで、此に英國工業の中心があり、世界工業の發祥地がある、丁度獨逸のライン地方、米國のペンシル

ヴェニア地方に相當する。汽車の窓から眺める黑い煙と林立せる煙突丈でも、一應の印象を得られる。若し出來たら此にランカスターの紡績地方を加へ、更にホーリーヘッドからアイルランドへの旅行を加へて一旅行區域としてもよい。此の地方には格別に時期がない、唯春から夏の始めにかけて一番適當であらう。第三に僕は南ウェールスを一區域として、此に英國炭坑の模型を探るがよいと思ふ。然し此の旅行にはスウアンジー附近のマンベルスを加へ、更にブリストル、バースを加へるならば、景色の上から思ひもかけない獲物が出來る。マンベルスは英國のネープルスと呼ばれる絶景の地で、バースは英國のフローレンスとも云はれる、靜な落付いた古い美しい街である。此の旅行も時季に差はないが秋か春がよい。

第四はノルフォルク、リンコルン等の農業地である。此に英國農業の中心がある。そして社會問題の上からは、今迄保守派の堅城であつた此の地方に、今後どれ位勞働黨が喰込むかに興味がある。將來の政界は農民の向背が重大の影響を持つ。I、L、P、が如何に農業勞働者の政策に腐心するかの消息は之で分る。僕は曾て英國の農業を取るに足らぬものと思つて、さる大學教授に笑はれた。試みにノルフォルクとリンコルンに往つて見給へと云はれた。第五に東はブライトンから西はランヅ・エンド迄の南海岸を廻ることは又興味がある、一體に此の海岸は白い崖が突立つてゐる、所謂クリッフと稱せらるゝものである。英人は太西洋を渡つて來て、此のクリッフを見ると胸が躍ると云ふ。崖の上に松がよく茂つてゐる。此の海岸に靜に腰を据ゑて讀書でもしながら、倦きたら少し宛場所を變へるなどは極めて妙であらう。夏は混雜するし暑い。冬から春先にかけてが恰好である。若し以上の旅の外に、春先四月五月頃に、ケント、サセックス、サレー等の田舍を巡る旅を加へるならば、申分がない。丁度日本の春、桃、櫻が綻び、菜の花が咲き、麥の穗が出る陽氣とよく似て、此の時季に英國の最も美しいと云ふ此の南部地方を巡ることは、決して失望を與へることないことを保證する。

R君

夏に開かれる施設として注意すべきものは、諸種の夏期學校であらう。第一に七月の下旬に自由黨主催で、オツクスフオルド・リベラル・サンマー・スクールが催される、大抵一週間である。次でフエビアン協會の主催で、八月の上旬から四週間、毎年場所を更へて開かれる。更に、I、L、P、が此の年から始めて、八月の下旬と九月の中旬に、二個所に夏期學校を開く。之等の施設は出來るなら、少し宛でも加入して置くと、他

で見られない英國人の生活が理解される。更に此の外に注意すべきものは、毎年九月の上旬に開かれる、勞働組合大會(Trade Union Congress)である。各勞働組合の聯合大會で、所謂勞働者議會に相當するものである。勞働問題に興味を有するものが、勞働黨の大會と共に、逸してならない年中行事である。僕は此の中リベラル・サムマー・スクールを除きては、すべて出席して、意味ある夏季六旬の生活を持つことが出來たのであつた。

——(在　歐　通　信)——

(二)

R君、

僕がスコツトランドに對して持つ興味は、風景に限られたものではない。英國の文化に對して持つ重要さにある。曾てノースタリッフ卿は云つたさうだ、英國の偉大はイングランド人の冒險心とスコツトランド人の頭腦の調和にあると。如何にも要領を得た一種の觀察である。英國の思想史を繙いて、誰でも直ぐ感ずることは、思想家哲人の少からざる數が、此の人口稀薄な高原から出てゐることである。それは何故であるか、之が僕の一つの興味を持つた問題であつた。澤山の哲人が此から出たばかりではない、スコツトランド大學を中心として、幾度か新しい思想運動は起された、十八世紀の末に於けるトーマス・リード・ハミルトンを中心としたスコツチツシユ・フィロソフィーは其の一つであり、十九世紀末に於て、グラスゴー大學を中心としたケヤード兄弟によつてなされた理想主義の運動は又其の一つであつた。

僕の人から聞いた所に依ると、之等澤山の思想家を出したことは、一つの原因は宗教の普及してゐた事であり、今一つの原因は教育の發達してゐた事であると云ふ。スコツトランド人は常に誇つて云ふ、イングランドにはオツタスフオルド、ケンブリツヂの二つの大學しかなかつた時に、總人口ロンドンの人口より多からざるスコツトランドは、エヂンバラ、グラスゴー、アバヂーン、セント・アンドリユースの四つの大學を持つて居た。之を以て如何にスコツトランドの教育の程度が高かつたか分るじやないかと云ふ。尤な話である、殊に僕の感嘆する所は、之等四大學に學ぶ學生の多くが、極めて貧困な人々で、止むに止まれぬ好學の心から、無理をして勉强してゐた事である。元來此の四つの大學は、其の制度がイングランドの大學と異つて、一年を通じて學校が開かれては居なかつた。冬雪の降る間丈、學校の講義があつて、春から秋にかけては休暇となる。此の間に學生は各々故郷に歸つて、半年の學資を稼ぐので

ある。一方で此の事は敎授の時間を半年間短くすることになつて、研究により多くの力を注ぐことになる、多くの俊秀の敎授がスコットランドの大學に集つたのは、一つは此の理由によるのである。此の制度はごく最近になつて改正されて、イングランドと同じ樣になつて了つた。例へば亡くなつたボサンケの傳記を讀むと、氏がセント・アンドリュース大學の敎授になつたのは、半年しか授業しなくてよいからであつた、そして規則が改正された後、氏は敎授を辭してイングランドに歸られた。ともかく此の點が、オックスフオルド、ケンブリッヂの坊ちやんの大學と逆つて、隨分眞劍な學生が集まつた一つの證據にもなるので、今一つは貧民の爲めの給費制度が、かなりよく整つて居たもので、彼のアダム・スミスをオツタツスフオルドに送つたスネル給費制度は、殊に有名なものであるが、あの外にもスコットランド丈の大學に、便利な施設が澤山あつた。宗敎の盛であつたことは、更により大きな原因であらう。最近少し事情が變つて來たと土地の人は嘆ずるが、スコットランドに宗敎は牢乎拔くべからざる地盤を持つてゐた。宗敎改革はルーテルより先に、既にスコットランドに多くの先驅者を出して居た位である。今日スコットランドには、アングリカン・チャーチ、ローマン・キヤソリツタ、ナンユムフオルミストの外に、スコットランド丈の別の敎會がある、之等のすべてを通じて、吾々に特に興味があるのは、敎會內部の役員の選任に對して、一般信者が大きな參加を持つて、其の組織に非常にデモタラチツタ・エレメントがあることである。デモタラシーの運動が個人の覺醒を促す原因になることは、周知の事實であるが、敎會の內部にさへ存するデモタラシーの組織はスコッチッシュメンを敎育するに預つたこと少くない。

扨宗敎の盛んであつたことは、何故に多くの思想家を出すことになつたか。云ふまでもなく、搖籃の間に注入された宗敎心は、多くの人にメタフィジカルな考方を刺戟し、それが段々成長して、多くの哲人を作つたのである。僕は此の點に於て、タリスト敎が一般歐洲に及ぼした一つの大きな事蹟を認めたいのである。他の點は暫らく之を問はないとしても、タリスト敎は歐洲人に、人生の根本問題を考へしめたといふ所に、大きな力があつたと思ふ。人間の墮落、人間の罪、善惡の辨別、之れの問題に對する根本的な省察が、學窓に於て哲學の敎師より聞かされる前に、家庭に於て父母の口より、童話と共に讃美歌と共に耳に入つたのである。あるものにとつて之は獨斷となつて、却つてより深い考察を防ぐことになつたかも知れない。然しあるものにとつて、殊に彼らの素質の優秀なるものにとつ

て、メタフイジカルな考方を刺戟したことが多いだらう。此にタリスト教の一つの功績があり、又西洋の文化の上に見逃すべからざる點がある。宗教の普及したスコツランドから、多くの哲人が出た一つの原因が此にありと云ふのは、決して不當ではあるまい。

多くの哲學者を出したと云ふ點に於て、スコツトランドは獨逸とよく似てゐる。曾つてカントの傳記を書いたウイリアム・ウォレースは、カントの祖先はスコツトランドから來たので昔はCantと綴つたのが、其獨逸に往つてからツアントと讀まれるのを怖れて、Kantと變へたのだと云ふ。ともかくスコツトランドは獨逸と似たものが多い。湖水をLochと云ふが、イングリツシユは之をロツタと發音し、スコツトランド人はロツホと發音する。シーエツチの發音など獨乙と似てゐる。僕はロツホと發音して、君は獨逸語を知つてゐるねと云はれた位である。ともかくかうした特色を持つスコツトランドは今でも行政上に一つの別な區域をなして、イングランドと異つた法規を適用されてゐる。然し彼等は之に滿足しないで、進んでアイルランド同様の自治を布けと云つて現に勞働黨、自由黨のスコツトランド選出者は、一つの同盟を作つて、法案を議會に出してゐる。當分物になるまいけれども、保守黨の人々は、目を丸くして、アイルランド、スコツトランド、ウエールスが皆自治になつたら、何が英國に殘るのだと云つて嘆聲を發して居る。

（三）

R君

扨僕はバーミングハムからヨークを通つて、スコツトランドに向つた。ヨークはカンターベリーと並んで、アーチビショップの居る所で、此には中世更に遡つてローマ時代の遺跡がある。ローマの勢力が英國の此まで及んだことは驚く。其の寺院は實に立派なものである。僕も英國へ來てかなりカシードラルを見て歩いた。リバプール、チエツスター、ウインツエスター、ウースター、サウリスベリー等數多い、然し此寺院には、何か外で見られない一種の感じを與へられた。西洋へ來て建築の知識の足りないことを、熟々殘念に思ふ。

ヨークからニユーカツスルに來て、汽車は波荒い北海に沿うて走る。ニユーカツスルは石炭及造船業の中心地で、此の在にドクトル、メツサーが或る種の新しい施設を、勞働者の爲に開いてゐるので、一見の値があるとは、さる人から聞かされた事であつたが、自分は往く機會を持たなかつた。

エヂンバラに着いてすぐ感ずることは、美しい街だと云ふこ

とである。人は英國の巴里だと云ふ。少くとも其の中心である。プリンス・ストリート丈は、巴里よりも勝れて居る。中央に大きなスコットの紀念像を置いて、遥に突き立つた巖の上に古城を眺め、奇麗な花壇が續いて居る。此へ來て由緒ある昔の街へ來たとは誰しも感ずる所であらう。實際エヂンバラには見るべき遺跡が多い。ヒュームの墓、ヅガルド、スチュアートの紀念碑、ノックスの紀念教會、アダム、スミスの家、其の墓など學究の好奇心を惹くものが數多い。スミスの墓を訪ねて墓守に聞くと、隨分澤山の日本人が來ますと云ふ。同じ地內にヅガルト・スチュアートの墓もある。一體にエヂンバラに持つたスチュアートの勢力は大きなものであつた。業績としては決して獨創のものでないが、時人に與へた影響は獨創に比例しない素晴らしいものであつた。

僕はエヂンバラ市に着いて、直ぐ兼て紹介されてゐた英人W氏を訪うた。ロンドンのD氏からの手紙で前からあなたの來るのを待つてゐた、エヂンバラで自分の出來ることなら、何でも喜んでするから、遠慮なく云つて吳れと云ふ。早速自分は希望を述べて、一つは大學を中心として社會科學と哲人との一二の教授に會ひたいことと、一つは教會が貧民窟でしてゐるセットルメントを見たいと云つた。氏は御易い事ですと云つて、實は市長に御會ひになる様に手配をしてゐるのですがと云ふ。之は溜らないと思つたから、背廣一着の着のみ着のまゝですから、もう何卒その方面の御心配はないやうにと云つて旨く逃げて、そして先づ氏の斡旋を乞うて、哲學の教授ノルマン・ケンプ・スミス氏とジエームス・セツス氏とを訪ふ事にした。

エヂンバラ大學が最近まで持つてゐた誇りは、セツス・プリングル・パチソン氏であつた。氏はボサンケ以後英國ネオ・ヘーゲリアンの殿將と云ふべき人であらう。氏の書いた「ヒュームに對するカントと蘇國哲學者」「ヘーゲル主義と人格」「哲學的急進派」「近代哲學の光より見たる神の觀念」等は僕の接した事のある本で、氏には御目にかゝりたいと思てゐた、然し聞けば既に大學を隱退して、エヂンバラからかなり離れた田舍に住んで居られると云ふ。氏の後繼者がノルマン・ケムプ・スミスである、此の人の有する地位は一種の興味がある。それは氏がヘーゲリアンから離れてケムブリッヂのホイットヘッド等のリアリズムの影響を受けて、兩者の調和を企てゝゐるからで、氏の最近の著"Introduction to Idealistic Theory of Knowledge"が即ちそれである。別に一講坐あつて、ジエームス・セツス氏が之を占めてゐる、前のプリングル・パチソンの令弟である。氏の書いた「倫理の原理」は、英國に於て之丈倫理學教科書とし

て、讀まれたものはないだらうと云はれ、別に「英國哲學者及哲學々派」の一書は、英國哲學史として僕の愛好したものであつた。扨て急ぐ旅には、プリングル、パチソンを田舎に訪ふことは許されない、電話で都合を聞いて貰ふとジエームス・セツス氏も田舎に往つて居られて、三四日後でなくては戻らないと云ふ。ノルマン・ケムプ・スミス氏の家を訪ふべく、タキシを驅る。御宅に着くと、如何にベルを押しても答へがない、附近の職人が出て來て、何か用かと云ふから、來意を告げると、今遙か向ふに花束を持つて歩いて行かれるのがスミス夫人だから夫人を途中で捕へろと運轉手に云つたと見えて、タキシを走らせた。僕は少しあつかましい樣な氣がしたので止せと云つたが、どうも旨い英語が出ない、其の中にタキシは夫人の傍で止まつた。驚いた夫人に來意を告げると、今一寸留守ですが、きつと主人は喜びませう、明日の五時に御茶に是非來て下さいと云ふ。或はホテルに戻るとその時外から招待が來て居るかも知れない由を答へて、若し何もなかつたら是非伺ひますと答へて、ホテルに戻つたら果して翌日は前約あつて、遂に同氏にも御目にかゝることが出來なかつた、之でエヂンバラ三人の哲學者はすつかり會へないで、今以て殘惜しい氣がする。

僕は翌日さる人から中食に招かれて、此で大學の經濟史の講師リース氏に會つた。食卓に坐つていつまで待つてゐても來ない、一時間程して主人公が呼びに往つたら、やつと來て、どうもすつかり忘れてゐた、失禮〱と云ふ。如何にも呑氣な無頓着な人だが、若くて頭の鋭い人である。食事をして、戯談を云つてる内に、自分はウエールス人だと云ふ、あなたはウエールスの特徴を御存じかと云ふ、ケルトの血が混つてパツショネートな所が多いと云ふのでせうと云つたら、最も代表的なのが政治家としてロイド・ジョージ、勞働運動者としてジエー・エッチ・トーマス、學者としてと云つて一寸途切れたから、サー・ヘンリー・ジョーンスですかと口を入れたら、驚いて之は恰好だと云ふ。食事了つて少し御尋ねしたい事がありますがと開きなほつて、氏に兼て用意した數條の質問をした。氏には英國產業史、英國金融史、產業組織論の著書がある、何れも大著ではないが此の方面の質問をするに適當と思つて、一體一口に英國の產業革命といふけれども、私から見ると明にそれは前後二期に分れると思ふ。一つは十八世紀末から十九世紀の始にかけてのもので、其の次のは、十九世紀後期に於けるものである。前者の蒸氣力に對して後者の電氣化、前者の個人の解放に對して、後者のカルテル・トラスト、各々異つた特徴を持つてゐる。此の二つを一面に於て接續せしめて、一つの產業革命として研究する

ことと、他面に於て亦、此の二つを異つたものとして兩者の差異を辨別することが大切ではないか。トインビー・マルクス、等産業革命の學者は前者丈を扱つて、後者を扱ふの暇がなかつた。勿論後者の内カルテル、トラスト等を單なる一つの經濟問題として、引き離して研究した企はある、然し前期の革命が一般社會文化の上から眺められたと同じ樣に、後期の革命を眺めたものあるを聞かないがどうでせうか、殊にカルテル・トラスト等の組織と金融との干係を、研究したいと思ひますが何かよい示唆はないでせうかと云ふ長い質問である。之に對して氏の答へた所は中々要點に觸れてゐたが、唯後期革命の調査の困難であること、殊に組織と金融との干係の一點に至りては、餘程金融社會と知合でもなくては、通り一遍の編纂に了つて了ふし、殊に外國人には非常に困難な問題であると云ふ。實は同じ樣な答を外からも二三聞いてゐたのである。

次で僕の出した質問は、勞働問題を專攻する學生にとつて、英國で注意すべき事は何でせうかと云ふ馬鹿げた大雜駁な問である。かう云ふ問を出すと、大抵の人は面喰ふ、そして質問の質問を仕返す。然しリース氏丈は、默つて考てゐたが、やがて之と之と之だと二三條云つてのけた、之は頭のよい人に出合つた、かうした要領のよい答を探して居たのであると思て感心した。氏は第一に英國に行はるゝ重要な年中行事を十位擧げた、何の學會の大會、何の政黨の大會等、かうした事をすべて網羅して告げて吳れる人がない爲に、海外の學生はどの位不便をし、時間の浪費をするかも知れない。之を吾々は求めて人に尋ねるのだが、多くの人はそんなおあつらへ向の返答をして吳れない。次で氏が現代英國と云ふものに鳥瞰圖を與へて吳れるやうな著述を四五種擧げた、之も皆知つてゐるのではあつたが、かう纏めて列擧されると、成程と首肯かれる。要するに短くはあるが極めて有益な會談であつた。碎けた話になつてから、日本の留學生制度が話に出た。何百人の學者を每年何百萬圓の金を使つて、歐米へ派遣するとは、實に偉い政府ぢやないかと云ふ。自分は此の點丈は專制政治贊成だと云ふ。戲談云つちや困る、日本は立憲國だ、ちやんと議員の協贊を經てゐるのだと云ふ。それなら何の事、偉い國民ぢやないか、そんな事はとても英國などのやれる事ぢやないと云ふ。歸國した學者の結果はどうか、進歩思想にでもなつて政府の施設でも攻擊することがありやしないかと云ふから、ない事はない、あつても別に大した事にはならないと云ふ。それを知つて默つて政府がどし〱人を海外に出して、進歩思想を作ることは、偉大な政策ぢやないかと、賞めちぎる。云はれて見るとさうも考へられる。誰が

始めて、如何なる動機が、實行せしめたかは知らない。何れ歐米に敗けまいと云ふ一種の國家主義の産んだ偶然の功績であらう。然し考へてみれば英國政府などのやれない仕事である。此れ我國のよい點と惡い點とが二つ潜んでゐる。

（四）

リース氏に次で僕の訪ふたのは、大學の教授ニコルソン氏であつた。

R君、

君も知つての通り、千九百二十三年六月五日は經濟學の建設者アダム・スミスの二百年の誕生日である。僕がスコットランドに往つた目的の一つの中には、エヂンバラ、グラスゴー、カーコウデイーを中心として、何かの催があるであらう、これを探りたいと云ふことがあつた。尤も誕生日の日はバーミングハムに居た、其の日英國新聞にあらはれたスミスに關する記事は隈なく注意してゐた。次で六月六日ブリチッシュ・アカデミーで開かれた紀念講演には、態々ロンドンまで出て來て、聽いたのであつた。これはグラスゴー大學の教授スコット氏がやられた。

現代英國で若し、スミスに關して何事かを云ふ適當の人を求めたら、それは四人を擧げることが出來ると思ふ。一人はロンドン・スクール・オブ・エコノーミックスの教授キャナンである、富國論の最良版を出し、スミスが大學時代の講義の原稿を公にして、スミス學者たること疑ない。次はロンドン郊外に閑居して居られるジエームス・ボーナー氏であらう、アダム・スミスの藏書目錄を出版し、「哲學と經濟學」の著者である。第三が前述のスコット氏である。之はスミスの居つた大學の經濟學の教授であり、講坐の名前もアダム・スミス・チエーアと云ふのであるしフランシス・ハチソンの傳記を書き、最近に富國論のボーンス・ライブラリー版を出して居る。最後の人がニコルソン氏であらう、同じく富國論のニコルソン版を出した人であるニコルソン氏に會つたら、一般新聞雜誌の記事を今少し詳しく聞くことが出來、スコットランドに於ける催も分るであらうと云ふのであつた。氏は快く書齋に招かれて、多くの雜誌新聞を自分に與れてから、カーコウデイーとグラスゴー大學に往くことを勸められた。氏はスコットの講演に頗る不滿で、スコットはスミスを少し低く見過ぎてゐる、スミスはもつと偉大さを持つと云はれ、僕に一讀を勸めて、是非感想を書いて與れと求められた。氏はスミス以後經濟學者の視野の狹くなつたのを慨嘆し、殊に現代經濟學徒に於てそれが著しいと云はれた。

R君

僕は翌日スミスの故鄕カーコウデイーに往つた。ニコルソン氏の吳れた紹介狀を持つて、此の地のスミス通ロツクハルト氏を訪ふたのである。氏は絨壇の商人であるが、どう云ふ緣故か、スミスに關する斡旋を以て自ら任じ、又日本人を大變好きと見える。商科大學の高垣氏、長崎高商の武藤氏の名を擧げて、誕生當日の土地の新聞の紀念號を日本の兩氏に送つたと云ふ。氏に案内されて、スミスの誕生の家、富國論を書いた家、考へてみながら寢卷の儘で海岸へ出て了つたと云ふ其の庭、スミス紀念の圖書館など巡つて、氏の家で御茶を御馳走になつてから、再びエヂンバラに戻つた。誕生の當日は花火などあげて、大變な御祭をしたと云ふことである。

其の後僕はグラスゴー大學で開かれてゐたスミス紀念遺物展覽會に臨んだ。スミスに一番緣故のあるあの大學の一角に、スミスの像を据ゑ、其の藏書、其の日用品等を公開して居た。富國論のスペイン譯が治安に害ありとの理由で、發賣禁止されてゐたと云ふのが一寸目を惹いた。

R君

打ち明けて云へば、僕はさまでアダム・スミスに興味を持たない。一つは其の人となりが圓滿に過ぎて、ヒユームの硬骨に及ばない點が、僕に飽かぬ思ひを抱かしめるのであらう。一つは又經驗科學としての經濟學に、さまで僕が興味を持たないからであらう。僕は寧ろベンサムにより多くの注意を惹かれる。若し僕をしてスミスに執着を感ぜしめる一つのものがあるとすれば、それは一人の學者として新學問を建設したスミスの着想である。新學問としての社會學を作つたコムトの着眼と同じ樣に、どうしてスミスはあの學問を作つたのかと云ふ事である。固よりキヤナンの講義は此の事のよい材料であらうが、スミスが經濟學を其の一部としたユリスプルーデンスと云ふものが、どう云ふものなのか、之を今少し考へることが、此の問題によい思案を與へるものなのであらうが、此の點に於て僕は再びスミスを顧みて見たいと思つてゐるのである。然し此の事はもつと詳しく書くべきことで、かうした筆に適したものではあるまい。

(五)

エジンバラを立つて所謂スコツトランド湖畔地方を通つてオーバンに往く。山の上に羊が飼はれ、何と云ふか名の知れない黃色い花が一面に咲いてゐる。此の湖又湖、沿道、樹の間に湖水が見えたり、隱れたりする。丁度スイツツルに似、又イタリア

の北部に似てゐる。然しあの莊嚴なアルプスは到底此では見られない。英國第一の高山と云はれるベン・ベニスが四千四百尺であるから、湖水に幽邃を加へる山の美が欠けてゐるのは物足りない。オーバンからカレドニアン運河に入つて、フォルト・オーガスタスと云ふ山間の田舍で泊つた。

翌朝寢坊の僕には珍らしく、四時半に起き五時の汽船でインバネスに立つた。余りに早いので大きな汽船であるが乘客が二三人しか居ない。朝霧に包まれた湖水はしつとりとして良い。白い鳥が澤山に船を追つて來る、之にパンの屑を投げたりして遊ぶ。インバネスで永い船の旅を終つて、直に汽車で、アバヂーンに向ひ、此で一泊した。此の土地で僕の期してゐたのは、プリンシパル・ケヤーンズに會ふことであつた。然し相憎エヂンバラに往つて留守だと云ふ。若い美しい令孃が代つて出て、アバーヂーンに付て色々と說明して呉れた。それからキングス・コレッヂの中世以來の禮拜堂を見て、直にセント・アンドリュースに向つた。

セント・アンドリュースは有名な海水浴場地で、又ゴルフ・リンクとしてスコットランド第一である。汽車が街に近づくと、贅澤なゴルフ・リンクが續いて、あちらこちらで盛に興じてゐる。然し僕が此の地を訪うたのは、美しい海岸でもなければ、勿論ゴルフにあつたのでもない。此の大學がプラトー研究に有名な、二人の教授を持つてゐるからであつた。

R君、

僕は日本に於てプラトー、アリストートル等の希臘思想が、僕にとつて重要な研究題目であることを知つて居た。然し英國に來て、此の方面に對する興味は更に唆られた。非常に面白いことは、英國の大學では、社會問題の參考書として、プラトーの「共和國」を擧げることである。如何に社會を視るべきか、如何に社會に對すべきかに就て、之等の本は外に無いと云ふのである。プラトーを學生に推稱するのは、オックスフォルドに於て、殊に盛であるが、之は數百年來のプラトー研究の中心地たることから來る傳說の故もあるが、一つは誠に尤な理由があると思はれる。それは僕の意見で註釋を付けると、かうである。プラトー以來學問は進步發達して、色々の對象に對して研究の分化が行はれた、そして其の分化が著しくなつたと共に、學問相互の關係が分らなくなつて來た。之を社會科學丈に云つても、心理學、倫理學、政治學、經濟學、法律學等が出來て、各々が專門の研究に沒頭して、隣の人の仕事が分らないし、又全體を一團として綜合して、一つの社會と云ふものに對する根本態度が分らなくなつた。其の現代に於て、其の欠けたるものを補は

うと欲するなら、プラトーに往け。其處にある各學問の幼稚は分化の行はれた現代に及ぶべくはない。然し其處には、之を結び合せるもの、そして現代に最も欠けてゐるものが、はつきりと現はれて居る。一部分一部分は幼稚であるが、後に展開すべき多くのものが相互に結合した、縮圖となつてスタートが置かれて居る。其處に一度目を通して、又再び分化した現代の科學に返れと、かう云ふ意味じやないかと思ふ。

プラトーの研究も英國に於て盛衰はあつた。然し時代の傾向が綜合的神秘的のものを求める時には、常にプラトーを顧みた。そして其處から、新しい源泉を酌んだ。最近に於てオツクスフオルドのジョウエツトが前世紀の中葉に於て、プラトーの英譯を完成して、其の研究を刺戟し、之から新しい思想運動が起つた。所が丁度現代に於て、スコツトランドのセンド、アンドリユースはジョン・バーネツトとエー・イー・テーラーと云ふ二人の英國一流の、否歐洲一流のプラトー學者を持つてゐるのである。

僕が先づ訪ねたのはテーラー教授であつた。見るからに小柄な人で、極めて氣さくに自分の問ふ所に答へて呉れた。プラトーの思想、其の作物等に付て、聞きたいことを終つてから、最後に一つの問を出した、それはプラトーに闘する獨逸學者の研究をどう見るかである。氏はかう答へた、自分は獨逸に於て注目すべき研究に接しない例へばウイラモウイツツ・メツレンドルフなどは、果して本當にプラトー自身を研究したかどうか疑はれる。矢張プラトーに闘しては我々の同僚バーネツトに及ぶものは、歐洲に一人もあるまいと。唯プラトーの譯文としては自分はジョウエツトよりも獨逸のアペルトを推稱する。ジョウエツトの譯は英文としては實に名文である。唯譯文の妙に急にして、原文に稍忠實ならざるの憾がある。此の點でアペルトの獨譯は申分ないと認めた。プラトー當時の社會的背景を伺ふものとして、氏はチンメルマンの„Greek Commomealth„を推稱したが、歴史的背景としては、流石にエドワード・マイヤーの古代史を忘れなかつた。要するに氏は獨逸のものにも充分に眼を配つて居、其の長所を認めてゐるが、然しプラトーそのものの研究としては、ジョン・バーネツトを推賞措かなつた。

バーネツト氏を訪うた時、氏は庭の椅子に倚つて茶を飮んで居られた。柄の大きな髮の毛の眞白な、どうみても泰然とした老大家である。話題はテーラー教授の時と同じ様に進んで、最後に日本のプラトー研究に就て聞かれ、プラトーの日本譯がありますかと云ふから、ずつと以前全集の邦譯があつたけれども、譯文は現代的でない。最近に新しい眼がプラトーに注が

て、現代的の譯が現れつゝあると答へたら、何が最初に出ましたかと云ふので、辯明とクリトンですと云つたら、はあさうですかと考へて居られた。氏の著「希臘初期の哲學」「希臘哲學、ターレスよりプラトー」二巻は希臘哲學史としての傑作であらう。僕は後者の續卷アリストートルが出るのを鶴首して居る由を述べて、辭したのであつた。

後オックスフォルドでさる人と食事をしてゐた時に、セント・アンドリュースでバーネット氏とテーラー氏に會つたと告げたら、二人が御互に何と云つて居たと聞くから、テーラー氏は大層バーネットを激賞した、然し何か二人の間に有つたのですかと尋ねた。云ふ所に依ると、曾て此の二教授の間に大論戰があつた、それは多分何所迄プラトーの作物にソクラテスが出て、何所迄がプラトー自身かと云ふ問題であつた。此の論戰は當時學界の注目を惹いたものであるが、結果はテーラー氏の敗北の樣であつたと云ふ話であつた。それにしても、テーラー氏が同僚バーネット氏を推賞して、之を持つことは英國の誇であり、セント・アンドリュース大學の誇であると云つてゐるのは、襟度頗る羨むべきものがないか。

セント・アンドリュースから一旦エヂンバラに戻つて僕はグラスゴーへ立つた。グラスゴーは都市行政の點に於てバーミングハムと竝んで、英國都市中に異彩を放つて居る。バーミングハムが保守黨の根據であり チエンバーレン以來保守黨の開明專制で堅めた市制を持つに反し、グラスゴーは社會主義の勢力を占めてゐることに於て特色がある。人若し車を驅つて、グライド河の沿岸を走るならば、其の造船業の盛なるに驚くであらう。此の造船業を中心として、グラスゴー附近の勞働者は、最も急激な社會主義者で、所謂クライド社會主義者と稱せられるもの、殆共產主義に近い傾向を持つ。大戰中に於ても政府は、此の方向を非常に怖れ、マクドーナルドもクライド一派の制肘に少からざる苦心を要した次第である。

グラスゴー市に於て僕に最も興味のあるのは、有名なアート・ギャレリーであり、又グラスゴー大學である。前者は有名なホイッスラーのカーライルの畫を始めとして、英國中に於て指を屈すべきギャレリーである。後者は其の地位の高貴なることに於て、其の建物のどつしりしてゐることに於て、恐らく英國第一の大學と云へるであらう。僕の記憶にして、誤ないならば、確かスミス時代とは場所を變へたのではないかと思ふ。然しともかく此の大學は英國思想史に於て重要なる役割を演じて居

る。其の道德哲學の講座に坐したもの丈で、フランシス・ハチソン、アダム・スミス、トーマス・リード、エドワード・ケヤードがある。何れも大きな足跡を思想史上に刻んだ人達である。其の後此の地位は二つに分れて、一つは哲學となり、一つは經濟學となつた。其の經濟學の方がアダム・スミス講座と稱せられ前に擧げたスコットが其の教授であり、前任者が確かスマートであつたらう。哲學の方にケヤードの後繼者となつたのが、サー・ヘンリー・ジョーンスである。氏はウエールスの田舍の靴屋の職人から育つた人で、其の思想の獨創と云ふ點から云へば、ケヤードの蔭に隱れて、見るべきものがないかも知れない。然し一人の「偉大な教師」として、氏がスコットランドに持つた勢力は大したものであつた。僕の知合で氏の門下生であつた人の話によると、ジョーンス教授の人氣は非常なものでした、ある婦人の學生が氏に戀して大變であつたと云ふ。氏は僕が英國に着いた前年に死んだが、晩年不起の病に冒されて、非常な苦痛に堪へつゝ、書き上げた „Faith that Enguires" の一卷は此の派が世に提供した最後の傑作と云ふべきものであらう。題目が內容を表はして居る、一方に於て「信仰」を持ち他方に於て「探究」を容れる。探究を容れざる獨斷でなく、探究に迷うて懷疑に陷るのでないと云ふのが其の立場である。非常な身體の苦しみの中に在りながら、此の世の惡や苦痛の意味に付て、神の心を疑はなかつたと云ふ點で有名な著作である。

氏の沒後之に代つて、名譽なる道德哲學の椅子に坐したのが、僕が之から訪ねやうとしたリンゼー教授である。氏はグラスゴーに生れた。我が藤井武氏によつて譯された「ルーテルの事業と其の生涯」の著者プリンシパル・リンゼーは教授の嚴父である。オックスフォルドのベリオル・コレッヂのフエローを長い間勤めて、此の地位に就いた。僕は教授邸宅第一號に氏を訪うた　大學は大きな公園を見下して、遙にクライドの流を眺める。其の建物は古い僧院の樣な重々しさがある。氏の書齋の窓から眺めた景色も實によい。僕は氏と一時間余の間、色々の事を問答したのであつたが、此の會談は僕が英國で持つた最も愉快なものであつた。潑剌たる氏の答は僕を啓發すること實に多かつた。氏に別れて出て、大學前のベンチに腰かけた時、身のグラスゴーに在ることを始めて氣が付いた位、已れを忘れて話に沒頭して居たのであつた。

其の後一年程して、オックスフォルドのベリオル・コレッヂのマスターなるエー・エル・スミスが死んだ。學會及教育界に名聲ある又重要なる此の地位を、誰が繼ぐであらうかとは、英國上下の等しく興味を持つ所であつた。マスター・オブ・ベリオルはジ

ヨウエット・ケヤード以來社會的に重要な威信を備へてゐるからである。一部の人の間には、多分アスクイスが自由黨首領の地位を辭して、此の職に就くであらうとさへ噂した。程なく新聞紙上に新なマスターはグラスゴーのリンゼー教授のことが公にされた時、僕は多くの人と驚くと共に、心からリンゼーの爲めに祝つたのである。エドワード・ケヤードがグラスゴーの教授からジョエットの後を繼いだと同じ經路を踏んで、リンゼーは僅にグラスゴーに在ること一年にして、母校のマスターに就いたのである。齡未だ四十余、グラスゴーの教授既に名聲であるに又出でゝヘリオルのマスターとなる、恐らく之が最近に於ける榮轉の随一であらうとは一般のいふ所である。氏はI、L、P、の會員で社會主義者である。之が傳統固い大學の重要な地位に、明に社會主義者と稱した人の就いた、最初であらうと云つて、ニュー・リーダーやデーリー・ヘラルドは喜んで居た。

R君、

スコツトランド十日の旅を終へて、僕はグラスゴーから一直線に、イングリッシュ・レーク・ジストリクトに向つた。英蘭湖畔地方とはウエストモアランドとカンバーランドとの兩州に跨つて、澤山の湖水を連ねた地方を云ふ。僕は其の中の一つ、ウインダーシア湖の北岸、アムブレサイドに足を留めて、約三週間滯在したのであつた。山の高さがないことと鬱蒼とした木の蔭のないこと、水の急流がないこととは、湖畔地方の欠點である。然し平凡單調な英國の一角に、之丈の景色のあることは多としなければなるまい。老人婦人子供も限なく往ける様に馬車やシヤラバンの設備がよく整つてゐる、同時にそれが少しも天然の風光を傷つけることにならないのは偉い。アムブレサイドを中心に毎日あちこちの湖に杖を曳く。其所からケスウイックに至る路と、其所からアルスウオーターに至る路とは、眺望の廣濶なることに於て類が尠いし、ダウエントウオーターとバツタミア湖との廻遊は、峻い急坂が續いて、馬車上の人をして心膽を寒からしめる。夏涼しい所に施つて、靜な讀書でもしやうと云ふには、湖畔地方は余りに雜踏して居る。然しスコットランドの旅の歸りに、一週間か二週間、旅の疲を醫するには又とない場所である。

然し僕等を此の地方に惹付けるものは、風景でなくて、寧ろ此の地方の思想的聯想である。十八世紀の末から十九世紀の中頃にかけて、多くの詩人が此に篭つて詩想に耽つた。此の點に於て、英國湖畔は思想史上に意味がある。ライダル湖グラスミア湖に於けるウオーヅウオースとコールリッヂ、ケスウイックに於けるシエレーとサウシー、コニストン湖に於けるラスキン

等、皆離れられない縁故がある。ウオーズワースがフランス革命に熱狂してから、次で之に失望して、落ち付く先を求めたのは此の湖畔であつた。コルリーヂとサウシーとが同じくゴドウインの共產主義に感激して、アメリカに新らしき村を作らうとして成らず、退いて詩作に耽つたのが此の土地であつた。コールリーヂがウオーヅワースを訪ねて、共に千七百九十八年「叙情詩集」を公にして、ローマンチシズムの聲を揚げたのは、グラスシア湖畔からであつた。かうしたことを數へたら切がない。之等の詩人の住家、其の墓、遺物を並べた博物館を廻つて歩くことは、一種の巡禮旅行と云へるであらう。

（七）

僕は七月末、ウインダーミア湖に別れて、南ロンドンに戻り、直にサレーの南部ヘースリーミアに開かれたフエビアンの夏期學校に臨み、此に八月の四週を送つたのであつた。

フエビアン教會主催の夏期學校は、毎年ロンドン近くの田舍の學校寄宿舍を借り受けて開く、此の年はヘースリーミヤ在のハインドヘツドのセント・エドモンド・スクールで催された。非常に廣い地面で テニス・コートが五六あり、ゴルフ・リンクあり、大きな森がある。學校に集まるものは、會員のみであるが、フランス人、イタリヤ人、アメリカ人、ロシヤ人、印度人、日本人等かなり國際的である。毎週講演の題目を集中して、第一週に所有問題、第二週に農業問題、第三週に勞働者と國際關係、最後に勞働者と能率問題とし、毎日更に小さな題目の下に、講演がある。講演は午前十一時から一時間で、十二時から一時迄は質問及び討論である。講演そのものよりも、此の方に寧ろ重を置くのは、如何にも英國らしい仕方である。中食の後にテニス・ゴルフ等をして、五時の御茶の後で、又臨時に會員の中から講演がある。夜は大體音樂や芝居の余興が開かれる。毎週議長となるべき人が選ばれて、之が質問や討論の整理をする。僕がかうした共同生活はウツドブルツクに於て既に經驗があるので、敢て珍らしくはなかつた。唯其の食事の際などに於ける食物の香合、態度の粗野なこと、一體に喧騒なことには、少からず驚かされた。尤もウツドブルツクから來たために、特にさう感じたのかも知れないが、ある人は之が社會主義國家の混亂の縮圖だらうと云つた。然し態度はどうでも構はないとしても、唯僕の頭に殘つたのは、各々の人の心に如何にも余裕がないことと、一つは集團として余りに統一の欠いてゐることであつた。若しウツドブルツクを以て nice but not clever なる人の集りとすれば、之は clever but not nice の人の集りとも

云へよう。然し後轉してI、L、P、の學校に入つた時、僕は此に二つを兼ね備つた人の集りに接することが出來て、非常に嬉しかつた。

毎日〳〵の講演を語ることは煩雜に過ぎる。第一週の所有問題に於て、僕の眼に映じたことの一つは、少からざる人が、生產手段の公共所有と云ふことに、疑の念を挿んでゐることであつた。つまり所有問題が決して、社會問題解決の最後ではない、之から後に出て來る多くの難問の唯一つの解決たるに過ぎない。然し是非踏まなければならない一つの路だと云ふに一致してる樣である。此にギルド・ソシアリズム等の影響があると思ふけれども、僕は所有問題と云ふことから、一步更に視野を廣げてゐる所に、興味ある傾向があると思ふ。

第二に農業問題を論ずるのは、此の時分に此の問題が喧しかつたからである、其の一つの理由は都市の擴張に對して、農業の衰微をどうするかと云ふことで、之は各國共通の問題で、英國のみの事ではない。唯英國は食料品の過半を海外に抑ぐと云ふ關係から、特別な農業政策が起ると云ふ丈である。第二の理由は大戰中に農業に加つた保護を戰後撤回した爲に、農民の困窮が著しかつたと云ふことで、第三は今後英國政界の形勢は農民を保守勞働何れが、味方にするかにある。都市の住民は略形勢が定まつた。殘る所は農民にある、之が著しく農業を問題にする所以なのである。

第三週の國際問題には、特に國際聯盟を附加して、勞働黨の外交政策を論じ、第四週の「勞働者と能率問題」は最も散漫で內容がなかつた。第一日の夜に、全體の人の顏合せと云ふ樣な恰好だ、茶話會が開かれた。話は先づ坐にあるイタリアの某大學の歷史敎授S氏に求められ、同氏はファッシスチーの話をされた。次でアメリカの若い婦人に、米國最近の社會運動に付て求められ、最後に僕を名指して紹介の辭に曰はくフエビエン敎會の出版物の賣れる數から云ふと、英本國を除いては、世界中日本に及ぶものがない。實に日本と云ふ國は驚くべき不思議な國である。其の國に於て國際聯盟をどう思つてゐるかを話して吳れと云ふのである。日本を不可解の國だと云ふのは、日本は立憲制度の發達しない官僚國、それが社會主義のものをよく讀むと云ふことにあるのであらう。確に其の點は外國人には不思議に映ずるに違ひない、何故なら英人には、讀むことと、信ずることと、實行することとは同一時だと思つてゐるからである。

數多い講演の中で僕の印象に殘つてゐるのは、シドネー・ウエッブの「資本主義文明の沒落」と云ふのであつた。之は氏の近著"Decay of Capitalist Civilization"の要領を述べたもの

であらう。此の講演が僕に與へた感じは、ウェッブはかうした問題を論ずる時に、非常に立場が弱いと云ふことであつた。資本主義文明の沒落と云ふのは資本主義を採る國家が、アッシリアやバビロニアが亡びた様に亡ぶと云ふのか、或は資本主義を基礎とした社會組織や文化が亡びると云ふので、種族や國家が亡びるといふのと關係がないのか、其の點が要領を得ない。何れでもあるやうでないやうでもある。かうした問題は廣汎な社會科學の智識を必要とし、之を綜合するに文明批評家としての一種の見識を必要とする。ウェッブは之を備へてゐる人ではない、此にウェッブと云ふ人の持つ弱點を覗つた感があつた。それよりも面白かつたのは、氏が臨時的に「議會の印象」を語つた時であつた。前年始めて議員となつた氏が、如何にウエストミンスターを見たかの感想であるが、之は頗る暗示に富んだ話であつた。議會の開かれる前時に院内の禮拜堂で祈禱をするが、その時一番敬虔なるが勞働黨議員で、一番不信心なるが、アングリカン・チャーチを擁護してゐる保守黨であること。院内のバーで一番酒を飲んで泥醉するのが保守黨で、一番謹嚴であるのが勞働黨であること、社會、經濟上の問題を最もよく研究して學問のあるのは、勞働黨の議員で、保守黨は到底太刀討が出來ないこと、此に勞働黨の多望の未來があること。保守黨には一人も人材が見當らない、自由黨のロイド・ジョージは大戰當時の全盛に比して、今は悲慘そのものであること、アスクイスはあれ丈頭の秀でた人が、近時頻に衰へたのは、酒とカルタの御蔭で近く隱退の潮合を見てゐるのであらう等。議員生活第一年生として、此の學究の眼に映じた議會は頗る興味があつた。

（八）

R君

更に僕の忘れられないのは、近く逝いたモレル氏の「外交機關改革」に關する講演であつた。モレル氏は君も知る通り、曾てアフリカのコンゴー國に於けるベルギーの土人虐待を掲げて、世界に一つの運動を惹起した人である。國際平和の爲めに爾來努力して、大戰中は平和論の爲に牢獄に投ぜられ、當時"Union of democratic control"を作つて"No more war campaign"を起して居た。其の後マクドーナルド等が、ノーベル賞を受くべき資格ある人として、氏を推薦したことがあつた。氏は第一に日英同盟締結當時に於て日本國民は露西亞と握手せんか、英國と結ぶべきかを考へてゐた、偶然の事情が日英兩國を結んだのである。然し同盟が國民の眞精神より發露すべきものとするならば、露西亞と同盟し得る國が英國と結び得る

理由がない。當時の露英の間には余りに多くの國情の差があつた。然るに牛と馬とを自由に選擇しやうとした所に、如何に日本國民の此の同盟に對する不信があるかゞ知られる。第二に日英同盟は、日本の朝鮮併合を助け、支那の蠶食を容易ならしめた。此の同盟程、東亞に於ける罪惡を作つたものはないこと。第三に英國はワシントンに於て日英同盟を棄てると共に、更にシンガポールに海軍根據地を築いて、往年の同盟國に鋒を向けやうとする、其の不信不節操の政策を痛罵し、第四にシンガポール要塞は要するに、オランダと策應して、日本のジアワの併呑を防がうとするにある。要塞を英國が築き、オランダが艦隊を作り、相共に日本に當らうと云ふのである。保守黨内閣のシンガポール築造の決議と共に、オランダは艦隊增設案を議會に出して、大問題を起してゐる。英國は此に再び危險なるオランダとの秘密條約に入らんとしつゝあるのではないか。第五に斯くの如き外交政策の一貫を欠くのは、秘密外交と一部の人の獨占に委するからで、宜しく之を公開外交とし、議會の各黨を含んだ常設委員の會議に委ぬべしと云ふにあつた。

此の講演は熱誠面に溢れて、頗る聽衆を緊張せしめたものであつた。日本を罵倒するあたり、かなり手厳しい、然し英國も同じ様に痛罵してゐるし、モレル氏の過去の經歷を知る僕には少しも嫌な氣持が起らない。講演終るや、議長は此の講演は日本と關係が深いからと云つて、突嗟に僕を指名し、Kさんあなたの御意見をと請はれた。僕は起つて、日本が過去に爲したモレル氏の所謂罪惡に付ては、短い時間内に之を説くことは出來ない、唯吾々青年は過去にあつた色々の事に關して、衷心恥しく感じてゐることを云ひたい。然し世界各國の人々が此の種の問題を論ずる時に大切なるは、誰が最初の石を投ずる資格があるかと云ふことである。止むをえざる國情が、御互にかうした罪惡をさせるのである。之を認めた後に於てのみ、御互の罪惡の批評はされなければならないこと。若し夫れ外交機關の改革に付ては、制度の改善は萬能ではない、要は國民の精神にある。率直に云へば、過去二十年間外交を國民的にしたとも、英國々民は日英同盟を採つたであらうと思ふ。然し外交の公開は國民の心を改善する有力の手段にはなる。此の意味に於て自分は、モレル氏の意見に贊成であると答へた。其の後請はるゝまゝに、日本に關する一切の講演をさせられた。一般に歐米に於て朝鮮人支那人の日本反對の宣傳はかなり行き屆いて居る。日本の帝國主義に付ては到る所に意見を求められ、僕も此の前後數ケ所に於て、拙いながらも日本に關する説明をすべく、余儀なくされたが、之に對する僕の態度は一定して居た。第一に我々

長篇小說

痴

滿二年の大苦心になる

谷崎潤一郎氏

生涯の最高力作

大正文壇に重きをなす谷崎氏が、滿二年の精進碎心の結晶である。本著が藝術的に不朽の名作であることは勿論だが、讀んで恍惚として全卷を一氣に讀了するのは全く氏の獨有する魅力である。此一書は著者が多大の期圖を以つてかいたもの

青年は日本が支那朝鮮に於て爲したことがよいと思つてゐないこと、第二に之は蓋し國際最高の正義に反するからで、此の見地に於てのみ、吾等の爲したことを恥づるのであること、第三に此の國際最高の正義より見る時に世界各國は何れも石を投ぜらるべきで、他國に石を投ずる資格あるものはないこと、第四に要するに吾々青年は内に保守派外に外國の帝國主義と腹背兩面に戰はなければならないことを述べるにあつた。曾て或る英人が講演後、君は上手だね、さう云はれると文句が出ないよと云つて苦笑してゐた。

R君

フエビアン夏期學校四週間は、少し僕には長きに過ぎた嫌はあつた。然しサレーの此の邊は海拔約千尺、空氣新鮮でいかにも氣持がよい。若しシヤラバンを驅るならば、ウオルヂング、ボグノール、チチエスター、アランデル、ウインチエスター等がある。更に遠く往けば、ポーツマウス、サザムプトン、アイル・オブ・ワイト等がある。此の邊の景色は平凡であるが、中部北部の英國と違つて、雜木林の多いことや、松の樹の工合など、大變日本と似て居る。僕は八月卅日學校を去つて、ウインチエスター、サウリスベリーを經て、西へ西へと向つて、プリマウスに着いた、九月一日から開かれる勞働組合大會に列せんが爲であつた。

(九)

勞働組合大會は千八百六十八年第一回を開いて以來、毎年引續いて開かれる、全國勞働組合の統一聯絡を計る機關である。大會を開く場所は毎年更代になる。之は一つは組合出席者に違つた場所を紹介するのと、各支部に大會に對する興味を喚起する爲であらう。多くは景色のよい歷史上の名所などに開き、出席者に一の慰安を與へることも考へられて居るやうである。此年はプリマウスに催された。前回に此の土地に開かれたのが、確か千八百九十八年かで、丁度今から廿五年前である。其の時英國勞働史上に於て劃時代的とも云ふべき決議が通つた。即ち勞働者は自由黨から離れて、別に獨立の政黨を作るべしと云ふのである。之が今日の勞働黨の起源で、爾來僅に四分の一世紀、彼等は今陛下の反對黨となるの隆盛に達したのである。プリマウスに於ける大會は、かうした歷史上の回顧もあつた。

大會は恒例として、第一日に開催地の市長が、正式の禮服を着し、市を代表して、歡迎の辭を述べる。次で土地の有名な敎會に於て、祈禱會を開き、有名な牧師の說敎を聽く。それから第二日の會議に入るのである。僕は會議に列すること數日、秘

辯會を除いては、プラットフオームに於て、議事の模様を委に観察することが出來た。恰も日本大震災の報があつたので、第二日議事に入る前幹事は緊急動議ありとして、我國の災害を報告し、以前の同盟國たる日本國民に對し、殊に其の災害を最も多く受くべき下層階級の爲めに心から同情する旨を述べ、日本に電報を送ることと、三分間の默禱をなすことを提議した。滿場一齊に起立して、默禱をした時には、列席したる自分は衷心其の同情に感謝したのであつた。

爾來數日の間續いた大會の議事中に於て、主要なるものが三つあつた。一つは同一產業に從事する職業組合間の爭を如何に解決すべきかの問題である。所謂インダストーリアル・ユニオンを作るべしとの聲高いに拘はらず、未だに各トレードに別れるトレード・ユニオニズムの執着は强くして拔き難い。勞働者階級は決して一つの階級意思など中々持つては居ない。之が爲めに勞働組合大會の幹部に從來よりもより大きな權限を與へて、多少の强制を加へ得るやうにしやうと云ふのが問題であるが、贊否區々中々決しない。結局それは可決されたやうであるが、之は勞働運動上に橫はる一つの難問として、尙將來も永く殘るであらう。其の次に激論の中心となつたのは、消費組合の所屬工場に雇はれる勞働者組合と、雇主たる消費組合との勞働爭議である。此の問題は實に興味ある最近の問題で、此の中に澤山の暗示が含まれてゐる。元來消費組合は千八百四十二年ロッチデール・パイオニアによつて、主として勞働者階級の爲に、作られた制度である。又消費組合の所有する工場に雇はれる勞働者は、殆皆消費組合そのものに會員となつてゐる。若し其の所有工場に於て經營が巧く往つて、經費が節約せられゝば、其れ丈消費組合員の配當は增す譯である。然し其の工場の勞働者から云へば、消費組合員として受ける配當は間接で、一人當り僅少であるが、工場の勞働者として受くる賃金や時間は、直接で緊急の關係がある。之が勞働爭議の起る所以である。此の事は結局企業と云ふものの存在する以上、其の企業主體の何人たるを問はず、其の企業目的の何たるを問はず、其處に必ず企業主體と勞働者との爭のあることを明にするので、所有關係が最後の解決でないと云ふ一つの例證を示すものである。又現存經濟秩序に對する變革運動としての、勞働組合と消費組合との利害の交錯から來るもので、丁度同じ變革運動としての、社會黨と勞働組合との衝突が、サンヂカリズムと變形を採つたのとよく似て居る。共に複雜なる現代運動の一面を表はすものである。坐に消費組合の幹部があつて、消費組合としては自衛上止むをえないと極力辯護して居た、結局双方の圓滿な

交渉に俟たうと云ふことに話を取定めた。次に大會を動かしたものは、フランスのルール占領を非難する決議で、獨逸勞働者の代表者の演説が、特に聽衆に感動を與へ、幹部席にあつたミス・マーガレット・ボンドフィールドは窃に涙を拭つて居た。

プラットフォームの僕の隣りに、丁度幸にオックスフォルドのラスキン・コレッヂのセクレタリー・スミスが居て、色々說明の勞を取つて呉れた。此の中から未來の政治家が澤山出るのだと云ひ、あれがクラインスで、あれがスマイリーだと指す。大會に列する代表者約七百人、其の中に殆一割近く石炭工夫組合の代表者が占める。十九世紀中に於て勢力を占めた綿工業、機械工業、造船業が漸に後景に退いて、二十世紀に入つて之に代つて飛躍して來たのが、石炭、鐵道、運輸等の不熟練勞働者の組合である。英國勞働組合の驚くべき勢力の分野は、此に明に展開されて居る。

プリマウスの港はメーフラワーが出帆した港である。祖國を追はれたピユリタンは此の船でアメリカへ落ちのび、其處に人權の思想を布殖し、遂にアメリカ獨立の源をなし、フランス革命の根抵をなした。追はれたメーフラワーの人々は、プリマウスの陸に別れる時に哀愁に堪へないで、始めに着いたアメリカの港をプリマウスと名づけたと云ふ。海を距てゝ二つのプリマウスある所以である。此から更に西に往くと、其處に(Lands End)と云ふ所がある、之が英國の西の端で、此にある一本の樹が the last tree in England (英國に於ける最後の木)と呼ばれてゐる。

(十)

R君

僕はプリマウス一週間逗留の後、ロンドンに戻り、再びロンドンとケムブリッヂとの中間にあるホッデスドンに開かれたILPの夏期學校に臨み、此に一週間を送つた。ILPはフェビアンと違つて、此の年始めて此の種の企を試みた、八月下旬一つをスカーッオロに開き、今一つをホッデスドンに開いたのであつた。ホッデスドンのハイ・リーと云ふ土地は銀行家バークレー氏が死ぬ前に遺言して、宗教に關係ある會合の爲に、此の屋敷を提供することにしたので、溫室あり花壇あり、數個のテニス・コートあり、大きな森があつて、端から端が知れない位廣い。此に六十程の室があつて、數十人の泊れる用意がある。外に會議室あり、食堂あり、談話室ありで、驚くべき行き屆いた設備である。日本にもこんなものが一つあつて欲しいと思ふ。

ＩＬＰの學校はフエビアンと違つて、勞働黨が内閣を取るも遠い事ではあるまいと考へて（之には多少諧謔を交へて居つたので此諧謔がまさか半年の後事實となつて現はれやうとは、神ならぬ身の彼等の夢にも思ひ及ばぬことであつた）ＩＬＰの名士が内閣大臣となつて、各省の施政方針を述べると云ふことにし、之に反對黨の首領を一人假想して、之に反對演說をさせ、議員が双方に入り亂れて討論すると云ふ趣向であつた。ブレールスフオルド氏の失業問題、スウヮンシック夫人の軍備制限と國際聯盟、ペシック・ローレンスの金融と銀行、バートランド・ラッセルの大學教育、タウネーの普通教育など、其の主なるもである。社會主義が主義そのものの宣傳の時代を去つて、實行の時代に入り、行政の時代に入つた、一つの表象と見られる。

ＩＬＰの學校がフェビアンと異る所は、明な旗印の下に全體が統一されてゐることである。フェビアンは掲ぐる所余りに漠然で多種多様の會員を容れ過ぎた。之に反してＩＬＰは何處やら清新な戰士の集團として、分子が選擇されてゐる。フェビアンにもウエッブ、ショウのやうな中心人物はあつた、然し今の人達と之等の人々の間には多少の距離がある。之に反してＩＬＰにはケヤー・ハーデイ、ラムッセー・マクドーナルドを始めとして、目下のクリッフオード・アレンに至るまで、ある中心人物を持つて動いて來た。從つて學校に於てもアレンの驚嘆すべきリーダーシップの下に、全體が氣持よく動いてゐる。此にはフェビアンに見る樣な亂雜と無秩序とがない、而もアレンの統制は各個人の自由と少しもそれが軋らないで、自由と統一とがよく調和してゐる。討論の際に於けるアレンの議長振と反對黨首領ドランのユーモアとは、眞に僕を感ぜしめるものがあつた。一週間のＩＬＰの生活はかうした人の集團が如何に、動いて往くものかを敎へる所が尠くなかつた。同時に僕を感ぜしめたことは、英國勞働者の中にある帝國主義的思想であり、アングロ・サキソンの優秀民族であることの自負心である。之は僕が多くの所に於て感じたことであるが、最も純粹なＩＬＰの社會主義者中に於ても、尙人種的の偏見を持ち、英帝國が確乎たることによつて、世界に平和と正義が維持されると云ふ考の牢乎拔くべからざるものがある。英人の悧口さは容易に之を悟らしめない。然し比較的淡泊に語る此の討論に於て、僕は今更ながら之を感付かざるを得なかつたのである。世界の各國が謙遜に他國を待ち、互に平等の心を持するのでない以上、世界の親和は來るまい。英國のみならず、各國の勞働者階級に漲る國民的帝國主義的思想は僕が此の洋行に於て投ぜられた一つの暗い影であつた。

更に又感ぜしめられることは、英國に於てはかうした思想に對して、直に駁論を加へて憚らない一團の人の有ることである。さうして保守派が之に對して敬意を以て謙聽することである。僕は英國が過去三百年間、世界外交上に爲した罪惡を、眞に痛罵したく思ふものであるが、同時に僕を打つものは、英國は其の罪惡の時に、常に自國を罵る人を國内に持つてゐたことである。印度に對するエドモンド・バーク南亞に對するキャンベル・バンナーマン等を始めとして、責任ある名流にして、自國の政府をまのあたり難詰するものがあつた。さうして一般民衆は之に與すると否とを問はず、之を待つに敬意を以てしたのである。一群の保守派のあることは必ずしも、問題ではない。強く之に戰ふ人のあることに、多望の未來が開かれる。更に此の聲に耳傾くることを知る民衆のあることは、來らんとする流の方向を示すに足りないか。英人は惡に強いと共に善に強い。僕の公憤は幾度か英國の外交の上に燃えるのであるが、顧みて之を他國と比較する時に、矢張一段上にあることを思はざるを得ない。英國にも罪の種は多い。然し此には罪と戰ふ一群の人がある。

× × × × × ×

R君、僕はホッデスドンから九月中旬ロンドンに戻つた。思へば一月中旬僕が英國に着いてから八ケ月、多くの人の好意によつて、僕の受けた示唆は尠くなかつた。今は靜に之を反省し整理する時に來た。のみならず久しく本と離れてゐたので、讀書の欲求は抑へ難いものであつた。何れか靜な所に籠つて、來らんとする半歳を送らう。そしてそれはオックスフォルドを措いて外にないとは、僕の夙に思ひ定めてゐた所であつた。かくて僕は九月末、希望に溢れて、オックスフォルドに向つたのであつた。

（五月廿五日）

支那反帝國主義運動の基本考察

支那の國權回復問題

米田實

一

上海に於ける同盟罷業は、思はぬ大問題の惹起を促すに至つた、五月三十日會審衙門に於ける上海大學及文治大學々生二名の罷業煽動事件公判の日、三千の支那學生同處に殺到し爲めに檢束者を出し、之に續いて起つた學生連の租界警察署亂入、警吏の空彈及實彈發射、その結果として現はれた即死四名、傷死三名、輕傷數十名とその責任等につきては、予は敢て玆に之を論斷せんとするものでは無い、然かも平素外國租界の存在を非難し、殊にその行政振りに至深の不滿を抱いて居た支那人としては、此機會に平素の憤激と怨恨の念とが爆發し、更らにそれに一般國權回復の希望が加はつて、全國的大運動化して來たのも、考へて見れば、亦た何の不思議があらう。

而して此國權回復の問題こそは、今や少くとも支那側では最も重要事項と目して居る、同事件の支那側交渉委員に任命せられた顏惠慶は六月二十八日「上海事件のみの交渉ならば、何等大事を取るの必要がないが、國家根本の大計たる不平等條約修正、國權回復に重きを置く」旨を聲明した、次ぎに平素支那政策を巧妙に行ひ、四億の人心を收攬せんと力めつゝある米國は國務卿ケロッグ氏、駐米支那公使施肇基氏等協議の末、治外法權撤廢其他の項目を含む國際會議提唱に決したと傳へらるる。國務次官から駐支米國公使に移つたジョン・ヴアン・エ・マ

クマレー氏（先きに北京米國公使館書記官たり、支那關係條約集等の著述がある）今後の活動は、同じく新らしき國務卿たるケロツグ氏（本年三月就任）のそれと共に大に注目す可きものがあらうと思ふ、從つて此機會に一言を刻下の支那國權回復問題に加ふるも、誰か無用の業と言ふものがあらう。

二

然らば即ち支那の國權回復問題と言ふのは何か、之には種々な性質のものが含まれて居ることは言ふ迄も無い、彼の租借地問題の如き、駐兵問題の如きも、明かにその一部である、併し目下支那人側で、少くとも今回の上海事件發生以後に現はれた其主張に於て、高調しつゝあるものは何かと言ふと、（一）關税問題、（二）治外法權撤廢問題、（三）租界問題の三者である。

關税問題につきて、支那が國權回復を稱道するに、尤もと言はなければならぬ。今日、支那中央政府の收入として地租收入も、雜税も少しもあてにならず、專ら地方督軍連を潤ほして居る丈けであり、印花税、煙草公賣等も中央政府の收入としては二三百萬元程度だと言ふに於ては同國が一年殆んど一億元に近き收入を見る關税に對し、最も眼を注ぐことは、洵に自然でなければならぬ。之に於ける現在の制限が撤廢され、關税に於ける自主權が回復され得たならば、一はその行惱んで居る內外債の償還問題にも貢獻することが出來やう、又たその國庫缺乏の爲めに官吏の給料さへも仕拂ひ兼ねて居る窮狀をも、幾分救ふことが出來やう、左れば予は此點に於ける支那人の要求の聲が洵に自然なることを思ふものゝ一人である、のみならず何と言つても他の國に於ては自ら自由にその關税を定むる權利が持たれて居り、自己の欲し要求する貨物には税率を低うし、その需要せず、若は社會政策上輸入を欲し無い貨物には税率を高うする如き自由があるのに、支那のみは所謂從價五分の規定に束縛せられねばならず、顧維鈞の言つたやうに、その要する機械類に對し税率を低うし、その希望せぬ卷煙草に對し之を高うすることも出來ず、又た他國と關税上互惠的協定をなす自由も無いとは、國家の體面から見て、默過し難き狀態と言はねばならぬ、斯くの如く考ふるとき、支那人たるもの、誰か支那人が所謂從價五分の法を定めた一八四二年の支那の對英米佛諸條約を憾みとするを怪むものがあらう、尤も數年前に比すると、支那の地位も幾分改善した、それは古い時代の低かつた物價の五分を税率とし、之を高くなつた價格の貨物に課して居た狀態は、一九二二年一月五日ワシントン會議極東委員會の「關税を現實五分とす」その決議に基き一九二二年九月上海の關税委員會で

定め、一昨一九二三年一月から實施した新關稅率で、幾分か救治せられたのであつた、然かも同じ會議で決定した「一般に二分五厘の附加稅を課し、奢侈品に對し五分の附加稅を課す」るの件は、一は佛蘭西が金フラン問題に關聯して對支條約の批准を遲らして居た爲めでもあつたが、今日に至るも一向實現し無いのである、昨（一九二四）年支那政府が提議した豫備會議召集さへも佛國は之が同意を拒んだのであつた、今や漸く佛國との金フラン問題解決成り、同時に列國の關稅會議の實現が可能になつたけれども、支那人民としては矢張り來る可き會議に於て列强が許さんとする二分五厘附加稅、五分奢侈品附加稅の實現を以て滿足す可きものであらう乎、之が收入の使途に關して一々列强の指揮を仰がねばならぬのであらう乎、又た直ちにとは言へぬとしても、寧ろ此稅權の根本的回復こそ支那人が結局翹望せねばならぬ所ではあるまい乎。

予は實に斯くの如き氣持を以て支那の稅權回復運動に對するものである、併し此問題は支那關稅の實際的影響最も大なる可き我國の貿易地位をも含めて、經濟方面の專門家（本誌に執筆せらるゝと聞いて居る）にその研究論議を委する方、寧ろ適當なることを思はねばならない。

依つて予の本論は專ら、所謂治外法權問題及び租界問題に限りたいのである。

三

然らば即ち先づ支那人が攻擊しつゝある同國の治外法權制度は如何なるものである乎、如何なる見地から又理由から彼等は之が撤廢を呼號しつゝあるのである乎、又た列强は如何に之に處す可きであらう乎、

治外法權とは或る人々若くは場所がその存在する國土の法權以外に立つの特權を意味するものである。それ丈けその國土の主權は制限を蒙つて居ると言はねばならぬ、具體的に言ふと、今日多數の文明國ではその領域にあるものに對しては、內國人たると外國人たるとを問はず齊しくその法權の下に立たしめ、罪あれば之を處刑し、之を被告とする民事訴訟も皆なその法廷に提起せしむるを原則として居るのである、然るに治外法權の束縛を受けて居る國では悲しいかな之が出來無い、在留外國人を被告とする訴訟、外國人間に起りたる訴訟等は駐在外國官憲の手に依つて處分せられねばならぬのである、而して此制度は決して支那に始まつたと言ふのでは無い、歐羅巴でも古代にもあれば、中世紀にもあつた、殊に中世紀の制度などを調べて見ると、僧侶連は彼等丈けの特殊の法律で處分せられて居た、猶太

人は別箇の裁判所で處分せられて居た、歐羅巴の自由市は外國の港に在るその市民の爲め特權を獲得して居た、ヴェニス共和國の如き一一九九年にコンスタンチノープルのアレキシウス皇帝と結んだ條約で、ギリシアに在るヴェニス市民の爲め治外法權を獲得したのであつた、一一五四年のヴェニスとピサとの條約、一四四五年のヴェニスとフロレンスとの條約など、皆な治外法權の規定を持つて居る、併し之は今日支那に於ける治外法權制そのものと直ちに比較することはならない、何となれば昔年歐洲に於けるそれは、偏務の規定でなくて双務規定であつた、一方のみがかゝる拘束を蒙るのでは無く、双方共に同じく拘束を受くるのであつた、否なコウ言ふ制度は各種法制甚しく異る双方の國にとりても、其國民にとりても頗る便利なものと思惟せられ、從つて例外としてゞは無く、原則として一般に行はれて居たのであつた、然るに支那のそれは之と異り全然偏務的となつて居る、これ同權につき明確な規定を造つた一八五八年天津條約第十五條以下に照して明かなる所である、

「第十五條　英國臣民間に起りたる所有又は人格上權利に關するすべての問題は英國官吏の裁判權に服從す可し、

第十六條　英國臣民に對し刑法上の罪を犯したる清國臣民は清國法律に從ひ清國官吏によりて逮捕處罰せらる可し、清國に於て罪を犯したる英國臣民は大不列顚國の法律に從ひ領事又はその事に權利を有する他の官吏によりて訊問處罰せらる可し」

而して同條約は斯くの如く在支英人の爲めに自國官憲に依る、裁判の權を確保したに拘らず、在英支那人に同じ權利を許與せる規定は、同條約中何處にも發見せられぬことを忘れてはならぬのである、尤も序でだが在支英人の治外法權は決して之から始まつたのでは無い、一八三四年東印度會社の英國支那貿易管理が廢止せられた時、英國では在廣東英國船上で刑事海事裁判所を開き、英人關係事件を處分する制度を造つたのであつた、然かも支那側から云ふと、明かに之を許與して居たのでは無かつた、一八四二年英支間の江寧條約も同權許與を見なかつた。唯だ一八四三年廣東、厦門、福州、寧波、上海の英國商業に關する一般規定に僅かにその姿を見出した。而して翌一八四四年七月の米支條約では最も明確に米人の治外法權が確保せられたものと言つて善い、その後佛蘭西は一八四四年十月の條約に依り、瑞典及那威は一八四七年に、露西亞は一八五八年に、獨逸は一八六一年に、丁抹は一八六八年に、和蘭は一八六三年に、西班牙は一八六四年に、白耳義は一八六五年に、伊太利は一八六六年に、墺洪國は一八六九年に　秘露は一八七四年に、葡萄

牙は一八八七年に、日本は一八九六年（明治二十九年日清戰爭の講和條約に依りて）に、メキシコは一八九九年に、智利は一九一五年に、瑞西は一九一八年に各々支那との條約に依りて同權を獲得するを得たのである、序でだが、露西亞は十七世紀の後半期に於て支那と尼布楚條約を締結し、之と双互的な、双務的な治外法權制を有して居たのであつた、之はその後十八世紀の二條約で續けられたものであつたが、右一八五八年の條約に至つて支那のみ拘束を受くる偏務的制度が造られたのである、日本は誰も知る如く日清戰爭前に於て同權を有せず、爲めに在支日本人は久しく支那の裁判所で處分せられて居たが、日清戰爭後の講和條約で始めて列國と同じく同權に均霑することとなつたのである。

四

左らば斯くして實現した支那の治外法權制度に對して、支那人は何故に反對の聲を擧げねばならぬ乎、之には種々な理由がある。

第一は矢張り國家の體面論であらねばならぬ、尤も支那人でも最初は之を體面汚辱と考へ及ばなかつたのである。例の支那外交關係の著述家モース氏も言ふて居るやうに、彼等は西洋人（國）を見るに夷狄を以てし「夷狄は禽獸の如きものである、中國人の如き同じ主義で支配せられる可きものでは無い」と考へて居た、コウ言ふ見地からは、外國領事の裁判も體面汚辱とは思はれ無かつた、併しその內、漸次近世の國家思想、主權の思想が高まり、又た此種問題につき他國が如何に考へて居り又たやつて居るかを知ると、彼等は自國內に在る外國人がその法律以外に立ち、即ち自國の主權の行使が制限せられて居るのを憤慨せぬ譯には行かなくなつたのである、第二は、外國人が支那政府若しくは人民に對する義務を怠り、或は罪を犯しても、正當な裁判が行はれ難く、支那國の權威を毀損せらるゝ事例が現はれて來たことである、蓋し支那で外人の裁判をなす領事は行政官であつて法律專門家では無い、のみならず一方に於て在留民保護の役目を持つことゝ、他方に於て裁判官たることは、そこに一大矛盾が含まれて居る、加ふるに領事裁判では充分に證據物を蒐集することも面倒であり、言語、距離其他の關係から支那人の證言も充分には行か無い、往々心ならずも偏頗な裁判が行はれ易いのである、コンナことで王寵惠が言つたやうに「之を護符として納稅義務を免るゝ外國人も少くない」のである、（最も英米兩國では別に裁判所組織を見て居るが、之でも弊害は同しである）以上は支那人側が最も不滿とするところである、然か

ぬ、此外、被告の國如何で適用せらるゝ法律の種類が定まるので、誰か先きに出訴したかと言ふ偶然的事情で、適用法律が定まるの狀態に居ること、狹き開港地の如きに在つて數十の異つた國法が行はれ混雜多きこと、被告にして原告に對する別種の要求あるも同一の法廷で救濟せられ得無いこと、又た今日法律の發達上判決を本として法を造り出すことが大切であるが、右領事裁判の場合には、右判決を下した裁判所以外に、その判例は有効でないので、それが出來無いこと、同じ犯罪につきても非常に刑罰が不確實であること、等、いづれも治外法權制度の缺陷たらざるは無いのである。

併し乍ら予を以て之を見ると、最近支那人の治外法權回復運動が熾烈を極めて來たのは、コウ言ふ治外法權の本來の缺點の爲めでもあるが、それよりも、寧ろ一層支那人の國民的覺醒が猛烈になつた爲めたるを思はねばならぬ、次ぎに最近他の東洋諸國が着々治外法權撤廢の氣運に會したこと、否な支那自身も或部分に於て、成功の實例を見たことにも關係あることを思はねばならぬ、支那人の國民的覺醒は、一は世界大戰後、各民族を通して現はれた同じ精神の發露でもあるが、又は支那に於ける教育の向上、思想界の革新から來たものであり、それは最も多く國民黨やら學生系の運動に反映したところである、而して近く此覺醒から盛んになつた治外法權撤廢運動は、土耳共及び暹羅に於ける同じ問題が採つた一大進運に依つて油を濺がれたのである、何ぞや東洋民族中、地理的に最も歐洲諸國に近い土耳共人は、最も早くから治外法權に惱み同時に最も熱心に之が撤廢を要求したものゝ一であつた、彼等は一八五六年巴里條約で歐洲列强の仲間入りが出來てから引續き之が撤廢を望み、世界大戰より一兩年前にはその司法制度の全部的改革をも企てた、一九一四年九月には同年十月より治外法權制を廢止する通牒を列國に送り、同年十一月土耳共が獨墺側に參戰した後には、獨墺から同制度撤廢を規定する條約を得たのであつた、然かも大戰で土耳共が敗れたので一九二〇年八月セーヴル條約では英佛伊以下列强がその治外法權を許さ無かつた、ところがその後英傑ムスタフア・ケマル・パーシアが希臘軍兵を小亞細亞の野で破碎したので、形勢一變、遂に一昨一九二三年七月二十四日ローザンヌ條約第二十八條に於て

「締約國は各自國に關する限り土耳共國に於ける一切の點に關する治外法權の完全なる撤廢を受諾することを聲明す」

の規定を造るに至つたのである、尤も土耳共は猶ほ五ケ年間丈け戰爭中の中立國より法律顧問を招聘せねばならず、又は外國人の結婚、離婚、後見權其他親族法的事項につきでは該外國

人所屬の國の法廷に依らしむることに讓歩したけれども、それを除けば、彼等は所謂「治外法權の完全なる撤廢」を英佛伊以下にも約諾せしむるを得たのである、

次ぎに暹羅は如何と言ふと、之も久しく治外法權に惱んで居た、ところが之も今や同法權撤廢の氣運に會して居る、即ち英國は一九〇九年之に治外法權撤廢の約をなし、米國は一九二〇年同じ意味の條約を許し、佛國は一九〇七年佛蘭西領亞細亞人に對する同權撤廢の條約を許したが、本年（一九二五年）一月佛蘭西本國人に對する同權撤退の條約を締結したのである、之等が一九一七年暹羅の參戰の結果、一九一九年ヴェルサイユ平和條約で獨墺に同權撤廢を諾せしめたのと相待つて、未だ完全では無いが同國の國權回復を語るものたるや言ふ迄も無い。

土耳其、暹羅、斯くの如くなるに、支那獨り遲延に遲延を重ねて居るでは無い乎、而して之が支那人の自尊心を傷くる大なることは、いかで今更ら喋々の要があらう、殊に支那自身が此間治外法權制排斥に成功して居る實例あるに於て、彼等の決意が愈强くなるのは、洵に當然だと言はねばならぬ、

何ぞや、支那は、南米ボリビア共和國の間に於て、治外法權制を排し得たのである、即ち同國は一九一九年支ボ條約第二條の最惠國條款が「ボリビアが支那に於て治外法權を有するを意味せざる旨交換公文で聲明したのであつた、一九二〇年波斯王國と支那との條約第四條では「在支波斯人が支那の法權に服する」旨を規定したのである、此外、英佛伊と同じく白人たる獨逸墺太利兩國は一九一九年講和條約の結果、支那に於ける治外法權を放棄した、又た露西亞の如きも昨一九二四年五月三十日の露支協約第十條に於て之が放棄を約し、同第六附帶聲明書に於て此點につき規定を進めたのであつた、獨墺露の白人系、同權撤退に大體同意せるに、他の白人系たる英佛伊以下諸國が之を肯んぜぬのが、支那の目に不當と見えたのも、亦た何の無理があらう、かくて燃え出てた國權回復の熱火が、今日の罷業を機として、焦天の姿を現し來つたのも斷じて怪むに足ら無い所である。

五

然らば、支那の此の要求に對し、烈强は如何に處す可きである乎、予の所見によると此際各國が少くとも支那人の希望實現に歩を進むる同情的措置こそ肝要でなければならない、

何故に然る乎、外でも無い、本來治外法權の制度は、近世國家に於ては變則であり、少くともその關係國民が未だ發達せざる狀態に在る間の一時的現象に過ぎぬ筈である、此見地から丈

けでも支那の法權回復には同情せねばならない、ところがその上に英國は一九〇二年英清條約改訂に際し新英清通商條約第十二條に於て清國の司法制度改善に援助を與へ、その法典の狀態運用の方法等の進捗に從ひ治外法權を撤去する用意あることを聲明し、一九〇三年日本及び米國も同樣の約をなしたのである、その後一九一九年巴里講和會議の際、支那代表者は治外法權撤去問題に努力したけれども、何等の効果も收むるを得無かつたが、一九二一年華盛頓會議になると、支那人の熱烈なる努力は、酬ゐられたのであつた、即ち同年十一月二十九日汎米會館の協議で同權撤廢決議案、委員會の可決を經、十二月十日總會議に於て可決せられたのである、その內容は英米日伊佛白葡蘭の各國が一名宛の委員を出して支那治外法權制度の實狀、支那の司法制度及びその運用を調査し同權撤去に適當なる司法上の改正案を立てしむること、支那よりも一委員を出さしむることと等を定めたものであつた、尤も此委員會は一九二二年五月支那の政局面白からぬ爲め、駐米支那公使よりの支那行一年延期希望があつて、未だ實現しては居らぬけれども、斯くの如き態度を執り來つた歴史ある列强としては、宜しく今後步を着々同權撤廢に進むるこそ正當ではあるまい乎、

世上支那の治外法權撤廢を尚早と言ふものが少くない、臨城事件の例、督軍の橫暴の實狀、之等は洵に支那の爲めに悲む可きことには違ひ無い、又た同權の撤去は漸進的であらねばならず、殊に又た支那が一九〇四年法律編訂會を組織して以來民刑法の編輯をなし幾分新式裁判所を諸地に實現せしめつゝあつたけれども、未だ完成して居無いのに照し、急激な希望達成は出來難いことを疑はぬ、然かも予は試みに問ひ度い、「今日の土耳其今日の暹羅と今日の支那とは左迄徑庭あるものだらう乎」「支那は土耳其暹羅程度の法權回復實狀をも許し難いものであらう乎」と、

勿論今日直ちに完全なる法權回復を支那に許すことは六箇敷いに違ひ無い、列强は先づ支那を助けてその新法律を造り上げしめねばならぬのであらう、然かも之が出來たならば、彼のウツドヘツド氏が論述した案のやうに、先づ目下の各國領事裁判に於て從來の自國法適用の代りに法律を適用し、玆に一は支那領土內に於けるその法律の權威を全うし一は狹き地域に雜多の法律の衝突を起し來るを避け、以て支那の支配權回復の第一步を成す如きも研究を値ゐする一案であらう、そうして支那の各地裁判所の完備を待つのも善いかも知れぬ、又た一九二〇年米國及暹羅間の條約に現はれて居るそれのやうに、暹羅の刑法、民法商法、裁判所構成法等諸法典の實施せられた後猶五年

は、原則として米國人を暹羅裁判所下に置くけれども、或る事件に限り之を從前の如く米國領事裁判に附するの權を保有する如きも一案であらう、或は一時的手段として外國人法律顧問を支那側に雇用せしむるのも一案であらう、否な此等ばかりでは無く、種々の案があることを疑は無い、併し孰れにせよ、列強は今日、支那國內に漲る至當な法權回復の要求に對し、國際會議を開催するなり、其他適當なる協議方法に於て同情ある措置を執ることは至當であらねばならぬ、彼の一部に行はるゝ「同盟罷業後、暴行後に現はれた要求だから、將來の訓戒として强壓す可きだ」との說の如きは、暴論の極だ、而して地境、之と隣接し、人種又た相近き我日本に於ては、自ら多年治外法權に苦しんだ歷史にも顧み、他に率先して、隣人の希望實現に助勢するの態度に出でねばならない。

殊に又た此治外法權ある限り、支那としては全國を外人に開放することが六箇敷く、之が撤去が國土開放の機會を造ることは、支那人が度々指摘せる所であり、ウイロ－ビー博士なども高調した通りである、從つて此永久的に見て撤去が外人にとりても有利な點は、是亦た吾人が忘却してならない所ではあるまい乎。

六

治外法權問題は之れ位ゐにして、今から少しく租界問題に言及し度い。

刻下隣國で最も矢釜しくなつて居るのは、此租界に關する國權回復問題である、之は言ふ迄も無く本年五月三十日上海租界英國警官の支那學生射殺事件に會して、勃發したものである、空氣は從前から存した、唯だ之を結晶せしめたものは、實に此度の出來事であつたのである。

然らば先づ現在の租界は如何にして出來たか、如何なるものである乎と言ふと、それは、英支阿片戰爭後に成つた一八四二年英支江寧條約第二條の「清國皇帝陛下は英國臣民を准るしてその家眷を携へて廣東、厦門、福州、寧波、上海の市町に居住し障礙無く通商貿易に從事するを得せしむ且つ女皇陛下は監督官即ち領事官を任命して上記の各市町に居住せしめ、該地方の清國官吏と商人との公文往來の媒介たらしめ」云々の規定と、一八四三年江寧條約追加條款第七條の「永久和親條約は廣東、福州、厦門、寧波、上海の市町に居住する英國臣民及びその家族に對し煩擾拘束無く居住せしむることを規定せり、故に次ぎの如く決定す、即ち地方官吏は領事を通して土地及び家屋を取

除け置く可し」(The ground and houses—shall be set apart by the local officer in communication with the consul")共家賃代價は公平にし且つ平等に按排し人民の間に行はるゝ割合に準して定め孰れよりも强求をなさざる可し建築せられ又は貸與せられたる家屋の數は年々領事により地方官に報告せらる可し地方官は之に依り各自の總督に報告をなす家屋の數は商人の來往に準し多寡ある可きにより、之を制限すること能はず」てふ規定にその根源を發したものだ、ところが此居住地若くは租界には、普通四種ありとせられて居る、第一は一國丈けでやつて居る專管居留地であり、恰かも我日本の天津租界、漢口租界などその例である、第二は數國共にやつて居る共同居留地即ちインターナショナル、セツトルメントであり、上海の共同租界などその例である、此外に第三として支那が任意に設けた外人居留地があり第四として支那の默認の下に現はれた居留地がある、ところが此等の租界が支那の行政下に置かれず地方的自治を始めたのは如何と言ふと、之は諸外國が支那官憲の同意を得て造つた規則にその端を發した、即ち上海居留地に關する一八四五年の取極第十二條は、外國借地人達に石造、木造の橋を建築し、市街道路を掃除し整頓せしめ、街燈を備へ、消防機を置き、番人を雇ふの權利を附與し、一八六六―八年同じく規定を發布したのである、而して之はその後國際條約若くは取極にも現はれて來た、明治三十年蘇州日本居留地取極書、明治三十一年漢口日本居留地取極書同年沙市日本居留地章程、同年天津日本居留地取極書等を檢してもその一端を知り得らるゝのである、併し予は一々之を說明する餘裕は無い、唯だ此間比較的に廣き權利を收めて居るのは、矢張り今回問題となつた上海の共同租界で無くてはならない、

然らば上海の共同租界はドウかと言ふと、上海は一八二四年南京に進擊中の英國軍隊で占領せられ、翌一八四三年外國貿易の爲めに開かれたが、英國官憲は最初蘇州河の南、黃浦口の西に於て外人居留地を選定した。而して初め三箇の居留地を見たが一八六二年佛蘭西のみは專管居留地策を取ると共に、英米兩國の分は合併して共同居留地を造つたのである、此處で今回の射殺事件は起つたのであるが同租界では英人が中心となり米人、日本人が副位に立つて居る、その行政機關として支那語で工部局と呼ぶ「上海市會」即ちミユニシパル、カウンシルがある、之には行政委員九名が中心となつて居り、その內譯は英國人六名、米國人二名、日本人一名から成つて居る、その行政はと言ふと、第一警察事業である、風俗習慣人種宗教言語を異にする二十餘國々民の集合地の風紀を維持し犯罪を防止するので

あるが、目下その警察長始め之が中心は英人から成り、その下に印度人六百、日本人四十、支那人千餘から成る巡査が居る、第二には衛生事業、第三に教育事業、第四義勇隊事務、第五消防事業、第六、土木事業等がある、同時に此租界行政には經費を要するので、租界內に居留する諸外國人及び支那人から地租、家屋税、埠頭税、其他の租税を徵收して居ると記憶する、要するに此租界は支那の領土であり、その主權下に立つには違ひ無くその權限も狹小であり、且つ行政機關であり政治的のものでないのである、併し乍ら、それが何分歐米强國を背景とする丈け、又た度々その權限を濫用する例がある丈け、支那人から見ると、恰かも國中に國を造られて居るの感無きを得ぬのであらう、斯くの如くにして之が國權回復の運動の目的物となつたのも、亦止むを得ぬ所であらう、

七

然らば支那人側が目下租界に對し主張する所は何乎と言ふと、之には三箇あるを見るのである、第一租界に於ける、參政權を支那人に與へらる可きこと、第二、會審衙門に關聯して不當なる外國側の權利擴張があるので、之を除去すること、第三、根本的に租界の回收を期することと是れである、

先づ租界の支那人參政權問題とは外でも無い、目下上海の共同居留地の如きその人口の九割は支那人であり、從つて之が租税負擔高莫大なるにも拘らず、同地の行政權は英米等外國人に限られて、支那人には與へられて居ぬのである。一八六三年北京の列國外交代表者が居留民に與へた訓令を見ると、その第五項には「市政組織」に支那人分子ある可く、支那人居住者に關係する問題につき之が同意を求む可しとの意を述べて居るが、居留地外人は、支那人を參事會に入れぬのである、唯だ支那人商業團體から每年三名の委員を選出して居るけれども、之は單に參事會即ち行政委員の諮問に答ふるの役目に過ぎず、然かも諮問するや否やは外人たる行政委員の腹中にあるのである、租界に於ける、支那人側の主張は此不當なる狀態を一變し、支那人にも選擧權、參政權を與へねばならぬと言ふのである。

次ぎに會審衙門の問題はドウかと言ふと、之は租界問題よりも治外法權問題と共に論ず可きであつたかも知れぬ。唯だ事實上の便宜から玆に說くが 本來の治外法權制に依ると、外國人はその所屬國の裁判所で支那人は支那裁判所で審問せらるゝのであつた。ところが上海租界では新組織が開かれて居る。國際混合裁判所即ち會審衙門がそれである。而して之は活動を正當な國際的のものに止めず、唯だ租界に起つたと言ふ理由を以て

純粹の支那法廷の管轄たる可き支那人丈けの間の事件をも處理して居る、換言すれば支那人間の事件であつてもその判決は支那判官の決定では無く外國官憲の同意を要することとなつて居る是れ豈支那人間の裁判にさへ外人を容喙せしむるの變則な狀態ではあるまい乎、殊に十四年以前の民國革命以後、右の機關は全く領事團の下に置かれて居る、從つて此點に於て支那人が改革を叫び、又た舊狀態回復を主張するのは、誰か權利問題から見て尤もでないと言ふものがあらう、

第三の根本的租界回收の希望はドウかと言ふと、之は一九一九年巴里講和會議の際にも支那全權側が希望した所であつた、それは列强と支那と右返還の協議を開始し、それが協定を見る狀態とならば、五箇年の時日を置いて實現したいと言ふのであつた、之れは（一）租界が國の中に國を造るの狀にあるのを支那人側が嫌惡したのにも依るが、（二）現に一九一七年支那が大戰參加後、天津漢口等の獨墺租界を回收し、又た露西亞の租界をも一時的回收を見たのに照し、之を他に及ぼさんと希望し始めたものであつた、而して此議論が今回の上海租界支那學生射殺事件に會して、高調に進みかけたことは、察するに難くない所である

然らば則ち此問題に對する吾人の所見は如何と言ふに、租界に於ける支那人參政權主張は當然容れらる可きものである。此問題は我日本の天津漢口等租界にも影響なきを得ぬのであらうが、差當り上海共同租界に於てその不公正なる狀態は改められねばならぬと思ふ、又た會審衙門問題も治外法權の協約に鑑み適當なる讓步を以て支那人の希望に副ふのが至當であらうと信ずるのである、若しそれ租界の回收になると、支那の現狀に照し多少年月を要するに違ひ無いけれども、之につきても國際會議等に於て步を進むることは、自然の進行だと言はねばならぬ、

世人動もすれば言ふ、英國は頑强だと、然り予も此點を認めぬでは無い、併し乍ら英人は又た能く大勢を見る民族であり急激な變化に同意せぬにしても、進路の方向を誤らぬ長所がある、それは往路の曲折があるにしても或程度に於て結局その對支政策に反映せぬ譯にはいかぬであらう、從つて東洋の隣邦日本としては、此問題に於ても支那民の心理を了解し、之に副ふの方途に出でねばならぬと、予は考へつゝある一人である。

對支列國借款の由來と其現狀

木村増太郎

支那の財政は、清朝の末年以來漸次紊亂し、國庫窮乏の慘狀日一日と甚しきを加へ、今や一大危機に瀕せるは、周知の事實である。之が爲めに一時は列強の熾烈なる利權爭奪をも招致し、其結果遂には將に國際俎上に於て分割せられんとするの形勢を馴致するに至り、近年は復た國際間に共同管理せられんとするの氣運をすら形成することゝなり、斯の如くにして支那財政の紊亂窮乏は絕へず東亞の平和を脅かす根源となつて居る。蓋し支那の財政が、斯る悲運に陷つたに付ては、其財政組織の根本に幾多の缺陷が存在して居ることにも原因するが一面無方針無定見に濫興した外債に累せられた點も決して小なりとせない。一體支那が內外債を起して、國家經費の支辨を公債政策に依るに至つたことは、未だ日淺く、僅に二三十年來の事に過ぎないが、其政策に何等の定見なく、遂には所謂借款の爲めに借款を重ねざるを得ざるに至つた爲め、今や殆ど拾收し難き深淵に陷るに至つたものたるを失はない。即ち列國の對支借款が、支那の財政にいかなる影響を與へたかは、以下叙ぶる所の借款の由來に依つて明かに看取することが出來るであらう。

一

凡そ前清の世に在ては、刑を嚴にし、賦を輕くして民に臨み、民をして其の威に畏れ、其の德に懷かしむるの策を採つたと共に、他方何等積極的政治を施すことがなかつたが爲めに、康熙、雍正、乾隆年間に在つては、比較的財政豐かであつて、國庫に常に餘裕を貯へたが、其後嘉慶、道光年間以後に至つては、紀綱漸く弛み、憂患相繼いで起り、國用凋渇し、爲に遂に外債を起すの已むなきに至つた。即ち十數年間に亘つて中部支那に猖威を逞うしたる長髮賊の亂は、同治の初年に及んで漸く平定したけれども、次で河南に捻匪の亂が起り、更に之と前後して甘肅、伊犁地方に回教徒の叛亂が起り、同治四年（一八六五年）之が討伐に際し、露國より軍器、彈藥及び糧食等を借入れ、

遂に外債を起すの濫觴を成すに至つた。其の後更に續いて、或は叛徒の討伐の爲め、或は海軍創興の爲め、若くは中央財政の窮乏を救はんが爲めに、英、獨より光緒十三年（一八八七年）に至る迄の二十二年間に於て、外資を借入るゝことゝ合計六百八十四萬九千八百八十磅に及んだ。然れども此等の外債は何れも期限短かく、而も爾後、內憂外患の起ることがなかつた爲め、唯々僅に英の七十餘萬兩、獨の二百萬兩を殘すの外、他は悉く光緒二十年前後迄に償還することが出來、未た財政上の累を爲すに至らなかつたのみならず、兎に角財政自給の地位を保持するを得、當時の海關收入は毎年二千萬兩を超え、歲入平均約八千三百五十萬兩、歲出約七千七百五十萬兩であつて、毎年五百九十萬兩の剩餘を示し、淸朝三百年を通じて最も國帑の裕なりし時期であつたと言はれる。

然るに光緒二十年日支干戈を交ゆるに至つてより、爰に財政擾亂の端を啓くことゝなり、遂に淸朝に及ぶ可らざるの悔を遺すの因を爲すに至つた。即ち同戰役の勃發するや、淸朝政府は軍費を得んが爲めに、各國內債の形式を模倣して、昭信票なるもゝの發行を企てたが、當時商民は未だ公債の何たるかを知らず、全く失敗に終つた爲めに、軍費は之を外債に求めざるを得ざるに至り、更に戰役の結果は二億兩の償金を支拂はざるを得ざることゝなり、是れ亦外債に頼るの外なきに至つた。之が爲めに支那は、遂に關稅を擔保として五千四百四十五萬五千磅の巨額の外債を負擔し、爾後毎年償還すべき外債の元利は二千五百十八萬五千兩を算することゝなり、當時の關稅收入平均二千二百萬兩內外の全部を充用するも尙ほ足らず、八千八百萬兩の歲入に對して、歲出は俄然一億兩を越え、玆に全く歲出入の均衡を失ふに至つた。

斯の如くにして、中央政府の負擔は大に重きを加へたのみならず、政府の威信また昔日の如くならず、延いて爾後、新に列强の利權爭奪を誘致することゝなつた。其の結果、次で光緒二十六年（一九〇〇年）義和團事件なるもの突發し、日淸役の深痛の未だ癒えざるに、更に支那の財政を瀕死の窮境に陥ることゝなつたのは、寔に是非もなき次第である。支那の負擔は、團匪の賠償一項にて既に四億五千萬兩に上り、毎年約二千二百萬兩を分償することゝなつた爲め、舊債と合算して、毎年の外債償還額は今や四千七百萬兩の巨額に達するに至つた。斯の如くにして支那政府は、建國以來未曾有の大負擔を加ふるに至つたから、一面、只管經費の節減、收入の增加を策すると共に、他面、賠償金は之を各省に夫々分擔せしむることゝした。然れども、當時中央及び各省は、何れも新政の勵行に力め、之が爲め警察及

教育經費の如き多額を要し、支出の膨脹は獨り敢て中央に限らなかつたから、各省の中央に對する貢賦も意の如くならず、加ふるに列國に對する賠償金は、金貨を以て元利を支拂はねばならぬ定めであつたが、不幸にして爾後銀價は年を逐ふて下落した爲めに、其の結果支那の負擔は益々重きを加ふるに至つた。之が爲め、復もや外債を起さざるを得ざるに至り、更に英國より一百萬磅を借入るゝことゝなつた。團匪事件以來今や既に二十年を閲するも、尚ほ未償還元金は一九二二年末に於て五千七百五十餘萬磅內外に迨び、將來の負擔尚ほ決して輕からず、年四分の利子は重なつて、遂に元利一億四千二百萬磅の巨額となる計算である。

斯の如くにして、實に內憂外患交々相迫るの狀態を呈したが爲めに、爰に政治革新の議沸然として起り、遂に立憲豫備の擧となり、中央官制の改革を企つると共に、多年の積弊を除去して財政の根本的釐革を企圖するに至つた。然れども、積年の宿弊は到底一朝にして一掃す可くも非ず。每年の歲出は光緒の末年に至つては已に二億兩を超え、宣統に入つては二億七千萬兩に上り、遂に同三年には三億兩に達するに至つたが、地方の送銀は之に伴はず、中央の難愈々極まるに至つた。爲めに政府は、已むなく當時列國の利權爭奪に熱中せしを利用し、各種の經濟借款を起し、之が流用に依つて以て纔に財政の補救を圖らざるを得ざる狀態であつた。彼の滬寧鐵道借款(二百九十六萬磅)、道清鐵道借款(七十萬磅)、粵漢鐵道借款(百十萬磅)、廣九鐵道借款(百五十萬磅)、津浦鐵道借款(第一次五百萬磅)、滬杭鐵道借款(百五十萬磅)、京漢鐵道英佛借款(五百萬磅)、等の相繼いで成立せしも、主として此の時代(自一九〇四年至一九〇八年)で在る。

斯の如く、財政の紊亂甚しきに至つては、遂に清朝滅亡の已むなきに至るは數の免れざる所であつて、一たび革命旗武漢に翻り、各省相繼で獨立せるも、中央は國庫固より已に虧しく、且つ列國は中立を嚴守して外債を起すに由なく、末年に米國の斡旋に依つて米、英、獨、佛との間に成立した幣制實業借款も、資金の交付停止せられ、已むなく政府は愛國公債三千萬元を發行したが、應募者極めて少なく、清朝の威信全く地に墜ち、人心渙散して政令行はれず、遂に宣統帝退位の已なきに至つた。

二

叙上の如くにして清朝の末年には、每年の歲入不足額六七千萬兩に達したが、斯る財政狀態を繼承したる革命政府は、一九

一一年十月の事變勃發以來、各省よりの送銀殆ど杜絕せしに加へ、軍隊の解散、其の他の臨時急を要するの失費頗る多く、且つ經常的歲出に於ても、南北八十箇師團の費用每月八九百萬兩に上るを始めとし、從來に比し增加した經費は約一億五六千萬兩に及ぶと稱せられ、更に財政上一層の窮乏を告ぐるに至つた。斯くて中央の財政は、一に全く外債に倚るの外他に途なきこととなり、列國も亦た競ふて支那に資を貸し、大に爲すあらんとするに至り、其の結果、爾後各種の借款雜然として相繼いで起るに至つた。

卽ち政府は當初淸朝の末年に成立した幣制實業借款を改訂し、之に依つて大借款を起さんことを策し、米英獨佛の四國銀行團も亦た支那外債を一手に獨占せんことを圖り、幾多の折衝を重ねたが、議容易に成らず、其の間支那政府は、一面銀行團に對する牽制策として、白耳義借款（總額一千萬磅、前渡金百二十五萬磅）及びクリスプ借款（總額一千萬磅、前渡金五百萬磅）を成立せしむると共に、他方政費の急需に充んが爲め、各種の零細なる小借款を起したが、眼前の政費は依然として窮乏せるのみならず、匪亂賠償外債等の、革命亂の起つてより以來、未拂のものが頗る多く、政府の困厄は銀行團に賴り大借款を起すの外なく、銀行團も其の後、日露兩國を加へて國際財團を組織し（一九一三年三月米國が脫退して五國團となつた）、支那財政補救の政治借款に應ぜんとの議を定むるに至つたから、兩者の交涉繼續せられ、幾多の波瀾曲折を經て、漸く一九一三年四月に至り、二千五百萬磅の所謂善後五厘金幣借款なるものが、五國借款團との間に成立するに至つた。而して本借款は、其使途が五國團の監督を受くることゝなり、從來列强の支那內政に干涉するの例を起すものとして、支那の最も欲せなかつた所を遂に實行するに至り、愈々各國の支那財政監理の端を啓くことゝなつた。而も本借款の負擔は、支那にとりては決して輕くなく、償還期限たる四十七年間の利子のみでも、積つて四千二百八十五萬磅餘となる勘定で、結局期限內に支那の支拂ふ可き元利は、實に六億八千萬元の巨額に及ぶ可き計算である。

斯の如くにして巨額の外債を借入れて、彼白耳義借款及び幣制實業借款の前渡金を始め、零細なる小借款の一半を償却し、錯綜せし地方、中央幾多の借款を稍々整理し得たけれども、實收額より借款契約規定の支出を控除したならば、中央の行政費に充て得べき額は、僅に四百五十餘萬磅に過ぎない有樣であつて、以て漸く一時の窮境を凌ぐに足るのみであつた。隨つて支那の財政上の地位は、何等借款成立前と異なることなく、依然政府の財政は窮乏の域を脫することが出來なかつた爲めに、政

府は續て復もや幾多の小借欵を起し、或は各種の經濟借欵を成立せしめて之を流用する等、姑息なる彌縫を借欵に恃むの已むなきに至つた。彼の海蘭・同成・浦信・沙興・欽渝・寧湘等の諸鐵道借欵契約の成立したるも、實に此時代である。併し夫れでも、民國三四年は、袁世凱大權を獨攬し、聽吏唯々其の命を奉じて、中央納入稅欵の截留を敢てするものが少なかつたから、大なる破綻を暴露することなく彌縫するを得たが、一たび袁氏の帝制を企つるに及んでは、財政と施設とは漸く正軌を失ひ、殊に袁氏の倒れてより後は、海内割據の表象顯はれ、更に財政の紊亂を其の極に達せしむるに至つた。

袁氏沒落後の北京政府は、袁氏の威望と手腕なくして、累年の歲入缺陷を塡補すると共に、第三革命亂に依つて生じた損害を救濟せねばならぬことゝなつた爲め、遂に復たもや民國五年九月、獨逸を除いた四國銀行團に對し、一億元の續善後大借欵を提議するに至つた。然るに歐州戰爭の前途測り難きと、適當なる擔保の發見せられなかつたとに因つて、議容易に決せなかつたから、各種の短期借欵に依り一時を凌ぐの外なかつたが、漸く翌年に至つて續善後借欵中より、支那政府の必要額を前貸することゝなり、財團會議の結果、我國單獨にて之を引受くることに決し、結局前後三回に別ちて三千萬圓を貸與するに至つた。併し、當時外債元利の延滯せるものが累積して、長期外債のみですら四千萬元を越ゆるの狀態であつたから、引續き借欵の必要に迫られ、而も當時我國にては極力段祺瑞內閣を支持して、以て支那の統一を促進せしめんとの策を立てた爲めに、茲に我國との間に幾多の借欵の成立を見るに至つた。世上西原借欵と稱するものが之であつて、總計一億四千三百萬圓餘に達した。

當時の支那の財政は、支那が歐洲戰爭に參加した結果、團匪賠償金の支拂ひが五ヶ年間延期せられ、其間每年一千九百萬兩餘の負擔を減じ、且つ獨、墺に對する債務約五千萬元を解除して支出を輕減し、加ふるに鹽、關兩稅の收入は未曾有の巨額に達し、實に民國以來例のない大福時代で、時正に財政整理の絕好の機會であつた。然るに爲政者は、毫も爰に顧及する所なく、反つて私黨を樹んで政爭に沒頭し、我國よりの借欵も大半之に費消し、爲に軍費は妄に增加し、一般支出も亦た昔日の比ではなく、益々財政を救ふ可からざる紊亂の域に陷しいるゝに至つたのは、寔に是非もなき次第である。外國よりの政治借欵は、民國七年十二月に、在北京五國公使が會議の上、支那の國內の統一を見る迄は、相互に相戒めて有ゆる政治借欵に應ぜざる可きを申合せて以來、民國八年末に米國太平洋與業會社との間に、

米貨五百五十萬弗の所謂烟酒借款の成立したると、九年に銀行團との間に一時的應急政費として七百萬元、北支那饑饉救濟費として四百萬元の借款の成立した外、十年一月に米國の提議に基いて成立した新借款團を支那が認めないのと、各國も又、借款は反つて支那の紛爭を助成せしむるに過ぎざるを實見した干係上、之に應ぜざるより、短期借入金以外、全く杜絶するに至つた。爲めに爾來支那の財政は、或は中國、交通兩銀行又は民間よりの一時借入金、若くは短期內外債、或は國庫債券の濫發等に依つて、纔に其の日を彌縫苟安せるの情態である。

三

以上は謂所政治的借款の經過の大要であるが、其外從來支那が列強の利權爭奪の渦中に投ぜられた爲め、幾多の所謂經濟借款成立を見たのである。而して經濟借款中主なるものは鐵道借款である。蓋し二十七八年戰爭後、支那の積弱が天下に暴露せられて一時支那は列強の經濟的帝國主義實行の目標となつた結果、各國は競ふて鐵道布設、鑛山採掘、財政借款等の利權爭奪に熱中することゝなれり、殊に鐵道の布設は、直接各國の勢力を扶植する捷徑であるが爲めに、勢ひ支那が投資の目標たるに至つたのである。其結果、將さに支那の領土分割の端も開かんとするの形勢をすら示すに至つたが、其後熱烈なる支那の利權回收運動を喚起し、列國管理の鐵道も漸を追ふて回收せられ、日本の南滿、露國の東淸、佛國の滇越、獨逸の山東、英國の廣九の五線を除いては、復た外國租辨の鐵道なく、漸く列強の禍心を防遏することが出來た。然るに一たび革命事變の起つて以來は國內の騷亂が絕ゆることなく、加ふるに政府財政の窮乏定に甚しく、殆ど借款の種類、性質を選ぶ暇なく苟くも之に應ずるものがあつたならば、借入れんとする情態に在つたが爲めに、爰に更に列國の利權爭奪を促すことゝなり、各國は競ふて所謂勢力範圍なるものを擴張し、こゝに鐵道を布設して、互に後れざらんことを厭るゝの勢を示し、復もや支那は國際俎上に爪分せられんとするの氣運を馴致するに至つた。殊に鐵道利權の爭奪は、五國借款團が經濟借款を除外して各國の自由たる可きことゝ爲してより、一層甚しきを加ふるに至つた。其結果、英國は多年の劃策たる支那の中心から緬甸、印度を經て、歐洲に達する世界大交通路の實權を掌握すると共に、他方極東經濟の策源地たる香港、上海を根據として支那の中原に到る鐵道を布設し、中部以南の經濟を左右せんとの大雄圖の實現を企て、從來投資關係を有する京奉（北京・奉天）京漢（北京・漢口）粵漢（廣東・漢口）滬寧（北京・南京）滬杭甬（上海・杭州・寧波）津

浦（天津・浦口）等の諸鐵道の外、更に寧湘（南京・長沙）浦信（浦口・信揚州）沙興（沙布・興義）の各鐵道布設に關與するに至つた。露國は又た、一面西比利亞鐵道を延長して蒙古を縱斷し、山西、陝西、河南、江蘇の大富源を横ぎつて揚子江頭に出で、以て多年渴望せる極東に於ける不凍港を建設し、且つ之に依つて揚子江以北を囊括せんとの大野心を現し、之と策應して同盟國たる佛國は、其領域たる印度支那を根據とし、或は廣西、廣東に、或は雲南、貴州、四川に出で、以て支那の中部に於て露と握手せんことを企て、之が爲めに兩國は、白耳義なる小國を表面に立て、其黑幕となつて隴秦豫海（一名海蘭鐵道と稱し、江蘇省海州より甘肅省蘭州に至る）及び同成（大同府成都）の二大鐵道布設を計劃し佛國は又た、欽渝（欽州・重慶）鐵道に關する利權を獲得するに至つた。於是乎獨逸も亦た、之に讓ることなく、其極東經營の根據地たる青島を基點として、山東、津浦兩鐵道の外、順濟・高徐（順德府・濟南間・高密・徐州間）の二線を約し、山東を中心として、直隸・河南を始め安徽・江蘇の北半を其勢力圈内に包擁せんことを企つることゝなり、次いで米國も遂に叙上列強の劃策を默視することが出來ず、或は江蘇の一部に、或は山西、甘肅に、或は湖南、廣西、浙江及び廣東に夫々鐵道布設を提議し、勢力の扶植を圖らんとするに至り、我國亦た滿蒙五鐵道と稱せらるゝ長春・洮南線、洮南・熱河線、開原、海龍線、海龍吉林線及び四平街洮南線を獲得することゝなり、列國の暗中飛躍は、實に前代未だ見ざる狀を呈した。併し其の後歐洲大戰の勃發に基く國際間の變動に因り列國の企劃は多く挫折し、各國自ら經營せし租辨鐵道すらも、山東及び東淸の兩鐵道は支那に回收せられたと共に、米國の策略に伴ふ新借款團の成立は、各國の借款を協調的ならしむることゝなり、爰に漸く列強の覬覦を防ぐを得るに至つた。然れども國際間の干係は、未だ遽に將來を測ることが出來ないのみならず、殊に他方支那財政の紊亂窮乏は今や殆んど其極に達し、既成の借款並に前渡金の如きは、元利の支拂殆ど停頓せるの有樣であるが爲めに、動もすれば列國の鐵道共管說など提唱せられ、東亞の風雲は依然として險惡なる域を脫するを得ない。

四

支那の近年の財政狀態は、上來叙ぶる如く殆ど借款に依つて支持せられ來つたものであるが爲め、今や内外債にして未償還のものは、大約二億七八千萬磅に上り、其内特に外債は一億磅を超ゆる狀勢である。勿論支那の借款は、貨幣の種類が區々であると共に、其財政は從來公開せらるゝことなく、從て秘密の

裡に成立せし借款も少なくないから、嚴密に其總額を計上することは頗る難事たるを免れない。現に財政部及交通部の發表せし數字の如きも、多少疑はしき點なきに非ざるも、近年發表の統計は左の額を示して居る。

政治借款(財政部關係)	
擔保確實なる外債	九九二、六八四、五七五・四二元
擔保不確實及無擔保外債	二二〇、九三一、二五一・八一
滿期後償還せざる獨逸外債	二、二三二、〇五六・七五
同上　墺國外債	三四、一三〇、五一六・二六
合計	一、二四九、九七七、四〇〇・二四
擔保確實なる內債	三〇四、四〇九、五九二・〇〇
擔保不確實及無擔保內債	三四、四〇〇、〇〇〇・〇〇
各機關經費として發給せる國庫券	三三、七六七、五八一・六八
各銀行商店の短期借款	四〇、八九〇、一八五・七〇
九六公債償還の殘額	二三、五〇三、九四〇・四二
合計	四三六、九七一、三〇九・八〇
內外債合計	一、六八六、九四八、七一〇・〇四
經濟借款(交通部關係)	
長期鐵路外債	二九四、六〇八、九四四・八三
短期鐵路外債	一七九、九二八、五六一・三〇
電政外債	四〇、七四二、五九六・二六
合計	五一五、二八九、一〇二・三九
各銀行短期借款	二、五七九、〇四五・二七
各銀行墊款	七〇六、九三八・〇三
內國公債	一六、一九三、五五〇・〇〇
贖路內債	三九、〇〇八、〇〇〇・六八
支付券	一一、三二〇、〇〇〇・〇〇
合計	七九、八〇七、五三三・九八
內外債合計	五九五、〇八七、六三六・三七
支那內外債總計	二、二八二、〇三六、三四六・四一

上表中財政部干係の政治借款は、十一年九月末、交通部干係の經濟借款は、同年十二月末の現狀を示したものであつて、當時已に內外債總額二十二億八千二百萬元に上れるが、其後本統計の少額に失することが各方面より指摘せらるゝに至つたと共に、如上の負債も擔保の特に確實なるものを除いては、何れも元利の支拂が今に停頓せる有樣であるから、恐らく現在に於いて內外債總額は、少なくも二十六億元を下ることはないであらう。而して其中外債は二十億を超え、而かも外債中に在ても、擔保の不確實なるか若くは無擔保なるが爲めに、近年全く元利の支拂停頓せるは、政治借款に於て六億を超え、經濟借款に於

て復た一億を下らない狀勢であつて、如上の政治借款の如きも十七口に亘る零細なる多數借款を網羅したものである。

斯の如く支那財政の紊亂窮乏は、延ゐて內外債をも紛糾せしむるに至つたが爲めに、曩年の華府會議に於て列國より承認せられた關稅附加稅の徵收が、早晚開かる可き各國の關稅會議に於て決定せらる可き筈であるから、先づ此增收に依て如上の錯雜した借款の整理を爲さんとの議が、頃來內外に於て高調せらるゝに至つた次第である。然るに他方又叙上の確實に元利の支拂を受けつゝある外債は、何れも外人の管理せる關稅及鹽稅收入を擔保とせるものゝみであつて、無擔保債務も關稅增收を以て整理することゝせば、將來の元利支拂は正しく確保せらるゝに相違なからうが、併し斯の如きは偶々支那自身に財政運用の能力なきを實證するものであつて、到底支那の自力を以てしては、遂に回運の見込のないことは瞭かであるから、支那の財政は寧ろ進んで國際間の共管に委するに如かずとの議論までも現はるゝに至つたのである。今爰に此等の議論に就て批判するは本稿の目的とする所でないから、他日の機會に之を讓るも、唯爰に識者の一考を促したいことは、次の諸點である。即ち從來列强の支那に對する借款は、假令其目的が、財政の補救であつても、將た又國內の統一を助成せしめんとの眞摯に支那の爲めを計つたものであつても、其結果たるや、唯徒らに政界の混亂腐敗を助長し、益々財政を紊亂せしめたのみで、財政の改善乃至政界の革新には寸効をも寄與する所のなかつたことは、上來叙ふる所の借款の經過に徵して知らるゝ所である。而して又世人は往々支那を衰亡に導くものは、其財政の窮乏であるから、支那を救はんとすれば、先づ其國庫收入を豐富ならしめねばならぬと論じ、而して其歲入の財源としては、關稅の如く確實なるものは他に無いと共に、其國情並に財政組織に照して、其歲入の多くを一般文明國同樣の財源に求むることは至難であるから、關稅の增徵は已むを得ないと主張するのである。去りながら支那財政の困窮を救はんが爲めには、關稅の增徵が最も適切であるとの故を以て、主として本收入のみに信賴したならば、如何に增稅するも殆ど究極する所がないのみならず、其結果列國就中我邦の貿易に至大の影響を與ふると共に、支那の經濟の發達にも、必ずしも有利とのみ斷ずるを得ない。又國際共管は之が圓滿なる實行に多大の困難が伴ふのみならず、其結果却て支那の自發自奮を妨ぐる惧あるを免れない。從て寧ろ支那の財政を危殆に導いた其根源に向つて、革新の斧鉞を容るゝことが最大の要務たるを失はない。(了)

國際關係の現狀に對する支那人の不平と要求

米内山庸夫

一、民衆勢力の擡頭と中央政府の無力

（一）

最近支那に於て最も著しく顯はれて來た現象は、民衆勢力の增大と、中央政府の權威の失墜である。

段祺瑞氏が各省の推戴に依つて、臨時執政に就任したけれども、而もこれを推戴したものは、主として所謂軍閥であり、一般民衆には殆ど關係はない。その軍閥と雖、將來これに服從すべき意思を以て、心から推戴したものでなく、唯だ當時、奉直戰爭に際して、誰もかも行き詰り、この際、段氏をして一時時局を收拾せしむることを便利と考へて、これを推戴したに過ぎないのである。だから現在各地に割據する軍閥とても、眞實に段氏の味方ではないのである。殊に口喧ましい政客、民衆を向ふに廻して、段祺瑞氏が、統治者として立つ上に、何等法律的根據を持たないと云ふことは、段氏にとつて多大の弱味である。尤も段氏は、その出處の宣言に於て、第一に善後會議を開き、第二に國民代表會議を開き、民意に基づいて國家の根本法を定めんことを主張して居るけれども、その第一の善後會議に於て已に、民衆の上に多大の勢力を持つて居る國民黨と分離し、その決定に依る國民代表會議にも、國民黨を羅致し得ない結果になつたことは、その國民黨が民衆の上に多大の勢力を持つて居る點から見て、これは段氏の重大な失敗である。將來內政外交上の幾多の障碍は、こゝから萌芽して來るのであらう。

（二）

國民黨はその政黨として成立の當初から、一般民衆の上に基礎を置いた。その前身たる同盟會時代に於ては、清朝の壓迫の下に、民間に辛じて僅かの同志を求めて、革命を企てゝ居たのである。民國元年愈々清朝を倒し、共和國建設に成功したが、併し國民黨はその新共和國の政權を手に入れることが出來なかつた。實權は北洋軍閥を結束して立つた袁世凱に握られた。云

はゞ袁世凱は、清朝と革命黨とを巧に操縱して、自ら天下を取つたものである。共和國とはなつたけれども、袁世凱統治の下では、民主政治は何等行はれなかつた。袁世凱死し、黎元洪代り、馮國璋となり、徐世昌、段祺瑞となつても、依然同樣であつた。故に孫文氏は死ぬまで「革命未だ成らず」と叫んだ。

孫文氏は幾度も軍閥に反抗して、眞の革命を企てたけれども、結局は軍閥の實力の下に壓迫せられざるを得なかつた。武力では到底敵はないと知つた孫文氏は、夙に民衆の上に眼を注いだ。殊に第二の國民たるべき學生の指導に努めた。そうして國內政治に關しては常に軍閥に壓せられがちの國民黨は、軍閥の手の屆かない外交問題に力を入れ、折しも巴里會議以來、世界に起つて來た民族自決主義を取り來つて、國權恢復の運動を起した。膠州灣還附の運動を起し、二十一ケ條の廢止を叫び、更に支那民族の解放を高調し、一切の不平等條約を悉く廢止して、相互平等主義の下に新に條約を締結すべきことを主張した。

巴里會議に於て、帝國主義の時代已に去り、民族民主主義の澎湃として起つて來たのを見、更に華盛頓會議に於て、列國の支那に對する態度の著しく變化したことを看取し、同會議の結果、在支外國郵便局を撤廢せしめ、外國軍隊を撤退せしめ、また同會議に關聯して、膠州灣租借地及山東鐵道を回收し、更にこれと前後して、獨逸と相互平等の條約を締結し、またソヴィエット露國は、從來露西亞帝國時代の一切の特權を抛棄し、新に平等の基礎を以て條約を締結した。

かくの如く世界の大勢、列國の支那に對する態度の變化を見、且つ獨露諸國と條約改訂に成功した支那は、この機逸すべからずとなし、國權恢復、不平等條約廢止の聲は、單に國民黨のみならず、已に國民一般の輿論となつたのである。

(三)

支那の現狀は、これを概觀すれば、軍閥と民衆との二勢力對峙の狀況である。段祺瑞氏は軍閥を基礎として立つては居るが、これも擁戴せられ利用せられて居ると云ふ程度に過ぎず、それ自身に於て殆ど何等の實力も持たず、また軍閥と結束してこれを動かす力もない。これに對して民衆は政治的社會的に漸次勢力を增大してきて居るのである。段祺瑞氏はこの民衆の上に何等の基礎を持つて居ないのみならず、その民衆に多大の勢力を持つて居る國民黨と相反對の立場にあるのである。最近の民衆勢力の增大には、武力の上に多くの力を持つて居る軍閥も、これを何うともすることが出來ない。況んや微力なる段祺瑞の中央政府に於てをやである。

現在民衆の標榜して居る目的は二つある。一は國內に對する、反軍閥、二は外國に對する反帝國主義である。前者は軍閥を倒して眞の民衆政治を行はんとするものであり、後者は所謂國權恢復、不平等條約廢止の運動となつて表はれて居るのである。

從來國民黨は一軍閥と結んで他の一軍閥を倒す所謂軍閥の蟲潰政策を用ひ、時には相當成功したことがあるけれども、然し軍閥は自身存亡の分れるところとなれば、死物狂になつて民衆に當るから、武力なき民衆を以てしては、軍閥を倒すことは容易でない。故に現在に於ては專ら力を第二の對外運動に注いで居るのである。國權恢復と云ふことは、この運動を喜ばぬものも、表面にこれに反對する理由を見出だすことを得ず、また軍閥自身の利害にも、左程直接關係を有するものでないから、軍閥もこれに對しては、澁々ながら民衆と聲を共にするを常とするのである。若し政府や軍閥がこれに反對せんか、これを機會として、反政府反軍閥の聲が、強く合理化せられ、猛然と起つて來るのである。そうして政府や軍閥の立場が甚だ困難となり、時には當局者が賣國奴として生命の危險さへ招くに至るを常とするのである。だから對外問題の關する限り、政府も軍閥も、民衆の聲に反對し得ず、また反對せざるを得策とするのである。かうして無力な政府は、對外問題に對しては、民衆に引摺られて行くのである。

二、排外運動と對內政策

（一）

今回支那全國に蔓延しつゝある支那人の行動は、外國人は多くこれを排外運動なりとなし、支那人は排外運動ではない、單に英國人の慘虐無道に對するものであると云ふて居る。然し支那人一般の空氣は、本件を單に上海工部局の英國警察官が支那人を殺した南京路事件としてのみ取扱はず、その根本に溯ぼつて、今回の事件は支那に於ける列國との不平等關係の存在が根本の原因であるから、この根本の原因を去らなければ、今回の如き事件は仍ほ幾度も發生するであらうとなし、その不平等條約の廢止を叫び、これを最後の目的として進んで居るのであるから、例へ現在單に英國または日英兩國を目標として運動を起して居るとしても、これは第一步であり、結局は一般列國に對する排外運動となるべき性質のものである。殊に今回の事件に關し、日本を切り離し、或は一部支那人の唱へる如く日本と連絡して、單に英國にのみ當るべしなどと云ふのは、支那人得意の外交手段である。昨年の奉直戰爭に際し、張作霖が馮玉祥と

吳佩孚から離して、吳を倒したと異工同曲の手段である。支那人の巧妙な作戰である。排外的虱潰政策である。英國がやられた後、次にやられるものは必ず日本である。尤も排外の意義及理由に關しては後節に述ぶる通り、私は支那人の主張に同情と好意とを有するものであるが、こゝには今回の運動は現在支那人が宣傳して居る樣な單に英國にのみ當らんとするものでなく、このまゝ進めば結局は一般的排外運動となる性質のものであると云ふことを卒直に述べて置きたい。

(二)

今回の運動は、現在表面に顯はれて居る點より見れば、對外運動であることは何人も認むるところがあるが、併し更に本件の發生及經過を仔細に見れば、この運動は決して單に對外的と云ふ樣な單純なものではなく、外にもつと複雜な事象が窺はれる。即ち表面對外的であると同時に、裏面に於ては內政的運動たる性質をも相當持つて居るのである。而して一面に於ては政治的運動であり、他面に於ては思想的社會的運動である。

これを政治的に見れば一部の在野政黨、不平政客の局面轉換策であり、對軍閥政策の第一步と見られる。國民黨派の人々は軍閥の跋扈止むなきは、帝國主義列國がこれを援助するためである、故に軍閥を倒すには先づ列國の帝國主義を排しなければならないと云ふことを常に口にして居た。今やその時機が來たのである。今回の運動が支那人に有利に進捗し、列國の帝國主義排除に成功した曉には、その次に來るべき支那民衆の運動は國內の軍閥を倒すことである。そうして何等かの新國家を建設すると云ふことである。國民黨または一般民衆の今日の勢力を以てしては、例令近年非常に增大したとしても、仍ほ國內の軍閥を倒すことは容易でない。下手に軍閥反對の運動を起せば、軍閥の直接利害、生死存亡の關するところ、或は却つて軍閥のために日茶苦茶にやらるゝかも知れない。だから表面軍閥反對の行動を起すことは暫く擱き、軍閥の利害に直接關係せず、また軍閥も反對の口實を見出し得ない對外運動に火の手を擧げて、これを機會に民衆の間に益々勢力を擴張し或はその間に武力を有するものとも結んで、最后には軍閥の虱潰しをやらうとするものである。若し今回の對外運動が不成功に終り、その結果、支那が却つて困難な狀態に陷つたとするも、その責任は政府の負ふものであり、苦境に陷いるものは中央政府であり、軍閥である。かう云ふ外患甚しい時には、內部の革命は得て起し易いものである。何れにしても在野政黨、在野政客に取つては、國權恢復と云へば名も美であり、利あつて損のないものである。

そこに政治的性質の機微なるものが窺はれる。

（三）

次に思想的に之を見ると、第一には云ふまでもなく、世界に對する民族解放の要求である。われに自由を與へよ、われに平等の待遇を與へよ。今回の運動の表面に顯はれて居る要求はこれである。巴里會議以來、漸次起つて來た虐げられて居た弱國、束縛せられて居た民族の解放要求の叫びである。第二には國内に於て政治的または經濟的にのさばつて居る支配階級の壓制に對する不平、解放の叫びである。表面は對外的にのみ發展して居るけれども、これは要するに廻り途して居るのである。今回の運動の中心は何處にあるか、指導者は何人であるか、これを煽動し、これが直接行動に出づるものは何物であるかを仔細に見れば、思ひ半ばに過ぎるであらう。本件發生の當初に於ても、全國に蔓延した今日の各地方に於ける行動を見ても、その運動の中心は主として學生である。これを指導するものは所謂思想家である。これを煽動するものも主として思想家、學生であり、直接行動に出づるものも、多くは勞働者、學生、その他附和雷同の無賴民である。一言にして云へば思想家、學生、勞働者の聯合行動である。北京總商會が對日英經濟斷行の決議をした、上海總商會が十三ケ條の要求を提出した、張作霖、馮玉祥が激勵の通電を發した、政府が不平等條約廢止の要求を列國に提出した、これ等の表面の事實からして、今回の行動に商人も、軍閥も、政府も、學生、勞働者、資本家と同一行動を取つて居るものと見たら、それは甚だしい皮相の觀察である。政府はその態度如何に依つては、この對外氣勢が急に反政府の行動に轉化する恐れがあるから、これを避けんがために民衆の意を迎ふるに汲々として居るのである。無力な現在の政府としてはこれまた致し方ないのである。軍閥は近來めつきり擡頭して來た民衆の勢力に殊更に反對することの不利を知り、且つまたこれを利用することの便利を考へて居るからである。商人は脅迫せられてゞある。政府、軍閥、商人は決して心から今回の行動に贊成して居るものではない。この運動が眞實に成功するときは、その時こそ政府の瓦解、軍閥の沒落、資本家分散を來すときである。支那に於ては現在の政府、軍閥、資本家と思想家、學生、勞働者とは到底相容れぬのである。外に勞農露國が、裏面に於て今回の運動を援助して居ると云ふことが各所から傳へられるが、確證は未だ握めないとしても、露西亞と支那殊に支那共産派思想家との關係、その共産派思想家と今回の運動との關係から見て、露西亞共産黨の實際の援助はあり得ることと想像せらる。要するに今回の支那人一部の行動は表面は對外運動であるが裏面に於ては政治的及社會的革命を馴致するの

要素、傾向を多分に持つて居ることが現はれるのである。

三、國際關係に對する不平不滿

(一)

前に述べた如く、現代支那民衆の叫んで居るところのものは、反軍閥、反帝國主義であり、延いては政治革命、社會革命をも喚致すべき傾向をも持つて居るのであるが、併し現在のところ、實際の行動としては未だ反軍閥や國內革命的運動の域までは達せず、專ら對外的にのみ出て居るのであるが、これは國權恢復と云ふことは、支那人の何人も希望するところのものであり、政府も軍閥もこれに反對することを得ず、引き摺られながらも一致の行動をとらざるを得ないからである。それだけ支那國際關係の現狀と云ふものは、一般支那人にとつて不平であり、これが改善は支那人一般の希望するところのものである。

現在支那人の列國に對する不平不滿は二つの方面から見ることが出來る。一は外國人の支那人待遇に對する不平であり、二は列國と支那との國際的關係に對する不滿である。前者は外國人の支那人に對する態度觀念の問題であり、後者は國際關係の法律的問題である。無論この二つは因を爲し果を爲すもので、別けて見ることが困難であらうが、併し支那人の不平を聞いて居ると、この二つの區別が明に認められるのである。前者に對する支那人の不平は、一般的であり、感情的であり、復讐心を伴ふて居り、對外的には最も危險な性質を帶びて居るものである。後者に對する不平は理智的であり、これを眞に理解するものは智識階級であり。この不平のみにては對外的に暴動化する危險は少ない。がこれが前者の不平と合して、前者の行動を合理化し、理論的にも實際的にも大なる勢力となるのである。

(二)

今回の事件は上海棉會社の罷工騷動を直接原因として、延いて南京路事件になり、遂に全國に擴がつた様であるが、然し現在に於ては、一般支那人はこの直接原因をそう重く見ては居ない様である。寧ろ本件の間接原因若しくは、根本原因とも見らるべき、上海工部局問題及び列國との不平等條約を主として力說して居るのである。

支那人の何人も甚だしく恥辱とし、何時かはこれに報ひんと思ふて居るところのものは、外國人が支那人を蔑視すると云ふことである。今回の事件も要するに英國人が支那人を蔑視することに端を發してゐるのであると云ふて居る。外國人は支那人を蔑視するかも知れないが、支那人自身は決して、外國人が考へる様に、それ自身を劣等國とも劣等國民とも、思ふては居な

いのである。國土廣く物資豐富で、四千年文化の歴史を持つて居る支那は、例令現在は國亂れ百端廢れては居るけれども、十年百年の混亂衰頽は支那の歴史には珍らしくない、必ず統一隆盛の時代は來る。支那人はかう思ふて居るのである。こうして大中華民國と自負し、自らを高うして居るのである。然るに外國人は支那人表面の寛裕溫柔をそのまゝ受けとつて、これを輕蔑し、劣等國民視する。指導し、使役し、罵しり、毆る。支那人は力敵はねばこそ忍從して居るが、何時かはこの讐を報ゐんと思ふて居るのである。

上海に行つた人は誰でも知つて居る通り、上海の公園には支那人を入れない。外國人の子供を守りするアマ、公園を掃除する人夫の外は、支那人は何人も入ることが出來ないのである。外國人の飼育する犬は勝手に入るのである。また昨年江蘇浙江問題の起つた節、徐樹錚氏は上海から外國人に追はれた。また孫文氏が廣東から上海に歸つて來たとき、外國人間に孫氏を上海に入れないと云ふ様な問題が起つたことがある。孫氏は烈火の如く怒つた。上海は支那の土地だ、支那人が主人で外國人は客だ、客が主人を逐ふの入れないのと云ふことがあるかと怒號した。これが豈孫氏一人の感情のみであらうか。また廣東の沙面（英佛租界）には外國人の使用人、支那電報局員の外は、一般支那人は居住を許されない。しかのみならず、沙面内に特別の用事を持つた支那人の、而も特定の時間以外には、これに出入することさへ許されないのである。上海であれ、廣東であれ、支那の領土である。然るにこの狀態である。外國人の支那人に對する態度はこれでその一般を窺はれる。自尊心高き支那人にとつては、これほど恥辱と感ずるものはないであらう。これほど無念に思ふものはないであらう。尤も外國人がかくせざるを得ない理由はあるであらう。併し支那人の眼のあたり見るものは、その理由でなくて結果である。支那人を侮辱する、劣等國民視するその事實である。支那人としては考へさせられざるを得ないであらう。

（三）

第一に支那に於ける現在の國際法的關係の問題であるが、これに對する支那人の不平等要求は一言にして盡きる。即ち現在の支那と列國（獨露等諸國を除く）との關係は、片務的である、不平等である、故にこれを改めて平等の關係とすべきであると云ふのである。所謂「不平等條約の廢止」、「國權恢復」を叫ぶ所以である。これを具體的に云へば、支那に於ける租借地、治外法權、關稅に對する制限、外國軍隊の駐屯等は支那の主權を侵害するものであり、且つ片務的のものであるから、こ

れを廢止すべしと云ふのである。上海に於ける今回の如き事件が發生するのも、租借地なるものがあるためである。各地に於て外國人との間に問題が起るのも、外國と不平等關係にあるためである。支那の國内が紊亂するのも、列國が治外法權を利用して軍閥を援助するからである。支那の財政が窮乏するのも、支那が關稅自主權を持つて居ないからである。だから支那が列國との關係を圓滿にするためにも、また支那國内を統一し支那自身を救ふためにも、先づ第一にこの不平等關係を改めなければならない。と支那人がかう叫ぶのである。殊に最近一部有識者間には、特に關稅自主權の回收を叫ぶ聲が高い。租借地よりも、治外法權よりも、第一に先づ關稅自主權を回收すべし、然らば支那は財政的に救はれ、自然内政の整理緒に就くべく、然る後は租借地回收も、治外法權撤廢も容易に來るべしと云ふのである。支那としては一理ある云ひ分と思ふ。

(四)

右に述べた如く支那人の外國人に對する感情の問題も、支那と列國と國際的不平等の關係も、支那人にとつては不平であり不滿であり、これが改善を希望し要求するのは尤もである。私は何れの國の人間でも支那人を蔑視することは止すべきであると思ふ。從來多くの外國人の支那人に對して取つて居た態度は改むべきであると思ふ。また國際的關係にしても、現代の時勢に於て、往古支那を威壓した時代の關係を永く存在せしむることは宜しくない。一日も早くこれを改むべきであると思ふ。而してこれを改め得る樣に支那の事態を改善することに、列國は支那と協力し、支那を援助すべきであると思ふ。華盛頓會議の精神はこれであつた。その後一部外國人の豫期しなかつた支那國内混亂の事實が暴露したため、列國の態度に多少の變化を來したかの如く認められる節もあるけれども、然し支那國内混亂の事實は、何も今に始まつたことではない。會議前も會議後も同樣である。たゞ外國人が實際を知らなかつたまでのことである。然し例へ支那混亂の狀態が事實であるとしても、華盛頓會議の精神は拋棄すべきでない。寧ろこれが事實であればあるだけ、その精神を保持して、支那改善のため同情と援助とを盡すべきである。たゞ問題はこれに到達するの途、即ち支那人の希望と要求とを實現せしむる方法と手段とである。

(五)

支那に於ける國際關係の現狀を見れば、ある程度に支那主權の制限せられてゐることは事實である。然し現在世界に多數の國が存在し、國際社會生活を爲して居る以上、何れの國と雖、その境遇と必要とに應じて、多少主權の制限はあり得べきであ

る。支那に於ける主權の制限も、これを設定した當時の境遇と必要とに應じて、支那主權の發動に依つて正當に設定せられたものであつて、支那人が頻に叫んで居る如く、その當時に於ても、現在に於ても決して不當に存在して居るものではない。尤も曾つては支那の主權が不當に侵害せられて居るものもあつた。然しそれは華盛頓會議の決定に依り已に悉く廢除せられたのである。外國郵便局の撤廢、漢口に於ける外國軍隊の駐屯等はこれである。尤も現在でも支那人が、支那主權の不當侵害を見て居る地方的問題は多少あるけれども、それは解釋の如何に依ると認められる點もないでもなく、兎に角現在の主たる問題である領事裁判權であれ、租借地であれ、關税に對する制限であれ、北京及京奉線沿線に於ける外國軍隊の駐屯であれ、何れもその當時に於ては、列國にとつて絶對必要であり、支那もこれを承認し、相互間に正當に決定せられたものである。現在に及んでその當時に比し、時勢に大なる變化があつたことは認められるとしても、然しその必要は果して無くなつたか何うか。この點は本問題に對し支那人と同樣に、直接利害關係を持つて居る列國人の考をも尊重すべきである。帝國主義時代已に去り、帝國主義的行動を非とする以上、總ての行動は現代的でなければならぬ。相手の意思を無視して自分の主張許り強制しやうとするのは、時勢の變化を口にし乍ら、自ら舊時代の行動を取るものである。殊に支那人の今回の如き行動は、帝國主義に反對し乍ら、自らその帝國主義の實を行ふものである。これは何人の同情をもひく所以ではない。これでは現在の支那國際關係に多大の同情を有し、切にその改善を希望して居るものでも、或はその同情の念を去り、曾つて列國が支那に對して取つた態度を、今日でも是認せざるを得ないことになりはしないか、支那人の國權恢復の希望は尤であるが、今日の如き帝國主義的直接行動は、支那及支那人のために決して策の得たるものではない。支那人が過去に於ける列國の帝國主義を非とすると同樣に、列國は支那人の今日の行動を非とするであらう。而して支那人の得るところは、國權恢復に非ずして、却て列國の支那に於ける國際關係の現状肯定であらう。

私は右の如き結果を來たすことを悲しむものであるが故に、而して眞實支那人の希望要求に同情と好意とを有し、一日も早くその實現を希望するものであるが故に、支那人にその手段を改めて貰ひたい。今日現に各地に行はれて居る樣な暴動的行動は止めて貰ひたい。これは徒らに敵意も悪意もない内外無辜の民を苦しむる許りで、支那人の要求を遂ぐる上に何等の好結果を齎らすものではない。而してかくの如き行動は外國人を苦し

めるよりも、寧ろ多數の善良な支那國民を苦しめる程度が高いであらう。經濟斷交とか總罷業とかも同斷である。結局は支那自身を苦しめる自殺政策である。現在支那人の取るべき策は、先づ現在の排外運動を終熄せしめ、支那が治安維持及び外國の條約上の權利等尊重の能力を有して居ることを示し、然る後に正當な平和的な外交手段に依つて、條約改訂の交渉を提起すべきである。何れにしても國内の統一、政治の改善は先きである。支那にある内外人をして、その生命財産に對する安全と安心とを感ぜしめなければならぬ。外國人をして支那に於て特權を保持する必要なきを感ぜしめなければならぬ。元ともとこの不平等關係は、外國人の生命財産の安全のため、絶對必要に應じて生れて來たものであるから、その必要さへなくなれば、支那人の主張する國權恢復は求めずして至るであらう。(七月五日)

「支那勞働運動に就ての一觀察」

及川忠恒

一

歐洲大戰が支那の國民生活に與へた貢獻の最も喜ばしいものの一つは、近世的產業主義の發達に對する夫れが刺戟である。戰爭から起つた特種の需要、國際通商に於ける船舶の不足、交戰諸國の產業休止、凡てかうした事情は、吾が產業隆盛に對して、最惠のものであつたと同じやうに、支那の產義發達に對しても最惠の事象であつた。連續して繰返へされる政治不安があつたにも拘らず、戰爭の終熄した民國七年までに支那の產業は數と質とに於て、全く面目を一新して了つた。戰後に象らはれた爲替の急激なる變動や、一般經濟界の不況やに依て、少なからぬ小企業は、沒落しなければならなかつたが、然かも今日支那の工業に看られる近世的產業の隆盛と繁榮とは、戰前の夫れに較らべて到底同日を以て談ず可きものではない。試みに全國の工業に就て揚氏が、農者統計に基いて多少の取捨改修を加へた上、發表した數字を瞥見する。

全國工場設立年別

年別	全國工場數	農商部に登錄したる工場數
一九〇三年以前	一二、四一五	二四
一九〇四	一、一六六	九
一九〇五	四四二	一八
一九〇六	六三一	三五
一九〇七	四二三	三六
一九〇八	五一三	二三
一九〇九	一、六四六	二六
一九一〇	一、二〇三	二六
一九一一	八二一	一八
一九一二(民國元年)	二、〇〇一	一七
一九一三	一、二四九	三七
一九一四	一、〇二七	三七
一九一五	六七二	五〇
一九一六	五五六	三三
一九一七		三四
一九一八		二九
一九一九		二三
總計	二四、七六五	四七五

右表の內、全國工場數の項目は大小の工場を盡く網羅したもので、中には殆ど家內工業であるものも含まれてゐるから、此數字丈けから工業發達の路筋を判斷することは出來ない。農商部に登錄された工場數によつて、始めて工場發達の經過を窺ひ得られるのである。何ぜなれば、農商部に登錄された工場は近世產業の眼光を以て看られ得る工場が大多數であるから。

で、此數字に就て看る。一九〇三年より一九一一年までは、一政府が工業獎勵に就き能ふ限り、施設を盡くした時代であるが、一九〇六及一九〇七年の二ケ年が、最も隆盛で、一九〇八年に至つては稍々衰へてゐる。惟ふに揭氏の謂ふ如く光緒母子逝去の影響であつたらしい。一九〇九年からは、若干興起する家を示したが、一九一一年一九一二年には再び衰へてゐる。是は明に辛亥革命の反影であつた。一九一三年以後、政府がその行政安定(スタビリテー)を缺いた結果、嘗て試みたる工業獎勵の諸般施設は、全く行はれぬことになり、工業は此時から自動的に發達し始めたのである。然かも一九一五年に於ける登錄工場數は、實に未だ例のない五〇といふ數字を示めした。一九一五年といへば、歐洲大戰の第二年目で、大戰が支那工業の發達を捉進した程度は凡そ係うしたものである一八年に二九、一九年に二三と衰へてゐるのは、戰爭終熄の反響に外ならない。

同じ揭氏の別の一表を一瞥する。原動力を使用する工場の數に於て、蒸電氣機關の數に於て、馬力に於て、工場の石炭消費額に於て、支那の工業は孰れも戰爭中、或は急激に或は漸進的

に、增加を示してゐる。則ち工業の生產力內容の充實を物語るではないか。

		一九一二年	一九一三年	一九一四年	一九一五年	一九一六年
工場數	原動力使用	三六三	三四七	三八〇	四八八	四九〇
	原動力不使用	二〇、三八六	二一、三六六	一九、九九二	二〇、二五八	一六、四〇七
蒸氣	機關數	七五	二九六	三一七	三五三	六四二
	馬力	二〇、三九一	四三、四四八	五五、二二〇	五三、五九七	八七、七一五
電氣	機關數	一四四	一四六	三三三	二六一	三一八
	馬力	二、八五三	二〇、一九八	二一、一五三	一六、一〇五	一七、二六九
其他	機關數	二一四	二一二	四七六	三八一	一、〇七〇
	馬力	一、三四〇	二、二三〇	九、〇九二	三、二七七	六、八三七
石炭消費額		五九七、八三三	九〇〇、九五九	二、五三七、七四五	——	二、四六一、八三三

殊に紡績業の戰爭に由る發達は、其內で最もめざましいもので、一九一六年以後の斯業は、誠に空前の活躍を呈した。工場の新設、或は增設されたものは、二三評論家の言を借りれば、『雨後の春筍の如く簇生し』『大いに風發雲湧の慨』があつたのである。支那の紡績王として馳名である穆氏の一文『中國棉業發達史』に記るされた所に隨へば、一九二二年二月末現在に於ける全國紡績工場の有する機臺は、支那人企業に屬するもの一萬六千臺、日本人企業のもの三千臺、英國人企業のもの二千六百臺で、紡績は一九二二年末の計算では、英商の二五九、二八四、日商の八六六、九二〇支那商の二、一四〇、四六二、合計三、二六六、六六六といふ數字にまで上つてゐる。蓋し支那の需要した棉織貨の大宗は、何んと云ても英國品であつたが、一九一六年以來その輸入が杜絕して、價格が奔騰した結果に外ならぬ。

鑛業の發達も亦大戰から著しく惠まれたものの一つである。官營鑛業は、一九一六、七年以來金屬の世界的騰貴があつたにも拘らず、經營の良しきを得ないのと、不斷の政治不安の打擊からして、彭縣の銅鑛が潤利四萬元を、湖南鑛務局が四十八萬元を僅に揚げ得たに過ぎないで他は概ね舊の如く不成績であつたが、民鑛に至つては、其發展誠に顯著なものがある。則ち山東の中興公司を始めとし、北支那の炭鑛は一切に中興の成功を示し、河南の六河溝公司、直隸の怡立公司、柳江公司、江蘇の賈旺公司、安徽の烈山公司等みな少からぬ利益に滿ほされたのであつた。六河溝公司の如きは、獲利の餘力を以て、臨城鑛務局の白耳義借款を買收したほどである。北支那炭鑛と同じく南方の金屬鑛も戰爭中異常の發展を遂げた。丁文江著『五十年來中國之鑛業』に據れば、湖南のアンチモニーは、一九一四年に於て、僅に二百萬元內外を產出したに過ぎなかつたが、一九一六、七年には、殆ど一千萬元を產出し、錫、水銀、鉛の產額も異常に增加した。タングステン鑛が始めて支那に開鑛したのは

一九一三年であるが、一九一七、八年には江西、湖南、廣東等の産出額は殆ど四千萬噸、價格一千萬圓に達し、米國を除けば、世界第一の産出國となるに至つたほどである——尤も戰後需要の減退から大打撃を蒙むつてはゐるが、左に一表を採錄して產業發達の趨勢を眺めよう。

全國炭鑛年產額（中國年鑑による）

	一九一六年	一九二〇年	增加百分率
支那新式炭礦	二、七三八、一四四	三、七二〇、〇〇〇	三六
外支合辦（外資ニヨルモノ）	六、九七〇、〇八七	八、九八〇、〇〇〇	三三
官營礦業	一、七六三、三八五	七八〇、〇〇〇	三四〇
舊式小鑛	六、〇一八、〇〇〇	六、〇二〇、〇〇〇	—
合計	一五、九〇二、六一六	一九、五〇〇、〇〇〇	二六

いふまでもない、工鑛業の發達は、夫れ自體勞働の數量增加を意味する。農商統計は工場勞働、鑛業勞働の二に就て下の數字を發表してゐる。

工場勞働者數年別

	男工	女工	合計
民國元年	四二一、九九四	二三九、七九〇	六六一、七八四
二年	四一八、三〇四	二一二、五八六	六三〇、八九〇
三年	三九一、一二六	二三三、三九八	六四二、五二四
四年	四〇三、四四八	二四五、〇七六	六四八、五二四
五年	三三五、〇七八	二三九、九五四	五七六、〇三二
六年	三一七、八四七	二三七、七四五	五五五、五九二
七年	三〇七、三二〇	一八一、二八五	四八八、六〇五

が併し五年六年度の數字は、統計が未完成、七年度の數字には、湖南、四川、廣東、廣西、雲南、貴州の六省份が含されてゐないのであるから、四年度の六四八、五二四を以て、現在の勞働數を推測する基準としなければならぬ。前記揭鉾は、民國五年度の統計未完の數字に三年度の統計を照合添加して、一九一六年に於ける工場勞働者を男工三九三、一九二、女工二四四、二五九、合計六三七、五五一と計算した。今日は、此時から既に九年を經過したことであるし、紡績業が雨後の春筍の如く族生したのは、前記の如く、一九一六年以後のことであるから、一九一八年以後は戰爭中に勃興したる小工業の稍々多數のものが沒落して了つたとはいへ、工場勞働者の總數は、全國を通算して十五萬人內外を增加したるものと看ることが出來よう。則ち現在數は約、七、八十萬前後を往來する數字から、あまり遠くないことであらう——刁作謙の如く約百萬とするもの、工人旬報の如く約百六十萬と計算するものもあるが。鑛業勞働者に就ての統計は

全國鑛業勞働者數年別

民、元年	採鑛	一五、四二〇
	採鑛	一五二、四五九

二年	採鑛	七、二七六
	採鐵	三九九、九一六
三年	採鑛	一一、四六三
	採鑛	二四三、五五九
四年	採鐵	四二、一〇五
	採鑛	四六、八二六四

といふのである。國民五年以後七年までの統計も發表されてゐるが、之また西南各省の分を含まぬから、四年度(一九一五年)の數字を先づ信憑さる可きものとしなければならぬ。戰後に現れた鑛業衰退の爲め、一九一六、七年當時の異常なる活躍は、固より之を今日に看やう可くもないが、夫れにしても、鑛業の繁榮は、最早や一九一五年頃のものではない。少なく見積るとも、今日の鑛業勞働者は其數五十萬を下らぬことであらう。(民は約百萬と稱し工人旬報は四十二萬とした)

二

製造工業の生産力増進と、勞働の數量増加――別言すれば産業がファミリー、コンサーンたる域を脱して近世的に産業化されることになれば、茲に勞働自覺が生れ、是に基いて勞働條件の改善を目的とする幾多の勞働運動が、自ら醱酵することは、古今東西を問ふ所ではない。支那に近世産業化が顯著に看られだしたのは、前段の敍説で知られる如く、一九一五、六年からのことで、勞働自覺の芽が地殼を破つて萌え始じめたのも則ち此時からである。開戰後一、二年にして現はれた物價の騰貴は、延て勞働者の生計不安と、雇主に對する不滿足とを釀成し、勞働條件改善に對する欲望が、漸く勞働者の間に、眼醒めたのである。

純經濟的に發芽した勞働自覺の苗は、丁度其頃盛になりつゝあつた所謂る新文化運動によつて、育て上げられねばならなかつた。先年香港で、一兇漢の手に斃れた黄氏が、嘗て白話文學の提唱に就て發表した一書面に左ういふ一節がある。

〔支那を政治的に〕救濟する根方的方策に就ては、余は新文學の提唱に其發端を求めねばならないと信ずる。つまり我等は、支那の思想を世界の現代思潮に直接結び付け、是れによつて、支那思想の急進的覺醒を喚起するやうに努めなければならぬのである。而して我々は、夫れを爲す上に於て、世界思想の基本的思潮が、支那の民衆生活を左右し得るようになることを期待しなければならない。是が實行の方法は、簡純な、そして簡單化した言語、文章を、思想を國民の間に廣く撒播する爲めに、使用することがある。史家は文藝復興を目して、歐巴の中世主義倒覆の基礎としてゐるではないか。

書面は白話文學の目的とする所を明にしたのであるか、夫れは同時に、白話文學を骨子とし、且つ武器としたる新文化運動の眞の目的をも傳へるものである。誠に新文化運動は支那の民衆生活が世界的風潮によつて、左右せらるゝことを以て、支那の凡ゆる政治的經濟的社會的刷新が行はるゝ唯一の路であるとしたのである。實際新文化運動は勞働に深き同情を寄せ、勞働自覺敎育の爲め、非常なる努力を言論に出版に、費ひやしたのである。周作人は歌ふてゐる——

兵器廠の罷工

彼等は彼の爲めに鐵砲を造り
彼は彼等に飯を喰べさせ
鐵砲も充分に拵えた
米も隨分高値になつた
「もう少し下さい」
「…………」
「もう少し下さい」
米も隨分高くなつた
わしたちは飯が喰へない
それで、あなたの爲めに鐵砲が造れなくなつた
鐵砲は十分に造つた
工場の汽罐に火が消えた
職工の竈にも煙がきえた
鐵砲を持つ人が出て來た
鐵砲を造る人が收監された

新文化運動の勞働に對する協情は、凡そう恁したものであつた。かくて、一九一五、六から二〇年に至る三、四年は、二〇年以後爭議の形象に現はれて來た勞働運動の胚胎期だつたのである。

三

一九一九年歐洲戰爭の終焉と共に、戰場より支那に歸還した「赴歐工人」は、母國の具體的勞働運動に對して、之を喚生する導火線たるの役目を果した。彼等が歸來早々『赴歐勞工團』を組織したことは、旣に其前法に於て、近世的勞働組合を組織する氣運に向つてゐた母國勞働に油かけたのであつた。勞働に於て歐巴化されて來た彼等が、歸來後直に勞働の機會が見出せなかつたことや、母國勞働條件が著しき不利であることを知つ

た時、彼等の雇主に對する不平なり、反感なりが生れて來た。しかも戰後の世界的物價の奔騰は、支那の産業中心地をも襲ひ、「高價なる生活」は、國民を全く困憊せしめたのであつた。されば、産業地の一九一九年は、一般勞働者の勞働自覺、赴歐勞働者の母國勞働に對する不平、並に『高價なる生活』の三事象が、彼此輻輳して、玆に決潰の穴口を索めつゝ流れて往つたのである。此年五月四日の學生運動が、その穴口への路を敎えたのであつたことは言ふまでもない。

赴歐勞働者が凡そ何人であつたかに就ては、まだ正確に報告されてゐない。英國政府の發表した所では、十八萬人となつてゐる。歸還勞働者の員數に就ても報告がない、が一般の觀察は約十四萬とされてゐる。支那の工場勞働者の數を旣述の數字から判斷して、約百萬とすれば、十四萬の歸還勞働者は、其一割四分に當り、支那の勞働は一九一九年以後に於て、多數の新勞働者を迎えたわけである。しかも彼等は、母國を去つた時の彼等ではない。戰場又は工場に於て彼等は、適當の普通敎育を受けたのであつた。百五十名より成る外支各國人の幹事は、彼等の生活向上に對して、凡ゆる努力を吝まなかつた。全く漢字の知識を持たぬ者には、僅に六週間で終得し得る支那字母―吾國の假文字―を敎えた。若干漢字を讀み得る者に對ては、六百字より成る漢字手本を敎えた。普通敎育を受けた者に對しては、英佛語を始めとし、地理歷史數學漢文等を敎えた。陣營並に工場は、基督敎靑年會と協力して、彼等の爲めに特に宿舍に俱樂部を設け、音樂室、讀書室、地球其他の遊戲室を具へたのであつた。單に夫ればかりではない。或は講演に或は活動寫眞で、植林、衞生、土工、製造工業、に關する諸般の智識を敎えられ、或は國民的公民的自覺の鼓吹を受けた。最も特筆す可きことは、彼等が就職した各々の工職に於て、完全なる熟練勞働者となつたことである、勞働能率の意義を知つたことである、協同の價値と團體的若しくは組織的運動の訓練を持つに至つたことである。しかし、彼等はC、G、T、其他の勞働運動を親しく目擊してゐた。歸還前の一九一九年春、渡佛勞働者の一部は『中華工團』と稱する組合を組織して、勞働人格の向上、組合員相互の扶助に努めるに至つた程である(組合規則七條。)

されば、歸國後の彼等が、渡歐前の勞働條件を甘受することが出來なかつたのは、自然の成行であつて、不平不滿は動搖を生み、終りに滿足を索めねば已まなかつた。

――かやうにして、支那の勞働自覺は一九二〇年から、愈々罷工の形象に於て具體的進展を現はして往つた。

四

罷工の見地から支那の勞働運動を看ると、一九二〇年はその開始期で、二一年二二年は全盛期、二三年二四年は稍々衰へ、以て今回の青島上海に於ける罷工に及んだのである。罷工の全盛期である一九二二年に就て曰へば、八月より十二月に至る五ヶ月間に於て、罷工總數は實に四十一件で、參加人員十四萬五千七百八十人、その內五六・五%は爭議に捷ち、一八・四%は半ば捷ち、二五・一%は全く敗北したのである。此數字は胡適一派の新人が發刊するところの週刊『努力』の傳ふる所であるから、先づ信憑して差支ない。

今までの罷業の歷史の中、一九二二年の香港海員罷工、同年秋の粤漢鐵道の罷工、翌一九二三年の京漢鐵道工夫の罷工の三は玆に特筆さる可きものであらう。

香港海員罷工は其の形の大きかつた點に於て、罷工海員結束の鞏固であつた點に於て、洵に堂々たるものである。始め太洋汽船の海員四千名の罷工であつたが、間もなく帆船、小蒸汽船乘組員も之に參加し、終ひには埠頭の石炭積込人夫並に船荷引揚人夫までも加はり、延ては幾多の同情罷工罷市をも惹起し、一時香港は全く經濟的に封鎖されたのであつた。香港の孫文に對する政治的反感が此罷工を、しかく大ならしめたのであることは疑はれぬ所である。ともかく、海員側の捷利に終り、一割五分の賃銀增額は容れられたのであつた。

同年の秋の粤漢鐵道工夫の罷工は、鐵道側の暴力的壓迫が、最も極端に行はれたのであつて、天津の橘氏が支那研究に採錄したところの漢口の笹川潔氏の談話に依う見えてゐる。

元來粤漢鐵道は、英國の投資によるもので、會社の行政は、監督の英人技士某氏の掌中にあるのであるが、一派の支那人間には、當時吳佩孚の勢力を以て、英國の後援に出るものとなし、頗る憤懣の情を挾むものがあつた。彼等は謂へらく、排英の風潮を作興するは、支那の官僚軍閥を倒すに當つて、豫じめ取らねばならぬ必要手段である、といふところからして、猛烈な衝突を惹き起したのである。罷業の始まりは、印度のガンジー思想とも謂つた風な所謂無抵抗主義の非協同主義を標榜し、多數の鐵道工夫は、枕木に並行して軌道の上に列を作つて横臥し、汽車の運轉を防害したのであるが、英人技士は、支那官憲と打合せの結果、暴壓手段を採ることに決し、全速力の機關車を放つて、彼等の群中に突進せしめた。其爲め無慘にも、百四十余名の工夫は、殺傷され、實に名状す可からざる凄慘の光景を現出したのである×××

笹川氏は、十數年以上、漢口は文筆を以て馳名な論客、粤漢鐵道工夫罷工を親しく目撃された一人である。罷工は結極工夫方の泣き寢入りに終つたのであるが、笹川氏も指摘したやうに、此罷工あつて以來、外人企業に對する勞働者の反抗的對度と、罷工を慫慂鼓吹する文化運動主義者の國際資本に對する反抗運動の計畫は、次第に露骨となつて往つた。

一九二三年二月に行はれた京漢鐵道工夫總罷工は、罷工工夫の多數であつたのと、元來の目的が勞働條件の改善といふこと以外に、直隷軍閥の横暴に對する反抗運動として著名なものである。この大罷工は、前月中に成立したる京漢鐵道職工組合の團體的勢力によつて、頗る鞏固なる結束の下に行はれたのであるが、安直戰爭以來、京漢線の事實の持主となつてゐた呉佩孚の武力壓迫によつて、終ひに敗北に歸してしまつた。が、罷工中、北京大學の李大釗一派の共産主義的新人は、切りに罷工の持續に活躍し、京綏、津浦、正太、隴海の各鐵道や、上海の各勞働組合は、頻に同情を電致して其聲援に努めたのであつた。この年四月中に政府が、勞働組合法案十五條（工人協會法案）を議會に提出したのは、たとへ夫れが、議會の協贊を經なかつたとはいへ、この京漢鐵道罷工の直接の影響である。

五

これまでの罷工に就て、週刊『勞力』が調査した所では、罷工の原因は凡そ

七〇・九%　賃銀增額の要求
一二・二%　工長、苦力頭（勞働者の組長）に對する反抗
一二・二%　同情罷工
四・七%　組合組織の要求

の比率になつてゐる。然らば罷工の根本的原因たる勞働狀態は、果して現在どんなであるか。先づ賃銀に就て見ると、揚銓が農商省統計に基いて作つた表がある。

各省男女工の數及勞銀

（本表は五年度の農商統計を根據とし、三年度の數もあり）

（毎日の勞銀）

省別	男工	女工	總數	男工 最高	男工 最少	女工 最高	女工 最少
京兆	七〇五七	二五九	七三一六	、三〇	、一四	、〇九	、〇七
直隷	三九三三九	四五一五	四三八五四	、二九	、一四	、二六	、一五
奉天	一七六三九	一一〇	一七七四九	、三三	、一八	、一五	、一三
吉林	八五六四	三三	八五九七	、四五	、三〇	、一〇	、〇六
黒龍江	三二〇〇	—	三二〇〇	、二八	、一七	—	—
山東	一七七九五	二一七六	一九九七一	、二五	、一九	、二六	、一四
河南	一二二三三	二〇三三	一四二六六	、二四	、一三	、三〇	、一二

山西	一六三二八	一三六四	一七六九二	、二三	、一二	、一三	、〇八
江蘇	四四二八六	一〇〇五九四	一四四八八〇	、五三	、三三	、三五	、二八
安徽	一一〇八〇	一六二〇四	二七二八四	、一四	、一六	、二二	、一六
江西	五六一五七	二三一九	五八四七六	、二五	、一五	、一五	、〇九
福建	一七二〇二	三四三四	二〇六三六	、三七	、二一	、二三	、一二
浙江	五三二六三	二五九〇二	七九一六五	、二八	、一七	、二四	、一四
湖北	二三九九二	九〇八三	三三〇七五	、三三	、一五	、二〇	、一二
湖南	一四二三三	三六四二	一七八七五	、二六	、一四	、一九	、一五
陝西	三五三七	六四五	四一八二	、一九	、一〇	、一三	、〇八
甘肅	一五三八	九五五	二四九三	、二二	、一四	、二二	、〇九
新疆	三五五	四五	四〇〇	、四〇	、二六	、三三	、一四
四川	四三一四一	八一九八	五一三三九	、四七	、一四	、一四	、〇九
廣東	一六〇四八	四二三五五	五八四〇三	、四六	、三三	、三三	、一八
廣西	八五三	六四	九一七	、四五	、三三	、二五	、一四
雲南	二六九八	一一四一	三八三九	、三三	、一七	、二二	、〇七
貴州	一五〇七	三六七	一八七四	、一六	、二一	、〇七	、〇五
熱河	六七四	—	六七四	、二二	、一八	—	—
察哈爾	一二九四	二一	一三一五	、二一	、一五	、〇八	、〇五
綏遠	二七九	—	二七九	、二五	、二一	—	—
總計	三九三、二九二	二四四、二五九	六三七、五五一				

これは、各地の各種の製造工業に就ての平均であつて、此種の統計としては、最も信頼す可きものである。但し過去三年間に於て、罷工の結果、賃銀は大概ね二三割方增額されてゐるから、この表の賃銀は、今日に於ては、若干改修されねばならぬ。また昨年、上海の經濟討論處が、全國の主要工場に就て調査した一表がある。

(職工數單位千人、賃銀仙)

工業別	調査工場數	職工數 男	職工數 女	賃銀 男 高	賃銀 男 低	賃銀 女 高	賃銀 女 低
纖維	四五七	三七	七一	六四	九	四〇	九
染織	三、一九一	七〇	六六	五一	九	二七	八
機織	二三〇	八	—	一・二一	一五	—	—
鑛業	一、二〇二	一六	—	六六	一〇	二八	一四
製造	四、二〇三	六七	二	八一	八	二六	七
化學	八四一	一五	七	六八	七	二五	九
雜	四、二〇八	八九	三〇	一・〇五	一〇	二五	九

以上の二表によつて、賃銀の地方別に依る、工業別による、極めて大體の態樣を瞥見することが出來よう。問題は此程度の低廉な賃銀と、勞働者の生計費との關係如何である。吾輩は、これまでに全國勞働者の生計費に關して、信頼するに足る調査の發表されたものあるを知らない。たゞ上海勞働者の生計費に就ては、朱心澄が工業委員會に於て發表したものがある。低ろである。

『上海粗工の毎月最低生計』

	獨身者	五人家族
食品	五、四五	一一、一〇

服裝	一、一一九	二、一一三
家賃	一、七八	二、七八
燃料	〇、四七	一、九二
交通費	〇、七一	〇、八五
雜費	二、二五	二、五六
合計	一一、五〇	二一、三四

(單位元)

『上海精工及半精工毎月生計費』

	獨身者	五人家族
食品	七、三二	一、五〇六
服裝	一、三一	三、九四
家賃	三、〇九	五、〇二
燃料	〇、五七	二、五一
交通費	二、一二	二、一五
雜費	三、八五	七、一一七
合計	一九、二六	三五、八五

漢口、天津、廣東其他の產業地に於ける勞働者の生計費も、上海の夫れを多く遠去からぬものと看なして、之を前揭經濟討論所の賃銀表に比較照合するならば、現在各工業地の賃銀は大體に於て『生計最低限度』を、甚しき苦痛を感ずることなく維持し得る底のものであることが知られる。

然るに物價は、他の一方に於て、戰後著しく騰騰した。財政部の駐滬調査貨處の統計によれば、

	一九一四年	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年
糧食	一〇〇	一二九・一	一三六・二	一三六・六	一四五・五	一四九・六
其他食物	〃	一二六・〇	一三八・八	一三一・〇	一三三・六	一三三・四
織物及原料	〃	一五三・二	一四八・三	一四七・六	一四八・一	一五七・八
金屬	〃	一三三・六	一五〇・〇	一五〇・四	一三三・四	一五八・一
燃料	〃	一八七・七	一八三・〇	一七七・七	一七一・八	一七〇・四
建築材料	〃	一四四・八	一六二・三	一七二・〇	一六三・八	一六四・〇
工業用品	〃	二四六・四	二四八・〇	二九一・四	二〇〇・九	一八三・三
其他物品	〃	一三一・八	一三四・八	一四〇・〇	一三〇・八	一三一・九
雜貨平均	〃	一四四・七	一五三・〇	一五〇・二	一四五・五	一五六・四

の如く、物價の騰貴率は四、五割である。しかも是は卸相場であつて、小賣相場に至つては筆者が昨春上海に遊んだ時の見聞に於ては、騰貴率七、八割が普通で中には十割に及ぶものもある。

元來支那勞働者の生活は、極めて少數なる機械工や技術優秀なる工藝人を除外すれば、概して悲慘なるものであつて、產業國勞働者の夫れと到底比較される可きものでない。試に半粗工(セミス・キルド)の工場勞働者に就いて曰ふならば、

『男女工の生活狀態は、決して裕福のものではない。本地帮(當該產業地の勞働者)に屬し、父母の膝下より通勤する農商家の子女は、衣服化粧品等をも購買する多少の餘裕を有するが、父母子弟の扶養義務を負ふ者の生活は、甚しく慘狀を極めて

ゐる。彼等は茅窓蘆軒、或は蒲鉾形のアンペラ小屋か、然らされば五六疊敷の床なき堀立小屋の内部に蠶棚の如く設けた床上に、數家族十六七人も雜魚寢するものもある。彼等の食物は勿論極めて粗惡のものであるが、尙ほ一人前一ヶ月四、五元は要する獨身者を除きては、普通三人以上の家族を伴はざるものはない。而かも彼等の受くる給料は、三人分の糊口の資に足らない。一日働かざれば、一日食なき境遇である。夜に入りて、點燈するが如きは、彼等仲間には稀少である。カンテラさへも點ずることを得ないのである。雹雪吹き荒む嚴冬に、炭火の一片すら購ふことを得ない。銅元一枚を投じて得たる土瓶一杯の熱湯で、凍飯を溫むることが關の山である。工場の多くは職工宿舍の設備があつて、彼等に低廉に貸附けてゐる。一軒を上下三つに仕切り、一房二疊である。一房の借賃、一ヶ月二元が通例であるが、四人以上の職工の住居に當てられてゐる。獨身者の多くは、一人分二、三十仙內外で又貸してゐる。かくして一房に三人乃至六七人が雜寢するのである。余の參看せる某邦人經營工場の寄宿房に於ては、二百餘軒中點燈せるものは、僅に二ヶ所であつた。しかも一つはカンテラ一つは豆ランプで、他は眞の暗闇であつた。彼等は此暗黑裡に、群蚊と南京蟲の襲擊と戰ひつゝ一夜を過すのである。彼等の內、蚊帳を所持するものは、僅に三〇%である。彼等は生活苦の爲に、夏時蒲團を入質するものが其大部分である。然るに冬天に至つても、之を受け出すの餘裕なきもの二〇%を數ふるものである。彼等は房中床なき土上に、一抱の藁屑を持ち來つて、犬仔のソレの如く、家族相重なり、體溫をストーブに代へて寢に就くのである。如斯境遇にある彼等に能率の向上を期待するは、期待するものの誤りであるまいか。彼等の盜心を咎むるは、咎むるものに罪はあるまいか。吁、彼等の生活狀態は、人としてでなく、番犬の夫れにも遙かに及ばない』

この叙述は、西川喜一氏が、上海勞働者の現狀に就て觀察された一文（東亞經濟研究九卷一號以下）の拔萃である。吾輩が民國七、八年並に十三年前後數回に亘つて、上海天津の數工場に親しく見聞した所と、大體に於て符合するところから、吾輩の備忘錄に代へて、玆に之を引用したのである。

言ふまでもなく、戰後の物價昂騰は、かなり悲慘な彼等の生活を惡より最惡に下せしめねば已まないものであつた。罷工の大多數が、勞働時間短縮に就ては多く之を問はずして、賃銀增額の要求にのみ基いて行はれた理由は、蓋し玆に存する。一九二四年度英文中華年鑑によれば、上海のストライキは米價が

ピカル十三乃至十五元に上騰した時、行はれたものが多いとのことである。(普通には八元乃至十元を往來する)が、これ迄の事實に徴すると、罷工の多くは必ずしも純經濟的理由に由つてのみ行はれてはゐない。最初より、勞働條件の改善といふ本質的目的の外に、別の目的を持つて出發したものもあるし、後に至つて別の目的が加へられたものもあるが、いづれにしても別の目的といふのは、多分に政治的音響を持つものである。一九二三年の京漢鐵道罷工は、既に言及したやうに、吳佩孚一派の直隷軍閥に對する鬪爭であつた。則ち安直奉直の兩戰爭以來、直隷軍、殊に吳佩孚は京漢鐵道收入の大半を强奪して其軍隊の維持費に充て、或は軍隊の無賃乘車を强制し、或は既定時間表を勝手に變更し、横暴專恣を極めた所から、之に對する反抗運動として罷工が行はれたのである。二二年の粤漢鐵道罷工も亦其理由とする所は、前記笹川氏の談話に看られる如く、粤漢鐵道は英國の資本により、英人の技士によつて經營されるのであるから、而して吳佩孚を後援するものは英人であるから、官僚軍閥を倒すためには、先づ排英の氣勢を揚げねばならぬ」といふ所に在つたのである。今回の上海大罷業に於て、彼等が高唱して處も亦、「帝國主義的國家の資本に吾々は搾取され、凌辱されてゐること甚しい故に、之に對する抗爭として、吾々は罷工を續ける」とか、或は「外國の帝國主義的侵略を排斥する目的を達せぬ限り、罷工の進行を止めない」といふやうなものではなかつたか。あまり急進的でない梁啓超すら、最近六月十日の『晨報』に一文を寄せて、『我等は今强敵(外國帝國主義的資本)と相對して、平和的戰爭の狀態にゐる。××戰略は攻勢を採る可きであることは言ふまでもない。但しこの攻勢たるや、最有效なものでなければならぬ。一着ただちに敵の要害を制するものでなければならぬ。此點から日へば、游行示威は攻勢といはれない。たゞ罷工のみが眞の攻勢である。×××吾等は全力を以て罷工を援助し、その强硬と持久を增さねばならぬ××』と論じた程である。

罷工が純經濟的に行はるゝ以外に、恁うした政治的要素を持つのは、抑もまた何故か。畢竟大小罷工の殆ど孰れもは、其背面に在つて罷工の發生を提唱し、罷工起るに於ては凡ゆる援助と指導とを吝まない、新文化運動や煽民的政黨者流の極めて露骨な、且つ極めて積極な後押しに由つて、行はれるからである。一九一九年より二〇年にかけて、山東問題に關聯して各地に起つた多數の排日的小罷工は、新文化運動の一つであるところの『學生運動』か『愛國』の名に於て押し進めたものである五四運動其他の學生運動はやはり所謂新文化運動の内に含まる

可きものである。東方雜誌二十週年紀念號、所載の潘公展の一文もサウ述べてゐる。また京漢鐵道罷工は李大釗一派の北大新人が『軍閥打破』の名の下に押し進めたものである。實際、京漢鐵道罷工組合を成立せしめた大きな力は、李大釗、陳獨秀其他の共產主義者の具體的後援であつた。隨つて、今迄の主なる罷工の非經濟的要素は、孰れも常に、その時々に於ける新思想を投影した政治的要素から成り立つてゐるのである。

罷工の醇生を助けたものは單に新文化運動ばかりではない、時々に於ける失意の煽民的（デマゴーグ）政客も亦その有力なる發酵母であつた。香港廣東に行はれた罷工の大多數は、明に國民黨系デマゴーグと緊密なる干係を持つてゐた。京漢鐵道罷工を始めとし北方に行はれた二三の鐵道罷工も、明に反直隸系デマゴーグと密接な干係を持つてゐた。今時上海罷工に於て、多數の左傾的國民黨政客が背面に活躍してゐることは、既に衆目の視る所である。吾々は、支那の罷工を觀察する上に於て、此等のデマゴーグの活躍を見逃してはならぬ。何故なれば、彼等は巧に新文化運動に〇け込んで、其姿を隱くし、罷工を政爭の具に供する處かあるから。

七

新文化運動は、經濟的に發芽したる勞働自覺の苗を育て上げた。勞働爭議を押し進めることに於て、堂々たる成功をも贏ち得た。すべて一九一五、六年より今日に至る八、九年間の出來事であるが、其の間中國勞總同盟、中華工業聯合會、赴歐勞工團、京漢鐵路職工組合等の有力なる勞働組合を始めとし、全國に亘つて極めて多數の勞働組合若しくは團體が既に出現した。而して又戰後の世界風潮につれて、新文化運動は、多數の急進社會主義、共產主義（マルキシズム）者も生れて來た——尤も孫文を中心とする「三民主義」的社會主義は、其以前から國民黨の團體的勢力を以て、一般社會並に勞働に有力なる影響を與へてゐたが。今回の上海罷工が、前記の如く「帝國主義的國家の資本によつて吾々は搾取され。凌辱されてゐるから、之に抗爭するために罷業を續ける」といふ意味の宣言を發表したのは、この戰後に生れた中國共產黨員の教えた所である—彼等の黨綱宣言書の末節に『中國の開發に對して吾が軍閥を利用する帝國主義的國家を倒せ』『國民の壓迫に就て外國と共同する吾が軍閥を倒せ』「全支那の國民的革命よ』とあるではないか。

勞働が組織づけられ、爭議が繰返へされるとき、マルキシズム、ボルシエヴイズムの信徒が異常に活躍するに於ては玆に樣々の事件が醸生されることは明である。支那の勞働は、今後益々

多事でなる可きは言を俟たぬ。一見露西亞は歐巴の支那で、支那は東洋の露西亞であるが、然らば支那は、勞働の運動と共産黨員の活躍によつて、赤化する蓋然性を充分に具へてゐるのだらうか。吾輩はさうは考へない。

第一支那の企業家は、近世産業化の下に於て、勞働者は如何に待遇さる可きかに就ては、勞働者よりも一層よく之を熟知してゐる。固と近世的工業が、支那の各地に勃興したのは、開港地に經營された外國人工業の刺戟に俟つたのである。隨つて彼等が其の工場を新設するに當つては、近世的設備を具へた外人工場に凡ての範を見習つたのであつて、廣東上海天津等の比較的規模のなる工場は、大概ね換氣、光線其他の衛生的條件に於て、外人企業の夫れと略ぼ同樣である。家內工業の陰欝で濕氣多く、風通なき仕事場に勞働する『工人』に取つては、洵に幸福なのである。上海に就て看るに、多數の工場は、藥局、病院を有し、且つ教育に就て例へば夜學校其他の簡易な設備を設けてゐる。商務印書館、內外棉花、英米煙草の各所は此等の點の最も完備したるものである。北市の揚樹浦に工場を有する外支企業業は、協同して一つの協會を組織し、其下に病院を開き、教育機關を具へてゐる。各地の工場は、槪ね勞働者の爲めに宿舍を設け、極めて低廉なる房貸しか課さない。宿舍內の生活は前記西川氏の叙述に看らるゝやうに、吾々の眼から見れば、甚しく悲慘であるが、勞働者自身は決して悲慘とは考へてゐない。若し宿舍の設がなかつたなれば、彼等の大多數は「蒲鉾形のアンペラ小屋か、然らざれば五六疊敷の床板なき堀立小屋」に、十數名同居しなければならぬのである。宿舍は彼等に取つて極めて上等な住宅である。

勞働者の待遇に關する恁うした凡ての設備方法は、孰れも企業家側——外人たると支那人たるとを問はず——の自由裁量に由つて行はるゝのであつて、工場設備の改善が、勞働者側の示威罷業其他の勞働運動により、企業家からもぎ取られる歐米の狀態とは全く違ふ。一言にして蔽へば、支那の企業家は勞働者側から提起さる可き要求に先手を越したわけである。其他勞働時間も亦、家內工業の工人が、十四乃至十六時間であるに反し、之に在つては普通十乃至十二時間である。たゞ賃銀は果して合理的であるか怎うかは疑問で、殊に物價が一九一四年より一九二三年までに約七、八割乃至十割の騰貴を示したるに、賃銀は大低二、三割方の增額を見たに過ぎないから。

第二に工業勞働者の殆ど全部は、地方の出稼人である。彼等は生計困難の爲め都市に出て來るのではない。若干の貯蓄を持つて歸郷することを始めからの目的としてゐる。隨つて工場勞

傭に傭はれるに當つては、普通雇傭の期間を豫しめ契約して置く。つまり農家の繁忙期には、工場を去つて歸鄕する爲めである。恁うした事情あるが故に企業家は常に勞働者の募集に相當の困難を嘗めるのであつて、隨つて「工頭」又は『苦力頭』(共に勞働者の組頭)に勞働者の募集を依賴しなければならぬのである。鄕土に於ける冠婚喪祭や兩親の病氣其他の家庭的事情も彼等歸鄕の理由となる姿である。彼等にして一度歸鄕すれば、彼等の農業によつて、漁業によつて、十分生計を維持することが出來るのであつて、工場勞働者としての地位は、失業によつて轉々移動しなければならぬ歐米勞働の夫れとは全く異つてゐる。彼等の賃銀にして其の都會生計を維持し能はぬものであれば、彼等は都會勞働を棄てゝ歸鄕すれば、それでよろしい。罷工其他の勞働運動によつて、飽くまで賃銀の增額を得なければ、直ちどころに生計に饑ゆるといふ狀況にあるのではない。隨つて罷工の價値は、歐米勞働者と支那勞働者との間に於て、自ら著しい軒輊があるわけである。

第三に支那には階級的鬪爭がない。明淸の時代と雖もロマノフ王朝の露西亞、ブルボ王朝の佛蘭西に見たやうな極端に壓迫された階級を見出すことは出來ない。尤も支那には古から、『良』――フリー、メンと『賤』――奴婢と呼ばれた奴隸との二階級で存在してゐる。大淸律は、饑饉其他の自然災害によつて、最早や妻子を絕對に扶養し得ない狀態に立ち至つた場合に限り、妻や子女を他人に賣却することを認め、他の場合には人身の賣却を禁じたのであつたが、奴隸の買賣は依然として行はれてゐた。また民國の法律は人身の賣買を絕對に禁止してゐるが、賣買は依然として行はれてゐる。が、支那の奴隸は全くローマの土隸や、歐洲中世の夫れとは異なるものであつて、彼等は所有者が傭ひ入れたる他の使用人と同じ地位に於て家族制度的家族の一員となるのである。農家に於ける彼等は、農家の子弟と略ぼ同じ待遇を受けつゝ農場に耕すのである。家內工業に於ける彼等は、徒弟又は見習として、親方の子弟と共に働くのである。彼等は時に其勞役に對して勞銀を支給されることとさへある。身賣金を返還すれば、何時にても解放されるのである。古より前淸までの彼等に對する唯一のディスクオリフイケーションは、僅に科學の試驗に應試出來ぬといふこと丈けであつた。要するに彼等は、フリーマンたる雇傭使用人と事實に於て同じものである。

又支那には、近世的意味に於けるブールジョアのプロレタリヤ壓迫といふ現象は古來全くなかつた。强ゐてブールジョアに當る階級を支那の社會に求むるならば、夫れは一と口に『鄕

紳』とか『紳董』とか呼ばるゝ階級であらう。彼等丈けが地主でもあり、資産家でもある。而して、都市に於ける商店の主となるものは、彼等の協同出資の下に合名又は合資的に經營されるのであるから、彼等丈けが所謂る資本家である。けれども、彼等は事業に出資こそすれ、直接事業の經營に與かるのではなく、事業は全く別人をして受負的に經營せしめ、自身は出資額に對する一定の利子を收得するに過ぎない。隨つて『紳董』は經濟上に於て全く無勢力なのである。大株主が直に會社の社長、重役になるのとは趣を異にする。且つ事業そのものは凡てファミリー・コンサーンであつて、使用人の員數も少く、雇主に對する干係は、全く家族主義的情誼によつて、硬く結び付けられてゐる。有ゆる生産が、小規模なるファミリー、コンサンの組織の下に行はれるとき、其處にブールジョア對プロレタリアの近世產業的問題が起る筈ないであらう。しかのみならず、この紳董なるブールジョアは、官權の壓迫に對して、何時でもプロレタリアと協同して對抗し來たつたのである。官權を對照として、二者は全く同列に立つのである。

近時産業の近代化と共に、所謂ブールジョアなるものが現はれて來た。併し近世的產業の主なるものは、官營にあらざれば外人企業で、民間の企業は未だ極めて少數であるから、純支那のブールジョアも亦極めて少數である。しかもブールジョア對プロレタリヤの反感が、階級鬪爭を捲き起す丈けの永い時日は未だ流れてはゐない。

支那に於ける唯一の支配階級は、官憲である。けれども、畢見によれば、國民が官憲を太く嫌忌したのは、彼等の手に於て裁判の公正を期し得なかつたことが主なる理由であつたらしい。前淸の隨筆物の内に讀まれる官憲に對する怨嗟の聲は、裁判の不正收賄の無制限とに對するものが最も多數である。日知錄や、經世文編等の政書が官吏に就て非難を加へた所も亦多く此點である。裁判を除いた他の一般行政に於ては、一般普通に考へられる程、亂暴を極めたものとは思はれない。知府、知縣等の所謂る『親民之官』は地方鄕紳の後援を得ない限り、行政上の成績を舉げることが出來なかつたのである。もしも彼等の排斥を受くるならば、其地位を保つことさへ出來なかつた。今日の縣知事も、吾輩の見聞に於ては、全く共通りで、此點は縣知事の現狀からでも推量することが出來やう。前淸の吏部は、各地の地方官から地方の田賦負擔の能力、最も有效なる徵稅の方法並に鄕紳の姓名及び其の社會的勢力等に關する報告を集め置き、新に知府、知縣が地方に赴任する場合に、此報告を示めし豫じめ赴任地の狀況を教ゆることになつてゐた。夫れほど鄕

紳の地方に於ける社會的勢力は有力であつて、知府知縣は到底之を度外視することが出來なかつたのである。しかも郷紳は地方の所謂る『年長有德』の『古老』であつて、常に地方民と同列に立ち、之を指導して官憲に對抗したのであるから、地方官は自己の比較的自由に裁量し得る裁判以外には、余り横暴專恣の態度に出づることが出來なかつた。知府、知縣、知州が縣知事に改められた今日に至つても、事情は全く同樣である。

　してみれば、支那の社會は、印度の如く立體的に成立つものではなく、平面的に組まれてゐると看ることが出來よう。かくて、支那には階級的闘爭が無かつたし、また無いのである。

×××

勞働爭議は今後も屢々繰返へされるであらう。而して其都度、罷工のサプラノは、或は新文化運動の或は共産主義者の或は煽民政客のアルトを伴れて二部曲に奏でられ時としては全體の四部合唱に歌はれることもあるであらう。けれども、之を以て支那が赤化的傾向にあるものと觀るのは、やはり早計であると思ふ。

七、一二稿

家庭の幸福は健康に在り
サナトーゲンは保險に優さる



興味津々たる小册子
御要求次第無代進呈

眞正の强壯食料品
サナトーゲン

家庭の幸福は、まつたく懸つて、貴下の御健康にあります。なるほど、保險に依つて貴下が現在の財產を失ふことを防ぐことは出來るかも知れませんが、サナトーゲンは保險以上に貴下の御爲めになります。

卽ちサナトーゲンは貴下の健康を維持し活動力を增進して、從前よりも倍一層の働をなし又此を樂しむことによりて、漸次その社會的地位を高めます。

サナトーゲンは元氣と忍耐力の輝かしい源泉を賦與することによりて、神經と頭腦とを强めます。貴下は事業を成功せしむるため、毎日規則正しくサナトーゲンをお召上りなさい。

さあ、今サナトーゲンを御購求になつて、二三週間、御食事の度每に御上り下さい。貴下は必ず間もなう、その恩惠的效果を經驗なさつて、すぐと往年の靑春の氣分をまつたく恢復し、好き生活の悅樂を十分に御味ひになることが出來るでせう。

二萬四千人以上の醫家が健康增進、元氣恢復劑として熱心にサナトーゲンを推奬してをります。サナトーゲンは眞に恰適の强壯食料品です。

サナトーゲンは貴下の爲めにお役に立つばかりでなく、又貴下の御見樣方にも、貴下の御家族にも御役に立ちます。

サナトーゲンは健康にして幸福なる家庭生活を建設します。

●全國到る處の藥店に販賣してゐます。

サナトーゲン

日本一手輸入元

ゼーエル・タムソン株式會社

神戶市海岸通一丁目英三番

（神戶三宮郵便私書函二十二號）

月刊雜誌—內容—經濟・社會・政治・法律・哲學・資料

社會科學

七月號目次

（定價五十錢 送料一錢五厘）

創刊號目次（再版出來）

（定價八十錢送料一錢五厘）

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



安全無害強力の理想的殺菌消毒劑

ペルゾーン

（中性純過酸化水素液）

含嗽用　二十乃至三十倍液
消毒用　原液乃至二倍液
化粧用　原液乃至二倍液

小瓶（一〇〇瓦入）
大瓶（四五〇瓦入）

携帯に便利なる固形過酸化水素

ペル錠

ペル錠は純過酸化水素を特種の化學的方法にて安定の固形體となしたるものにして之を微温湯に溶解すれば随時に新鮮なる中性純過酸化水素液を得

二〇錠入　〇・六〇
五〇錠入　一・〇〇
一〇〇錠入　一・七〇

◇全國知名藥店にて販賣す

製造發賣元　第一製藥株式會社
本社　東京市日本橋區榑正町
支店　大阪市東區道修町二丁目

（詳細說明書贈呈）

故アルフレッド・マーシアル著　大塚金之助譯

經濟學原理

（全四册）　菊判上製　定價壹册參圓五十錢　送料廿六錢

貧乏は必然であるかの問題に出立し、近代理論經濟學の成果と現代厚生經濟學の基本觀念とを集め、獨創と謙遜とを兼ね、現在斯學の最大作として世界の學界を照す巨火は本書である。分册三はその最も理論的な部分であつて、適切簡明な例解は、讀者を近代經濟分析の最深所に導く。その理論的歸結が改造の社會的情熱を藏する所に物故した教授の偉大な風格を見る。譯文のなほ遠く及ばないのを恐れる——譯者

新刊　發賣

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二一番　改造社

大杉をめぐる同志の人々

中村還一

ローマンスはこれで終つてゐるのか。それともまだ續けられなければならぬのか。否々、それから更に始められなければならぬのかも知れぬ。では、いつたい、何時にはじめられ、何時に終るのであらう。

何時終るかは問ふ所でない。それは時の流れに任せて置かう。私は唯、はじめも知らず終りも無き一くさりのローマンスを、まざまざと思ひ浮べるだけである、あゝしかし、幾人の戀と生命と血と涙とがそこに織り込まれてゐることぞ。

人類の見た夢の名殘りが、歴史といふ反古紙に姿を變へるなら、このローマンスも誤つて落したインクの汚點ほど、行を外れてゐるがそれだけ際立つた印象をとどめるであらう。そして、その赤黒いインクの汚點から、人類の新しい夢が伸びないとも限らない。

×

私は今、福田大將狙撃事件の被告として市ケ谷刑務所に繋がれてゐる和田久太郎と、及び和田と決死の行を共にした、今は獄死して亡き村木源次郎との、過ぎし日の思ひ出を語らうとするのである。いま、これを書くべく過去を振り返ると、私は自分の感情が穏かでない興奮に驅り立てられてゐるのを感ずる。語るべき事柄が、私にはなほあまりに生々しく、追憶が語るに先立つて自分の感情を搖り動かすのだ。そして、過ぐる日、お互に同志と呼び同志と呼ばれてゐた頃のことが全體となつて私の意識の中に盛り上つてくるのだ。しかし私は、自分の感情が勝手に作り上げるドラマから離れて立たなければならぬ。私は唯、與へられた紙數の中に、定められた二三の人々（古川大次郎君のことも書きたいのだが、彼と交りの無い私はたいして書くことを持たない）の思ひ出を、しかも極斷片的に書かなければならならぬのだから。

思想に生き、思想に死ぬ――それが社會運動に志すもの丶常

然持たなければならぬ信條なら、憲兵の締手に、軍卒の銃劍に、その命を落すことも所詮彼自分の選んだ途に他ならない。思想に殉じた者は、鐵窓の月を仰いで彼自らの運命を容認するであらう。彼等は、その思想から約束される所の一切の報酬を甘受して、その就くべきに就き、その行くべき所に行くことを自分の意志の命ずる至上の道德とする。和田も村木も、自らの意志の勝利に法悅を感じつゝ、彼等の運命に就いたに相違ない。思想に生き、思想に死ぬ者の光榮は、彼等の後續者の間に高く行手の光として揭げられるであらう。

大杉は、斯くの如くして思想に終始した。和田も村木も同じ道を進んだのである。そして、その同じ道に續く者は何時までも影を絕たないであらう。

ひとり私にあつては、すべてが一切の夢に終つてゐる。思想に生き、思想に死ぬ――その信條は既に私を捉へない。私は思想を生きることに幻滅した。召されてゐた思想の夢から、忽然として私は醒めた。思想のオーソリテイから解脫したのである。そして、私は今、自分だけの世界に生きてゐる者である。――が、これ以上自分を語ることは差控へなければなるまい。こゝには唯、二つの立場が、彼等と私とを隔てゝしまつてゐる事實を言へばそれで足りるのだ。

大杉の生涯を通じて、彼を中心とする運動が最も高調に達したのは、週刊『勞働運動』の頃であつたらう。それが、それまで或ひは同人であり或ひは外部からの共力者であつたボルシエヰキ系の人達の詐欺に會つてひと度沒落の狀態に置かれ、大杉の口から『ゴマの蠅』などといふ彼一流の毒舌が吐かれたりして、そこに、日本の社會運動が截然とボルシエヰキとアナアキズムの二つの分野にわかれる機運を作つた。そして、それまで强ゐて境界を設けなかつた所謂同志達の間に、ボルかアナかの論議がやかましく、至る所に分解運動の渦を捲き起して行つた。和田も私も、大杉の直參と綽名されるほど、それほどに共産黨に對する憎惡の念を燃やしてゐた。その二人が、或る日、こんな話をしたのである。

『いつたい僕等の最後はどんなことになるんだらう。ボルとブルぢや腹背に敵を受けてゐるんだからな』

『さうだな。尠くとも大杉なんかは殺される可能性が多いな。それも今の政府は法治國家の體面といふ奴に自縛されてゐるから容易に殺しもすまいが、それよりもボルにやられる。ボルはきつとやるぜ。だから、或る時が來たらこちらがやるかやられるかだ』

『それもさうだな』

訊いたのが私、答へたのが和田である。

所がそれから三年後の九月十六日、大杉は法治國家の雇人たる憲兵等の手で無殘に虐殺されてしまつた。自らはそれほど信じようともしなかつた輕卒な――而も多少誤つた――豫想は、あまりにも急速に事實を齎してしまつた。

復歸――その爲めに和田がピストルを握りしめた時、私は旣に彼とグループを異にし、戰線同盟といふ下らない團體の爲めに奔命しつゝ大阪に在つた。そしてひとり、震災の時に受けた極端な迫害と龜戸事件と大杉事件の異常なショックに心の激動を感じつゝ、合理的運動に對する懷疑に懊惱し、思想に太陽を暗くされてゐた。しかし、私はピストルを握る代りに、やがて自分の思想を擲り捨てるやうな機會に到達してしまつた。震災後大阪に住んでゐた私は、社會運動を去ると共に久しぶりで東京に居を移すことにし、その準備の爲めに出京しての留守中、和田が大阪に自分を訪ねてくれた、會ひたいと思つてゐた矢先だつたので、いよいよ歸京して後、早速和田と落合つてゆつくり思想上の問題を談し合つてみようと思つた。當時、アルス新聞の編輯をしてゐた和田は直ぐ來てくれた。で、私が自分の思想から解放された氣持ちを話し出さうとすると、和田は意地惡くせゝら笑つて話題を一蹴してしまつた。私は餘計な老婆心から、依然として自分の思惟の爲めに、即ち思想のマニアの爲めに奔命してゐる彼を論破したかつたので、彼の態度に胸を惡くして別れ、そしてそれつきり會ふ機會がないうちに震災の一週年がやつて來た。

忘れもしない去年の九月二日の朝である。私が眼をさますと、近所に住んでゐた吉田一が私の枕元に立つてゐた。

『やつたぜ、和田が』

『えつ』と言つて私は飛び起きた。

『誰を』

『福田をだ』

けれども、新聞を見た瞬間、私の胸には新に何か物が閊えたやうな氣がした。二錢銅貨大の福田雅太郎の背中の火傷と和田の悲痛顏とが眼の底にチラついた。が、私はすぐ考へ直して自分に言つた。なアに、和田自身は今頃もう、成敗の外に超然として哄笑してゐるに違ひない、と。

實際、彼はそんな風な男である。自分が飛んでもない失策をやつたことに氣がついて、大きな悔恨に打たれても、すぐ別な傍観的な彼が出て來て、悲痛顏をしてゐる自身の額を拳固で一つドヤしつけ『おい、どうしたんだ、てめえ』といつた風の

である。

　これは、唯物史観に對する彼の態度の上に如何にもよく現はれてゐる。多分、大正十一年の一二月頃だつたと思ふが、堺利彦老がその頃共産黨の機關として發行されてゐた『赤衛』とかいふ雜誌に、例の冷々磊々たる調子でアナアキストに對する痛次的文章を書いた。これはレーニンがアナアキストを揶揄して『小兒病』と呼んでゐるのを引例し、『彼等の一足飛びな理想への憧れと焦燥的な氣分には同情するが』といふやうな脈味を並べて、個人の意志をいくら力調しても客觀的事實の推移はそれ自身の法則を以てする以外に如何とも爲し難いといふ意味を述べたものであつた。その時、和田と私とは、月刊『勞働運動』の紙上で堺老に一矢を報ひることにしたので、偶々二人の間に議論が持ち出された。

『經濟的關係が我々の生活意識を決定するといふのは動かしがたい事實だよ。客觀的には、だからいくらでもさうしたことを認めるよ。けれどそれだからつて、我々の意志の自由を拋つ必要はないぢやないか。事實に適合しようといふのが唯物史觀流の信條なら、僕なんかは、こつちから適合しようとするんぢやなくつて、唯事實がさうなるのを苦笑して眺めるだけだね。僕の意志は僕の主觀から出發するより仕方がないことも事實なんだ』

　彼は斯う言つて涼しい顏をしてゐた。二人がその駁論を書いて後、堺老から二人に宛てゝハガキが來た。それには、私が堺老を『唯物史觀的老症』と言つてやり返したのをそのまま逆にとつて『老症生より……小兒病患者様』と書き、『君等は結局英國流の急進ボルシエヰキなのだ』といふ結論が下してあつた。和田はそれを見て、またも一流の苦笑を洩らしたきり何も言はなかつた。

　苦笑しながら眺める――それが彼の個性の最も著い特色だ。そして彼は、自分自身をさへ、その行爲の後に苦笑しながら眺めゐる。だから、警察で×××にされて×××られても、うしろでつこに縛り上げられて姫路の街中を監獄まで引かれて行つても、それに憤激したりジタバタしたりするよりは、おのれの慘めさを凝つと眺めて、苦笑しながら堪えるといふ風なのだ。

　彼の顏面筋肉は、いつも悲痛に顫へやうとしては凝つと堪えてそれを苦笑に變へてゐるやうな趣きがある。意固地でヒネクレもので不精で我儘で、先づ恐らく世の中の困り者の特性を十二分に兼ね具へてゐながら、何處かにしんみりと人を懷かせる所があるのも、彼の性格の底に湛えられてゐる洒然とした超越味の故でらう。彼は實に多くの者に愛される。たいがいの者は

『和田久』といふと『好きな奴だ』といふ。

私が最初に和田を知つたのは、大正六年の春寒い頃だつたと思ふ。彼は今、三十三だから、當時二十五、私が二十、お互に驅け出しの主義者、主義者のヒヨコだつた。その頃、小石川白山の本屋南天堂が電車の岐れ路の角の所にあつて、その二階に、日本の社會運動の慈父とも言つていゝやうな通稱渡邊のおぢさん事渡邊政太郎老人が住んでゐた。我々はそこで、老人の紹介で知り合つたのである。

序でに老人の事に就て一言するが、その老人といふのは寧ろニツクネームであつて、實際は四十代、貧乏と病氣と過勞とで顏色憔悴し、それに鬚や髪を伸びるに任せてゐるので見るからにぢゞむさく、そこからその名も起つたのである。大逆事件以來の日本の社會運動の冬と呼ばれた時代に在つて、廣告くばりや飴賣りをやりながら、又時にはバリカンを持つて貧民窟を無料散髪までして歩きながら、勞働者の間から一人二人の同志を集める事に熱心な努力を續けてゐた。さうして人を集めては、自分の屋根裏住居を會場にして、月に二度宛の集會を開くのであつた。先年伊豆の天城山中で寫生旅行に行つて凍死した久板卯之助君は、その熱心な共力者だつた。二人共、極端なピューリタンだつたのでその態度はまるで宗教の傳道者然としてゐた。

大正七年の晩春、貧苦と過勞は渡邊老人の生命を奪つてしまつた。『彼が死灰の中より自由の大樹は生ひん』と荒畑寒村君が聲涙共に下る告別の辭を述べたとき、會衆は息を詰らすやうな悲しみに噎んだのであつた。そして、老人の殘して行つた團體は彼の號に因んで北風會と名けられ、『實行へ！』『實行へ！』と叫ぶ若い同志達の手に支へられるやうになつた。日本に於ける勞働運動の勃興期ともいふべき大正八年からかけて、例の社會主義同盟創立に至るまで、その中心となつて活動した若手の同志は、殆んどその北風會に生ひ立つた人達なのである。和田は勿論、その中での出色の闘士であつた。

播州明石に生れ、大阪の株屋の手代をして少年期を終つた彼は、早くから世の中の苦酸を嘗め盡して、そこに環境から影響されるだけのものを充分性格に植えつけられ、若くして世に拗ねた一人前の人間が出來上つたらしい。彼が皮肉を好み、世間に憎惡を持つやうになつたのも、おほかたそこに由來するのであらう。彼は、社會運動をやりながら、決して『人類』や『民衆』なんてものを愛さなかつた。そんな架空な、センチメンタルな觀念的遊戯はきらひだつた。『他人の爲め』といふことをへ

ドの出るほどきらつてゐた。彼の信條は『自分のため』一點張りだつた。彼の運動は自分の反逆的な意志を勞働者に點火すること以外に無かつた。自分を生きる――自分を生きることを瞶めながら生きるのだ。だから彼は、アルツイバアセフの『サイリオフ』の氣持を愛した。『サニン』が、汽車中で、愚痴を言つてゐる農民に憎惡を感ずるあの氣持に共鳴してゐた。ピストルを握つたときの彼は、そつくりそのまゝ『サイリオフ』だつたと見てもよからう。

株屋をやめてから、車夫もやつた。車夫になりたて、藝者をのせて引つくり返つたさうだ。それから新聞配達にもなつた。富川町の人足もやつた。和田の古巣といへば木賃宿のことであつた。

その株屋時代に俳句をひねり出して、一時は碧梧桐の弟子となり、今でもその道にかけては素人離れがして居る。蓋し俳人としても近來彼位な名吟家はあまり居るまいと思ふ。非常に一茶を好み、その句風を慕つてゐる。一茶とはその氣持に共通する所がある故だらう。俳句をやるといふ理由も手傳つてゞあらうが、彼は文學や思想の方面にだんだんと入り込んで來たらしい。そして、何かの偶然がその頃堺老の手で發行されてゐた『へちまの花』といふ薄つぺらな雑誌を彼に讀ませるやうになり、それが彼を社會主義思想に近づけたのださうだ。

彼が上京したのは多分大正五年頃であつたやうに聞いてゐる。上京後、立ン坊になつたり新聞配達をしたりしながら、渡邊老人に近づいて主義の勉强をやりつゝあつた。その後の事である。彼は一日、失業のいらだゝしい氣持をかゝへてブラリ〳〵淺草公園を歩いてゐた。すると、ベンチの陰から『おい兄弟』といふ調子で話しかけたのが、例のポン引である。未だ田舎者だつた上に、どうでもなれといふ呑氣な所もあるので、たあいもなく引つ掛つて足尾銅山へ送られてしまつた。送られて見ると鬼の住む地獄、それも殘忍な飯場頭に買はれて、ムゴクコキ使はれ、まつ暗な竪坑の昇り降りに生の恐怖を感じたらしい。やつと隙を見つけて脱走したが、徒歩で山越しをしてゐる途中を捕まつて引き戻されたりした。それでもやつとの苦心で、救援の手紙を渡邊老人に送つて來た。老人はその手紙を謄寫刷りにして各方面に配り、自分は單身足尾に乘り込まうといふ決意をした。そして、愈々明日出發しようといふ前の晩に、頭に繃帶をいつぱい捲いてゐる和田が蹌踉として老人の家の戸を叩いた。彼は、或る日竪坑で足を踏み辷らし、逆さに轉落ししようとした。が、その刹那、足が坑道の足場に引つ掛つて危い生命を助かつたのである。その時、頭部に可成り重い負傷

をしたので、暫く休養をして飯場から醫療所へ通つてゐた。その不幸が幸だつた。彼は醫療所へ行く途中から汽車に只乘りして逃げて歸つたのである。彼の頭には、今でも傷痕が殘つてゐる。

もう一つ、彼は、死に損ひに就ての挿話を持つてゐる。株屋時代、極度の神經衰弱に掛つて世の中が厭はしくなり、四國の方へ旅して其處の海岸から身を投げようと計つた。さて海邊へ來てみたが、そこの崖のやうになつてゐる上から水面を覗くと恐怖が出て來て却々に死ねない。それで、海岸から數十步の後に退いて、驅け足で一思ひに飛び込まうとしたのだといふ。いよいよその方法で驅けて來て、いざ飛び込まふといふ刹那、まさに間一髮といふ時に靑天井から彼の頭をめがけて、冷たいものを叩きつけた奴がある。彼は、ハツとしてそれに氣をとられ、飛び込むのをやめて拭つて見たら何かの鳥の糞だつたといふ。さうした瞬間に、心氣一轉して彼は死ぬのを斷念してしまつた。彼が極端な冒險に就く場合に、自分の運命に對して勇敢であり得たことは、さうした死の際に自分を置いてみた經驗が幾分でも役立つてゐないであらうか。

和田久は昔ながら和田久である。彼が社會運動に飛び込んだ時分から、十年を經過する今日まで、その人柄と言ひ、思想と言ひ、殆んど變つた所が見られない。大杉のもとにあつて、その行動のみでなく、思想の上にまで終始一貫し得たのは村木と彼位なものであつたらう。私をはじめ、他にも隨分多くの人達がしたやうに、オツチヨコチヨイな動き方——變節改論は彼に於て見られなかつた。それだけまた、彼の思想、そのアナアキズムはインデイビデユアルな分子を多く持つてゐた。彼とても、勿論思想の惱みを惱んだに違ひない。その思想と、彼自身の具體的自我との間の距離を感じ、そこに、思想に對する全我的一致を見出すことに懊惱したに違ひない。彼に於てはそれが、彼のインデイビデユアル・アナアキズムと、アナルコ・サンデイカリズムとの内面的な抗爭となつてゐたらしい。彼は、現實の民衆を憎惡する。けれども、民衆といふ假想を離れて、彼の思想も運動も成立しない。そこに思想上の苦悶が無ければならない。そこで彼は、矛盾を認容した。矛盾は生の事實だ、といふやうな考へ方をした。大杉の思想を最もよく解し、且つ體してゐた點でも彼が一番であらう。體してゐた。といふ言ひ方は妥當でないかも知れぬ。事實は、最も多くの共通點を持つてゐたのである。

いつか、彼がこんなことを言つたことがある。

「石川三四郎君の話だが、フランスの何處かの街上で、一人の勞働者が些細な事柄から警官に擲つたり蹴たりされてゐた。その痛憤すべき事態の中で勞働者は唯意氣地なく打たれてゐた。そこへ共産主義者が通りかゝつた。その有様を見て共産主義者は言つた。『警官の奴横暴だ。怪しからん。勞働者は可哀さうだ。助けなければいけない』と。するとそこへインディビデュアル・アナアキストが通りかゝつてまた言つた。『へん、意氣地無しの豚野郎。うんと擲られるがいゝ』と。僕には、兩方の氣持が半分半分にあるね」

この言葉は彼の多面的な氣持を現はしてゐて面白いと共に、その思想の根底をハッキリさせてゐる。

昔ながらの和田久に一つの例外とも言ふべきは、彼が辯舌家になつたことだ。そのかみ、渡邊老人の家の例會で、それまで、堺、荒畑、高畠といふやうな先輩の講義ばかり聞いてゐたのが、少しは自分達も喋る稽古をしなくてはといふ所から、順々に立つて自己紹介と感想とを述べ合ふことになつた。順番が來て、我が久太がやをらテーブルの前に立つたのである。私はこの時ほど彼の赤い顔を見たことが無い。そして、そのまつ赤な顔が押しだまつたまゝ、一分、二分、ウンともスンとも聲がない。そのうちに、テーブルの下から拳骨が一つ、ニユーッと伸びあがつて彼の額の所でぴつたりと止まつた。動かざることまた一分。拳骨がテーブルの上に下ると彼は首を上下に振つた。無言にしてまた二分。さうして彼は自分の坐にかへつてしまつた。これを和田の五分間演説といふ。しかし、それから間も無く、彼は自己紹介の演説に完全に成功した。曰く『私は非常に性慾の強い人間であります。私は自分の堪えがたい本能の滿足の爲めに、十四の時から淫賣買ひをしました。さうしてヒドい梅毒に冒されたのであります。私の臍からは一年中膿が流れて居ります。私の血管には梅毒菌がウジョウジョしてゐるのであります。……』

彼の自己紹介といふのは斯ういふ調子のものだつた。以來和田久のヘソウミは一躍有名になつてしまつた。こゝらに彼の素ッ裸な性格と多分の僞惡趣味とが躍如としてゐる。そのヘソウミは後に監獄生活で不味いものを喰つたお蔭か流れなくなつたと言つてゐた。けれども、根から癒つたのでなかつたから、それには隨分悩まされたらしく、震災の年の春から夏へかけて可成り永い間那須の温泉に浸つて、熱湯の中にスパルタ式な梅淋聯合菌の克服運動をやつて來た。根治したかどうかは知らない。唯、彼の腰のまはりの物凄いやけどの痕が今も眼の底に残つてゐる。

そこで彼の辯舌の問題にかへるが、その後私は、幾多の公開の演說會場で、彼が五尺そこそこの倭軀を演壇の前後左右に運びながら、音吐朗々と大雄辯を奮つてゐるのを見た。その聲は低い方だつたが、張りがあつてよく通る中音だつた。論旨は文章で表はす程にテキパキして冗が無く、巧者でないまでも立派だつた。うまいものだナ、と私は思つた。そして、うまくなつたものだナ、と思ひ返した。足尾に鑛山勞働同盟會を中心とするストライキが起つたとき、彼は大阪から驅せ參じて坑夫數千の前にその雄辯を奮ひ、自分の嘗て共處に虐げられた事實と反抗の激情を吐露したものである。

彼が實際運動に對する門出とも言ふべきは、大正七年の春、久板卯之助と共に大杉のもとに走り、月刊『勞働新聞』の發行に携つたことであらう。當時、大杉はその戀愛事件のために同志の交誼を失し、巣鴨の奥に伊藤野枝との貧しい家庭生活に閉ぢ籠つてゐた。唯一人、同志として陰になり日向になつて盡してゐたのは村木だけだつた。(この當時の彼の貧慘な生活と、その中に在つての大杉の實行に對する情熱とに就ては、村木自身が筆をとつて改造誌上に書いたことがある)。一方、和田と久板とは、渡邊老人の穩健な教壇的傳道にあきたらなくなり、彼等の暴烈な意志を投げ込むべき實際運動を欲しつゝあつた。情熱を抱いて風雲をねらつてゐる大杉と、彼等二人とが接近して行つたのは當然のことだ。(久板のみは、彼の四十過ぐるまで童貞であつたといふほどのピューリタンの爲めに、大杉の生活上の個人主義が容認出來なくなり、後に飄然大杉のもとを去つた)。

二人の同志を得た大杉は、巣鴨の奥から龜戸の勞働者街へ引越して、勞働者に讀ませる爲めの新聞の發行に從つた。そして、そこには續々として勞働者の同志が集つた。新聞が彼等數人の喰ふや喰はずの熱心から作られると、他の同志がそれをそれぞれ自分の働いてゐる工場へ持ち込んで行つた。大杉の周圍には、世間や政府から見て何となく險惡な一團の空氣が漂つてゐるやうに思はれだした。和田も久板も尾行附となつた。出入りする人々の身邊にも警察の目が光り出した。新聞は發賣禁止――なら未だしも印刷中を押收された。發行人の和田と印刷人の久板は起訴された。私なども記事を書いた廉で召喚された。和田は一年六ケ月、久板は十ケ月、いづれも監獄へブチ込まれた。これが彼等自身の初陣であると共に、若い同志達の監獄入りの魁であつた。

この新聞發行中に、和田に就ての面白い話柄が残された。といふのは、毎號禁止押收が續くので、それに對する對抗策とし

て種々と先方の裏を掻く方法がめぐらされ、或る時は紙型を二枚宛作つて一枚宛をおとなしく押收させて置き、他の一枚を持つて逃げるといふ計略を立てた。和田がつまりそれを持つて逃げたのである。所が張り込んでゐた私服隊に發見されて追跡をくらひ、紙型をかゝへて横つ飛びに逃げ出した。追つ手は多勢、逃げる方は一人、所は京橋區内で、白晝の街中をキネマそつくりの追跡の光景が展開されたのだ。が、姿は小さくても新聞配達をやつて駆けるのに慣れてゐるから却々快足だ。八重洲海岸のあたりから、茅場町の公園へかけて、ぐるぐる逃げまはるうち、一人落伍し、二人落伍し、とうとう逃げおはせてしまつた。斯うして新聞は無事に發行されたのである。

監獄生活で彼は盛んに本を讀んだ。彼は其處で、經濟學や社會學の一般智識を養つて來た。一年半の後娑婆に出た彼は、世の中が驚心愕目に値するほど變つてゐると呟いた。さう思つたのも無理はない。無數の勞働組合は雨後の筍のやうに生れ、『改造』や『解放』のやうな雜誌も出て、社會的思潮は一世を風靡する概があつたのだから。

再び大杉を中心に、和田、久板、近藤、私を同人として、月刊『勞働運動』が發行されたのは、和田の出獄後間も無い、大正八年の十月だつた。

和田は關西の支局を受持つて、古巣の大阪に走つた。爾來彼は、アナアキズムの運動の大阪鎭臺といふ形だつた。關西に於けるアナアキスティックな運動は、殆んど彼を母胎として生れ出たといつても大して過當の言ではあるまい。

運動のことゝなると不精に似合はずよくコソコソと飛び歩くし、從つてその飛び歩くのに邪魔になる尾行をのべつに撒きちらすから、警察から憎まれたことも一通りでない。或る時は、京都の街上を歩いてゐて顔見知りの警部に出會し、故も無く警察に引つ張り込まれて　　　れたといふ。

彼の運動上に於ける詳しい經歷とその勞苦の數々を書いてゐたら到底限りがない。私は、この思ひ出の斷片を奔馬のやうに飛ばさうと思ふ。

和田には多分の探偵趣味があつたらしい。ふだん讀書には大體不精の方だつたが、モウリス・ルブランのルパン物なら夜明かししても讀み終らないでは氣が濟まぬといふ風だつた。日本物でも白井喬二といふ人の作などを認め出したのは、私の知る限りでは彼が最も早かつた。『シヤアロツクホルムスは筋だけだが、ルパンには性格がある』などゝ言つてゐた。實は私も彼のお蔭でルブランや白井喬二を知つたのである。彼はしかし、單

に探偵物を好んで讀むだけではなかつた。即ち、それを實地でゆく趣味があつた。そして彼は、ひとりこつそりと探偵の探偵をやつては北叟笑んでゐた。その中で一番振つてゐるのに、古褌物語と題したら一篇の探偵小說にでもなりさうな話がある。

或る同志にスパイの疑ひが掛つて、それが、大分濃厚になつて來た。その頃大阪から一寸歸つてゐた和田は、その探偵趣味を早速實地に試みるべく、乳母車に大杉の長女魔子ちやんを載せて、例の如く尾行を從へながらその同志の家を訪れた。同志といふのが彼よりも先輩で、それまでは絕對的な信用を同志間に得てゐた。彼が訪ねたのは、そこに預けてある禁止物の印刷物を受取ることゝ、それを持つて、明日の一時の汽車で大阪に發つことを告げるのと、この二つの用件の爲めだつた。印刷物は魔子ちやんの乳母車の底にこつそりと隱され、彼はまた尾行を從へて洒然と車を押しながら社へ歸つた。翌日、大きな風呂敷包みを脊負つて、彼は東京驛の大玄關にかゝつたのだ。するとそこには、警視廳のお役人がちやんと待ち構えてゐて、その包みを押へてしまつた。お役人は明けてみせろと言つた。『勝手にしろ』これがさういふ場合彼の吐き出す常套語である。そこで彼は、日比谷署まで連行され、その包みは警官の手に解かれた。中から仔細らしく出て來たのは煎餅蒲團と古褌とであつた。そしてそれ以外の何物でもなかつた。

大阪に發つた筈だつた彼は、快心の笑みを洩らしながら勞働運動社に歸つて來た。その同志であつた男は、かくしてスパイの決定を受けたのであつた。

酒は猪口一杯で金時のやうになり、煙草はいたづらに煙を吐き出すだけ。探偵趣味のほかに、趣味とか、道樂とかいふものを擧げてみれば、落語と義太夫に稍々通じ、時々席へ行つて高座を睨みつけること、芝居なら歌舞技物、小說なら鏡花に龍之介。俳句はどうしたわけか永い間中絕したかたちになつてゐた。唯、彼の女郎買話は少々有名に過ぎたが事實はそんなでもなかつたらうと思ふ。將棊はお仲間では弱い方でないまでも初段に片桂位。碁は初段に九目の私に三目ほども弱いのだからこれもお話にならず。强いと言へるのは、鼻つぱし（これは人一倍）と八八である。彼の技能として優れてゐたのは、文と書である。文は、勞働運動社隨一の名文家であつた。一寸した宣傳用の雜誌記事を書いても、それが一體の文章として味があつた。隨筆俳文の類にはとりわけてすぐれたものがある。書は、何處かに彼の性格を髣髴させるものがあつた。正規の習熟によつたものでないらしいから、その道の人から見ればどうか知れないが、尠くとも我流としては達筆と言ふべきだらう。勞働運

動社の看板も、雜誌の題字も彼の手に成つたものである。

人事關係に於て、彼の大分惱んだらしいのは、野枝さんとの折合ひのよくなかつたことである。大杉が、生活上の極端な個人主義者だつたやうに、野枝さんも負けない個人主義者だつた。そこへもつて來て、和田もそれに拮抗し得るやうな生活態度を持つた男だつた。大杉との關係に於ては、彼が上から抱かれるやうな地位に立つから何等問題も起らなかつたらしいが、野枝さんとではさうはゆかず、盛んに正面衝突したらしい。大杉が佛蘭西へ行つて留守中、彼は野枝さんと一つ家に住むのを嫌つて下宿住ひをしてゐた。

斯うして自己の生活の全部を社會運動に投げ込んでゐた彼にも、時あつて、老齡の父のことを思ひ、自分の進退に迷ひを感じたことのあるのも事實である。彼は、二三年前、暫く社會運動を絶つて父を墓に送るまで故鄕に百姓をしようと決意して東京を去つた。所が、彼の決意は、あまりにも唐突に悲劇的な展開を齎し、そしてあまりにも急速にその幕を閉ぢてしまつた。父は、彼のさうした心情を喜ぶのあまり、彼が歸鄕して數日の後、ポツタリ死んでしまつたのである。苦笑に濟ましてゐる彼の腹の底を、私は自分のセンチメンタリズムから勝手に推測して、私自らを佗しくしてゐる。

彼に一つのラブ・ローマンスがある。そしてそれは、彼の前半生を通じてたつた一つの和やかな思ひ出となるものだらうと思ふ。彼が戀愛にめぐまれないといふことは、お互の冗談の折りによく語られたものだつた。「おれは戀の相手を得ても、肉體的に所有することが出來ないからな。おれは相手が出來たら同棲する前にすつかり自分の毒を驅逐しなければならないんだ」彼は眞面目顏してこんなことも言つた。ヒネクレ者の僞惡家の彼も、戀とか愛とかいふ假想の前には、驚くべき純潔さを不用意の間に吐露してゐたのだ。それが那須の溫泉で療養中、同じ病氣を治しに來てゐた或る女と偶然にも意氣投合して、歸京後同棲するつもりにまでなつたらしい。何んでもその女は可成りな變り者だつたとか。立膝か何かで姐さん振りを發揮する女だつたとか。さうした好みが和田の半面にあるので、或ひは似合ひの一對だつたかも知れぬ。が、女の親の方にもうるさい事情があつたりして、二人の間の交渉が種々に縺れたらしい。今度の事件までに、それがどうなつてゐたのか私は知らない。私は、その頃に彼から職業の口探しを頼まれて、逐一事情をきいたゞけである。

事件以後私は面會にもゆかない。震災後一度會つたきり隨分

久しく會はない。しかし、私は會ひたくない。會つたとしても、私は彼に向つて言ふべき言葉を知らないであらう。

×

村木源二郎――彼は既に追憶の世界の人となつてしまつた。今度の入獄が事實上の死刑になるであらうとは、敢て私ひとりの悲しい豫測ではなかつたらう。彼は久しい以前から健康を氣づかはれてゐたのだから。

この人の生涯の前には、私は默つて頭を下げる。そして、彼のありし頃のことを思つて自分の至らなかつた考へを悲しみたくなる。

實に私は、彼に接してゐた可成りの永い間、自分の輕薄さから、そして物の奥底を見通せない幼稚さから、彼の人となりを充分に理解することが出來なかつたのである。出來得ないまゝに、それは好々然たる一人格でなければ、不思議な一存在といふ位にとゞまつてゐた。しかし、今となつてみると、その好々然たる一人格が大きく光つてきた。その不思議な一存在の底から村木といふ人物の全輪廓が浮きあがつて來た。

彼は運動の上で何んな役割をしてゐるのか、一寸見には誰も知ることが出來なかつた。宣傳の記事を書くでもなく、演説會に出るでもなく、議論するでもなく、それでは何をしてゐるかと言へば、監獄にはいつてゐる者の差入れの世話をその身に適つた天職でゞもあるやうに倦まず撓まずやつてゐた。そして、それつきり彼の仕事は無いやうにさへ見えた。けれど、事實はそれだけのことが容易な仕事ではなかつたのだ。誰にでもやさしく親切に振舞ひ、その情愛で人を惹きつけてゐた。『村木さん』を愛敬しないものは無いだらう。尾行巡査さへもが、彼を徳としてゐた。しかし、斯うした彼の日常生活の間に、大きな事業には無くてならぬ最も主要な役割が擔はれてゐたのである。

唯、同志の世話ばかりしてゐて、何事にも容喙する素振りを見せなかつた彼は、而も何人も斷乎として言ひ得ざるところを『大杉君、それはいけません』とキツパリ極めつけるやうな熱意を持つてゐたらしい。そんな風で、彼は隱約の間に大杉の番頭乃至參謀となつてゐたのだ。だから、彼の表面の仕事ばかり見てゐた分には、側にゐても彼の本當の存在が判らなかつたのだ。

和田が獄中から四月號の『勞働運動』に寄せた『同志村木源次郎君を憶ふ』と題する一文の中にこんな一節がある。

『横濱の源ちやん』『鎌倉の源兄イ』は、黑襟のかゝつた着物や、しぼり染の浴衣が大好きだつた。そして彼は、妙にその遊びに行く先き先きで、直ぐ其處の「内の人」になつてし

まふ、他の眞似の出來ない、一種のやわらか味を有つてゐた男である。

　僕に、變な江戸趣味のあるのも、半ばは鏡花の小說の影響であるが、半ばは村木のお仕込みである。最初、僕を八丁堀や淺草の金車へ引つぱつて行つたのも彼である。

　彼は、もとはクリスチャンである。横濱で社會主義運動に加はつて、そのクリストの信仰はやや失つたが、それを根帶から捨てたのは、赤旗事件で入獄して、千葉の監獄で、ヘッケルの「宇宙の謎」を讀んでからだ、といつてゐた。

　しかし、誰も知る通り彼は信仰の男であつた。クリスチャン臭い處もやや殘つてゐた。毎年、クリスマスには、知人の幼い子供たちに「贈りもの」をしてゐた。

　やわらかい、やさしい村木を知つてゐる人は多いが、彼の「澄みきつた底の火」をも知つてゐた人は、或は少なかつたかも知れないと思ふ……。ポーランドの亡命者ボレツキイと、大杉の巣鴨の家で寫した寫眞の顏には、彼の、するどい、強い面影が實に好く出てゐる。あの寫眞は、いま何處かに殘つてないかしら……。』

　和田のこの文章を讀んだだけで、村木の人となりや風丰を想像することが出來ようと思ふ。

　渡邊老人が死の床に就いてゐるとき、枕頭につききりでその肺病の痰を拭つては脣を絕間なく濡らしてやつてゐたのも彼であつた。葉山事件以來、大杉と交りを絕つてゐた渡邊老人の病床に、何人も及ばぬ手厚い看護を加へながら、彼はまた大杉とその運動のために心を碎いてゐたのだ。

　私は自分が病氣して寢てゐる枕頭に、彼から藥を贈られて泣きたいやうな感激に咽んだことがある。

　しかし、彼との交渉を通して、何よりも忘れられない事件がほかにある。それは大正八年の五月のことだつたと思ふ。當時、實際運動へ、組合の中へ、といふやうな憧れが、私達を北風會の集會のみに閉ぢ籠つてゐることから慊らなくさせた。そこへ、或る機會が與へられたので、私は或る男を會長にして勞働同盟會といふものを作つた。しかし、その動機の問題と會長たる人物に對する周圍の疑惑から、私は北風會の若手の同志達によつて査問會の席へ据えられることになつた。次第によれば擲りもしかねまじき權幕で、十何人かの同志が私をとりまいたのだ。私は悲しくなつた。そして情けなくなつた。それから息が詰るやうになつた。するとその時、突如として、村木が

『中村君、何んにも言はないで、勞働同盟會をやめて下さい』

と少し吃り癖のある口調で、張り裂けるやうな感情を抑へてゐるやうに聲を顫はせながら言つた。私はあまりに突然なその言葉の眞意が、すぐには理解出來なかつた。が、それよりも私は滂沱たる彼の涙と爆發したやうな泣きじやくりの聲に、心から激動しないわけにゆかなかつた。彼の眞意がそれで悉く了解し得た。私も泣いた。聲をあげて泣いた。そして、辛ふじて『やめます』とだけ言ふことが出來た。

けれども、その翌日になつて、彼は多勢の同志を說いて私を再びその運動に留まらせるやうにした。彼の泣いた所以がいよいよハツキリわかつて來て、彼から激勵の言葉をきゝながら私は更らに泣いた。

その後、屢々私を訪ねてくれては、淺草公園に連れ出して三ツ豆を御馳走してくれた。

もう一度、私は彼の涕涙滂沱たる有樣を見たことがある。大正七年の春、當時赤坂に住んでゐた福田狂二君の所で、ロシア革命一週年記念の集會を開いたときのことである。大杉と高畠素之君とがロシア革命の戰術問題で議論をやつた。それが動機になつて會場の空氣が大分緊張した。高畠君のロシア革命謳歌の氣焰に憤激する所のあつたらしい村木は、演壇に進み出て彼の個人的反逆の信條を叫び、自分の胸を指して師の一個が既に失くなつてゐる事實を語つて、この身體を以て當るの意氣無くんば……いふ意味のこと切々人に迫るやうな口調で辯じ去つた。そして、自ら感に堪えぬものゝ如く、聲を振りしぼつて泣いたのである。壇下の高畠君は、その時『やつて貰はう』と嘲笑的に叫んだ。

その翌日、村木は賣文社樓上に高畠君を訪ねて、その面前へピストルをつきつけたといふ。

『やつて貰はう』それから七年の後、彼は事實をもつてそれに答へたのだ。

それにしても、大杉の魔子ちやんは淋しいだらう。第二のパパの如く可愛がつてゐたといふし、魔子ちやんも懷いてゐたといふのだから。

古田君のことは、また適當な人があつてそれを書くだらう。私はこれで默ることにする。

内氣な娘とお轉婆娘（遺稿）

伊藤野枝

『女はしとやかでなくてはいけない、をとなしくてはいけない』と云ふ訓しへは甚だ結構な事です。一時『新らしい女』と云ふものが盛んにはやつた時には、大變なお轉婆がいろんな奇拔な眞似をして人目をおどろかしました。しかし、どんな勝手な眞似をしても氣持の上に、或るデリカシイを持つてゐなければならないと云ふ事は、其の當時そのお轉婆の一人であつた私すら痛切に感じた程でした。私達は『新らしい女』の本家本元のやうに云はれてゐましたけれど、其の頃世間に續出した所謂新らしい女の思ひ切つた行爲には驚異の眼を見はつたものです。それは本當に馬鹿々々しい、苦々しい事を澤山見せられたり聞かせられたりしました。そして、さう云ふ人達の行爲が皆んな私達のした事として、見當違ひな非難攻撃を皆んな受けなければならなかつたと云ふやうな苦い經驗は、いよ／＼私達に、エセ新らしがり屋を淺間しがらせたのです。

あの當時問題になつた吉原行きとか五色の酒とか云ふ事を、まるで私達のすべてゞあるかのやうに云ひなした世間の馬鹿共よりは、それをまた麗々と眞似をする連中に至つてはお話にもなんにもなりません。何の考へもないたゞの模倣と云ふことが、それ程馬鹿らしく見えた事はありません。

處がまた私は、本場の女性のデリカシイと云ふ事が其の意味を取りちがへられて、無暗と耻かしがりの模倣をする事が、舊い考へで奬勵されてゐるのをも同樣に馬鹿々々しいと思はずにはゐられません。

よく見もし、聞きもしますが、活動寫眞の中とか電車の中などで、をとなしくとりすまして、はづかしがつてゐる女の弱味につけ込んで、飛んでもない不都合を働く男があります。少し確つかりしてゐるものなら、たとへ口へ出して詰責しないまで

末弘嚴太郎著

學生、法曹、法治國民に此一書を捧ぐ

新らしき法學の權威末弘氏の快著。該博な斯道の知識を以つて法律に對し民衆が如何なる態度であらねばならぬか、法の前には平等であるべき筈の民衆が果してそうであるかを、あらゆる事實より証明し、且つ我等が國家人とし、社會人として生存して行くに必要である法律上の原則、形式、事實運用に對し談笑の間に誰にも分るやうに説いたもの。理は深遠に及んでいるが、語の平易なるため萬人均しく理解し得べく、そして著者の[illegible]

も、態度で詰れば大抵逃げて行くものなのです。しかし、默つてたゞ迷惑さうに、恥かしさうに顏をねぢたりしさつたりする位では、さういふいたづらでもして見る位の圖々しい男は益々圖に乘る位のものです。私などは、さう云ふ不都合な圖々しい奴は大勢の中で赤恥をかゝして以後そんな眞似をさせない位のつもりで、詰責する事位は當然だと思ひますが、普通の女らしいしほらしさを捨てかねる人達には、さうも思ひ切つてやれないのが當然でせう。けれども、兎に角確かりした態度をとる事は是非必要な事と思ひます。

　私はよくこみ合ふ電車の中などで、こみ合ふのをいゝ幸にして、わざと身體をすりよせて來たりする不都合者に時々出遇ひます。そんな場合には、どうも表立つてとがめる譯にゆきませんから、何時もその男の顏を見ながらわざ〳〵足を踏んでやるとか、出來る丈け強硬にひじをつつ張つて押し返してやるとか、默つて、出來るだけしかへしをしてやります。それからよく人の顏をヂロ〳〵無遠慮に何時までも見てゐる者があります。これは男に限らず女でもです。私は大抵長い間睨み返してやりますが、幾度も〳〵あんまり長い事見られると癪にさはりますからその人に云つてやります。

『さつきからあなたは私の顏ばかりジロジロ見てゐるが、私の顏に何かあるんですか』

　大抵はそれで赤面して止めてしまひます。それに何にかきかねじを喰はす程の本當の圖々しい人にはまだ出遇つた事はありません。

　何事も、内輪に、控目にと云ふ事は一面に必要な事ですが、目のあたり馬鹿らしい侮辱を受けたり、迷惑を感じたりした場合にまでもぢつとそれを我慢してゐると云ふ必要は少しもないと思ひます。寧ろさう云ふ場合には少しも我慢をしない事が必要だと思ひます。

　或時、私は電車の中で、品のいゝ二十ばかりのおとなしさうな娘さんと一緒に乘り合した事があります。その時には電車の中の半分は空席でした。すると或停留場から一人の醉つぱらいが乘りました。それ程ひどくよつてゐたのか、それとも醉つたふりをしたのかは知りませんが、その醉つぱらひはよろけたからぴつたりとその娘さんの傍に腰を下ろして、電車がゆれる度びにその大きな體をかぼそい娘さんの方にもたれかけて行きます。娘さんは、迷惑さうに眉をよせて少し體をずらしましたが醉つぱらひは直ぐにまたその間をつめて矢張りぴつたりよりそつてしまひます。二三度さう云ふ事をしてゐました。私はそれ

を見てゐて、よくその娘さんが思ひ切つて他の場所にうつゝてしまへばいゝのに、と思ひましたが別にそんな事もなしに、その酔つぱらひの傍に小さくなつて何時までも腰かけてゐます。私はそれを見てゐて、酔つぱらいの無作法よりも、その娘さんの理由ない我慢强さの方がよほど腹が立つた位でした。

或る人々は、お轉婆な娘だけが誘惑に陥り易い危險性をもつてゐて、おとなしく内氣な始終恥かしがつてひつこんでばかりゐるやうな娘にはさう云ふ危險性はないものゝやうに考へてゐます。しかしそれは大變な間違ひです。かう云ふ話があります。

それは或る地方での事ですが、その市では中流以上の暮らしをしてゐる家に二人の娘がありました、年は二つ程違つてゐましたが、姉は女學校の四年、妹は同じ學校の三年だつたのです。姉は快活な明るい性質をもつてゐました。妹はおとなしい兩親にもろくに口もきけないやうな子でした。

或る日、姉は友達の家に遊びに行つて夜になつてから歸つて來ました。そして、母親に挨拶をすますと直ぐ、眞紅にほてつた頰をなでながらさも愉快でたまらないやうな聲で笑ひながら母親に話かけた。

「母さん、それやおかしい事があつたんですよ」

娘のかへりが遲くなつたので少々ふきげんになつてゐた母親は、いく分か眉をしかめながら

「何んですそんな頓狂な聲を出して。さう無暗とげら〱笑ふもんぢやありませんよ。話をするんならもう少し尋常になさい」

と云つてたしなめました。

「だつておかしいんですもの、母さんつたら直ぐに、私が何にか云ふとお小言ね、だけど今日は本當に私いゝ事をしたんですよ面白くつて仕方がない、ねえ美佐ちやんそれやおかしいのよ」

姉は母親の澁い顔には頓着なしに此度は其處に居合はせた妹をとらへて話し出しました。

「何あに?」

妹はニッと笑つて靜かに聞き返しました。

「ね、私今交番に男を一人引き渡して來たのよ、おまはりさんにほめられちやつたの」

「えつ」

母親も妹も呆氣にとられて姉の顔をながめてゐました。姉は得意さうに笑ひながら説明しました。

友達の家を出て、もう暗くなつた道を歩いて縣立病院の塀にそふて歩いて來ると、後から突然男が歩みよつた。

『御散步ですか?』

顏を見ると知らない男なので、だまつて歩いてゐると、なほ追ひすがつて來ていろ〳〵な事を云ふ。

『そしてね、私の事を何んでも知つてゐるのよ、お兄さんの事も美佐ちやんの事も知つてゐるの、私氣味が惡いから大急ぎで歩いてるとね、終ひにグツと私の袂をつかんでね、』

『えゝつ、袂をつかんだね?』

母親は眼をまるくして娘を見ました。

『えゝさうなの、そしてね、もう先から私にちかづきになり度いと思つて樣子を見てゐたんだつて、』

『まあ飛んでもない!』

母親は聞く每に呆れるのみです。

『でね、今日は本當に思ひ切つてお願ひするんだがどうか私と交際をしてくれつて云ふんですの、私何んだか恐くつて體がブル〳〵ふるへちやつたわ、逃げ出さうにも袂をしつかりつかまれてゐるし、うつかりすると何をされるか知れないし、本當にどうしやうかと思つたわ、』

『でどうしたの?』

『誰か通つたら助けて貰はうと思ふのに誰も通らないんでせう。やうやく通つたかと思ふと賴みにならないやうな子供だのお婆さんなんですもの、仕方がないからもつと人通りのどつさりある賑やかな處で逃げやうと思つて、「私遲くなつて急いでるんですからまた今度にして下さい考へときますから」つてやつとの事で云つたの、そしたら「そんな事云つて逃げるつもりなんでせう、けれど、逃げられるものだかどうだか、まあ今日の處はかんべんして上げませう」つて云つてニヤ〳〵笑つてるの私だん〳〵恐くなつて來たから急いで步き出さうとすると「お待ちなさい、あなたのお家まで送つて上げます」つて云つて此度は私の手を握つちやつたんです。そして道々もいろんな事云つて私をおどかしてるの、私どうして逃げやうかと思つてゐるうちに橋の處まで來て、ひよつとあすこの交番に氣がついたもんだから、あのおまはりさんにたのんで逃げやうときめちやつたの。そして今度は私の方がしつかりその男の手を握つて交番の直ぐ前におまはりさんが立つてゐたのでいきなり「何卒此の人を捉へてゐて下さい」つて云つてやつたもんだからおまはりさんがびつくりしたんだか何んだか「何だつ」つてそりや大きな聲で云つたの』

『その男はどうしたんだい?』

『ね、知らん顔して大急ぎで行つちやひまうにしたのをおまわりさんが呼びとめたもんだから仕方なしに引き返して來て、私の顏をそりや恐い眼してにらんだわ。おまはりさんが、どうしたんだつて云ふからすつかり云はうと思つたんだけれど直ぐと人が五六人たつたから、きまりが惡いでせう、それでお父さんのお名前を云つてね、今うちから電話でお話しますからつて斷つて逃げて來たの、』

『さうかい、ちやあまだ其の人は交番にとめられてゐるんだね』

『え、さうでせう?』

『どんな樣子の人間です?』

『廿五六の書生よ自分ぢや醫學校の生徒だつて云つてたわ』

『まあ、飛んだ心得ちがいをしたものだねだけど、お前も惡いんですよ、暗くなつて外を出歩いたりするからそんな目に遇ふんです。もうこれからは決して無暗と外を出歩いてはいけません。それにしても、そんな交番になんか連れ込んだのは困つたねえ、どうしたらいゝだらう?』

『どうして困るんです? いゝぢやありませんか、おまわりさん待つてるでせうきつと、私電話でよく話しますわ』

『お待ち、今にお父樣がおかへりになつたらよく御相談してからにしないぢや、そんな性根の男を交番になんか渡して、後でどんなあだをされるか知れやしない。さう云ふ時には何とかうまく云つてをとなしく別れてくればいゝんです。なまじつかな事をする程惡い。』

『だつて、ぢやどうすればいゝんだらう? 構やしない、あんな奴うんと警察でども叱られるといゝわ憎らしい奴。それよりか本當によく電話をかけないぢやおまわりさんに怒られるわ、私本當に直ぐ電話をかけるつて約束で歸して貰つたんだから』

『まあお待ち、後でお父樣に叱られるやうな事があつちやいけないから。お前が一體出過ぎ者だからいけないんです餘計な事をして。今日はをとなしく歸すつてのだから、歸つて來れば、また後の事はどうにでもなります。餘計な交番になんか連れ込むから倍心配しなくちやならないぢやないか。そんな奴に眼をつけられるんだつて、矢張りお前がおきやんだからです。もう子供ぢやないんだからもう少し氣をつけて、萬事落ちついて女らしくなくつちや――』

『またお小言なの――厭やだわ、母さんは何んでもあたしの事つて云ふと直ぐお小言なんだもの』

やがて、父親から電話での話で、男は說諭を受けて歸され、姉娘は其後學校と家庭の特別な注意のせいか、何事もなく卒業

をしました。

此の事件以來卒業するまでの、姉娘に對する母親の心配と云つたら大變なものでしたが、無口でおとなしい妹娘に對しては母親は全く樂觀してゐました。

『あつ子に限つては間違はない。』

母親は固くさう信じてゐましたので、すべての點で姉娘よりずつと寛大に取扱はれてゐました。しかし、此の母親の樂觀が恐ろしい結果を齎らしたのです。

姉娘が卒業して、毎朝妹一人で通學するやうになつて二ケ月ばかりたつと、毎日學校の往復共、後をつけて來る若い男のある事に妹娘は直ぐ氣がつきました。恐い、とは思ひましたが、口重な彼女は、それを誰にも話ませんでした。實際は話をしてまた母親がやつと姉が卒業して安心した處に、また氣をもませるでもないと云ふ遠慮と、たゞ自分の後をつけるだけで何んでもないのを何にかのやうに云ひ立てるのが後めたくもあるし、男につかれる等と云ふ事が耻かしい事のやうに思はれるので誰にも默つてゐました。しかし、もう夏休みも間近くなつた頃には妹娘はすつかりその男の術中に陷つてゐたのです。男はその市での不良少年仲間では有數な一人だつたのです。

彼は妹娘のおとなしい內氣な性質をよく知りぬいてゐました。で、出來るだけその氣の弱い點につけ込んで脅迫したのです。彼女の不斷のおちつきは何の用もなし得ませんでした。姉娘程の氣持もなく腹もなく、たゞ氣の弱い彼女は、相手の男の思ふ存分翻弄されたのです。彼女はさうならぬ先きに母親に話さなかつた事を悔ひました。けれども一たん男のまゝになつた以上は、それを思ひ切つて、何んにも知らぬ家人に打ち明ける勇氣は更にありませんでした。彼女はたゞひそかに自らを果敢なみながら、男の指圖のまゝになつてゐるより他はありませんでした。そして彼女は何時か、姉や母を僞はつて幾何かづゝの金をねだる事さへしなければなりませんでした。

母親はすつかり娘を信じてゐました。姉娘にはきびしい監督の眼を見はつてゐましたけれど、妹娘にはまるで何の注意もしませんでした。

秋になつて、誰れからともなく校內でやかましく、其の事に就いて噂されるやうになりました。彼女の受持教師が聞きかねて、彼女にその眞僞をたしかめやうとしました。しかし、其の時にも彼女は素直に事實を述べる勇氣を持ちませんでした。受持教師はたゞ或る訓戒の言葉を與へた丈けで其の時はすみました。

しかし、教師に知れたと云ふ事は、彼女にとつては兩親に

れたよりはもつと恐ろしい事でした。彼女はどうかして今後彼の悪魔の手からのがれようと企てました。彼女は漸くの事で、近頃自分につきまとふ者のある事を告げて、學校の寄宿舎に、卒業まで入れて欲しいと賴みました。

『えつ？　お前にも？　まあ、どうしたらいゝだらうねえ、ぢやよくお父様と相談して上げるよ、心配おしでない。』

母親は眞蒼になりながらも娘を慰めて、父親や學校と相談の上で寄宿舎に入れました。しかし、どうしてはいつて來るのか、二日おき、三日おきに、教室の机の中に恐ろしい脅迫の言葉をつらねた手紙が吃度はいつてゐました。

『何日何處に何時までに來い。來なければ今までの事を學校に告げるのは勿論、お前もお前の父親の面目をも維持の出來ないやうな方法をとるから。』

と云ふやうな手紙に脅かされては、彼女は泣く〳〵外出しました。彼女の決心は何んの役にも立たなかつたのです。

一方、男の方では、彼女が避やうとしてゐる事を知るとます〳〵慘酷に彼女を扱ひ出しました。出來る丈け無理な要求を持ち出しては彼女を困らして喜んでゐると云ふやうな有樣でした。しかし、遂々最後に流石の彼女も死を期して、悪魔たちの要求を退けました。彼は彼女に盗みをすることを命じたのです。たとへ親のものとは云へ何一物も無斷で持ち出すと云ふ事は正直な彼女の忍び得ない事でした。今まで散々に彼等のまゝになつてゐたのも、唯だ、暫くでも母の心を案んじ、父の體面を重んじてたゞ在校中に問題を起すまいとの心持からだつたのです。しかもそれすら日夜良心に責め苛まれてゐるのにこの上盗みをする程なら死んだがましだ。彼女はさう決心すると共の要求をはじめて退ける氣になりました。しかしその最後まで、彼女は矢張り氣弱でした。彼には承知したむねを答へて、自宅に歸つたのです。そして其の夜は氣分が悪いと云つて寄宿舎には歸らず造花用の染料を多量に服んで苦悶してゐる處を發見されて、命だけは取りとめましたが、可愛想な彼女はとう〳〵氣が觸れてしまつたのです。

寄宿舎にはいつて以來は、安心しきつてゐた母親には凡ての事がたゞ夢としか思へませんでした。娘の遺書には最初からのすべての事が書かれてありました。母親は氣のふれたその可愛い、娘を抱いて、今も油斷のならない世間の悪者を呪つてゐる事でせう。

理屈の上では、現在女學校などでも、たゞ一づにおとなしい、淑やかだと云ふだけでは濟まない、非常時に際して充分適當な

態度をとれるやう確つかりした女にならなくてはいけないと云ふやうな事も教へます。しかし實際には、みんなんおとなしいすなほな一方の女にしようとします。さうした風な女を尊敬するやうに仕向けます。抽象的に云ふ場合には、さう云ふ風に進歩的な口調をまねても實際には家庭本位の教育をしてゐるのですから成るべく、總ての點で自分の考へなどはどうでもいゝやうな、決斷のにぶい、從屬的な傾向を帶びた女の方が歡ばれます。そして出來る丈けさう云ふ風に仕込まれます。その結果は、何時までたつても、女の生活は向上しませんし、男の生活までも墮落させるだけです。さう云ふ風な女は、どんな境遇へでも導かれゝば導かれるまゝにゆきます。どんな危險な暗示にもすぐにかゝります。どんな誘惑にも直ぐ乘ります。かう云ふ種類の女子が一番多くの危險性を具へてゐるものと私は思ひます。

世間の人達は、よくお轉婆だおきやんだと攻擊しますが、私はそれよりも、おとなしい淑やかだとほめられる女の方が、どの位多く攻擊される價値があるか知れないと思ひます。そして、私はさう云ふ人を意久地なしと云ひます。

或る新聞記者とその前に立つた偶像の話

石原純

「先生ですか」
「はあ」
「こんど××へまゐりましたので、ちよつとご挨拶にあがつたところです」
　さう云ひながら、さし出した名刺を見ると、數日前に來た記者と同じ社のものである。それでひよつと不審さうな顏をするのを見て、彼はすぐ斯う續けた。
「これまでHといふのがゐたんですが、今度私が代りまして……、まだきのふこちらへ來たばかりなんですが……」
「はあ、さうですか」
「しづかでいゝ處ですな、これから折々お話を伺ひにあがります」
「まあ、しづかですが、こんな不便な處でして、どうも……」
　彼はにや〱笑つてゐる。
「こなひだ、△△にへんなことが出てゐましたが、あれは本當ですか」
「どうも新聞なんて、まるでいゝ加減で、つまらんことばかり云つて困ります。まあ、記者がどんな人間かつてことが判るだけですな」
「でも世間ではさう思ふんです。あの人はまだこちらに居るんですか」
「いゝえ、ちつとも、ちよい〱來るなんてまるで嘘なんですから」
「へえ、それならいつ頃ゐたんですか、先生が夏滿洲へお出かけのうちですか」
「いゝえその前からゐました」
「お宅に泊つてゐたんですか」
「なあに、うちに泊つてはゐません。繪をかきに來てゐて、そ

のモデルになつてやつてゐただけです」
「帝展に出したのですか」
「いゝえ、だめでした」
「出なくてよかつたわけですな、はゝゝ。それから幾度もまゐりましたか」
「いゝえ、ちつとも來たことなんかありやしませんよ。ですが、その人は非常に眞實目な若い藝術家なんです。出たらめを云ふにも程があるぢやありませんか」
「どうも、地方にゐちや、いゝ種がありませんので……、何かさう云ふ記事を書かないと本社の信用にかゝはるもんですから。わたしなんかも今迄S縣の田舍にゐましたが、さつぱり種がなくなつて、はゝゝ」
「つまり、生活のためにそんな記事をつくると云ふわけですな」
　彼はそれを「いゝ種」のつもりでゐる。現時の新聞の低級さがこれでもわかる筈である。併しこれも彼等が生活のためにやるのだとすれば、また憐れむべき一つであるかも知れない。
「ひとつ大いに與太をとばすかなあ……。はゝはゝゝ」
「勝手におやんなさい。記者がどんな人格かつて云ふことがそれでわかるだけですもの。それでいゝんなら一向にかまやしません」
　彼には併しそんな言葉もうはの空であつたやうである。「何でもいゝ、書きさへすりや」と云つた樣子が見える。私はちよつと不愉快な氣がした。こんな人間と話してゐることはたまらないと思つて、その儘默つてしまつた。
「お宅には只今幾たりおいでゞすか」
「そんなことを聞いて何するんです。そろ〳〵種取りを始めるつもりなんですか」
　無禮ものめと云ふ顏を私が何となくしたので、彼はあはてゝ附け足した。
「どうもまだ話がまづくつて困りますが、……。いゝえ、ちよつとご挨拶に來ただけなんですが、折角こゝまで出かけて來たもんですから……」
「まあ、も少し遊びに來てお友だち附合ひをすりや、そんなことは自然にわかることぢやありませんか。無理に他人の家のことを聞くなんて、そんなことがありますか」
「いえ、これからはまた折々伺はせて頂きたいんです。こちらへ赴任するとき、もう本社からすつかり、どこそこにはどう云ふ方がおいでだからと云ひ聞かされてやつてまゐりましたんで……、それでけふすぐに上つたやうなわけでして……。これから

もいろ／＼教へて頂かなくちやならないわけなんですから、決してわるいことなんか書きやしませんから、どうぞ……」

「まあ、こんないゝお天氣に氣ばらしに出かけて來たと思へばいゝでせう。そこの高いところへ上ると、すつかり海が見えますよ。出て見ませんか」

　彼にはそれがどれ程の興味をも與へぬやうに、否、何ものかを記事の材料にしたいやうな風に、……「はあ」と返事したなり、すぐに言葉をかへてから云つた。

「ご近作の歌でも、何か書いて頂けますまいか」

「近作つて何にもありません。歌がいゝなら、その丘へ行つて、一つ作つておいでなさい。なにか出來るでせう」

「わたしにやどうも……。何でも結構ですから、どうぞ」

「ほんとにないんですよ。いろ／＼忙がしくて……」

「では、お寫眞でも一つ……」

「寫眞よりか、スケッチなさつてはどうです」

「いや……、スケッチなんて出來ませんなあ……」

「たゞ、挨拶に來たんだとすれば、そんなものはいつでもいゝでせう。まあ、そこへ出て景色でもごらんなさい」

「併し折角汽車賃をかけて來たんですから……」

「商賣に來たと思ふから、汽車賃をかけてなんて云ふんでせうが、いゝお天氣にこゝまで遊びに來たと思へばすむでせう」

「そりやさうですが……」彼はちよつと困つたと云ふ表情をしながら「やはり轉任早々何か記事を送つて本社の信用をとつて置かないとなけないんで……」

　彼はそこでとうとう本音をはき出した。

「それならやつぱり職業で來たんですな」

「いや、はつきりさう云ふわけでもないんですが、まあ、ご挨拶旁た……」

「新聞記者の肩書付の名刺をもつて來られて、一々どうしてゐる、かうしてゐると聞かれた日にや、とても氣もちよく話が出來なくて困りますな。まるで裁判所へでも喚び出されるやうで……」

「全く記者なんて困りもんで、よく人の家を訪問すると、玄關先きに、犬猫新聞記者入るべからず、なんて書いてあるのがあるんでして……、はゝは」

　彼にはより良い記者であらうとする心持ちがまるでないかのやうに、平氣で笑つた。

「そんな職業話はもう止めようぢやありませんか」

　私はその儘口をつぐんで默つてゐた。彼はそれでもなか／＼立ちさうにもしない。

「奥さんにもお目にかゝりたいのですが……」
と彼は暫らくしてから云ふ。無理に歸してつまらん事を書かれるよりはと思つて、長くなるのを我慢しながら、
「えゝ、どうぞ」
と承諾しながら、女中に招ばせた。待つてゐる間に仕方なしに私は新聞者のことなどを話題にした。
Y子は彼の名刺を見て少し昂奮してゐたらしい。座につくといきなり彼に云つた。
「新聞なんてずいぶんひどいんですね。よくもあんないやな言葉をつかつて他人を傷けるなんて。わたしだつて、そんな卑怯ぢやありませんよ。ほんとならほんとうつて正直に云ひますよ。人をむやみに傷つけておいて、それで新聞記者なんか濟むんですかしら。無恥にも程があります……」
「えゝ、そりや新聞も時々ひどい事になるんです、先に私が北海道の……にゐたときでしたつけ。病院の看護婦のことをちよつと書いたら、その看護婦が二三日してから、死んぢやつたんですよ……」
「あら、なんて云ふことでせう……」
Y子は或る恐ろしさの感慨に打たれたやうに身をすくめた。
彼はそんなことも別に平氣なやうに彼女を見てゐる。さうして「わるい事なんかちつとも書きません」と前に私に言つた言葉を繰返して、更にY子に
「お歌でも頂戴できませんか」
と云ふ。どこまでも彼が洒嗢々としてゐるのには少しあきれられる。
實はさつきY子が始めにこの部屋にはひつて來て彼に挨拶してから、何か云ひつけにちよつと部屋を立つた間に、彼は私のまへで小聲で獨り言のやうに
「なる程前から聞いてましたが、きれいな人ですなあ」
と云つた。「この無禮もの奴が」と私は心のうちに發した怒りを辛うじて抑へて、聞かぬふりをしてすましたのであつた。「どうせ相手にもならぬものを、まあ、いゝ加減に歸してしまつたがいゝ」と、私は頻りにY子に目くばせをしながら、彼にはもう一言も云ふまいと默つてゐた。
Y子は、彼が私の仕事の邪魔になるのを氣遣ふやうに、彼を庭へ連れ出してしまつた。
暫らくして部屋に戻つて來たが、やはり氣のいゝ彼女は彼にせがまれて歌を書いてやらずには氣がすまなかつたのである。

なげくだに値ひせなくといまは思ふいつはりに充ちし日に生くるはや

目に觸るゝ人のなべてに憤ろしわがこの頃の病ひさびた
り
　君とゐてわか生まゝくの子を欲しと思ふ日のあり悲しき
　極みに
「終ひのがいゝですなあ、はゝは」
と彼は依然として輕薄さうに笑ひながら
「まあ、大いに琴瑟和してゐるといふわけですかなあ」
と附け足す。まあ、そこらが彼に相應はしい形容なのかも知れない。
　Y子はそれから編物の會の話など持ち出して、今度××でバザーをやるときには新聞で紹介してくれと頼んだりした。彼はその記事に入れるやうにと、たうとうY子から一枚の寫眞をもらつた。
「まあ、ご飯でもあがつていらつしやいな」
と、どこまでも氣のいゝ彼女は、もう夕方になつたので彼に勸める。
「また折々伺ひますから………。いづれ新聞はお送りしますよ」
と云つて、彼は辭し去つた。

×　×　×　×

　それから數日經つてのことである。「××電話」とある記事だけを切り拔いた片隅に
「先日は失禮、惡口でも何でもありません。いづれまたお邪魔にあがります」
と書いたのを送つて來た。しかもその記事は以前に△△に出てゐたのを大體その儘繰返したもので、その終りに彼の訪問のことが記されてゐたのであつた。Y子が編物の會を紹介してもらふつもりでやつた寫眞がこゝに用ひられてゐることは云ふまでもない。
「なんて、けだもの見たいな奴なんでせう、あきれてものも言へやしませんわ……」
と彼女は憤慨した。
「わたしみたいに、こんな馬鹿つてないのね。汽車賃をつかつて……なんて云はれると、やつぱり氣の毒になつて、歌や寫眞をやるんですもの。これ程、人を裏切つておいて、惡口ぢやありませんだの、またお邪魔にあがりますのだつて、よくもよくもそんな事が云へたもんだと思ひますわ。なんて云ふ恥知らずなんでせう。わたし、くやしくつて堪らないから、本社へさう云つてやりますよ」
　彼があのとき折角尋ねて來たものをと思つて、本氣に好意を

もつて待遇してやつただけに、彼女の怒りはなか〱止まなかつた。

實際その記事には私も驚いた。彼のやくざものであることは、あのときの話や態度で、私にはかなり明らかでありはしたが、彼がいかに輕薄であるにしても、まさかに一片の良心はもつてゐるのであらうと推察してゐたからである。いかに彼の謂はゆる與太をとばすとしても、新聞の性質を考へたなら、まるで心にないことは書けまいと思つてゐたからである。ところが私のその見當さへすつかり外づされてしまつてゐるのであつた。彼は通俗的に「琴瑟和す」などと云ふ言葉をつかつておきながら、記事の上ではそんなものは影をひそめて、それが「愛の破綻」といふ文字で置き換へられてゐる。さうしなければ與太にはならぬと思つたのであらうか。「海と丘と愛の誘惑に醉うてゐた」二人の間には「別れ話」が持ち上つてゐると書いてゐる。彼は何を聞く、何を見、何を話して行つたのだらう。どうせ嘘でも、噂として書くのなら、惡口にも何にもなりやしまいと、たかをくゝつてやつたのか知ら。どうも私にもよくは判らない。

私はいろ〱彼の心理を想像してみた。多分彼は私たちを尋ねるまへに、彼の觀念のなかに既にその新聞記事をつくり上げてゐたのである。さうしてそこに僅かに綴り殘されてゐた場處に、彼の同じ既成觀念から發するでもあらうところの文字を埋めるために、私たちに遇ひに來たのであつた。私たちはその前に或る偶像として立つたに過ぎなかつたのである。

「羽織も着ない粗末な縞の袷の襟を合はせる」

と彼はそこで私の姿を描叙してゐる。陽あたりに路端の雜草を除つてゐた私を「水仙の花畑で瞑想に耽つてゐた」とした彼には、その最初に豫想した偶像は、もつときちんとした然かつめらしい風裝をしてゐるべき筈であつたかも知れない。ちよつと意想外なこの風も併し「黒い顏と金縁の眼鏡の底にショボつく眼瞼が物寂しい」

と云ふことで、先づうまくつくろはれたらしい。さうして彼のまへでこの偶像は「物憂い微苦笑を見せ」たり「血の氣のない顏を硬直させて居たり」したのである。

彼は云ふまでもなく、之に對して一人の「娼婦型」の女性を偶像的に配した。彼女は「魅惑的な眼差しを投じて戀に燃える人達をひどく惱まし」たり、「女王のやうな服裝で」諸方を歩きまはる浮氣さをもつてゐる。ともかくも遠來の客たる彼に對する一應の好意などはすつかり葬られて、只「濃いお化粧の顏」のみが彼の瞳に映る。彼女には餘りに不似合らしかつたメリン

スの衣物「丁度十七八の娘の着さうな」「唐草模樣のある草色のお召」に着換へさせられねばならなかつた。かやうにして當然「年齢の距たりから」愛の生活が味はれなくなり、しかも彼の眼前だけでは、强いてさう云ふことの「眞實でない意味を見せる」ための「嬌態」が技巧的に演じられたのであつた。

何と云ふ有難い偶像がそこに具現したことであつたらう。まあ、これでいゝ種が出來て一日の紙面を飾ることが出來る、と彼は思つたにちがひない。それにしても之を記事にした上で、自分は知らん顔をしてすましてゐればいゝと思つたのかしら。否、その記事をわざ／＼送つてよこすところを見れば、しかも惡口ぢやありませんなどと書き添へて來る處を見れば、彼の眞理はやはり私には判り兼ねる。そんな偶像はほんとうに見たつもりで居るんなら、よほどの低能者か妄想者であらうし、また全くの與太をとばしたつもりでゐるんなら、一人の新聞記者として、また一度でも親しく遇つた人間として、まことに許すまじき惡戯者であり、無恥者ではあるまいか。

私はどうもその判斷に迷つた。

Y子は方々の親しい人達のところで

「あなたがあんまり馬鹿正直すぎるもんだから、そんな目に遇ふんですよ。これから知らない新聞記者なんか來たつて、決つしてうつかり遇つちやいけませんよ」

と云はれたりして、大分閉口したり、憤慨を續けたりしてゐた。あの記者自身が云つたやうに、大概の人はやはり彼等を犬猫の部類に入れてゐるのではあるまいか。否、犬猫よりも遙かに仕末のわるひものにちがひない。

或る在京の知人からの手紙のなかに、こんなことも書いてあつた。

「先日も新聞紙に御地での出來事を報じてあつたとかで友人がワザ／＼私の耳へ入れて來ました。しよつちゆう先生方のことを友人にほこりにして話して居つたからで御座います。そこでさつそつく先日いただいたお手紙を取り出して、こんな御手紙をいただいたばかりだ、そんなことはない、記者の作りごとにちがひないと、きつぱりと打ち消してやりました。實に氣持よかつたです。」

これは併しふだんの消息がとどいて居たからでもあつたが、或る人などからはもつと本氣に心配して來てくれたのもあつた。どうせ後からわかる事ながら、ちよつと濟まない氣もする。どうも飛んだ偶像に祭り上げられたものである。

そのうちにもと△△に出た記事の出來が大分わかつて來た。

何でもこの町にぶら〳〵してゐて、時々△△に通信を送る靑年があるさうである。それが夏頃私の旅行中に訪ねて來て、歌の雜誌を出すから援助してくれと云つたとのことで、Y子は自分の歌を上げるくらひのことならいたしませうと答へたといふ話である。それから今まで雜誌が出來たとも何とも云つて來ないが、そのとき多分金でも欲しかつたのらしい。丁度家へ訪ねて來た折に、ことし美術學校を出たばかりのIと云ふ洋畫家がY子をモデルにして繪を描いてゐたのを見て、金をもらへぬ腹癒せにあの記事の種につくり上げたのであると思はれる。ともかくその靑年が新聞の原稿を書いてゐたのを見たと云ふ人もあつた。

「へんな奴だとは思つてゐましたが、まさかそんなことをしやうとは思ひませんでしたわ」

とY子はまた呆氣にとられないわけにゆかなかつた。

おとなしい眞面目なI君からは、いろ〳〵お世話になつておきながら自分のことで先生方にご迷惑をかけてすまないと詫びて來た。私は早速、あんな記者の云ふことを氣にするには及ぶまいと返事しておいた。

××にゐる例の記者のことについては、その後同地の多くの記者仲間の消息に通じてゐる若い彫刻家がいつものやうに話に來られた序に、またこんなことを聞いた。

「あの記事が出てからOさんのところで大いに憤慨したんですよ。……えゝ、今度來たK社のあいつあ、どうもけしからん獣なやつでね。また中學生の惡口を書いたもんだから、中學生がみんな怒り出しちやつてね。あいつんとこへ行つて たうとう詫證文を書かしたんでさあ。さうしてそれを寫眞版にとつて方々へ撒き散らしたもんだから、奴、大分閉口してゐるやうですよ」

「本社へそれを送つてやればいゝのですになあ」

「えゝ、勿論送つたでせう。あいつも、ひよつとしたら首になるか知れませんよ」

「どうも東京の大新聞の信用にも拘はりますからな」

彼が本社の信用を得ようとしてやつたことがさう云ふ結果にでもなつたとすれば、彼は更に憐むべきものである。

十二月の半ばに出たあの記事の話は、ことしになつてもまだ折々續いた。

珍らしく暖かい正月の幾日かが過ぎて、始めての寒さを感じた朝、歌人のS君がひよつくりたづねて來た。

「ゆふべ遲くなつてこゝの宿へ着いて、けさ早くあがらうと思

つたんですが、あんまり早く駭かしてもと思つて、一杯やつてゐるうちに、大いに氣もちがよくなつてしまつて、大分出來ました」

と云つて、豐かにふとつた懷ろから幾枚かの半紙に一首づつ歌を書いたのを取り出した。

「どうもあの宿のまへの大きな松の樹に松風の立つ音がおもしろいので……」

と、さすがに酒好きな、心もちの融けほぐれるやうな親しい話振りで、いろ／＼な話を始めた。

Y子がこの新年の前後に發表した歌を見せると、ウイスキーのコップを手にしながら「こつちのやうな主觀の歌がい〻ですなあ。近頃わたしもさう云ふ傾向を好きになつたせいもありますがやつぱりこんなのがい〻ですなあ」、

と、いかにも心地よげに次々に讀んでゆく。

家搖りて風吹きつのる眞夜中をきみがねむりを守りて覺め
居り

たゞひとつもぎし無花果きみとわがさきて食うべつふと
わくさびしさ

子らにせし吾がふるまひを君にするこ〻ろ寂しさのなし
といはなくに

いのち生きぬ病ひなりとも哭かざらめいつくしみ足る君
に守られて

寒くすなと半ばねむりていふ君が言深く沁む病みてしき
けば

おふかたの誣ひ言き〻て心ぐしいやひたぶるにひとを守
りつ〻

天津日の光にそへる陰影如して君に吾があるを人に知ら
しめ

「一體あなたの歌の特色は熱烈な強い主觀の出てゐるのにあるんで、そんなのは他人には眞似られないんですよ。寫生のでも、やはりどこかに心もちの出てるのが、私はい〻と思ひますな」

こんな話から、今の歌壇の傾向の論にも及んだ。

いろ／＼進んでゆくうちに、ふと新聞のことか何かをきつかけに、例の記事がそこでまた話題になつたのであつた。

「いや、私はその記事は讀まんですがな、新聞記者は大分やつて來てゐるんで、彼等がどんなものかつてことはよく知つてるんです。いや、そりやお話にも何にもなつたもんぢやないんで……。東京でまあAとかNとかの大新聞になると、隨分立派な記者もゐますし、學藝部とか政治部とかになると、大概ちや

んとしてゐるんですが、どうも社會部なんて云ふのはひどいんですな。宴會なんかで顔を合はして見ると、自分の社でも社會部の連中とくると、ちつとも知らない顔ばつかしあるんですからな。それがつて、一二ケ月のうちにすつかり變つちまうんでね。つまり方々へ渡り歩くといふわけでして……。だから、地方に出てゐる記者なんざあ、まるつきり………」

晝の時刻を大分過ぎて、食堂へ座を換へてからも、S君は杯を手から離さなかつた。すつかりいゝ機嫌に顔をあかめて、寄せ書きのハガキに筆を取つた。私たちがお對手の杯を最初から引込めておいても、それには氣をとめずに、獨りで滿足して飮んでくれるのは嬉しい。

「けふはどうも、こゝへ來て非常に感激しました」

と、S君は酒に光つた顔をこちらへ向けてしんみりと話し出した。

「大いに醉拂つてしまひましたが、それでもこの事だけは本當にうれしくつてお話するんです。Y子さん、あなたの歌をさつきいろ〳〵拜見して、實に感激したのでした。新聞記者が何を書いたつて、ちつとも構はんぢやないですか。ちやんと知つてゐる人にはわかるんですからな。歌にはほんとの氣持が出てゐるんで……。あゝ云ふ歌がたくさんあるんですもの。それだけでいゝんです。實はわたしの親爺があなたがたのやうな生活をやつたんで、言はゞ、私はあなたがたの子供に生れたと云つたやうな立場におかれたんで、……それで、この前もいつぞやお話したやうに、自分の結婚問題についても、いろ〳〵考へて來たんで、親爺もそれについて理解して、一切お前の心に任せると云つたわけなんでした。小さい時分には親爺も一緒にゐなかつたんで、どうもよく判らないと思つてゐましたが、だん〳〵さう云ふことに深く考へて來たんです。どうも、いゝ加減な心でやるんぢや、全くいけませんが、ほんとうに生命をかけてやると云ふことは美くしいと思ひます。どうか、しつかりした心もちでやつて下さい。醉拂ひが云ふんぢや困りますがね。さうぢやないんで、けふはほんとに心から感激して、うれしく思つたわけなんでした」

S君はぢつと首を俛垂れて、その細い眼でにつこりと笑ひながら、

「はゝあ、まあ、そんなわけで……」

と、ぐつと杯を飮み干した。

Y子は、しづかな調子で、

「どうも、有り難うございます」

と虔ましく頭をさげた。短い冬の日の夕影がもうこの靜寂な丘

の家を閉ぢてゐるのに私たちはその時氣づいたのであつた。

　私はこれで筆を擱かうと思ふ。今の新聞にはこんな記者があつてこんな記事をつくられてゐると云ふ話を書かうと思つたのではあるが、併し私たちもそれについて深く考へて見なくてはなるまい。記者がさう云ふ偶像を持ちかついでゐるやうに私たちもすべてに對して偶像をつくつてゐはしないであらうか。それを突きやぶつてお互の心を本當に知るといふことはどんなにむづかしいことであらう。だが　愛するものの間には、一瞬の時もそれをゆるがせにしてはならない。存外偶像でないと思つてゐるものが、やつぱり偶像に過ぎないことも多いんだから。

＊　＊　＊　＊

偶像が踊る。
偶像と偶像とが争ふ。
だが、おあひにくさま、——
おまへの幻想のなかの偶像は
さううまく息を續けてはくれない。

＊　＊　＊　＊

生きた人間は
彼自身のなかの彼だけにすぎない。
それがいろ〳〵の人の眼に映つて、
いろ〳〵な偶像につくり上げられる
だから、世の中はおもしろいと云ふのか。
だから、世のなかはむづかしいといふのか。

藝術覺書（遺稿）

郡　虎　彦

1　羅馬第一印象とダヌンチオとの事

予が最初に羅馬に遊んだのは、千九百十五年の春、丁度伊太利が戰爭に加はるか加はるまいかの危機であつた。一體の輿論でも又其筋の計畫でも、大方參戰に決しては居たのであつたが、總理のジオレッチが親獨派である上に、獨乙の方でも、特に元老のビュウロウを大使に遣して、極力伊太利の中立に盡したので、傾きかゝつた衡の重目が、一時迷ふ様な有様の時であつた。其の内に内閣も變り、參戰不戰の二派は愈々旗色を明かにして洶々とした人心が騒き立つてゐる、其の眞中へダヌンチオが乘り込んで來たのだ。年末首の廻らない借金で、差押へのやうな處分を食ひ、國を逃げてフランスに居たのだが、此の時は特に半公式に呼び還され、歸途何とかと云つた町で、總理大臣に代つて銅像除幕の愛國演説をやつた。それが全土に參戰の炬火を投げたやうなもので、その時の羅馬入りの仰々しさ、予は丁度ピアッツア・デイ・ヴェネチアのカフェに座つてゐたが、もう其の邊りから、二十丁程先の停車場へ、詩人を迎へに行く群衆の黒山がひきもきらない。翌日の新聞で見ると停車場の前に集つた人數は十萬を越えたといふ、あの廣々としたピアッツアでも、押し合ひへし合ひで何人かの死人も出來た騒ぎである。光榮といふことを詩人の冠と、伊太利人らしい野心に駆られてゐた詩人に取つては、此の時こそ得意の絶頂でもあつたであらう。予は一日聖プウテンチアアナのさゝやかな寺堂で、四世紀のモザイクを讃嘆して表へ出ると、聯隊旗を先に立てた兵隊が行進中に敬禮をしてゐる。そこを自動車が一台宮城の方へ走つて行くから、誰か王族の通りがゝつたものと思つてゐたが、それが後で聞けばダヌンチオであつた。何しろ大變な人氣で、もともと推薦された議會へ這入つても、詩人が席に就く時だけは、

他の議員も起立したといふ。それにしても之は後に、ロンドンで、友人と話しあつたことだが、かういふお祭り騷ぎを、只子供だまし、芝居がゝりと一笑に附することは、殊に我々薄鼠色のニユアンスで文化を彩る日本人には、殆ど本能的に容易なとではある。だが、一人の詩人を、しかも社會的には破產した、その作の多くは道德的には家庭に許されない詩人を、かうまで國家的に崇拜する心持を、只「子供だまし」にかたづけてしまふことは、スカンチナヴキヤのやうに藝術家を社會的に尊敬する國ならば別、日本のやうに、さういふ心持が一般に理解されてゐない國では、單に敎育上の問題としても早計であらうと思ふ。其頃羅馬の街々に、愛國の賦といつたやうなものが、參戰派のプロパカンダとして揭示されてゐたが、伊太利の光榮といふことを誇らしく象徵する者は、決つてダンテであつた。之は既に獨逸を出る時から、ゲエテの爲、ジヤン・ポウルの爲に、國の誇りを保たうと云ふ聲は、隨所に聞いたものだ。八月の二十日から國域を通る日本人は、皆入牢の災難に遭つた、それを際どく十九日に、今ロンドン大學で敎職についてゐるKと二人、和蘭に逃げてアムステルダムへ着いた時、中立國ながら此處にも愛國の焰は飛火して、人心は騷いでゐる、そして此處で和蘭の守り神は、レムブラントがつとめてゐるのだ。

二　藝術家と國家との事

ダヌンチオの「芝居がゝり」が、趣味に合ふと合はないとは別として、あの當時鼎の沸いたやうに說の分れた伊太利が、一體となつて殺倒して、虐殺の海に飛び込んで來たのは、多く此の詩人の力に依るものといはなければならない。その頃大使館の書記官連とカフエで雜談の一夕であつた。一人がいふ。

「どうも怪しからない事だと思ひますよ、一體ダヌンチオの小說なんてどれを見ても姦通者ばかり、しかもその不倫を奬勵するやうな「自然主義」(!)ぢやありませんか、それを國王始め、生神扱ひにするのは分かりませんねえ」

「かういふ世界的になつた藝術家といふものは戰爭の火蓋を切らない前から、對手の國の精神を或る點まで征服したものなのです。新聞で見るとカイザアが、戰地から役者を呼び返して、シエクスピイアの三百年祭をするといひますし、ロンドンでもベエトオヴエンの音樂會はいつも滿員だといふことは、たとへかういふ國々が、いくら表面では阿修羅になつて殺し合ひをしても、心の底では對手の國の精神的の偉人、つまり對手の國を深い尊敬で崇めてゐる。かういふ意味からいつて、國家的に藝術を後援するといふことは、實は軍艦や砲壘を築くことより

も、本當の意味での國防にもなれば、殊に日本のやうに殺伐な方の國防ばかりを急いだ國では、國政上の急務と云つて、よくは無いのですか。」

もとより之は座興の詭辯で、一體社會的に藝術家を尊重することの弊は、クヌウト・ハムソンの小說あたりに見られるノオルウエイの例でも明かである。しかし藝術と藝術家とを尊敬することを知らなすぎる日本人が、いまだに數多く殘つてゐることは、情無いが國是の下等さを發露したもので、隨筆の冒頭にも說いたやうに、之といふのも、今日までの敎育の根本が論理に欠けてゐるところから來たものである。それにしても之は十一年前渡歐の船の中の出來事であるが、或る英國人が日本には今でも士農工商と云ふ階級が殘つてゐるかと聞くから、否今では朝野の二階級しか無い、野（や）は雲助といふ階級で、朝（ちやう）はごまのはひといふ階級だと答へてやつたが、考へて見るとこの狀態は今日以て大して變らない。――新國建造の折からかういふ方面にも、儀容のある思想が生れて來て欲しいものである。

三　シスチナ堂第一印象の事

話が岐路の迷宮にさまよつたが、ともかく予が最初に伊太利の土に逃避したのは、かういふ騷々しい境遇であつた。一つは伊太利語を解さなかつたからでもあらうが、一つは戰爭來の興奮は、もう二年前に敵味方の兩方で充分に味つたせいでもあらう。自分では何の興奮に妨げられることも無く、「永遠の都」の永遠の寶、人類が地上に、殘した最高の仕事を、日に日に餘念無く「詣でて」步いた。

それにしても最初にピアッツア・デイ・サン・ピエトロへ降り立つた時の心持が、いつまでも忘れ難い。四月末の珍らしく曇つた日であつたが、尖塔（オベリスク）の下に立つて、正面の伽藍から左右の大柱廊を眺め渡す。聖ピエトロの建築の「破壞」を嘆くよりも何よりも、先づ宏壯な廣場の高貴な印象と、とうとう自分は此の都の此の廣場に來たのだといふ自覺が、心持をたとへやうもなく高揚させる。これほどの藝術の社を地上に創つて、萬世に人間道の誇りを築いてくれた、巨人達の世に吹く風が、四百年の人道をこえて、今はわが面をも擊つといふのか、日頃の智情意が凡て「寸をのす」心持で、案內記に敎へられた正面（ファサァド）の左の小門を潜つて行つた。突然頭の上の鐘樓から鐘の音が、けたたましいやうに鳴り出した。丁度ゲエテの「人間のなし得る限りの仕事を知らうと思へば、シスチナ堂に詣でるがよい。」といふ讚詞を讀んだ當時で、伽藍よりも美術館よりも先づ第一にシスチナ堂へと、心急き急き步廊を廻つて行く間も、鐘の音はしつ

きりなく鳴りつゞけて居る。まだ惨な「心の調節」をおぼえない頃ではある。その鐘の音を、ダンテの「地獄門」の聯想から、超人の世の門を開く警鐘とも聞いて、長い長い道のはて、長い長い廊下のはての、寧ろ見すぼらしい段階を降りて行つたのであつた。

シスチナ堂——今引いたゲエテの言葉を何十度か繰り返して引くより外は無い、「天上地下から永世に吹く嵐」とブランデスは云ふが、いづれにしてもこの堂の下に立つて、一見漠々とした天井から、一つ一つ驚く可き巨人の型が幾十幾百と雲を破つて現れるのを見た果報者は、こゝでは我々の哀れな日常の言葉は、悉く術を外さなければ通用しないのを氣がつくであらう。シスチナ堂に就いては、尙章を新にして述べやうと思ふが、それにつけても十年諸國遍歷の間には、色々の經驗に出くはすものだ。何年か昔、或料理屋で二人の日本人の知人と會食したことがあつた。一人は醫家、一人は伊太利を『一廻り廻つて』來た畫家であつたが、醫家も之から羅馬へ行かうと思ふところで、種々と畫家の教導を仰いだ末「ミカランジエロとかラフアエロとか云つても、偉い者になつてゐるだけでの話で、大した者ぢあ無いんぢや無いんですか」といへば、畫家は納まつて、「さうですなあ、まあ名所廻りのつもりで一度無駄足をされるんですな。我々の方からいつても高が名所ですよ。」といひ居つた。此の偉大な藝術の力は、翌る日、二度目に此の天井の下に立つた時、雲を破つた百雷の勢で直下して來た。此——の豫言者——、——の巫女、天地創造からノアの洪水までの傳說、奴隷と名づけられた——の、人體の最も驚く可き型成、それから祭壇の「最後の審判」——、之等凡て、人體に似通つた百の巨人の集團が、實際人の人間の手で創られたのだと思ふ時、ゲエテの驚嘆も、ブランデスの讃唱も、言ひ方が小さくこそあれ、誇大なぞといふ事は思ひも寄らなくなるのである。それからその翌日その翌日と、ある日は此の薄暗い堂宇に集められた「天上地下から吹き荒む永世の嵐」に心を惹かれ、ある日は、階上のスタンツエに集められた、朗かな調和、併しながら希臘藝術とは明かに區別のある、不屈の意力を土臺とした人間藝術のラフアエロに心を寄せて、とうとう全三十日といふもの一日もかゝさず日參をしてしまつた。その内段々に暑さが堪へ難くなつて來た。バサジア、マルゲリイタの丘を歩くのを常としてゐたが、左には聖ピエトロの圓頂から始まつて羅馬の七つの丘が又もえ立つて來た、右には曠野にも塵が立つやうになつて來た。帽に羽根をつけた伊太利の壯丁が殺氣ばつた愛國の歌をうたひながら、新に開かれた戰陣へ急ぐのである。

IV キユビストの見たるシスチナ堂の事（一）

實際聖ピエトロの圓頂(クーポル)が、西歐三千年の人道の象徴ならば、カペラ・シスチナは階上のスタンツエ・デイ・ラフアエロと一所に、其れ自身直ちに人道の集團(マッス)、一大モニユメントとなつたものである。

併しシスチナ堂に就いての感激感想を述べる前に、もう一度冷かに、單に一個の藝術品として、本當の意味での技巧の點からも目を通して見度い。それには在來の美術史、その多くは獨逸の教授の解説を、今更引照するよりも、玆にキユビズムの評論家ド・フアイエの文が、面白く讀まれるのを、大意を汲んで抄譯することにした。論者が平素ピカソと提携してゐることも、偶々新藝術が、古典の大家をどう學ぶやうになつたか、所論に讃すると否とは別として、傾向を覗ふ一助となるであらう。

先づ第一に論者が驚くのは、此の無際限の感激が、確固とした型(フォルム)の中に盛られて、何處にも溢れ出してゐるやうなところが無い。實際繪畫に求むべき者は、凡て此處にあるといつて、さて細説して、「堂に入る。天井。──穹窿。最も莊嚴なしかも鮮かな色彩。鼠色と白との土臺に、黄橙、赭黄、赤、緑土、紺青の、最も落着いた調子。一體「色彩畫」は、之れ以來どんな進歩をしたであらうか。次に構造は。──全然新しい量(ヴオリウム)の科學に聯(つな)がれた各要素が、最も大膽な對照法で組み合されてゐる。──一體繪畫の目的の第一は、與へられた表面に、建築の法則で組み合された、形の集團(マッス)を取り圍むことである。そして其の集團(マッス)は、眼と相對のエネルギイで運動を生み、其の運動は又連續した調和によつて、整へられて行かなければならない。此の相對的の運動の調和、關係が、即ち成形藝術、抑も藝術その者の目的といつてよいのである。そして此の集團(マッス)の運動は、近代では、始めてキユビズムに依つて研究された者であるが、ミカランジエロのシスチナは、其の凡ての要件を滿たして、抑も繪畫の到り得る最高頂を示してゐる。」

又「最後の審判」に就ては、「天井の繪よりも更に形成の意力が強く見はれてゐる。色彩に任ねられた役目も、更に決定的だ。「最後の審判」の莊麗な色彩は、二つの調子しかない、黄橙と紺青。そして此の二つの調子は、黒と白との混交によつて、又各自に近寄つて來てゐる。驚く可き感激の器(うつわ)だ。」と。

V キユビストの見たるシスチナ堂の事（二）

キユビスト風の敎理的な論調をば、煩しく感ずる者があるか

も知れないが、之を在來の美術史が、殆ど全然表情の正否、内容の解説に重きを置いたのに比べて、別種の興味を持つことは否な者が無いであらう。（それにしても、予等から見れば、尚あまりに内容的文學的と思はれるオエルフリンの「伊太利ルネイサンス」が、美術史上、藝術を審美的に取り扱つた最初の者だといふことは、いかにけふまでの美術史が、美術實際の發展には、交渉が少かつたことを證據立てゝゐる。）

更に進んで、

「偉大な藝術は建築といふ感念無くしては存在しない。此の事は、聖ピエトロの寺背を造つたミカランジエロは承知してゐる。繪畫が一度建築に手を觸れた時、其の繪畫は靈魂を持つやうになるのである。尺度の感情の偉大さは、建築以外の藝術を、建築の眼で見た者で無くては分らない。「最後の審判」はぎつしりつまつた建築で、其の數學はあくまで正確であるから、今此の繪の一部分を摘出しやうと思ふことは、全體に對して反逆を企てるやうなものである。此の點から云つて、本當にミカランジエロを知らうと思ふ者は、實際シスチナ堂に足を踏み入れる迄、複寫寫眞を見ることを避けた方がよい。ミカランジエロは實際創造した。偉大高貴といふやうな人像は、彼の型の組み合せから生れた。常々石で物を築くことを好んだのは、彼の順序と權威とに對する愛情が、彫刻よりも建築に、もつと決定的な表現の器を見出したからで、メディチの堂、ピアの門、聖ピエトロの寺背、之等の型の集團は、殆ど心臟的な均齊に創り出されて居るが、實は繪畫の方でも、彼は同じことをしてゐるのである。即ち神とか豫言者とか、傳説的な型を再現してゐるのではなく、成形的の方則から生み出した偉大な型。それが後に、神とも呼ばれ豫言者とも名付けられ得る偉大さを創り出したのである。法王はシスチナに、歷史を描くやうに命じた。で、ともかく人體を現さなければならない。併し、羅馬の市を歩いてゐる男女の人體から、彼が創り出した者は、全然新しい型で巨人、怪物、神々となつて現れた人像の下には「此の女は巫女、此の男は神」とかいてなくとも、其の型それ自身が、新しく、未知で、又尋常を外れてゐるので、今日四世紀の後、豫言者とは之であり、神とは之であると、人が受納するのに躊躇しないのである。」

以上、出來得るだけ大意を解いて抄譯したのであるが、大體の眞理は否み難い。殊に結論は、予も躊躇なしに同意するものである。「繪畫をば、單に再現の境域から、新しい、全然成形的な要素の創造、感覺的な建築を含む迄、成形的な要素の創造に、もち上げたミカランジエロは、今日我々にとつて、最も學

よぶべき教訓を殘してゐる」

VI　シスチナ堂天井由來の事

千五百八年の春までは、此のシスチナ堂の天井も、紺地に金の星を散らしたコンヴエンショナルな者であつた。それをジウリアノ二世の、例の一つから一つへと、法外なモニユメントを築く企てゞ、一旦自分の墳塋の建造を命じたミカランジエロに、その彫刻は思ひ切らせ、今度は此の天井に十二使徒の巨像をかかせやうといふ。巨匠(メイトル)は再三再四辭退した。實際法王墳塋の建立は、此の大彫刻家の心魂を動かしたもので「羅馬の空から遠く地中海に影を落す大理石の山を築かう」と、途方も無い野心に驅られて、幾年刻苦、漸く宏大な構想を作り上げた今となつて、其の計畫を中絶することは、いかにも思ひ切り難かつたものであらう。數年前、老レオナルドと對抗して、フイレンツエの市廳に描いた「ピサの戰」で、普く認められた名聲はありながら、自分は本來畫家では無い、たゞ正しくは鑿持つ術も知らぬ者だと、繰り返し繰り返し王座の前に跪いて、此の難儀な王命の免除を歎願したのであつた。(ミカランジエロは、此の法王の墳塋が未成に終つたことを、彼の生涯の悲劇だつたと、死ぬまで愚痴をこぼしてゐる。事實今日羅馬聖(サン)ピエトロ・ウインコリの、出來損ひのジウリアノの墓の前に、四圍の平凡と調和なく、謂はゞ雲の向ふの自分の世界から、一人取り殘された巨人のやうな、モオゼの座像を始めとして、ルウヴルやフイレンツエにある未成の「奴隷」が、いづれも此の「山嶽」を飾る可き、幾十の巨像の一部に過ぎなかつたことを考へると、之は、人道の悲劇ともいはなければならないものだ。)

併し法王は、偉人の特性の氣紛れから、もう自分の墓といふ考へにはあきてゐたので、ミカランジエロの心をこめた歎願にも、返事としては、シスチナ堂に百尺近い足場を築かせて、その上に巨匠(メイトル)を追ひ上げてしまつた。かうなるとミカランジエロも文句をこねて、フイレンツエから多勢の畫家達を呼び寄させ、フレスコの描法を教り度いといふ、十二使徒の畫題よりも自分の好むものがかき度いといふ、ミチデユカツトの畫料は六千にして貰ひ度いといふ。いろいろの文句がそれでも謂なりに通されて、翌年の一月、やうやく仕上げた下圖を持つて、巨匠(メイトル)は三十三才で、その百尺の足場を登つて行つた。

萬有創造の嵐が人間として古來誰よりも創造の主に近づいた藝術家の、巨大な心魂を吹き搖(ゆる)がして來た。昨日までのけちな爭(いさか)ひは、渦(うづ)に渦を卷く塵のやうに、此の力と偉大との世界からは遠くなつて行く、——わざわざフイレンツエから呼び寄せた

畫家達は、一人殘らず追ひ跡されてしまつた。只一人森閑とした禮拜堂の天井に、未だ曾て人類が想像もしなかつた、偉大な天地を創つて行く藝術家の心と手には、太初只一人宇宙の混沌と争ひながら、萬有を創つたといふ天主の力が、日に夜に勢をまして集つて來た。「一世紀を震撼させた」ジウリアノも、かうなつては三十才の藝術家に頭を下げる有樣で、あの性急な老王が、三年の間未成の畫面を見るなといふ命を守つたことは、此の時の藝術家の權威が思ひやられる。——當時の天下に只一人、此の造物主の新しい天地創造を、その日からその日へと、驚嘆して眺めて行つた人間は、毎朝繪具をこねに通つて來た左官であつた。

VII　ミカランジエロとラフアエロとの事

一方ミカランジエロを、新しいプロメトイスのやうに、あらゆる人間道からはなれた世界の涯に縛り付け、莊嚴限り無い寂寞の間から、莊嚴限り無い新天地を、創造させてゐたジウリアノ二世は、同時に、同じ宮殿のたゞ一つの階段を隔てゝ、新しいパルナッスのさんざめく享樂の間から、今一人の巨人に、同じく莊嚴限り無い新天地を創らせてゐた。三年の間曙光から黄昏まで、百尺の足場の上に仰向けになつて、流れ落ちる繪具を浴びながら、天下を呪ひ友人をそしり、仄暗い寂寞の精となつて「天上地下の嵐を集めて、ミカランジエロが此の大業を成就した千五百十一年、階上のカメラ・デイ・シニヤトウラ、「人智の最も高貴な收獲」も成就したのである。此れを成した巨人は、いふまでもなく當年二十五才の少年ラフアエロで、ミカランジエロの野心が、凡て從來の繪畫の概念を根こそぎ追ひやつて、己が臟腑の底ひから新しい恐しい天地を創り出すことにあつたと比べて、少年は仕事の最中も、多勢の廷臣、宮女、藝匠、學者たちに朝夕取り圍まれながら、此のヴチカノの一室に、伊太利二世紀の繪畫史を「海のやうに」集めて、更に新しい歴史を創つてしまつた。ミカランジエロが其の傷つき悩んだ心、三年仰向けになつて難行に虐げられた體を、絞りに絞つて無邊の雄大を創つてゐる間、ラフアエロの筆も輕げな下圖の裏には昨夜の戀の思出が、輕い唄になつて書かれてゐる。(此の下圖は今オツクスフオードに殘つてゐる。)そしてそのラフアエロは、夢寐の間も息むことを知らない創造の犧牲となつて、——才の若年で斃れてしまつた。藝術創造の抑へ難い衝動に逐はれて、その英雄的な難苦に殉じたところは、二者選ぶところは無い。しかも何といふ違つた人格であらう。そして何といふ違つた藝術であらう。ラフアエロこそ羅馬に來て、スタンツア、殊にスタ

ンツア・デイ・セニヤトウラを見ない、でとかうの論を立てることは冒瀆である。ミカランジエロの藝術が「人間の爲し得た最大の仕事」として何人も不服の無い者ならば、ラフアエロは全くコピノオが書いた通り、ミカランジエロの「持たない者、持たうとしても持てない者を凡て持つてゐた奇蹟」で調和、渾全、嫻熟、そんな言葉は、二十五才のラフアエロが描いた「亞典の學派」の前には、唯亂雑ないたづら書きになつてしまふ。ラフアエロの事は稿を改めて論じるつもりであるが、今我々の想像のたじろぐのは、此のシスチナと此のスタンツアとが、時を全うしてかゝれたことで、數年前フイレンツエの市廳の壁に、レオナルドとミカランジエロとが、同じ畫題で技を競つた例にしても、凡て十六世紀の人事の偉さは、巨人等が山と山とを投げ合つて爭つた太古の神話をそのまゝの趣である。基督教が藝術に及ぼした感化はどうあらうとも、罪の觀念と、それに伴つた自覺の觀念とが、藝術即ち人間道の結晶に、影をつけ深さを加へたことは否み難い。之に比べては遙に完全でもあり渾然ともした希臘の彫刻は、何か雲を知らない碧空の下で作られた趣で、煩惱の力に足りないところが、神業としてはどうともあれ、今日の人間道のモニユメントとしては陽影の貧しさを感ずるのである。

VIII　ルネイサンスと英雄主義(ヒロイズム)の事

一言にしていへば、ルネイサンスとは、倫理的にも藝術的にも英雄主義の時代である。教條によらない英雄主義の面白さは、凡ての英雄が、個々の煩惱を思ひ思ひに主張しながら、しかも心核を個性の力(Virtue)に凝聚して、偉大な成果を收め得た所にある。悲痛で壯大なミカランジエロの働き方に比べては、出入に王候の供奉をつれ、天晴廷臣になりすまして榮耀を極めたラフアエロの働き方は、一體に事大な東洋人には、同情を呼ぶとが少いかも知れない。その「倫理家」には又、ミカランジエロが野の人望を失はせようと力めた小量に對し、ラフアエロが恐れ氣もなく、自分はレオナルド、ミカランジエロのやうな獨創の力は無い、彼等によつて畫道を教へられた後進の弟子ではあるが、只河川を集めて作る靑海の廣やかな美は、誰にも讓るまいといつて、しかも其大言を成就した廣量を偉いものと見るであらう。レオナルドの變態的な好色も、「不道徳」であれば、ブラマンテの友人排斥の劃策や、(ミカランジエロの大理石の山嶽が、空しい夢となり、彼の「一生の悲劇」となつたのは、ブラマンテの劃策が功を奏したからである。)さてはチチアンの沒義道――既に巨萬の富を積みながら、尚數百デユカトを貪つ

て、自分ではその才能を認めた若い藝術家の、既にきまつた注文まで奪ひとる沒義道を敢てした、――之等凡百の不倫から、更に世間を對手とした君公、僧正の惡行に至つては、後世の道德家の苦い肝が、いくらつぶされても追ひつくことではあるまい。思ひ思ひの煩惱とその Virtue（力）の面白さを、特に唱へる事としても、無論之等實際の倫理的の欠點を、欠點として否まうとする者では無い。しかしながらその欠點にも敢て惡びれもせず、要は心身を鍛冶して、後代萬年が「仰いで敎へをうける烽火(のろし)」をあげ得た巨人の Virtue（力）を思ふ時、何人も此の煩惱肯定の人道に、讃唱の聲を擧げずにはゐられないのである。

曾てラビントラナアト・タゴオルに私淑した印度の青年が、實際本氣で、ルネイサンスほどの人類の大不幸は無いといつてゐたが、之は彼の立ち場からいへば然る可きことで、要するに「ルネイサンスを一貫した倫理的の敎條」は、凡て煩惱人力の極端な擴大、過度の意慾、超人的な努力であつて、なでやかな中庸の幸福は玆に求めてはならないのである。――悠暢迫らない落付、その身振を社交的には流行さした十六世紀初頭は、實は巨人等が血眼になつて、息を切つた凄まじい時代で、四六時中地團太を踏みながら焦りに焦つて確固不拔な大業を成就したジウリアノこそ、種々の意味で巨人の世の王たるべきものであつた。

之に反して、一方今日のクラシシズムが、單に智的傾向として止つて居るのは、實は英雄的(ヒロイツク)な意力がまだ藝術の何處にも見出されないからでは無いか。一體平面に見える自然を、立體に築くといふ、クラシシズム根本の考へから心理的の英雄主義である。科學の傳播、民主々義の發展と一所に、力は個人から集團に移つて行つたといふ淺見は、早い話がレニン、ムツソリイニの例でも反駁される。勿論英雄主義などといふものは、主義として提唱され可き者では無いと思ふが、抑も敎條としてルツソオ以來の自然主義眞摯主義は、鍛冶主義、スパルタ主義に、步を讓る可きであらうと思ふのである。

IX　英雄主義(ヒロイズム)の事（一）

一體英雄主義の美を、一言にしていへば、自然に抗(あらが)ひ自然を撓(たは)めて産むだ力である。「何か英雄主義には哲學的でないものがある、又宗敎的に淸らかでないものがある。一般に英雄は、他の人々の靈も、自分と同じ素質から出來上つたものといふ事を無視してゐる、彼の特性は自然矜度と傲岸と、極端な個人性とに集まつてしまふ。」とエマアソンはいふが、抑々極端な個人性とは、多くの場合、四圍に抗つて打ち立てられるものである。愛す可き眞情主義、自然の傾向の導くまゝに、卒直に、幸福に、

「賢人の愛」に溺れるのを、人道の本體とする倫理が、その眞理は兎も角、最も合理的な解釋とすれば、その萬有汎愛の只中に、拮据に己れを持して、謂はば生命の河中に頑な、岩を立てる英雄主義は、一見不合理であり「哲學的でない」のである。併し乍ら人の世の合理不合理を誰れが定めよう。スパルタの鍛冶、羅馬の矜度、日本の武士道、いづれも不合理な倫理ではあらうが、人の性の力と美とを導き出した功を擧げれば、「合理的な、眞情主義に比べて、遙に合理的な進化を促したものである。鍛冶、忍苦、强行、——人の心は刀劍に等しく、たゝけばたゝくほど、鍛へれば鍛へるほど冴えて來る、四肢の自然な運動に抗ふのが、舞踏の美の根本義ならば、英雄主義は、自然に對する曲藝の美と云つてもよい。それにしても今日になつて見れば、ノラの馬鹿々々しい眞情主義に比べて、おさんの不自然な英雄主義が、幾倍か美しくも貴くも見えるでは無いか。

併し乍ら以上、スパルタ、羅馬の男性道德、または日本の義理にしても、英雄は單に自分の性好といふ自然に抗へばよいので、彼等が遂げた英雄行爲は、戰場に於ける英雄行爲と一般、周圍の賞讃をうけるもの、英雄主義としては、寧ろ安逸な低級な者といはなければならない。英雄が英雄として、其の純金の價を現す所は、周圍の道德的批判に逆つたところ、玆に危險難苦を無視する、英雄主義の美は一番に輝くのである。「危きに近よらざる」を金科玉條とする合理道德に對して、英雄主義の根本は「安きに近よらざる」不合理道德にあるので、エマアソンが感嘆した青年訓、

「凡てしてはいけない、しては恐ろしいと思ふことばかりをやつて見ろ」と云ふのもこの事である。

ついでにエマアソンの小句を抄譯して見やう。

「英雄主義は一般人類の聲に反し、又少くとも一時は、偉大な人善良な人の聲に反して働くもので、その行爲は單に個性の内面的な衝動に對する服從であるから、凡ての用心深い人の眼には、社會の安寧とは絕對に違反したものと見えるのである。それにも係らず最後の成功は英雄主義によつて克ち得られるので、かくなつて始めて「賢人」も、英雄行爲を賞讃しないではゐられないのである。」

X　英雄主義(ヒロイズム)の事（二）

個人の力、自然に抗つて生ずる個人の力、之がステンダルに從へばルネイサンス文化の動力である。當時最大の思想家レオナルド、マキヤヴェリの二人が、十五世紀英雄の頭目として、推擧するのに躊躇しなかつたチエザアレ・ボルジアは、幾世紀か

悪魔の化身として葬られた地獄の底から、又このごろは個人の力の權化として、ニイチエ、ゴヒノオ以來新しい評價を得て來た。實際彼の凄じい悪行——妹を姦し、兄を殺し、義弟を殺したのは、彼の無道の小さい部分に過ぎない、——殆ど想像し難い無殘の悪行を通じて、彼自身の力、現世來世の審判を無視して立つた個人の力は、審美的嘆賞以外、倫理的にも否み難い美を持つものといはなければならない。

ドストエフスキイの「カラマゾフ兄弟」と並んで、近代文學の聖經となつたステンダルの「黒と赤」は、その主人公ジユリアン・ソレルが、著者の理想的英雄として、新しい英雄主義の權化をなしてゐる。其の他レルモントフの「今日の英雄」、ドストエフスキイの「狂信者」、いづれもソレル型、ドン・ジユアン型の、あくまでも冷かな、絶對に恐れをしらない人道の侮蔑者、凡ての境遇を、只己が力をためし又磨く試金石、打ち克つ可き障害として、危險から危險を求めて行つた英雄が描かれて居る。ジユリアン・ソレルに至つては、僞善の保護色で、衣紋を染めた今日の社會を憎むあまり、己が力を試みる爲めに、故に危險を作り、危險を冒して、揚句には故に死までを招いてしまつた。一生を單に己が力の術として自己の運命を、善悪思ふがまゝに形づくつて行く、此の型の英雄の滿足は、誇らかな孤獨にあるのである。もともと行爲は問題では無い。問題は個人の力にあるので、予としても今日の社會に、必ずしもドン・ジユアン型の英雄を求めるといふのでは無い、只あまりに涙脆い人道主義、眞情主義だらし無いルツソオ系の自然主義に對して、矜度を根本とする、鍛冶、忍苦、信條としては武士道、羅馬道、スパルタ道のいづれを問はない、ともかくもたゝき上げた個人の價、人の世の鉄碪で鍛へ上げられた「打てば金鐵の響きのある」胸が求め度いものだと思ふのである。(それにしても情けないことだが、武士道には、スパルタ、羅馬の士道のやうな矜度が無い、義務と云ふ觀念をそれ自身の價に置かず、主君といふやうな人手に置いてゐるところから、根本が卑屈で、此の點からは町人の義理の方がむしろ矜度を、持つてゐる。)

以上一言にしていはゞ、人道心核の建造を旨とするクラシシズムの藝術を、座談隨筆の心棒として、右見左見の道草を食ひながら、續述して來たが、一方最近傾向の紹介と云ふ意味もあるとはいへ、もとより眼前の流行を報導したものでは無い。予一人としては、まだ今日ほどの傾向にならない前から、疑は無い信仰を其處に置いて、過去十年間、多くは四圍の風向に逆つて來たものであるが、もとより今日といへども、まだまだ理

想の時代には、百里も千里も程が遠い。一體審美的には、平面に眺めて居た物體を、成形的に立體的に見やうとする眼は出來たにしても、更に倫理的な力、その成形の理想をおのが手で築き上げる力は、まだ何處にも生れてゐない。力、力、心の手力、そのヒロイズムの湧くまでは、今日の藝術も所詮は生命の無い教說に止まるものだ。かういふ折から國を擧げて國を築くといふ故國の樣を想像して、法外な希望を築くのは、十年の遠離から國を知らなくなつた愚人の夢でもあらうか。三千年來西の國の誇とした手力のヒロイズムを、今日は東から盛りかへして、新しい人道の誇りを立てゝ見やうと思ふ、老人か若者か、男か女か、その人々の聲は聞けないものか。力、力、心の手力、そのヒロイズムが太陽と一所に東から上つて來ないものか。

父を葬る

藤澤古實

大正十四年五月六日、父死去の報を得て歸鄕す

舊里（ふるさと）の道はすべなしおのづからあふるる泪（なみだ）とどめかねつも

とことはに還（かへ）らぬ父がこやりい座（ま）すこの部（へ）屋（や）に母も亡（な）くなりにけり

晝は日（ひ）照（て）り夜は燈（ひ）ともり明（あか）るしと病（やまひ）の床（とこ）に宣（の）りし父はも

いささかも病むくるしみを言ひたまはず心あかるくい座（ま）せり父は

粘（ねん）土（ど）像（ぞう）我（あ）は作るなり亡き父の面（おも）わ守（も）りつつ我（あ）は作るなり

——父を葬（其二）——

わが村の山の粘土は我が作る父のみ像となりにけるかも

亡き父の門出かなしもあたらしき草鞋を穿きてこころかなしも

墓山にしみ立てる樹木の若芽ふきすがしき時に父を葬るなり

呼子鳥の聲こだまする夕山に父をぞはふる雨に沾れつつ

向山の夕影に啼くかつこうの聲こだまする奥津城處

山の上に天雲垂れて零る雨に沾れづつ父を葬りけるかも

雨あとの雫やしげき山松の木末が上にすめる蒼空



渾河のほとり

川田順

初夏某日、撫順奉天間のところどころにてよめる歌十七首

眼に見えて鵲まれに下り來なり赤砂原の日のひかりかも

砂を踏みて專ら歩めりおのづから澄み乾く夏の空ひろらなる

見ゆるもの何もあらねば眞晝間の赭ら砂原眼は疲れたり

はたけ生の高粱の芽かそかか青みつつここの曠野に夏は來向ふ

驢馬の牽ける鋤より土ほこりかそかに立ちて愛しきろかも

渾河の流れ行くかたは見えにけり赤砂の迹の水びかりかも

たひらかに堆れる砂のをちかたを河ながれたり水光しつ

河中洲の諸ら砂原たひらかに眼をさまたげず向うの岸まで

喰ひ入れる轍は深し河のべの諸ら砂はら行く人なしに

黒豚はちぢむさく寝てゐたれども豚の仔どもは走りてゐたり

くろぐろと黒豚の仔の動きゐる野の水たまり夕かげりたれ

旅ゆけば黒豚の仔のすばしこく走りゐるさへ愛しかりけり

遠い村の黍殻垣根がきはやかに黄に照りゐつつ夕づく砂原

野の水の夕日あかるし人きたりうさぎうまより竿をはづす

河中洲ゆふかたまけて黝みたりそのまんなかより煙が立ちゐる

曠野原の遠低山のうへに立つゆふべの虹は何人も見なくに

ひたぶる歩むわれかも曠野原の夕日いやはてに小さくありけり

大連市外星が浦の旅亭に午餐を喫す、即興二首

渤海の鯛釣りほこる漁師かも眞日の沖べに帆は動かざり

遠方の生簀の泛子のあなしづかよく見てあれば搖れてゐるなり



置忘れた生人形

賀川豊彦

赤ン坊は　産れたのですか？
生えたのですか？
鶏小屋の　側で
市松人形の　やうに泣くのは
天の使が置忘れて行つた
人形ぢや　ありませんか？

何しろ　目出度いことです？
パパアが　歐洲に行つて
留守の間に
天の使が　また　もう一人の
小さい人間の芽生を
天窓から　一寸と　投げ込んで

行つて　くれたものですから
うれしいことです

おむつが　森の間に
滿艦飾のように　輝いて
ゐるぢや　ありませんか？
鷄も　パピも、みな
喜んでゐるぢやありませんか？
コカツコツコ〱、ピヤウ〱
軒の雀も　喜んでゐますよ
「武藏野の　北澤の　小屋に
赤ン坊が　一匹　天から落ちて來た」
と云つて　大騷ぎをしてゐるのが
私の耳に聞こゑます

坊やは　妙な顏をして
赤ン坊の顏を見てゐませう
おかしい奴が？

何處から　來たのか　知らぬ
私の乳を盜る奴は
おかしな奴だと
ねたましくも　思つてゐませう

然し何しろ、目出たいことです
その日は　武藏野の空も
特別に　晴れたことでせう
天の使が　天から落ちて
來たのだから　それ位のことはありますよ

遠見の富士も　今日は
にた〳〵微笑んで　くれませう
ロンドンにゐるパパも
うれしいので　ニタ〳〵笑ひました

私は　どうしても
產れたは　思へません

生えたのです
生えたのです
如何にも　自然に
鶏頭畑に　鶏頭が
生えるように
生え上つたのです

新しい　赤ン坊は
大地から　生えたのです
春の日に
武蔵野の　椋と榛の下に
生えたのです

まア　何しろ　目出たいことです
私は　土地から
赤ン坊を　突出してくれた
大地の精に　お禮を云ひませう。

（一九二五、四、二七、ロンドンにて）

歐洲をめぐりて藝術巡禮者の感想

矢代幸雄

心の糧

是は心の糧としての藝術の願ひである。

藝術表現を實驗心理の材料と見て、美意識の一般法則を求めんとする努力がある。それは近世の美學である。又藝術を文化現象と見て時代背景から史的解説を試みることが流行する。日本ばかりでなく、各國に美術史の研究が美術研究の恰かも全部であるかの如く行はれて、美術に關する數多き著書には史的價値は藝術に黒い蔭影を翳して居る。藝術の學問的取扱は學問として有效であるけれども、藝術の友達は淋しがるであらう。

藝術境は宗教境である。藝術の要點に、宗教的獨立價値がある。我と藝術との直接交渉である。藝術が顯示である大きいものと我との面接である。そこには自ら美意識の一般法則に沿ふて我も動き生きて居るのであらうけれども、美感の一般法則の理解に關心することは、藝術との會話に仲介者となるよりも、有らゆる他の仲介者と同じく、障礙である。一天下之を非としても藝術と私と、私丈の話しをしたい。背景の文化史的解説が畢竟何にならう。欲しいのは藝術そのものである。傳統から釋放せられたる、至純であらうとする「私」か前後左右の但し書から切離されたる一つの面影に、面晤し、耳語し、憧憬する。心の糧を求めて、生を影響されずば、何の望みあつて藝術を求めんとするのであらう。藝術への願ひは知的遊戯でも又一般教養でもない。

心の要求の至醇でないことを怖れやう。それが至醇な心の要求であるならば、見る影もない一つの壁畫の切れ端の前に、終日を立ち盡しても、悔ないであらう。ファン、ゴーグが、あんな俗なと思はれるメツソニエーの或る描き方に感心したなどは美しい挿話である。名作でなければ感心しないことに決めて居

る數多き紳士よりも、どの位純粹であるかわからない。藝術の感銘は對象のよさと主觀の狀態との相關から生れて來る。こちらの氣分に蔭影の切りに往來する以上、名作が常に同じ感銘を持ち來たすと豫想すれば誤謬である。和蘭陀へ行つてレンブラントに感心して來給へと云ふ。レンブラント程大きいものになれば、焦れた子供のやうな、こちらのむら氣を抱擁して、常に懐かしいけれども、それでも或る繪は或る日に温く開けて見え、また或る日は閉された如く寂しかつた。日本で藝術で通なる人がよく云ふ、「あれに感心しなけりや駄目だ」と。私はその「駄目」であつた日が多かつた。「駄目」でも仕様のない程、名作を前にして心がほかの物を欲がる日があつた。ベートオフエンの第九交響樂は私を歐洲に於て最も深く動した音樂であつた。それを最初に聽いたのは巴里であつた。けれども私はベートオフエンなるが故に常に變らず感激して居る譯には行かなかつた。

私の四年居た伊太利のフイレンツヱは音樂に貧しい町であつた。時たま、名手(ヴアーテエオシ)が通過する時、「音樂の友達の會」の催しで一夜を古い堂内に亂れ彈いて、あとは却つて寂寞になる町であつた。音樂に滿腹して容易なものでは感服しないことを誇りかけた巴里の日の後に、私には隨分音樂の饑が來た。意地のきたないやうに、どうか耳に、耳から心に、刺戟がほしい。そう言ふ時ナポリの歌か何かを唄つて街を流して來るギタラの哀音をどの位貪り聽いたらう。特に私の愛した、樂人と云ふには余りに慘めな三人が居た。夫は大きな古風な立琴(アルパ)をかついで來て彈いた。夫の弟らしいのがヴイオロンチエロを、そして妻が腰かけて、ヴアイオリノを彈いた。妻が腰かけて彈くのは膝に乳飲子が居たからであつた。乳飲子が母の乳房のあたりになつきかゝると、母はヴアイオリンをやめて子供をあやした。肝心のヴアイオリンが已むので、チエロ彈きはそれを償はうと急に元氣よく弓を動かすのがおかしかつた。——夏の宵にアルノの岸に靑く吹く微風の所爲(せい)か、それともその日の午后に再びも三度も、線と云へば、それは水底に揺れる縷り藻の描く曲線よりも柔かなボチチエリの繪を見た所爲(せい)か。私は屢々ベートフエンの交響樂に泣けなかつた淚と、親しい感激を路傍の音樂——と言ふても音樂の故郷、伊太利の決してさう貧しいものでない——それに泣いたらう。

くだらないものへの感激を愧ぢやうか。庶幾くは、それよりも、名作に對する倫理的尊敬故に感激した積りになる殊勝なる僞りを愧ぢやう。昨年の復活祭には獨逸人の大群が伊太利を蔽した。如何するかと思つて見て居ると、有りと有らゆる

美術館へ、行かなければと焦つて、偖行つてベデカーの案内記に照合せてしるしをつける。するとそのまゝ安心してフイレンツエは二日で濟ませたと得意であつた。國へ歸れば、ゆつくり本を讀んで藝術を取卷く周圍の事情に物識りになり、藝術自身には愛着と悟入がない丈それ丈氣楽に、一般妥當を心がけたる抽象論と、周圍の事情を克明に調査した美術説明書を出版するのであらう。私は方法論を以て初まり概説に畢る、獨逸の藝術に關する學問を、伊太利に唾棄した。欲しいものは藝術それ自身であつた。藝術に關する書物の研究ではなかつた。

——秋の日は大西洋を横切つてコンテヴエルデ、コンテロッソの大船が駛つて米國の遊覽客を澤山に伊太利に運ぶ。その多くは龜甲條の丸い眼鏡をかけて、米國の大學に美術史の講義をきいた婦人達であつた。彼等が樣式比較と製作年代を氣にするのを驚嘆するがよい。米國の美術館は美術を時代通觀の挿繪にした。寫眞をそろへて比較研究に便にして、偖藏品の配列は一目に發達史的順序を會得出來るやうに巧みであつた。私は美術史研究者に米國の美術館圖書館の組織の如何に効果あるかをよく知つて自分自身お世話になつたけれども、この樣式批判と製作年代の攻究がほとんど總てである米國に、藝術の正しい感得が、私の知れる限り、殆ど不可能のやうであつた。美術上の物識(スノッブス)りの如何に米國に多いか。古代羅馬の廢墟に秋の日のおかおかと照れば、眼鏡をかけた老孃の、遠見には美しい着物の色の群は、「レディース、エンド、ヂエントルメンス。」と云ふて英語演説を初める伊太利の案内者を取卷いて、一生懸命に羅馬史の名君主の名と年號とを手帳に筆記して居た。宿屋に歸れば食卓に論じ合つて、第一回基督教迫害は何年、その時教徒を獅子に食はせたか否かを説いて、合宿の東から來た旅人を驚かす快感はあつても、その旅人のしたやうに斷礎の間にちらちら覗いて返り咲いた壺菫を愛することは忘れるやうであつた。そんならば廻かなる大西洋を横切らずに本國に本でも讀むで年表を暗記する方が正確である。あゝトラヤン皇帝は何年にでも死ね、大理石を金色にあたゝめる太陽を石に這ひのぼる銀緑蜥蜴と共に日向ぼつこして、黒い程の蒼空に羅馬の星の晝でも見えるかと見上げる、星は見えないけれど中天をさへぎるコロッセウムの、むつの丘よりも大きく、さればまた結晶體よりも端正なるを、懶惰のからだなればこそ長閑に生きて居られる心に吸へば、——私の幸福は完全であつた。古き羅馬は日の光と共に旅人の皮膚に滲み入る。

エペソの保羅のやうに、眼から鱗片の落ちるやうに。藝術から心の救ひがもらへないならば、詩人キーツに夕樹の蔭から唄

つた小鳥、

「知識をほしがるな、私は何一つない。

　でも夕の空が耳を澄して私を聽く」

私も無知で歸り度いと禱つた。禱りの無駄ではなく、無知では歸つたけど、尙私の心の眼は保羅のやうに鱗をふるひ墜して明らかになつたか。………以下に描くところ、論の形にはなつても、それは、他人の心でない、私の小さな心の、藝術に對する愛と美しき願ひである。

靜かなる藝術

欲しいものは、それは靜かなる藝術であつた。

希臘の美學にエトス Ethos とパトス Pathos の藝術論あるをきいた。エトスの藝術とは人間の恒久性の表現、パトスの藝術とは云はゞ人間の動搖性の表現とも言へるであらう。アリストテレスは希臘藝術をプラキシテレスの出現を以て、こう前後に區別した。藝術表現に微かに動く人間の情感の生活を入れて爾後の希臘末期の彫刻を、鎭まり停む神々から生命に動く人に下して、なつかしくもなやむものにしたプラキシテレスに要點を置いて、希臘藝術を前後に二大別することは、慥かに史上の名論に相違ないけれども、後世のものには、エトス、パトスの論は、更に大なる適合を以て、希臘藝術と基督教藝術との對立を説明するやうであつた。プラキシテレス、スコパスの藝術に情感の動きを見せて、やがては、石も泣き叫ぶであらうラオコーンの製作を見るに到る古典世界の終末期は、實はその裏に何時の間にか悲哀の宗教、基督教の生成を文化史的に豫想するのであつた。嘆きの谷に見えぬ神を怖れ慕ひ呼ぶ基督教藝術に比べるならば、そのかみの希臘藝術は玲瓏としてまるで靜かであつた。悲しむも神々の子孫は靜かに悲しむだ。——基督教は歐洲を悲傷と歡喜の有頂天に洗禮して歐洲藝術は中世以降、如何に情意表現に雄辯になつたらう。涙垂れ、骨はそば立ち、肉はうごめいて、觀る者を同じく泣け、さもなくば喜び悶えろと強いて來る。私は歐洲を大體に見て、強調を重ね重ねた表情の緊張感に耐えないと思つた。切迫したる體驗は人間に實生活で澤山である。何故靜かなる美しき國が、藝術にない。

古典と基督教と比べる時、私の好尙は常に古典藝術に向つた。くどく露骨である歐洲の生活に疲れた者が、如何に安らかに——それは刺戟に貪婪なる近代人に余りに長閑とも物足りないとも言はれやうけれども。——希臘の壺の繪を眺め入つたであらう。端麗なる線の國に美しきからだが、親しみ悲しみつゝ、靜かに舞ひ、眠りを眠る。私はまたぽーつと鈍い希臘の大理石の

肌が好きだ。文藝復興期以後のカララの大理石は、その靑く半透明なる鋭どさが、近代に到つて益々際立つて來る鑿の冴えと共に、心を焦ら焦らさせた。白い石が女になりかけた神話のまことになる太古の姿を――私は腕きゝの持囃さるゝ現代から慕ふ。

　私はミケロアンゼロ的でなかつた。額に汗して生を生きねばならぬ、此世の煉獄から遙かなる天國を惝恍する、――ミケロアンゼロは基督教的人生觀の具體化であつた。羅馬へ行つてカペラ、システイナに入る者は、重たく苦悶する筋肉の騷然とのたうつをきいて怖れるであらう。私はミケロアンゼロならば未だそれは薄明りの陰影に浸つて靜かであるフイレンツエのメデイチの墳墓が好きであつた。後期のベートフエンの交響樂をきくやうに、私はミケロアンゼロの大きさを充分に知るけれども、表面にまで出た悲劇に聲限りの力の叫ぶ世界は私の欲しい國ではなかつた。ドストイエフスキー・デユーレルの「深刻」なる藝術の流行に、日本に居る時からのけものの自分であつた。偏るゝ者の生は直ちに打たれ燒かれ深めらるゝであらうけれども、音樂で言へば自然それ自身の如く平遠なるバッハの國に太古の長閑さに歸り度いのが、私の本心であつた。

　近代藝術は何故こうも騷々しいのであらう。强い自我の意識は自然と揉み合ふて、如何したらそれを取入れられるかと言ふ、巧みであらうとする作意が見えすぎて、自然への投入を妨げた。人間の雄辯は大自然の前に騷音であつた。ルーベンス、フランツ、ハルスから承け繼がれて行く近代繪畫は聲高い筆致の示威運動のやうである。それは刀がいきなり要所を、そして要所だけを突くならば、筆致は如何ほど鋭くとも、姦ましいとは響けない。自然の大きい調和に組み入るが故である。私は雷鳴のやうに轟くバッハの音樂を靜かなる音樂とよぶ。明暗對照の强い、そして筆致の豪放であるレンブラントに靜かなる國を見出す。大自然の音律(メロディ)が靜かであると一般である。和蘭の海牙の美術館に立箏を彈くダビデと王サウルの繪の前に人は森林の中に座したる思ひがあるであらう。あゝ大自然の聲をきけ、自然に乖離し、焦ら焦らとして小さき反逆を繰返す近代藝術の演說口調が私を疲らす。見るもよい見ぬもよいと描いた繪を野に抛り出す、古代の心を私は戀しがりそうであつた。

　でも駄目であつた。長閑な古い國を戀ひながら自分達は否應なしに近代人であつた。中世の罪惡意識と世記末の神經衰弱が誰も胸に波立つてゐた。桑の葉形の團扇(うちわ)を持ち、肩に稚鳩を留まらせて靜かであるタナグラの女の住む國に、あくがれながら、住めない。住めないが故になほあくがるゝのであつた。希

臘人でない。希臘を慕ふもの、丁度ビョルンソンの描く北の國の子のやうに、蔭影の多い谷間から、あの山越えたらばと、日はあかあかと照る未だ見ぬ南を戀ふのであつた。私は希臘へ行き度いと日本を旅立つて、伊太利まで行つて、そして五年は疾く經つた。行き度い希臘にはとうとう行かれない。

伊太利藝術のあくがれに充ちた靜肅を我が心の懷しむ。希臘は彼岸であつた。同じく達しられない希臘を戀ふて、そしてまた近代の初まりなる文藝復興期伊太利には、我が心と同じものが搖れた。ベネチヤへ行くならば、ベリニ父子からヂオルヂオネ、近きマントワにマンテニヤ、中部伊太利へ來てボルゴ、サンセポルコロには玲瓏として澄んだピエロ、デラ、フランチエスカ、ピエロの師ドメニコ、ベネチヤノはフイレンツエに。そしてその銀綠の橄欖の岡に護られたるフイレンツエは懷しき人々に滿ちて居た。マソリノ、マサツチオの藝術は、中世の薄明りを透して希臘の彫像のゆききする默劇を見るやうであつた。ベアタ、アンゼリコは恥かしそうに、フラ、フイリツポ、リツピはかくしきれぬ官能にふるえて、靜かなる大地の夢を、まだ天使の國に描く。ボチチエリに到つては、もつと近代的であつた。近代人の欲しがる、そして近代人に得られゝばそうでもあらう、はかなき靜けさを持つて居た。古き神話を花に輝いた森の、銀波喜ばしく笑つた地中海の、春の芝居に仕組んでも、神々は白き人の群れに、それはまた野山に遊ぶ美しき森の精、水の精に、霞み薄れた。靜かなのか淋しいのか。近代人には靜かなことは淋しいことであつた。――そして、レオナルドオ、世界思想の總ての集成であるやうなレオナルドオには、長閑なる古代の心の氣のつかなかつた呪ひも懷疑も容れた、大きい凝視と靜思があつた。ボチチエリを近代の悲しき友達と言ふならば、レオナルドオは高く見おろす自然の先生のやうであつた。

小さき親しき藝術

藝術に友達の愛着を搜ぬる者は近代の粗大なる藝術傾向に落寞として悲しむであらう。それはその譯である。專らに瞥見的效果をつとむることが近代に藝術の生命を蠹害した。

西洋藝術の發達は、中世より近代への文化主潮であつた基督教に沿ふたが故に、崇拜對象の製作と宗教建築の裝飾と言ふ、同一場所に行はれながら、異つた二つの動機から起つて居た。崇拜對象は無論畏敬と愛着を以て作られた。室房の裝飾はそれは縱令聖堂に筆を謹んで殉教者の傳を描いても、一般的效果が先に立つて、よく練れた、噛んで味ふ美味が乏しくなる前兆があつた。言はば工業的なる粗雜さを含んで居た。それにはそ

に特有なる大きい味があることは疑ひない。餘りに謹んで書いた本尊畫よりも壁畫には屢々よい豪放さがあつた。臆病なるフイリツピノ、リツピは、縦令それはマソリノの輪廓によつたとは云へ、フイレンツエのカルミネ寺の壁畫に於て、餘りにたどたどしき平生の聖母像よりも、どれ程壯重であるか。けれども、十七、八世紀に藝術が工業に堕ちる芽生が上代よりの壁畫にもうあることは疑なかつた。慎しみ深き千四百年代(クワトロチエントオ)にすら、専門の壁畫描きの畫はベノツツオ、ゴツツオリにせよ、ギルランダヨにせよ、何處か索然と乾燥したところがある。世にアレツツオにピエロ、デラ、フランチエスカの描いた十字架物語の壁畫程靜穆に美しいものはないであらう。ピエロはまた山の町ウルビノに見るやうに、うぶ毛ほどの一筆にも魂を籠めて、磨いた象牙の肌のやうにまで密畫を描ける人であつた。そう言ふ人が壁畫を描いて初めて、大きい中にしつとりとして愛す可く又靜かであるものが出來た。サンマルコ寺に描いたベアタ、アンゼリコも、プラトオのフラフイリツポも、ヴイラ、レムミにトルナブオニ家の結婚を祝する圖を描いたボチチエリも、そう言ふ感受性の上の貴族であつたが故に、いつまで見ても見飽きのしない壁畫を描くことが出來た。豪壯として壁畫製作に一紀元を劃したとばかり言はるゝマサツチオも、實はベルリンや、フイレンツエの畫廊にあつて、萬人を懐しむる鄭重なるサンタ、マリアの畫を描く人である。まして聖傳に挿繪して古い細密畫(ミニエチユーアー)の技巧を殘したマソリノ、ダ、パニカーレならこそ、訪ふ人稀なカステイリオーネ、ドロナに、──私はロンバルデイアの眞盛りの春に行つた、──洗禮堂を覗いて亂れ咲く桃李の夢に混るほど美しき壁畫が描けたのであつた。

密畫の練れた味を愛撫する心に耐えないと思ふ。日本美術で云ふならば隆能、經隆、古土佐の繪卷物を銀の一筆の行衛まで慕ふて繰るを唯一の樂しみとした。重たき琵琶を抱いて黒髪の人に耳語する青簾に、春の物語は靜かに更けて行く。艶とも言はう、寂とも言はう、濃やかな肌合を惜しむ心が、藝術の愛の中に住んで居る。小さくてもよい。何故こう云ふ丁寧な愛物の世界がなくなつた。中世の僧侶は聖傳を想ひ聖歌の古めかしい音譜に合唱しながら、象牙肌の羊皮紙に處女マリアの受胎告知を描いた。美男の基督の一代記も殉教者の歴史も描いた。高價な金粉や群青が大切なのか、想ふ面影のもつと大切なのか、羊皮紙は磨かれて、繪は大切で仕様のないやうに描かれてある。本好きのドミニカンの學僧の集めたサンマルコ寺(フイレンツエ)へ行つて見れば、小さい畫卷に鐵鎖をつないで、見る人を醉しむるほど、大切がつた昔の心を、さもあらうと高貴なる細(ミニ)

樹蔭が擁護する。白鳥の滑なる綠池から森の奥に女王の寶冠かと覓つけられる華奢なシャンテイイのお城（シアトー）には、趣味の上の貴族に相應しい四季耕作の圖、金泥重たく凝つてジャン、フーケーの細筆は四寸角の畫面に、美くしい森羅萬象を魔法使ひの心鏡に映るやうに鏤刻した。

おがみ、睦み、喜びて、ひそやかに生に密着した愛物の世界から藝術を放逐したのは、近代思潮に伴つて發達した展覽會と云ふ魔物であつた。展覽會が藝術を支配する勢力となつて以來、藝術は目に見えて墮落した。近代が展覽會に於ける粗雜なる群衆心理を藝術の目安に置く以上、藝術の藝術らしい部分は自然陶汰されて藝術でないものが發達する。藝術を社會事業とする人のみが、展覽會の隆盛を藝術の名に於て祝福するであらう。

展覽會に於ける勝利とは何であらう。疲れたものに強いてふり返りさせる注意の强要である。短時間に最印大象を殘す芝居である。大聲客を呼ぶか、嬌態客に媚びるか。近代藝術は丁度こう云ふ客本位の道に沿ふて墮落して居る。私は前章に騷音の多い現世から首出して靜かなる昔の藝術を戀ふた。今また小さき、愛物の世界を嘆くのである。ルーブルのカモンド氏蒐集品中、セザンヌ筆「首つりの家」、そうでなければ、ベルネエム、ジヨン氏の私宅にあるビスケットのある「靜物」、それ等の繪具の、浮彫のやうに厚いのを見るがいい。自分が是でよいと思ふまで、いくらでも描いて行つた、そして岩山のやうに厚くなつて仕末が行かなくなつてやめたやうな、人に見せる氣もない、唯愛するが故に描いて氣の濟むところまで行かうとしたセザンヌの心持が――私には元來合はない、荒い近代人の繪具の肌合を透して――尊くも受入れられる。展覽會は藝術家に畫面の競爭を促した。藝術感興に無關係に、少くとも、畫面は大きさを以て先づあつと言はせなければならない。展覽會はまた藝術を圖案にする。第一印象に快よくなければならないからである。後は空虚でも拘はない。言ひ換えれば展覽會は藝術を强い、くどい壁紙に發達する。丁寧なことはして居られない。そして私の藝術から欲しいものは壁紙の性質とは如何しても背馳した

――タラグラの女達が立つて居る。夕暮は來やすい大英博物館に、私は素描室（プリント・ルーム）の仕事を畢へて、希臘の壺の室、それから希臘の古銅の室、それから愛くるしい小さい白い人形達が今日も居るなと、もう古銅の室にそう思ひながら、蒼く銹びた眠り（ヒプノス）の神の前に足を止める。夜は、トウ、ウヰツト、トウ、ウオー、と鳴く森の奥の翼が耳の兩横から生えた蒼い眠りの神の、赤子のやうに笑みながら、でも草疲れた世に、急いで、人はねな

なる罌粟の實を蒔いて行く、夕闇にまぎれさうな青銅色の神の慈悲ある馳走に私も引入れられるやうにうつとりとして、次の次の室へ來ると、また、あのダナクラ達が遊んで居る。夜が此世に戸を閉めれば、人形の國に薄い朝はあけて小鳥のやうな口をきゝ出すか。戀人の人形は囁き、踊り手の人形は裾を持つて恥しさうな曲線に踊り、娘の肩に留らせた女は本當は夜だけど、紫色の翼を撫でてやるか。そして夜は白ら白ら明けて、人間の騷音が初まると人形の國は靜寂に歸る……藝術は愛物であつた、だから生を深くする。

美しき藝術

美と感傷に抗辯して悲劇的表現に進まうとする近代藝術の中に、それでも私は美しいものを慕つた。絢爛として快よき感覺の御馳走である。

月の光を殺せと猛々しき近代人の言ふ。私はパトモスの森にエンデイシオンの赤き月の出を、いつまでも夢みて、何故いけないと思ふ。深いものの表現でなければ大藝術でないであらう。しかしそれに美しき感傷がからまりつくが故に藝術價値の低下する筈でない。表現するものの深さが藝術價値を決定する。それを同一と假定するならば表現形式の甘美なることによつて表現的内容の親しくなるは、さまたげでなくてたすけであらう。色に惚れ、端麗なる形に魅せられたと思ふうちに、何時の間にか奥の立派なるものに面接する。美しきが故に藝術である。

こう思ふのは近代藝術が余りに野蠻だからである。筆が亂暴に跳ね廻つて、畫面が徒らに喧喧を極めるばかりでなく、深刻であらうとする手近な手續きとして、色をきたなく、形は狂はせやうとする。それがエル・グレコに於けるが如く鬼才の體驗であるならば、奈何ともすることは出來ない。そしてこれは一番よいことに相違ない。そうでないあたり前の心が、何を骨を折つて、醜く、不快であらうとする。自己を詐らずすなほな心が綺麗に見える物を綺麗に描くに心配するものでない。

女の裸體の、私に、色は春の眞珠貝よりも美しい。形は——若し自然界に曲線で出來上る結晶體があるならばそれであらう。寶石よりも端正に、霞よりも暖かに、白鳥の首よりも滑らかなもの、そのまばゆき自然の高貴を、近代の畫家が如何取扱つて得意であるか。巴里の新派のサロンは尨大なる馬鈴薯の如き裸體の連續である。あんなきたないものを描くならば、畫家は何故寧ろ畫布を提げて赤土の岡に散歩しない。ロダンはよい眼の人であつた。けれども明敏なる頭腦は理論に煩はされる人

であつた。表現の爲に殘虐なる誇張を美しき肢體に施して得意で居た。自然は春の嫩葉を絹絲の蒲團に包むやうに、大切なものを隱す。恥感は卑怯ではなくて自然の美しき臆病である。恥感を蹂躙して、あんな形を强要させて喜ぶ心を自分に分析したなら、淺ましいであらう。私はミユーゼー、ロダンの一室に、開くまじきを無理に開ひた體軀(トルソ)の前に。そしてそこに何にも藝術問題のない部分を、眞面目らしい顏をして寫生する日本人を見て、情けなかつたことがあつた。羞かしいものを羞かしがり、美しいものを美しく喜ぶすなほな心に、私は自然を承認したい。古い希臘人(アルケイック)のしたやうに、在りの儘の健康の厚味を抱くマイヨールの方が、ロダンより余程親しい人であつた。

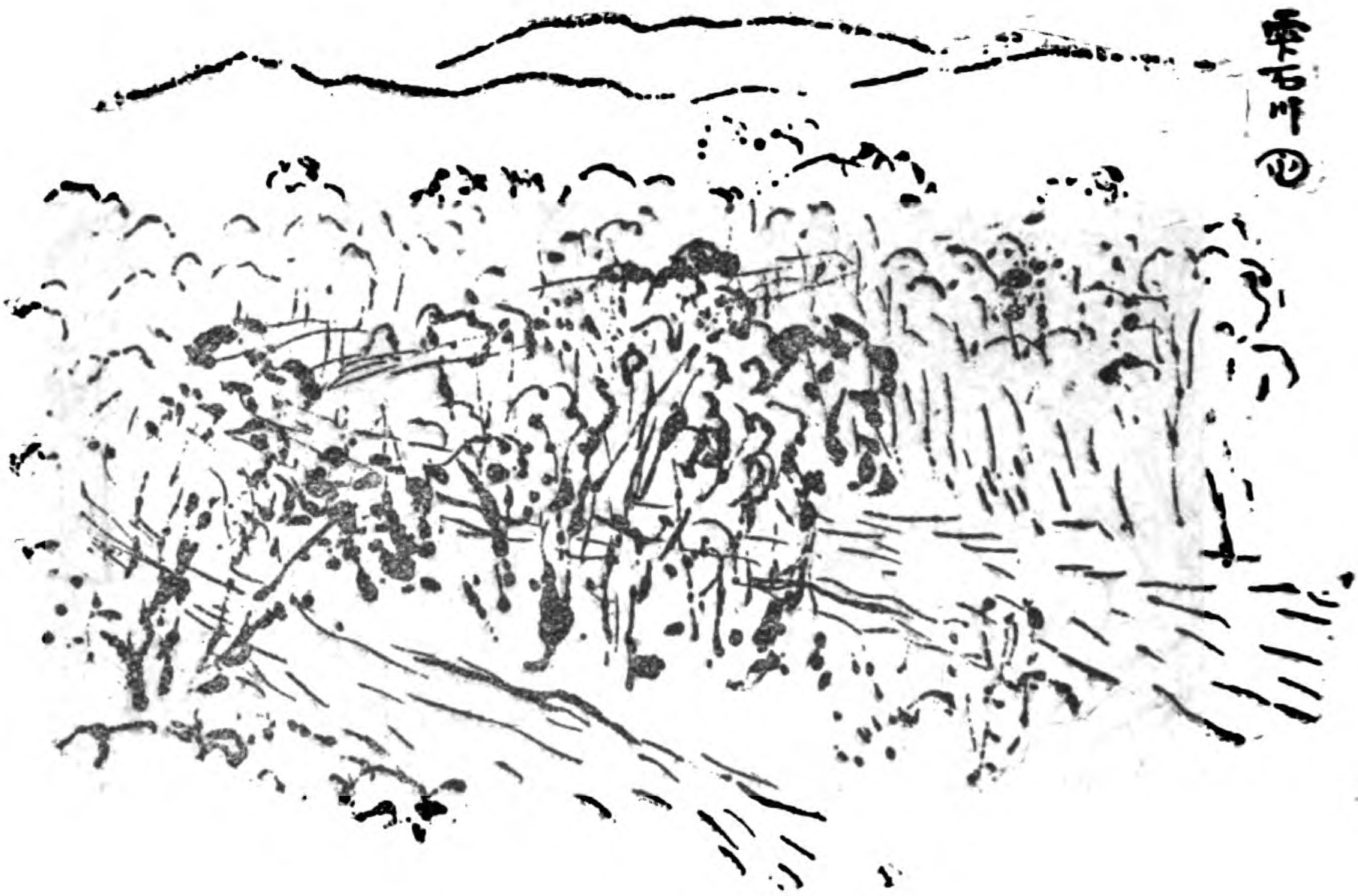
美に對する私の貪婪はもつと問題をつきつめて考へさせる。「感覺の御馳走」の願ひが果して學者の說く如く淺薄であらうか、感覺は人間性の末梢機能である。しかし末梢なるが故にそれ丈で中樞より劣ると結論するのは、創世を歌ふ詩が草の葉を慕ふ唄より、それ丈で高等であると斷ずる文學論と一般にならう。宇宙の創造を司どる同じ神は、また美しいむら氣を以て小さき花を意匠する。小さき花にも神のお影が宿るとするならば、亦意識の表面をかすめ飛ぶ感覺の漣みに、小さければ小さい丈睦まじき人間性が覗く。淺薄と形容する感覺の單なる快よき、言ひ換へれば感覺の美しき、配列に、星座の運行と同じ宇宙の大調和が歌を唄ふであらう。くだらなくなつてよい。私に皮相なる美しさをくれ。

變轉多き留守の五年目に歸り來れば、日本に獨逸風の學問の藝術にまで橫行する、こんな程であつたかと驚かれる。哲學の思索に於ける獨逸の優秀は私も誰も異存はない。有らゆる人生の動きを哲學が裏づけるとも又更めて云ふまでもない。唯、裏面にまで哲學が出て居る獨逸の學問が藝術を犯して、哲學思想の優秀を專ら藝術から求むることは、本能に動いて窈窕と感覺の雰圍氣に奧のものを包み、解かると云ふよりも感じさせる藝術の本質と言ふものにとつて、よくない育て方となつた。何故仕組まずに、無邪氣に唄はない。樂しみ描かない。耳丈になつて音の聞きたい樂人が藝術家である。大げさな論もし又音も立てぬワグネルよりも春の小鳥の囀ることよりしか知らない――そしてその囀るを野も青空も聽きほれるであらうモツアルトが、藝術家であつた。モツアルトよりも、もつと南に長閑である伊太利の樂人の群れ、スカルラツチイ、ボツケリニの單純なる美しさが好きであつた。私の切なる願ひは、音樂會に堅くなりに行くのでなくて、嬉しくなりに行くのであつた。ベートフエンに疲れるより、近頃伊太利のレスピギが交響樂になほして歐洲

各地に時々演奏され、演奏さるゝ度に聽衆が理屈ぬきに長閑な古代の笑みを笑む十六七世紀の伊太利音樂は、どれ程直接に心の慰めであらう。譯もなく美しきものに魂は憩ふ。くだらなければくだらぬ程よいかも知れない。

ロココを皮相だと排斥されて久しくなつた。美しいロココを見て私はそう思ふ。皮相でよい。唯希くば美しくあれ。佛蘭西は髑髏をかざして言ふ。皮下一枚にしてこれだと。だから美しいものが欲しいのでもあつた。春枝紅花を鏤ばめるけれども、やがて散ればこそ、尚更花はいとしいものであらう。——ワトーの描く庭園の木下闇に高貴の絹を着る人々は南洋の夜の花のやうに匂へば、廣緣の帽子を斜にかぶり、ひらひらとリボン垂れたギタラ彈きの伊達姿、綠色に奏する一曲のセレナーデは、意味は深遠でなくて、それ丈でよい。また歌麿形新模樣、蔦の葉綴りの浴衣から、黃色い紙地を拔いて白象牙に出る女の二の腕の、恥しいほど美しければそれでいい。——美による陶醉を拒んだなら藝術は藝術でなくなるであらう。

靜かなる、小さなる、そして美しき藝術の願ひは、滯歐の五年に、私に絕えずついて居た。それは私の個性ばかりから來たのか、それともそれ等を余りに缺きそうな近代藝術思潮が、そしてその近代思潮が日本に誇張を以て受けつがれて行く有樣が、私にこんなことを、ころまで思はせたか。壯大なるもの、深きものを誰が藝術から拒むと言はう。偏つた議論をこんなにまでしたのは、靜かを慕ふ心の、畢竟は生に親しき喜びを求めんとして、無いが故に揚げたる、呼び聲である。



山

凡山凡水

平福百穗

高い山に嘯いて下界を睥睨する快や、生命がけで險峻を攀ぢ登つたり、人跡未踏の溪谷を探つたりすることは、僕の體質が許さない。世間からは登山家のはしくれのやうに思はれながら、一向山らしい山に登つたことがない。山岳熱が世間に流行し出したので、旋毛曲りの僕は自然とその機緣に遠ざかつたともいへる。それでも山を愛し、山を讃美するに於ては敢て人後に落ちないつもりである。

奥羽に生れ、奥羽で育つた僕は、自らその土地に愛着がふか



いものがある。明麗なる海南の風光よりも、雲霧低迷する奥羽の山水を想ふ。白砂青松よりも、疎林を流るる野川の潺々たるを愛する。寢ころんで衣を汚す憂ひのない土質よりも、苔深き岩にひんやりと腰を下すことを懷かしく思ふ。乾燥よりも濕潤を好む。峻嶺よりも、凡山凡水に親しみあり、有名よりも無名の地に好い處が多い。

奥羽には國々に、大抵富士山型の一峯が秀でてゐる。山形秋田の鳥海山、岩手の岩手山青森の岩木山、いづれも群山を壓して聳立してゐる。所謂日本アルプスの壯觀はないかも知れぬが、各々特殊な壯嚴さと美しさとを保つてゐる。山岳を恐れ山神を尊崇することに馴らされた僕は、山を踏破し山を征服しやうとは思はない。或は實際自分の憶病が然からしむるかも知れない。

この奥羽を北から南に走る、脊梁山脈の中に、國見嶺ほど僕にとつて親しみのふかいものがない。秋田の仙北から盛岡に通ずる唯一の交通路であつて、麓の宿(しゆく)から山道五里強、標高も僅か三千尺に滿たない。東京遊學以來幾度かこの嶺を越したか知



れたい。鳥井峠が四千尺といつても、藪原驛から見上ぐる屈曲した道を、下駄穿きで三十分も駈け登れば、苦もなく頂上に立たれる。それから思ふと五里のこの山越への困苦は到底比較にならない。それだけ山氣も部厚くふかいやうに思はれる。

人里へ降りてしばらくして、雫石川の上流を瞰下ろしてゆく、駒ケ岳と岩手山の奥から落ち來る淸流は、思ふままに林の間を流れてゐる。油合羽を着て雨の夕べ近くにここを過ぎたことも、早朝輝きをもつ若葉の匂ひも、忘れ難い景趣の一つである。

東北本線の一の戸から、末の松山波打峠を越したのは秋の初め頃であつたと記憶する。福岡まで一里餘、古道草ふかく〱げつて、若杉の秀黒く日の傾くの早きを覺つた。山中から貝の化石が出る。山の麓をさらさらと流るる馬淵川の淺瀨に、馬を乘り入るる人を心憎くも思つた。

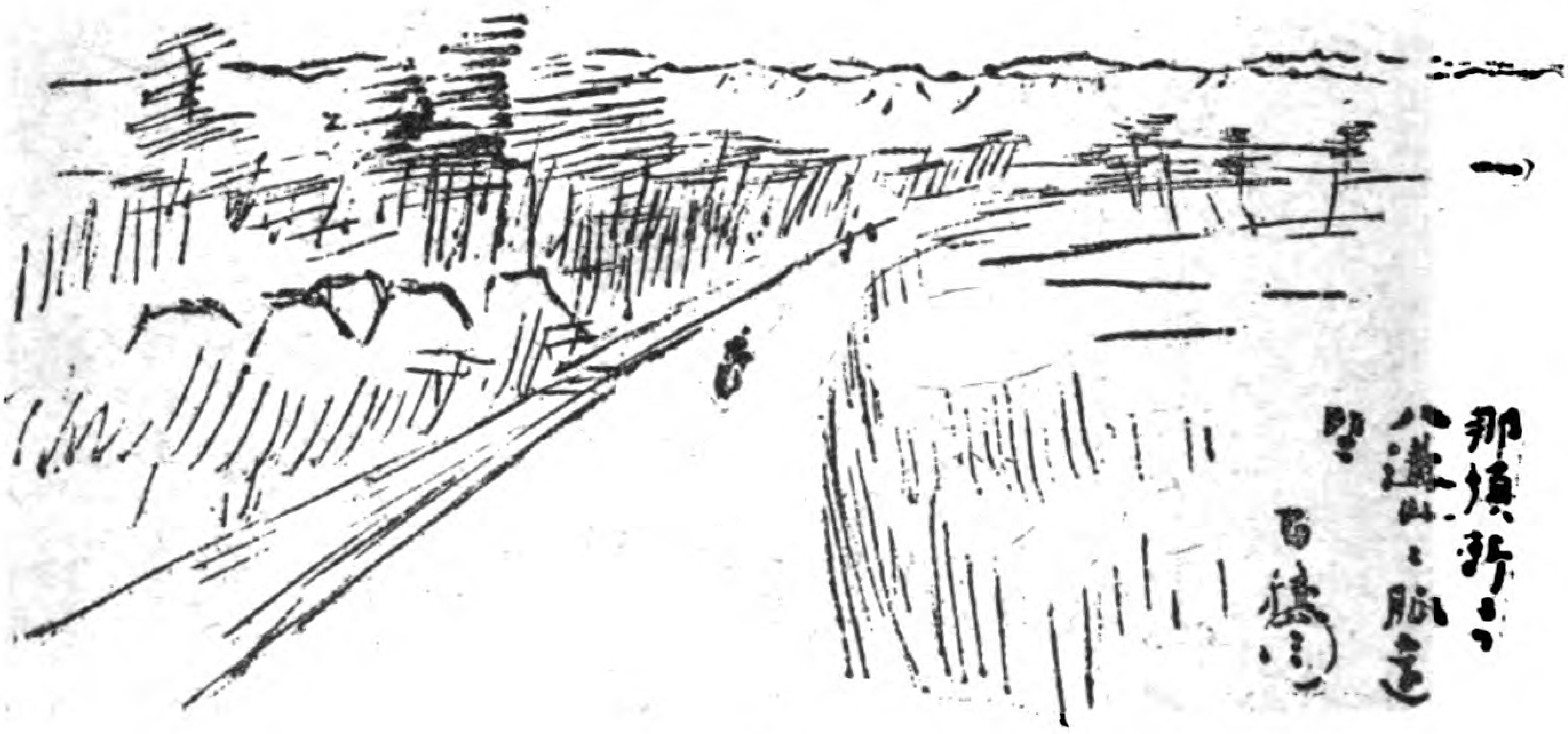
同じ本線の古間木驛から入いつた三本木原も、北海道以外の地に於ては見る事が出來ぬ。大浪のうねりに肖た地勢は、南北に稍々狹く、東西幾里とかに亘つてゐる。所々大農式に開墾さ



れてゐるが、大多分は牧場である。草深い原に放牧の群馬、遠く近く尾を振りつつ、嘶き驅ける若駒の潑々しさ。野面に輝き立つ入道雲の立派さ。十數年前烏谷部春灯大町桂月の兩氏と二人連れ立ちてこの原を旅せし事も忍ばるる。而して今は二人共故人となつてしまつた。

十和田湖は雄大でもあり景色としても可なり勝れてゐる。雌阿寒岳と雄阿寒岳を、東と西に對峙する阿寒湖と比して寂びに於て、或は劣つてゐるかも知れぬが、溪流として他に容易に見るべからざる奥入瀬川を控へてゐる。更に桂月翁が終焉の地として知られた、蔦溫泉に到つて、一段と幽邃を極める。湖畔からこの邊一帶に鬱蒼とした原始林が、風趣の重きをなしてゐることはいふまでもない。

十和田と正反對に磐梯山の爆破によつて成つた、檜原湖の生生しい痛ましさよ。それでも川上溫泉から秋山湖附近の溶岩の原は、一面に芒が人馬の影を沒するまでに蔽ひ茂げつて、所々に小松さえも生ひ立つてゐる。茫々たるこのすき原に、自ら畫中の人となるの旅情をよろこぶのも一興である。



芭蕉翁の奥の細道によつて名高い、那須の雲巖寺も幽趣捨て難き境地である。八溝山系の峽谷の杉木立の中にある。法雲鎖して人の訪ふなきこの山寺に、蜩の啼く音に驚き目が覺めた。枕に近い椽さきで、忽ち鈴鐸を振つたかの如く一つ啼き出すと、裏山から遠山と啼きついで、一と時山峽に啼き震ふ。雨戶を操ると、さ霧がふかく夜はまだ明けきらない。凉冷の氣が肌に迫るを覺える。

山を戀ひ水を想ふ時節が來た。畫債を片づけて山水に浸るの快を貪らう。

雪線以上

木暮理太郎

（三）

近來登山が著しく盛になつたことは事實である、これは日本だけの流行かと想ふとさうではない、伊太利や獨逸あたりでも可なりの勢で流行してゐる。米國などは最近數年間に登山團體の設立されたものが十を超えてゐるといふ有樣である。英國では又世界の最高峰エヴェレストの登攀を企て、既に三回の探檢を行つて、二萬八千二百餘呎の高さまで登つた、それで餘す所は僅に八百呎足らずであるが、是非とも絶頂を極めるといふ意氣込みで、明年復第四回の探檢隊を送り出すことになつてゐる。加奈陀でも之に對抗する積りか、加奈陀第一の高峰一萬九千八百五十呎のローガン山を加奈陀エヴェレストと唱へて、之を征服せんものをと今や正に探檢の途上にある。加奈陀エヴェレストといふても、槍ケ岳を日本のマッターホーンと、或はレーニヤ山をタコマ富士と呼ぶやうに、ローガンの山形がエヴェレストに似てゐる爲ではない、形體の類似などは全く無視して、單に加奈陀第一の高峰であるから世界第一の高山の名を之に冠らせたといふに過ぎないのである。

斯樣に登山の流行は、概括して世界的現象であるといへばいへるやうなもの丶、流行の範圍は甚だ狹いもので、或る階級の間に限られてゐるといふのが實際の狀態である。さればエヴェレストの探檢にしても、又はローガンの登攀にしても、その成功と否とに關せず、兎に角大きな仕事であるから、それは人心に强かれ弱かれ或る刺激を與へるであらう、殊に登山の方面に及ぼす影響は相當に大なるものがあるに違ひない。然し、それが爲によしや一般の人が一時登山に注意を拂ふやうなことはあつても、廣い意味に於ての登山の隆盛、國內のどの階級も擧つて山に登る、即ち登山の民衆化といふことに對して、どれだけの助になるかは疑問である、ことによると助どころか反て邪魔になるかも知れないと思ふ。

登山は誰も知つてゐる通り、日常の生活とは違つた場所に身を置いて、違つた行動を取らなければならないので、其處に危

險の潜在してゐることは見易き道理である。この危險を避けて目的を達する爲には、特殊の知識と經驗と更に技術――登山術を要する。山が高くなればなるほど其必要の度が增して來るから、益精練された知識、經驗、技術が要求される。さうなればいくら山が好きでも最早素人には手も足も出せないで、登山は少數の所謂其道の人に占有されるにきまつてゐる。好んで占有する譯ではあるまいけれども結果は同じことである。其上多大の時間と費用とを考へたならば、てんで貧乏人などは振り向いて見る氣にもなれないのは當然ではあるまいか。かくて登山は貧乏な素人の手から離れて、經驗ある特權階級の最上の道樂と化し、一般民衆とは沒交渉になつてしまふ。それ所か實は山との緣切り狀を投げ付けられたも同然で、無意識に反感を培養する虞れが充分にある。

　西洋の登山はアルプスを舞臺として發達した。其處には氷河が現存し、氷河に依つて作られた幾多の嶮しい山群が聳立してゐる。雪線を突破した此等の高峯に登ることは、素より容易な業ではない。唯科學的登山術の力が能く其目的を達せしめたのである。從つて登山の目標がアルプスを離れてコーカサス或はアンデスといふやうに、高い山から更に高い山へと向けられるに連れて、登山の計畫や方法や用具やなどが驚嘆す可き發達を遂げたと共に、一面に於て貴族的色彩の濃厚になつたことを拒む譯には行かぬであらう。尤も西洋人の登山が貴族的傾向を帶びてゐることは、必然的にその生活や思想から導かれたもので、それが實際の必要と相須つて一層助長されたものといへる。だから當事者に取つては別に贅澤をする意味ではなく、必要な爲であつても他人は好意を以て見て吳れぬ場合はいくらもある。英國は高山と稱す可き一の峯をも國內に有してゐない。けれども多くの登山家が續々海外に押寄せて、今日までに登られた世界の高山は、殆ど總てが最初に其足跡を印せられてゐるといふ有樣であるに拘らず、第二回のエヴェレスト探檢始末を記述した書の序文に、旅行家で且つ探檢家である有名なヤングハスバンド氏は「エヴェレストに登攀して何のよきことありや」といふ質問に絕えず惱まされてゐた爲に之に就て一言することを餘儀なくされてゐる。大登山家の多數を有する英國に於て猶且つ然るかと思へば、それが無意識の反感でないまでも、登山と民衆とは其間に超えられない大きな溝のあることが察せられる。

　所で今や亞細亞を除く世界の高山は皆登られてしまつた。登山の主要舞臺は西藏印度の國境を中心とするヒマーラヤ、カラコラム、崑崙、天山等の大山脈に移らんとしつゝある。私は餘

て二萬四千呎以上の高峰が亞細亞に幾座あるかを調べて見た。そして單に探檢家の手記に載つてゐる不確實なものを除いて、印度測量部の測定を經たるもの八十七座を數へることを得た。二萬三千呎以上といふことになれば二百八十座を下らないといはれてゐる。この八十七座の中幾つが完全に登攀されたかといへば、未だ一つとして登られたものは無いのである。唯最後から二番目のカブルー山（二四、〇一五呎）が絶頂より低きこと纔に三十呎である一隆起に登られたのが、兎も角も頂上の一地點に人間の足跡を印した唯一のものであるが、若し明年第四回のエヴエレスト登山が決行されて、天候と雪の狀態が順調であつたならば、恐らくこの世界最高の峯も一度は頂を明け渡すの止むを得ざるに至るであらうと想像される。之に次では三十二番目のカメット山（二五、四四七呎）が二萬三千五百呎の鞍部まで二度も登られてゐるので、今後この山を攻擊の目標とする人は、比較的骨を折らずに頂上を極め得るかも知れない。其他の高峰の大部分は、取り付くことさへ非常に困難であるといはれてゐる程であるから、科學的に發達した技術を有する少數專門家も當分手の付けようがあるまい。これでは古今の名登山家といはれたマンマリー氏が評したやうに「初めは近寄れぬ山、中頃は恐ろしい山、最後には何でもない山」となるのは、何日のことか見當も付かぬとすれば、此方面に登山の民衆化を期待するのは、砂上に樓閣を築くより困難なものと云はなければなるまい。

要するに西洋人の遣るやうな個人主義を基調とした近代式、或は文化主義的登山が行はれてゐる所では、山が高かれ低かれ、登山の民衆化は望まれないことになる。唯米國オレゴン州のマヅアマ其他二三の山岳會が每年擧行するキヤンピングに於て稍平民化された登山が見られるのは寧ろ珍とす可きであらう。

日本の高い山脈に氷河の存在しないことは、山岳景觀の上からいふても、登山の興味の上からいふても、遺憾千萬のことである。成程過去に於ける氷河の遺跡といはれてゐるカールは、飛驒山脈にも赤石山系にも、亦木曾山脈にも見られる。ギツシリとカールを埋めた多量の萬年雪が更に長い雪溪をなしてゐるものも何條となく存在してゐる。私は決してそれを壯觀でないとはいはない。けれども雪の代りに夫れが氷であり、今日見られる雪田が氷原と化し、雪溪が氷河と變つたものとして、其壯觀を比較したならば、恐らく今日に數倍するものがあらうと信ずる。ニユージーランドアルプス最高峰のクツク山が一萬二

千三百四十七呎である外は、日本アルプスの諸峰と略ぼ匹敵した高さであるが寫眞で比較してさへも、如何に贔屓目に見た所で殘念ながら到底日本アルプスの及ぶ所ではない富士山の秀麗なるは世界に比類ないものとして、若し更に米國のキャスケード山脈の諸火山のやうに數條の氷河が見られたならば、錦上に花を添ふるの觀があるであらうに。

生きた氷河の存在しない日本アルプスは、最少限度の氷河を有するニユージーランドアルプスにさへ及ばないとすれば、其他の、アルプスは、勿論ロッキー、アンデス等に比較するの愚を繰返す勇氣はないが、強いて日本アルプスの特色らしいものを擧げるならば、麓から山腹にかけての森林帶を併せて、殘雪輝く頂上と共に一眸の中に望むことを得る點であらう。これとて必ずしも日本アルプスに限られた見ものではない、キャスケード山脈のレーニヤ山でもシャスタ山でも又三姉妹(スリーシスター)山でも、皆中腹の森林帶或は其附近まで流れて來てゐる氷河と共に山頂を望み得るのである。然しアルプスやヒマーラヤや加奈陀ロッキーやの諸高山は、氷原から直に崛起して森林といふものがない、實は無いわけではないが、森林帶から直徑にして近きも數里、遠きは十數里若しくは數十里を隔てゝゐるので、都合よく一目に見渡し得る場合は少ないといふてよい。たとへば世界第二の高峰であるカラコラム山脈のK2（二八、二五〇呎）の如きは、四方に長さ三十哩から四十哩に亘る氷河を有し、二萬呎を遙に超えた幾多の氷山に抱擁されて、海拔一萬五千呎の氷河流域に屹立してゐるので、森林などは南方數十里を距つるカシミヤ高原あたりに置き忘れてしまつた觀がある。これは稍極端の例であるにしても、山が大きくなると、何でもないやうに考へられることまでが案外困難となるものらしい。

近頃よく日本アルプスの壯觀は、本場のアルプスに劣らぬことを宣傳する爲に之を活動寫眞に收めて、外國の登山客を招致する手段にするとかいふ事を聞くが、それは日本に來てゐる外國人で日本アルプスを知らない山好きの者に對しては效果もあらう、けれども生きた氷河に慣れてゐる現代の登山者が雪線以下の山に惹き寄せられて、遠い日本へわざ〳〵來るであらうかと疑はれる。「一度は氷河の上を歩いて見たい」。これは日本に生れて日本アルプスの雪にあきたらぬ若き登山者の僞らざる告白である。

然しながら、日本アルプスが雪線以上に達してゐないことは、日本アルプス自身には不幸であり、一部の登山者には遺憾であるかも知れないと同時に、日本人一般に取りては反て幸福であらう、といふのは私の考では、日本の山岳は登山の民衆化と

いふことを實現する唯一の道場として、日本人に與へられたものであると思ふからである。

日本では昔から能く山に登つた、それも平民に限られてゐたもので、登山は彼等の年中行事の一であるまでに普く廣まつた。これは宗敎的ではあつたけれども、山を離れゝば又氣散じの旅といふやうな享樂的氣分も全然ない譯ではなかつた。そして各地に何講と稱する結社があり、講中の信徒は登山の經驗ある先達に引率されて、團體登山を行つたものである。この强い團結心を有するに至つたのは、他に社會的原因もあらうが、今はそれを詮議する遑もないから止めて、登山に就て一言すると、可なり嚴重な約束が習慣的に守られてゐた。富士山でいへば、初登山者にはお鉢廻りを許さなかつたなどは其一例である。各人は社會的地位の如何を問はず、一切平等であつて、先達の言葉は命令であり、之に違ふものは仲間を外れなければならなかつた。かくして彼等白衣の信徒は、關東からは奥羽、奥羽からは近畿といふやうに、幾十日の旅を重ねて遠くまで出かけた、日本の目ぼしい山といふ山は皆登られた、唯今日南北日本アルプスと呼ばれてゐる飛驒山脈と赤石山系の或部分だけは、彼等の幼稚な登山法では、流石に手におへなかつたので、獵師などが稀に獣を追ふて入り込む外は、登る人もなく取り殘されて近年に至つたのである。畢竟西洋には類のない斯様な民衆的登山が行はれたのも容易に山に登れることが最大の源因であつたに相違ない。そしてこれは内容に多少の變化はあつても今尚ほ行はれてゐることである。

明治の中頃より以後になつて、西洋式の登山が行はれ出してからは、登山、少なくとも耳新らしい日本アルプスに登るには、貧弱な素人——一般民衆には及びもつかぬことのやうに世間で早合點したのは、少し滑稽な位であつた。それは昔の先達に少しの山の知識を與へることに依つて、日本アルプスへも講中を引率して登らせることが不可能ではないと豫想されたからである。この豫想は今となつて裏切られたとは私は思はない、日本アルプスは何等の新らしい登山術を要しないで誰にも登れる山である。唯困るのは小屋の問題であつたが、夫も年一年と設置されて、夏の登山期になれば、富士や御岳の小屋と同様、食事にも宿泊にも差支ないやうになるのは遠いことではあるまい、さうなれば一般民衆は何等の恐るゝ所なく、日本アルプスにも足を容れられるといふものである。

かくて昔とは又違つた意味に於て登山の民衆化が實現されるであらう。

桂月と徐霞客

未醒山人

奥州十和田の山中、蔦の温泉で寂然と長逝した桂月翁は、近年日本中の山と云ふ山を踏破すべき大願を立てゝ、ずゐ分と歩き廻られたやうであるが、勿論まだ見ぬ山も遺してあつたらう、私も一兩度その山行の伴となつた、服飾と云ふものを、丸切り思ひ捨てた行裝、其點おかしくもあり感心にも思ふ先づ、古ズボン古上着、カラもネクタイもある事か、シヤツが開いて或時は臍を出し、手拭で頬被り、頸に太いゴム管を珠數の如くに懸けたのは、岩清水を吸ふ新工夫の道具、腰には瓢やら何やらゴタゴタとぶら下り、どうかすると片足がまきゲートルで、片足が長靴下の時もあり、ゴム靴を妙な形に鋏み切つたものを穿つ、リユークサツクを負ひ、金剛杖を突き立つ、山伏とロビンソンクルーソーとの合體のやうなもの、いま時槇有恒氏の流を汲む、日本アルプスを上下の若いスポーツマンの小意氣な服裝とは、甚だ以てかけ放れた樣態、又、あの如くでなくば、あの太願にはかなふまじくも思はれる、就て連想さるゝは、明の徐霞客なる大旅行家、四百餘州の名山大澤極めざるはなしと云ふが、徐君自身からは矢張りまだ見ぬ處を遺したと思ふであらう、ともかく驚くべき山水病、烟霞癖、桂月老と相對して談ずべきと思ふ。

元來孝行者で、母にひかれて飛び立つほどの旅行熱を押して家業に勤めて居たが、母もあはれに思つて、三十の時暇をくれた、それより徐霞客の家に在るは、年のうち冬ばかり、母没き後は恰んど半生を旅に暮した樣子、錢牧齋の徐霞客傳には、其行くや一奴或は一僧を從ふ、一杖・襆被のみ、裝を治めず糧を裹まず、能く飢を忍ぶと數日、能く數百里を走り、登山に臨みては疾きと靑猿の如く、などゝ形容してある、山あるきは巧者であつたらうが、紀行文中に、山中の嶮處で、土地の案内から手を曳いて上げられたとなどが記してあるを見れば、山中には又彼れ以上の健者もあつたらう、桂月老も山あるきは巧者であつたが、必ずしも目を驚かす放れ業をなさず、休まず、ゆるり

と、少しづゝ登るを最上として居た、それが誰人にもホントの登山法であらう、又桂月老は、山に登るに絶頂をきはめて即ち已まず、出來るだけは支脈を探り、奇岩を求め、瀧あらば瀧に行き、洞穴あらば洞穴、その他名所舊跡、いやしくも、知り得る限りを知らんとし見得る限りを見んとした、徐霞客も亦其如く、今年見落した處は、來年是を極めんとし、極むるまでは氣になつてたまらず、山水に貸しでもあるやうに、恐るべき誅求をなす、陳木叔と云ふ友人を訪ふて、雁山の頂に登つたかと問はれ、生返事をなして置いて、あくる朝忽然と見えずなつた、十日ばかりで歸つて來て、吾れ間道を取り、蘿を攔り龍湫に上る三十里、岩あり雁の家る所、絶磴を攀ぢ、上ると十數里、其顚罡風人に逼る、麋鹿數百群あり、圍繞して宿す、三宿にして下りたり、と話した、僧靜聞と云ふものと雞足山の行を共にせんとし、途中で强賊に會ひ、聞法師は創を蒙り江水に落ち、病を得て旅中に沒す、其の骨を負ふて萬里の旅をつゞけ、遂に能く雞足山に取り登つて迦葉の道場に聞法師の骨を納めたと云ふ、なかなか人情の深い男と見へる、錢牧齋は、長驅して西藏まで行つたと記して置く、西藏まで行かなかつたと、梁啓超は記す、一生偏歷の中、尤も大旅行とすべきは粤西貴筑滇南の蠻部の探檢で その紀行文も全集中に在つて大きな部分を占めて居る、紀行の文章は、支那流の摘出簡化にあらず、逐一に方角を見里程を認め、山脈の分派、水流の方向を說いて精細を盡す、桂月翁達意の紀行文と雖も此の如くには行かぬ、文章としては名文とは思へず、桂月翁の人事を交え古譚を加へて興味饒かなるには及ばぬであらう、詩が少し殘つて居る、孤雲獨往還と云ふ題に、

軸ヲ出デ、何ゾ幽獨ナル、悠然トシテ碧空ニ翻へル、遙カニ秋水ノ影ヲ分チ、忽チ夕陽ノ風ニ度ル、長天蹟ヲ留メズ、冷月容ヲ爲スゴトシ、歸宿應サニ何クニカ在ルベキ、崆峒ノ第一峯、

雲觀と云ふ題に、

白雲モト是レ山中ノ物、南極祥光五色偏シ、驀地兜羅世界ヲ成ス、一身却ツテ在リ玉毫巓などゝある、詩もあまり良いとは思はれぬが、此の南極祥光とか、兜羅とか、玉毫巓とか云ふのは、峨眉山雞足山などに生ずる、雲霧の變異で、日本の高山にもあるにはあるが、モツと奇怪な幻象を現はすものらしく、他の人の紀行文にも見受ける事がある、錢牧齋の霞客傳には、尙他に王玄沖なる登山の達人ありしを記してある、曰はく、王玄沖僧の義海と約して、十日の後蓮花峰の麓に來れ、頂上に烟が立たば、予が登つたと見よと云ふ、約の如く麓に行き、約の如

く朝に及んで山頂を望む、天晴れて岳色鮮明なる時、忽然として一道の白烟を認む、歸つて二十日にして玄沖來り、蓮花峰頭の玉井の蓮葉をみやげに贈る、義海法師の云ふには、玆の山昔より人は登れぬと云ふ、何として上つたか、玄沖の答が面白い「賢人よ、天も登る可らずと云ふ勿れ、たゞ共の志なきのみならずや」

先づこんな事で此の話を仕舞ふ、仕舞ひ際にモ一つ、先年桂月全集の裝釘を賴まれて、私は桂の木と兎（うさぎ）とを圖案した、うさぎは勿論月を意味したつもり、處が所謂月中の桂は今日本で云ふ桂ではなく、日本ではモクセイと云ふ庭樹が、その月中にありと云ふ桂なる由、徐霞客の紀行を讀んで居て始めて知つた、一體圖案に古事などを用ふるも餘り感心せぬ話ではあるが、古事を用ひて誤りがあつては、更に感心出來ぬ、是からは大きに注意すべしと、自ら叱つて置く。

支那南北記

木下杢太郎

朝鮮より北京へ

大正九年七月末、わたくしは長い間住み慣れた奉天と、その地の同僚とに別を述べ、その頃偶然に知り合ひになつた木村荘八君と共に數箇月の旅行をした。始めはまづ朝鮮に入つて平壌附近の高句麗の古墳を見歩き、それから京城へ出て李王家及び總督府の博物館に通ひ、そこの佛像や陶器に關して少しばかり理解するところがあつた。それからコレラ病の猖獗の最中慶州へ往つて、石窟庵の新羅佛像の傑作を拜した。是等の彫刻は朝鮮の地にこそあるが、現代遺作の多からぬ、唐代彫刻の最も優秀なる典型と見做して差支あるまいと思ひ、小稿「慶州」（中央美術、大正十年三月）中に此事を説明した。

それからまた一度京城に戻つて有名な金剛山を渉獵したが、そこの自然風景の奇と、往々其間に補點せられたる人間建設の美とは絶好の諧調を爲して居た。わたくしはこの十日の旅を記する意があつたが、遂に筆を執るに及ばずして歳月は經過し、その材料は火難に失はれた。

土地とそこに住む人間との間の交渉に就て厭くことなき興味を有するわたくしに取つては、旅行は保養であるといふよりも、むしろ研學である。そして歴史的知識の缺乏よりも寧ろ博物學的知識の不足の爲めに、いつも心を苦しめるのである。

朝鮮を三週間ばかり歩いてゐるうちに北京の戰爭が片付いたから北京に往つた。北京は既に三四度往つたことがあり、今ではさして驚かぬが、始めてそこに到着した日はわたくしはまつたく、魂を消したのである。實に不思議な處へ來たものだと思つた。そこは現代は支那の首都に相違ないが、人間生活の趣味や樣式には、我々が日本で支那的と考へてゐる以外の要素——多分蒙古的、阿剌比亞的、中央亞細亞的のものだらう——が多大に間雜交錯して居つた。後年わたくしは世界を漫遊していろいろの珍奇をも見たが、都會としてはクウバ島のハバナ、佛蘭西のパリイ、伊太利のシエナの他には、この北京が、最も特徴あるものとして長く鮮かに記憶に殘つてゐる。

尤も北京には現在はさしたる藝術品がないから、一度その不思議に慣れると、もうさう驚くこともなくなる。淸朝の時代に宮中の御府に藏せられてゐた、骨董品ぐらゐが、まづまづ普通のツウリストの到り觀るを得る美術品であつた。（是等のものに關しては先年自分の印象を錄したことがある。本書（近く出版すべき單行本「支那南北記」に收めた「北京觀賞記」はその一部である。）その他北京で好いものは芝居と料理とであるが、いづれも夏向きのものではなく、今回はこれにたんのうすることは出來なかつた。

北京附近では今度始めて長城、十三陵等に遊んだ。（「北支那の自然と人と」）支那ではその自然の姿態や建築の樣式が特殊であるばかりでなく、植物なども日本とはその種類を異にしてゐて、それからまた支那的といふ感じを受ける。西山でも八達嶺でも初秋にはいろいろの草花が咲き亂れて、甚だきれいだつたが、そんなものを蒐めて專門家に鑑定し

て貰ふと屬（Genre）は日本のと同じでも種（espece）は違つてゐるやうだつた。

北京で最も人の注意を引くのは日本でチヤンチン（臭椿又は樗 Cedrela sinensis）といふ大木である。ここの樹は多になると悉く其葉を落して、奇峭なる其枝をばうねりの強い瓦屋根の上に張る、莊子では惡木の標本となつてゐるが、冬空に其枝を見ると、唯もうそれ丈で身の北京に在るのを自覺するのである。

春には春で北京には情趣ある花木が尠くはない。わたくしの最も好むものは杏の花である。四月の曇り日または夕闇などに、やや物靜かなる街區の、老舗らしき商家の壁から、この花の枝を見る風情は格別である。無論我國の櫻のやうにいさぎよくはないが、それに較べて更にいたいたしく、哀れ深い。

夏になると北京の街道には槐（エンジュ）の葉が繁り、合歡木（ねむ）が紅花を開く。殊に秋の棗（なつめ）が情趣に滿ちてゐる。此樹は支那には十三四種もあると云ふが、讀書人でも住みさうな閑靜な家の門から、累々と實を附けたその枝が出てゐるのは好箇の支那風景である。

大同府及び雲崗

九月十日に木村君と倶に山西省（シヤンシイシヤン）の雲崗（ユンカン）に往つた。此に到るには、朝八時半北京の西直門（シイチイメン）から汽車に乘るとその夜の八時ごろ山西省の大同府（タアトン）に着き、そこに一泊し、翌日馬車を雇ひ、車行三四時間でここに着くのである。我々はそこの一寺院に宿泊して二十日間許りその石窟石佛を研究した。その記錄は大正十一年中日本美術學院から出版した、兩人共著の「大同石佛寺」に收めてある。此書は發行部數が少い上に、その一部分は震災の時燒けたといふから、讀書界に廣く渡ることが出來なかつたらうと思ふ。この地の石佛の事は我邦の、殊に建築學界に於ては夙くから、知られて居つた。そ

れは伊東、塚本、關野の諸博士が交るがはる此に至つて學界にそれを報告せられたからである。然し、その知識が一般的になつたのは寧ろ佛蘭西の E chavannes 氏に由る。その著「北支考古學的旅行」に澤山な美しい寫眞を入れて、世間に紹介したのである。その後もぽつぽつと邦人の此を訪ねるものがあつた。わたくしは時折關野博士の淸欬に炙したことがあり、ここに往く機會を待つてゐたが、丁度滿鐵の會社を辭して浪人となつたので勇み立つてそこに到つた。わたくしは已に龍門の石佛を知つてゐたが、この雲崗のものは豫期以上で、その美術的價値は遙かに伊闕のものに優るのを見、遂に長逗留をするやうになつた。

そこの佛像に就いての觀察及び感想は前記の著書に讓るがこれ等北魏の佛教彫刻を看ることに由つて、我々が奈良朝や平安朝の作品から得た佛教美術に對する觀念が、變り、廣まり、正確となるのである。

雲崗に白の服裝で往つたわれわれは九月そこを去るときは冴寒の爲めに半病人となり發熱のまま此京に歸つて一週間も病辱に臥す身となつた。（然るに十月末漢口に出たときは、夜は蚊帳を用ゐ、浴後は身に冷水を灌いた。往年河南で麥の穗を見、北歸して山海關を過るとき、百性の麥の芽を踏むを見て感じたのと同じ驚きである。一口に支那と云つても實物は尨然たるものである。）

北京に歸つてから公使夫人、山內書記官大貫正金支店長土屋法律顧問同仁醫院の諸君其他我々に同情ある諸君のパトロナアジュの下に、日本人俱樂部で我々が雲崗から持つて來た硏究材料（寫生、手拓本、平面圖、寫眞等）を陳列し、又講演會を開いた。そしてその爲めに在北京の日本人間に潛伏してゐた雲崗熱を煽ることの出來たのは愉快であつた。その時爲た演說の內容には、後に考へると誤があつた。然し北京に起つた雲崗熱は、その後も固定したのである。北京に在住する人には雲崗佛像の美を聞いてゐたが、果して往復四日の行旅を費してまでもそこに往く價値のあるか否かに

ついて危惧してゐた。それを我々が熱情的に肯定したのであつた。我々が三週間近く、いろいろの不便を忍んでその地に止まつた事が我々の情を偽るものでないといふ證據になつた。

雲崗には珍らしい草があつた。支那人はそれを「瓦松花(ワアスンホワ)」と呼んでゐた。コチレドン屬の、日本には見ない種類であつた。これをば支那では外傷を治するに用ゐるといふからその乾(ほ)にしたのを買つて後日その成分を取つて驗して見たが動物體に對して何等特記すべき效用をなすものでないことを知つた。この草と共に珍らしかつたのは、此地で「紅嘴鴉(ホンツエヤ)」と云ふ名で知られてゐる鳥であつた。日本の鳥よりはやや小さく、その嘴と脚とが、紅色であつた。

此地方の口語には著しい訛があつて、土人との會話は甚だ困難であつた。その數例を列擧して北京口語と比較して見るとまづ次のやうである。

(雲崗)	(北京)	(譯)
ニイルラ	儞們(ニイメン)	汝等
ニイ・ガアサア	儞幹什麼去(ニンガンシヨンマチユイ)	お前何しに往つた。
ハアパア	不錯(プツオオ)	その通り
オワラ	我們(ワアメン)	我等
ニイラ・サン・ナアライチユイ	儞上那兒去(ニンサンナアルチユイ)	お前どこへ往く
ニイルラ・ダ・ナアライ・ライダ	儞們打那兒來的(ニイメンダナアルライデ)	お前はどこから來たのだ

ニイラ・ワァワァ・チイガラ　你們小孫幾歲了（ニイメンシャオヘイチイソエラ）　お前の子供はいくつだ

サア・エ・プガァ　我不幹什麼（ワアプガンソンマ）　わたしは何もしない

ダアラア　對了（トエラア）　さうだ

ツオ・サア・ゲヤア　做什廣去（ソオションマチュイ）　何しに往つた

ニイ・マイ・サア　你買什麼（ニンマイションマ）　お前何を買ふ

一體に「ン」の響が無く、單（タン）、攤（タン）をタア、換（ホワン）をホワア、番（ファン）をファア、念（ニエン）をニヤア、と發音する。

大同府も北方の極めて特徴のある都會である。「大同石佛寺」にも此都の叙述を逸した。雲崗よりこゝに歸つて、雨の日、傘をさして、其最も繁劇を極める武定街、永泰街、清遠街、和陽街の相交る十字道をさまよふと、わたくしは始めて大都を見る少年のやうな心もちになるのであつた。

和陽街の道の片側の觀音堂の對側には大きな陶製の板を萃め合せた巨大なる影壁（インピイ）でありその表には數個の飛龍が活躍してゐた。近來日本で製陶の術が進歩したが、此くの如きを作るのは必しも容易ではない。

挽馬標（ワンマアピヤオ）（馬を繋ぐ石の柱）の頭中の獅子も此地方ではまた特有の型を示してゐた。

此地方は一帶に美人の產地として知られてゐた。殊に婦人の纏足の小なるを崇ぶは山西地方に過ぎたるはない。夏の日の夕方など、人の町場に幾人かの女が並び坐する。皆その足を伸し方にそれを注目してゐる。是れ各その小なるを競ふのであると。この事は人の話ゆゑ保證はしない。然し山西省の山谷などを歩くとよく

「婦人少女足ニ

「千萬不要漏……」

などと書かれた禁札の家の壁などに貼られてゐるのを見出すのである。

九月末燕京に歸り加茂院長、小菅前院長の好意に由り同仁病院に止宿し、熱の爲めに一週間病臥した。その間に病をして前記の講演をしたのである。熱去つて後——時は秋冷に入り北京も漸く演藝の季節となり——梅蘭芳等の「六月雪」「金山寺」等の演戲を見ることが出來た。又北京大學に教授周作人を訪ね、兼ねて望んでゐた支那古民謠を蒐むることの困難なるを知つた。又現時の口語を以てする支那の新詩運動の狀況を聽くことが出來た。また已に文華殿、武英殿が開かれており、久ぶりに、宋元又明清の銘器を看た。

肉市の正陽樓に、滿鐵窯業部主任の小森氏と炸肉（羊の炙肉）を味はつたが、季節はまだこれを味ふに適しなかつた。

太原府、晉祠、天龍山

十月十二日に木村君と連れだち、北京を發して太原に向つた。是れは先年關野博士によつて發見せられた山西省天龍山の石窟を看に行く爲めであつた。夜の七時半に北京を立ち車內に一睡するのであるが、支那通の某陸軍少將が言つたと傳へられてゐる「人の口車と京漢線の汽車には乘るな」と言ふその京漢線である。北京で厚い蒲團を買ひ、身には綿をどつさり入れた支那の綿袍を着け、いよいよ半支那人としての出でたちである。十三日の未明に石家莊といふ驛に着いた。そこで正太鐵路に乘りかへるのである。乘りかへまでにはまだ一時間ばかりある。少し寒いので銅錢を出して大道商人の賣る湯麵を啜つて見ようとするが到底口に入る代物ではなかつた。

正太鐵路と云ふのは直隸省の石家莊から山西省の太原府に往く狹軌の鐵道で、佛蘭西サンチカアの手に依つて千九百

七年に竣成したものである。役人は少數の佛白人の外は支那人であるが、彼等は能く佛語を話すことが出來た。支那の鐵道のうち善く整頓した方であつたが、殊に料理は中々美味であつた。汽車線路に沿うた風景はすばらしいものである。

即ち鐵道線路に並んで殆ど東西に直流する河流の兩岸は黄紅褐色の砂岩の丘陵を成し、殆ど同じ色の土壁の家屋が山背又は山腹に重疊するのである。その様やや伊太利亞南部の景色に似通つてゐる。樹木としては柳、楡、柿、栗などが多く堤上に看られた。そして北方には割合に少い松樹が此邊には多い。

太原府には午后四時頃着いたが此邊の岐鳳棧（チイフオンザン）といふ宿屋には齋藤氏が唯一の日本人として數年來住居してゐられて大に便宜を得た。太原府もかなり特色のある都會であつたが、この頃學生間には少しく排日の感情があるやうだつた。橋頭（チヤオトウ）街（チエ）、羊市街（ヤンシイチエ）などが最も繁華な巷で、郵便局、緞綢鋪或は殺餜を鬻ぐ店が櫛比して居り、洋裝又は支那服を着けた學生が濶歩してゐる。省の督軍閻錫山は日本の陸軍士官學校出であるが、武よりも文を好んで、教育や地方行政に力を注ぎ、此地も近世風の日本小都會の感がある。山西省はまづ支那の長野縣である。

翌くる十四日の朝馬車二台を傭ひ木村、齋藤の兩氏と共に晋祠（チンスウ）に向ひ五時過その地に着いた。閭門には煉瓦の穹窿の壁に「古唐村」と誌された扁額が懸つてゐた。民國某年に時の太原縣知事の歐陽英といふ人が揭ぐる所のものであつた。この地が即ち甚だ古き由緒を有する晋祠の市の入口で、陶唐の故地であるといふことである。

晋祠の境内は幽邃で、大樹が繁り、清泉が湧き、わが駿州大宮などをもつと時代離れさせたやうな處である。それへ督軍の例の教育主義で園内の樹木に支那名、拉丁名の榜を附し、簡單なる說明を添へてゐる。唐貞觀廿年正月十六日の日附ある晋祠之銘並序（唐太宗御製御書）の石刻の碑などがある。支那の事であるからその碑を收めた小屋には「全唐

社稷爲墟久、貞觀文章一碣存。」とか「文章千古事、社稷一戎衣」などと誌された扁額などを懸けてあつた。

晉祠は支那の里數では、太源府より太源縣へ四十支里それから西南へ五十支里といふことになつてゐる。古唐の始めて都する處で北齊天保年間に唐の叔虞を此に祠つて今なほその廟が傳はつてゐるのである。そして今は此を山西省の模範村たらしめようと努力してゐる。一體に山西省は人氣が好いがこの地は特にさうである。一例を舉げると、我々は山腹の一房に止宿したが、奴僕に支那貨五十錢を與へ、米、菜、雞肉、雞卵、蠟燭、紙の類を買はしめたが、それ等のものを賄つて、なほ遣はす所の錢の半を殘して歸つて來た。夜大提灯を點して大勢の村吏が我等を尋ねて來たが、其應對極めて殷懃で、決して山東、河南の如くではない。

閭門の壁には往々左の如き振つた佈告がある。

「山西督軍兼省長閻訓言。公道社會精神國家元氣、故主張公道爲國家民之天職桀傲不馴爲野蠻人之特性、眞血性男子腦筋中有國家兩字、欲自立先從不依賴人起、欲自由先從凝人自由起、（後略）」

文章は甚だ日本腔を示してゐる。

翌日また二輛の馬車を傭つてここより支那里七里の牛家口（ニユウチヤカオ）の小村に出で、それからは驢馬に騎して天龍山に至るのである。この間は支那里十三里で風景は非凡である。

午后二時ごろ山頂に喇嘛塔の頂が見え出した。そしてやがて天龍山に達する。山には白松（パイスン）と稱せられる樹の倭株が多い。

この地の石佛窟は久しく世間から忘られてゐたのを關野工學博士が縣志を案じ、勞苦を費して搜し出されたものである。そこの寺は今は天龍山とも、聖壽寺とも呼ばれて居り、我々はそこに宿泊したが、食物とては麵と岩鹽塊があるの

みで、餅なく、麪なく、況や蛋も鷄もなく、空しき胃の腑さへそれを取ることを肯じなかつた。おまけに、數匹の猛犬が居て叱すればいよいよ激して我々をして頗る狼狽せしめた。

さて例の石佛龕の事であるが、是れは稿を改めぬと事情を詳かに物語ることが出來ない。寺の後方に、殆ど直角に峭立する高い丘の中腹に在り、石龕まで攀るのには一方ならぬ苦勞と工夫とを費すのであつた。

山は西南面して居り東方西方との二つの峯に分れる。山の勾配は西上で三十度位、下の方は殆ど垂直である。地層は風化した水成層で尺大寸大の板となつて重疊し、それに足を掛ければ足が滑り、手を懸ければ石が崩れる。山のたたずまゐは筆で記すよりも寫生圖で説明した方が分り易い。（此には挿圖を略す）即ち東方の山には我々は下層にa b c d e f gの七龕、上層にh i j kの四龕を數へた。a龕には大きな一對の仁王があつて、遠くからも善く見えた。

これ等の石龕中の佛像に就ては、今は精確なる記憶を失ひ、唯僅かの寫生圖と覺え書から、想起するのみであるが、その平面圖は大體第四十七圖のやうである。（ここに其圖は略す）g龕には內部に何もなく、唯置かれたる壁の磨滅せるを見るのみである。hには首のなき七佛あつて悽愴の看を呈してゐる。衣襞が繁く足踵まで被ふ。e f兩龕には天井に薄彫の天女あり、殊にeに於ては、天女は天井の四隅の梯形面に刻まれてあるが、其形惡しく、刀法繁雜に過ぎ、上乘の藝術品を以て許すべきではない。

f龕は南面し、その南、東、西の三面には坐佛あり又東西兩側には炬を持つ高さ一米ばかりの薄彫が、入口に近き處に對立する。eはfと殆ど同じ構造であるが、三面の座佛、脇侍の外に樹下に瞑想する尊者を現はせる、及び蓮華を執つて供養する士人の行列の薄彫などあり、その出來榮が相當に好かつた。d、c、bの諸龕には優れたる彫刻がない。

a龕はその前房に大きな仁王が對立すること已に記する如くである。更にその後房には三米四方位の室の中に四角の

柱あり、その四面に大佛を彫み、各佛の兩側に脇侍が立つ。又その柱に面し三面に立像群が刻まれそのうちには佳作もあつた。（第四十九圖略）

又西方の山では、AB二窟は二丈の絶壁の上に在つて到底攀ぢ登り難く、唯下方からAに大きな仁王の對立するを望むばかりであつた。B窟には神將あり、その上に彫られた、木造建築の斗拱を現はすものに、我邦奈良の佛寺の建築と典型を同じうするものを看た。Cには崩壞せる仁王があつた。そしてDの一窟はその裡に多數の甚だ優秀なる佛像を收めて居た。是等の佛像の位置、形體等は今叙述の繁雜を恐れて此には一々示さぬが、挿入の四圖（うち二個は自筆の寫生畫であり他の二圖は Jean Lartigue 氏の論文 (Revue des Arts Asiatiques 1re Année No.1 Mai 1924) に挿まれた寫眞から離れ寫したのである。氏は有名な佛蘭西の考古學者セガレンに隨つて始めて支那を旅行したものであるが、その後の旅行に天龍山をも訪ね、ここの佛像の事を歐羅巴に傳へたものとしては第一の人である。（最近支那から來た人の話に據ると天龍山の佛像の殆ど全部は首を失つたさうである。）

天龍山佛に就ては關野博士及び我々の訪問の後多數の邦人も此に到り、日本に於てはもはや珍らしいものではなくなつた。それで自分に於ても考古學上の特別な正確な材料でも得たのでない以上今更之を紹介する要もないから、他の諸窟の事などには言ひ及ばずして此位のことでやめにしたい（發見者關野博士の詳しい研究も近きうちに發表せらるることと思ふ。）

この歴史的の事に關して我々の今知つてゐることは、同行の齋藤君の持つて行つた「山西志輯要」の太原縣の項下に出たる「天龍寺。縣西南三十里、北齊皇建元年建。內有石室二十四龕、石佛四尊、隋開皇四年鐫石室銘」の記事に過ぎない。

即ち北魏と唐との盛な造佛の間に介在した北齊（並に隋？）の佛像で、その間の遺作の少き今日有力なる考古的材料だといふことである。

之を美術的に見ると北魏及び唐朝のものに比して概して劣るが、間々優秀のものをも見る。即ち前記D窟の諸佛であるこれ等は雲崗や龍門の北魏佛に比すると、肉體の觀察がよほど官能的になつてゐる。多分これは直接に中印度藝術（笈多朝）の影響を受け後の唐朝佛像の樣式の先驅となつたものであらう。

獲鹿縣

天龍山から太原府に戻りそこの郵便局に奉天で知り合ひになつた佛蘭西人を尋ね、又新に建築せられた山西醫學專門學校を參觀した。豫科の他にはまだ一二年級しかなかつたが、ここで面白いことは洋醫部と中醫部とあることであつた。內科、外科、眼科には日本の醫學校の卒業者が教鞭を執つて居た。

太原府より京漢線交叉點の石家莊に復歸する途中獲鹿縣に下車した。この地に唐時建立の塔の在ることを、兼ねて北京に於て、京都大學より留學の竹內氏に聽いて知つてゐたからである。それは十月十九日の午后三時過であつた。それから七時三十一分發の票車（乘客列車）までに早々見たのであつて、確かな印象も殘らなかつたが、停車場から步いて三十分ばかりの處に本願寺と云ふ寺がありその門內に煉瓦で積んだ九重の浮圖と屋根を頂いた方形の舍利塔とがあつた。その傍に大唐本願寺造舍利塔並北堂石像之碑と題銘せられたる石碑があつた。唐の開元八年（西曆七二〇）に建つる所である。此碑面も寫眞に取つたが、原板が火災に會ひ、別に參考書とてもない今此塔の由來に就て考ふべき由もない。唯塔の四面に彫られた佛像は典型的なる唐の樣式で相當に佳いものであつたのを覺えて居る。殊に淺い龕の中央の

高い獅子座に座する釋迦兩脇の、毱多——唐型の、腰をひねつた脇侍の形は美しかつた。

唐碑の他に嘉靖の重修の碑があつた。それ等に據ると、この舍利塔が他に、昔はなほ高さ二丈餘作の釋迦や彌勒の像があつたらしい。

現在もその他になほ二基の唐幢があつた。兎に角この本願寺もたしかに一日二日の研究に價する處であつたが、わたくしは發車時間と夕闇との切迫に襲はれて、匆々としてそこを立去つた。

洛陽、鞏縣、鄭州

石家莊に一泊し、それから鄭州に出で、そこにまた宿り十月廿日に洛陽に向つた。いままでのやうに木村莊八君と一緒である。

鄭州に至る少し前に汽車が黃河に差しかゝる。それは落暉の山に近づく午后四時四十分ごろの時であつたが、その壯大なる景色は今も眼をつぶると眼底に浮び出す。殊に黃河南岸といふ停車場に近い處は、山、河の立たずまひ繪も筆も及ばない。さてまた鄭州から洛陽に出づる平遠山水も捨てたものではない。この邊は桃の名所で、春は綠の麥畠の間に、一里も二里も連る桃の花がいかにも妖艷であるが、十月の此時は丁度柿の收獲期で、どの村でもどの村でも、一家總出で柿の實を落してゐた。二錢出すと木ざはしを十も十五も呉れるのであつた。柿の木の他には槐や、楡や、椿、柏、桑また楊、柳などが最も普通に見られる樹木であつた。

空は明るい灰碧色で氣溫は高く、窓を開けても風が寒くない。それもその筈、寒暖計は華氏で七十五六度を示してゐる。山西省に較べると冬と夏の違である。沿線に丘陵狀の古墳が多く、若し考古學的に發掘したら、支那文明史に多大

の貢獻を爲す頃の材料は、まだまだ發見せられるだらうと想像した。

洛陽へ來たのは、無論龍門に往く爲めであつた。龍門には先年一度往つたことがあるが、唯三四時間の視察に止まり遂に奥境に至らなかつたから今度は一二週も逗留しようと思つたのである。處が洛陽の縣吏が我々のそこに往くのを阻んだ。理由は途に土匪が多いからと云ふのである。土匪ではなく、恐らく吳佩孚旗下の兵匪であつたらう。喧嘩腰になつた役人と談判し、決然として我々は勝手に往くと云つたが、第一車夫が言ふことを聽かなかつた。是等のいきさつは詳しく書くと中々面白いが、今はまあそんなことに停滯することは休めよう。龍門の舊游は已に之を記して拙著の「地下一尺集」に收めてある。又その時の短信は本書（近く出版すべき拙著）に入れた。龍門行は斷念せざるを得なかつたが、鞏縣（リンチエン）には往くことが出來た。鞏縣は先年敢て行かなかつたが、ここの石佛も亦有名である。北魏のもの又唐代のものがある。孰れも雲崗や龍門のものには劣りその上荒廢もひどいが其うちの或窟の浮彫などには、龍門の賓陽洞の有名な、すばらしい浮彫と同じ典型に屬するものがある。我々は幸ひに自らそんなものの拓本を取つたから、ここにその寫眞を挿まう。

鞏縣の彫刻の寫眞はシヤヷンヌ氏の圖譜にもどつさり出てゐる。今茲には何か書くに價する新知識もないから、石窟については此の位にしておくが、この邊の風景の奇なることは一寸附加したい。この邊は洛河の流域でそれに沿うて往々砂岩質の丘陵がある。その一側がしばしば垂直に崩れて障屏の如き斷崖を爲す。そして人がそこに孔穴を穿つて住居又は物置にしてゐる。鞏縣へ入る少し前の處には洛河に沿うて砥の粉色をした砂岩の山が兀立し、何れもまた黃く、セルリヤン青の空と不思議な對照をなしてゐた。鞏縣では宿屋（木賃宿級のもの）が皆塞つてゐて、やつと或る家の一室を捜し出した。室と云つても、牀も卓もなく、唯地べたにアンペラを敷いてあるばかりであつた。それさへ已に一梨商

人の占領する所であつたが、我々を跟けて來た巡警がその漢子を追ひ出し、我々を宿泊せしめた。直接地面に寝るのもいやであるから、小車（シャオチャ）（一輪車）を捜し出して來てその一端を高くして此上に横はつたが、夜中には轅が滑つて腰から下は地面に落ちてゐた。

翌日（十月二十四日）は再び石窟寺に往き、拓本、寫生等の仕事をし、午后四時四十分發の汽車で鄭州に歸つてまたここに一泊した。宿は佛蘭西人の經營するもので、支那旅館よりは清潔であつた。そのかみさんは、日本人で、朝は粉（フロマヂュ）にした乾酪（ラヘエ）を味噌汁の上へふりかけてくれたりした。

二十五日いままで、三箇月の間行動を共にした木村君と別れた。同君は數日來輕熱に惱んだが快方に向つた。そして北京に向けて歸るのである。わたくしはこれからまだ河南の諸省を見やうとするのである。

鄭州は曾遊の地であるが、有名の十三重の塔は已に知つてゐるが、唐時の經幢は未だ之を觀なかつたから、そこに往つた。開元寺の尊勝幢と稱せられるものである。そしてその晩の六時過ぎに發する汽車で漢口に向つた。

江南、江北、漢口、武昌

わたくしは鄭州から漢口へ出てここへ一休した。日本人の多く居る處であるから、氣持が安易になりついに三四日滯在した。此地氣溫の高きことは已に述べたが日中は華氏七十度以上に昇り、夜は蚊帳を張る始末であつた。漢口に來てから龍門に往かなかつたことが頻りと殘念に思はれ、も一度引返す氣になり、情報を領事館に聞きに行つたり、親切な瀬川領事にもいろいろの御厄介をかけたが、その企は到頭之を翻さざるを得なかつた。

さて、江南江北は支那の最もクラシックの地方であるから、その鑑賞には學問がいる。それのないわたくしは單に景

色を見てあるく旅行者に過ぎなかつた、然しただそれだけでも實に得心がいつたのであつた。

南船北馬と云ふことをいふが、漢口に近くに從つて漸く水郷多く、家は白壁で、其屋根の勾配は黄河以北の諸地方に比べて一層強い。單に強いのみならず、時として其形空想の限りを盡してゐる。樹には楊柳、槐、樗、が多く又樟や桃を見そして楡はやうやく其影を潜める。時秋の候であるから、家の庭には小山ほどの推禾(つみわら)がしてあり、沼上には水牛、大澤には漁船が集散してゐる。畠は大豆があり、蕎麥があるがまた二度目（？）の麥の芽が青む。又水田があつて稲が熟する。土壤は概して帶黄紅色の黄土、雑草もさすがに紅ばんで、空の鮮碧に對し風景が頗る明るい。潘江といふ驛の邊から始めて揚子江が見え出すのであるが、殊に滿家磯といふ邊の風景は全く雪舟の畫幅である。まるで北宋の山水畫が自然に戻つて目の前に展開したとしか思はれぬ。

禪宗坊主は南地竹分北地木といふことを言ふが黄河を南に來てから竹の發育に適する土地となる。北京地方では、唯庭の飾とする程度で、繁茂するとまでには行かない。竹發生の分布に伴つて、人文の變化がある。たとへば、北京でも山西省でも、乃至、河南省あたりでですら、夜の提灯は細い鐵網の龕燈である。白木屋お駒が家出し、番頭共がうろたへる時に持ち出すやうな形である。尤も四角なばかりではなく圓いのもある。それに赤字や黒字で（實は筆で書いたのではなく、色の紙を字形に切つて貼り付けたものであるが）金臺棧なら金台棧といふやうな屋號を現はす。揚子江に近くとどの村にも竹籤を見る。そして提灯は凡て竹骨のものとなる。それが武昌、岳州、九江、蘇州、南京、郷に從つて皆其形を變ずるので甚だ奇異である。

一旦漢口に出ると既に海港の氣象で、支那的分子よりコスモリツトの要素が多い。日本の商店にもあるが、下駄屋、疊屋、小間物屋、土産物屋、蕎麥屋、料理屋で其雰圍氣が頗る特殊的であつた。それでも第一に雜誌屋に飛び込み、新

刊の日本の文藝雜誌を貰つた所を見ると、自分の心にも、同じ精神が巣くうてゐるとみえる。

武昌は漢口に比すると支那的の純粋が保存せられ、黄鶴樓附近の街區は珍らしかつた。寶通寺の塔も立派であつた。も一つ、山西でも此地でも感じたことだが支那の村落にはよく公衆用の舞臺があつて、市街の美觀ともなり、平民の娯樂にもなつてゐる。つまり日本の祭典の舞臺の永久的建築であるが、こんなものは日本にも亦欲しいと思つた。

漢口、武昌で見た藝術品のうち、今なほ記憶に殘つてゐるものが一二ある。一は、多分黄鶴樓であつたと思ふが、古い大理石塔があつた。形は喇嘛塔である。いつの建立に係るか、つひまだ調べても見なかつたが、その面に刻まれた浮彫には、我國平泉の中尊寺に保存せらるる鍍金の浮彫の鳳凰や、伽陵頻迦などと全くその典型を一にするものの見られたのが一奇であつた。その二は漢口の住友銀行の水野鶴太郎氏がわたくしに示されたる寫眞である。それは氏が人の爲めに購求したる高さ一米ほかりの北魏太和年間に作る所の石佛の寫眞であつたが、わたしの興味を引いたのは、寧ろその背面に彫られたる彫刻である。是は、釋迦本生譚の二つの光景を現はすもので、一は白象が下つて摩耶夫人の脇腹に入るところ、二は、たしか太子出生して歩々蓮華を生ずるところだつたかと覺えてゐる。その構圖、樣式は、形に大小の別はあるが、全く雲崗の大窟の本生譚の大浮彫と其類を同じうするものであつた。そして雲崗に闕けたる部分が此に看られるのであつた。

此の同仁醫院（院長藤田氏）は漸く支那人の信用を得て患者が輻輳してゐた、

さつきちよつと言つた物産の地理的分布のことであるが近縣に棕梠の産地がある爲め、武昌には棕梠で製つた品物を鬻ぐ店が多かつた。井戸の釣瓶も棕梠製であり、籠も亦棕梠製である。竹細工もまた多く賣れらてゐた。

長江は多種の魚を産する。就中鱖魚（クヱイウ）は尤も美味である。人のその生肉を食ふや往々 Oedema Circumscriptum Quic

koに罹るといふが、その説は疑はしい。

岳州、長沙

十月廿九日、武昌の通湘門車站から乘車して湖洲に向ふ。この鐵道は之を粤漢鐵路と稱するのである。粤は越と同じく今の廣東廣西を指すから漢口廣東を繋ぐ積りであらう。まだそれまで連絡してはゐない。北方は唯武昌と株州（長沙の少し南）との間丈出來てゐる。汽車中で、嘗つて東京の岩倉工業學校に學んだ支那人技師あつていろいろの事を聞くことを得た。そして岳州では第一旅館に宿れと教へられた。

岳州へ着いたのは、まだ日の登らぬ午前五時頃ごろであつたが　その時の有様はいまだに記憶から去らぬ。停車場は市街よりだいぶ遠い處に在るらしかつた。その時の氣待ではまるで、夜中に田圃の眞中に拋り出されたやうであつた。下車する人は大勢あつたが、誰れも自分の侶伴ではない。暗い道に麵又餅を賣る行商人の燈が錯落として散布する。幸ひ宿引がないので、行李をかつがせ、第一旅館へと歩いた。

都門を入ると。街道の店の或ものは、已に起き出て、火をおこし湯（羹汁）を温め、油を煮てゐる。狹い街の兩側には、日本の酒藏めく大白漆喰の壁の家が並び、日の下で見たら、どんな都だらうといふ好奇心を動かしたのである。

宿引は四角な竹籠の提灯に「再來旅館」と記されたのを持つてゐた。それに第一旅館へ往くことを命じたのはこちらの無理でもあつた。連れ込んだ家は再來旅館であつた。それで爭ひが始まる。

「ここは第一旅館なのか。」

「再來旅館です。」

「でもさつき第一旅館へ往くと云つたのではないか。」

「この宿屋は狠だ好い宿屋だ」

門の中に厳しい大門が閉されてゐる。外の壁に應じて裡の人が門を鳴らす。門を開くと、奥深かさうな、感じの好い家である。然し第一旅館が先入主になつてゐるわたしの心を動かさなかつた。そしてかなり苦心して問答をした後に遂にきたもとの道を戻つて第一旅館へ赴いた。町の家の起き出したのが其數を増した。實際に然し第一旅館などと云ふのはないのであつた。巡警に尋ねると新旅館といふのがそれだといふことであつた。

その宿屋へ着くと門内に兵隊が大勢居た。今名を思ひ出さぬが、南北軍が爭があつて、この地が南軍かに占領せられ、この家がその幹部の宿泊所になつてゐたのである。北方の諸省と違ひ、此邊では女が人の中に交つてはたらく。この宿屋でも年増のきさくな姐さんが萬事采配を振つてゐた。

一睡してまた起きた。朝飯は其料理法が幾分日本風であつた。四菜一汁で其味中々おつである。一、鹹魚の煮付、一、白菜の煉煮、一、葷と豆腐、一、賽の目に切つた皮蛋、日本ならしやれたお茶料理の代物である。

夥計一人を連れて岳陽樓を見物に往つた。石欄に倚つて、十月なほ綠なる柳に對し水光疊くるところに群山を看るのは　身北京山水の裡に入つた感がある。岳陽樓の高居から近隣の家の屋背を眺めるのも一興で、其色彩、其彎曲、實に想像以上であつた。有名な范仲淹の岳陽樓記もあるが　どうもその文章があまりに抽象的であり　比興多く、この風景と較べてしつくり合はぬやうな氣がした。

この大湖は多種の魚を産し、洞庭湖志は鯽銀魚、鯿、鯉、鱘、沙魚、鰉、魴を擧げる。普通市場に見るは甲魚、鯽、鮎魚などであつた。又毛花魚と云つて、我邦の白魚を大きくしたやうで、長さ一二尺もあり　銀白色を呈してゐる。

新旅館の老夫人は柔和な顏をして居り且つ非常に親切だつたが水彩を以てその肖像を作つて贈ると甚だ喜び、家中の人また士官兵隊までも出て來て見物した。そして翌日この家を辭する時勘定を受取らなかつた。それは一泊四食で一食は四菜一汁で、五十錢ばかりであつた。それでその價を奴婢に分つた。支那人はけちだと云ふが、南方に來ると、氣質が餘程異る。

それから鐵道で長沙へ往き、午前十一時頃着いた。この地は日本人がだいぶ居り、日清汽船會社あり、又日本の醫院、雜貨店、宿屋、料理屋がある。ここでは日本の宿屋對岳館といふのに止宿した。

此地も亦極めて特色のある都會であるが、名所案内のやうに一々それを記してゐては際限ない。それで一二の特徴を以て之を晴示しやう。

街角の壁上にいろいろの掲示を見るが、その一に次のやうなのがあつた。湖南省警察廳の佈告である。

照得象棋作用　始有自周武王
原係消遣雅具　偶供娛樂無妨
迺竟有種無賴　竟至賣奕街旁
行爲類似賭博　路人停桨圍觀
致令交通阻礙　殊屬違犯警章
亟應佈告査禁　違即處罰相當

又

照得星相占卜　以及江湖賣藝

應擇寬坪劇字　不得當街射利
亦有擺攤門前　或竟道旁席地
不顧妨礙交通　致惹路人圍聚
合丞佈告禁止　責成長警取締
違即帶署處罰　其各凜遵勿替

相當とか取締などと云ふ字で、筆者の法律を日本に學ぶものなるを推察せしめる。象棋を禁ずるに周武王を引合に出すなどは支那的で面白いが（佛蘭西の佈告にもこの傾向がある）どの掲示にも人が團聚して交通を妨ぐるのを禁止の理由とする所が注意を引く。

長沙の街は兩側に極めて固有な土藏造の家を並列せしめ、道は極めて狹く、亦一種の美觀がある。殊に道旁に井戸があり、釣瓶の綱が兩側の家の軒を連ねる横木に吊られてゐる處は趣がある。支那の傳説集新齊諧などを讀むと屢道旁の井戸の話がある。騎手が過つて老人を井戸の中に落して知らぬ顔をしたといふやうな筋である。さう云ふことも思ひ出し、紀念の爲めに、わたくしは紙を展べて寫生を始めた。すると人立が始まつた。水桶を擔つて來た男は停滯した。車は進めなくなつた。遂に巡警が出て來た。そこで佈告の路人停聚、交通阻礙の文句が利いてくるのを悟つた。

また「照得無知男女、早晩擔桶傾糞云々」の掲示などである。この地は支那に於ても市街の淸潔を誇としてゐるのであるから、さう云ふ佈告も出るのである。然し北軍が此地を占領すると街が汚くなる。今は南軍の手中にあるからきれいだといふのである。

井戸は市街美の一條件であると云つたが、この地の賈太傅故宅といふ邸宅の前の「長懐亭」の匾額を掲げたものは、

殊に情趣を有するものであつた。

「督軍諭示。和人住宅、毋得擅入」などの揭示が家の軒に貼られてあるのを見て、一年も平安のない生活を想像することが出來る。

此地には米人の經營する湘雅醫院がある。雅禮會 Yale mission と湖南育羣學會と訂約して一九一四年に創建する所翌年は China medi-ae board of ther Rockoffeller foundation が之を援けて堂々たるものとなつた。醫學校も之に附屬する。

長江を下る

此紀行もだいぶんだらだらと長くなつたから、あとは好い加減に端折ることとしよう。さて長沙で太沽合社の英船に乘り湘江を遡り、洞庭を横り、更に長江に出て一旦漢口に下り、これで船を換へて長江を下つた。今までわたくしもあちこち旅行をしたが、この道程ほどの奇風景はさう多くはなかつた。

瀟湘の水郷は全く馬遠の如く夏珪の如く又雪舟の如くである。廣い蘆の洲があつて、ところどころに柳が立ち、こしてその蔭に檣が見えるといふやうな景色は我々が少年時代以來、襖に、床の間に、額に、屏風に見慣れた山水畫の原物である。唯たとへば岳陽に着いて 丘陵から聳立する寶塔高樓の天界線に固有の支那趣味を感じても汽笛、錨を下す音などの文明的音響や陸遊や、大觀などから得た幻想を破らるるのは止むを得ない。

長沙から上海にかけて旅客者はいつか不思議な現象に氣が付く。それは碼頭、街側の勞働者の五十人に就て一人か二人かはばげ頭だといふことである。いろんな人に尋ねて、この事をラアリイトウと云ふことは分つた。トウは頭であ

り。ラアリイは何か意味が分らぬ。分らぬ爲めに癩痢などと云ふ文字をあてはめてゐる。それは大部分は黄癬などと云ふ傳染病であつたが、其分佈の廣いことには一驚を喫するのである。

傳染病の分佈はかく廣いが文明や物産は中々放散しない。さきに提灯の分佈の事を言つたが、さう云ふ有形の物品のみならず、もつと抽象的な、たとへば裝飾圖案と云ふやうなものも土地土地で其様式を異にしてゐる。一番分り好いのは欄間模様で、上海は最も復雜で其趣、北京のものとは勿論、蘇州以西のものなども異るものである。

それから家の構造、殊に屋根の勾配が、土地に由り著しく違ふ。之に加へて自然が違ふ、植物が違ふ。人の言葉は無論著しく違ふ。それ故長江沿革の都會を遊歷するのは、面白い外に學問になる。支那以外の國に比較になるのは伊太利亞である。シエナはピザと異る。ピザはラエンナと異る。エネチヤとは更に異る。パツツはまた別である。比較的遠からぬ延長の間にこんなに特色の異る都會を有するはまづ長江と北伊太利である。

長江下りの船は九江で之を見捨てた。何でも潯陽江はこの近くであると聞いたが、九江それ自身情趣の深い市である。わたくしは少年時東京の築地邊を歩いたと同じ興味と空想とを以てそのあらゆる街區を見廻つた。

九江から廬山に登る道は風景が殊に好い。樹木としては「南京櫨」Sapium sebiferum と云ふのが殊に特徴があり、時に秋が半ばにして、葉は色めき紅は林檎の實の紅、黄は春月の黄であつた。それが雨に濡れた遠景の白壁の前などにあると、一幅の秋景山水を生かして來た。又鳥には叭々鳥といふのが居る。（此邊ではフエエツツと呼ぶ。）雪舟の畫幅に現はれ一匹千金萬金を費さしめる、此邊では惜しげなくふんだんに飛翔してゐるのであつた。

廬山の景色はすばらしいものであつたが、山に籠る三日の間雨に降り罩められ碌々見物も出來なかつた。また古來有名の窑場たる景德鎭に往くにも九江からする。途中民船を賴んだりして往復に十日はかかる。それでわたくしは敢て行

かなかつたが、後に北京で小森忍君に會うと、現今藝術的の佳器こそは造らぬが、規模が大きく、職人が熟練してゐて、一覩の價打はたしかにあるところだ相である。

南京、鎭江、蘇州

十一月十日九江で乘船、南京に向ふ。その航路では、三山磯、小孤山の風景が今も目に殘つてゐる。殊に小孤山は廣漠たる濁流の間に、忽ち船前に現はれ、忽ち船後に去り、まるで途方もなく巨大な鷲の鳥か何かに出會つたやうな感じであつた。

これから先は南京、鎭江、蘇州等の名所がある。南京には明(ミン)の孝陵、莫愁湖あり、又貢院、夫子廟あり、又小さいながら考古博物館あつて、觀るものにも事かかぬが、大體に於て、國破山河在の感情を味ひに往く處である。風物は羅馬の市はづれに似通つてゐる。棲霞寺の舍利塔は隋の時代の創建に係ると云ふが、四面の佛本生譚を現はす浮彫は、白象降下から卒塔婆の崇拜に至るまであるが、よもや隋の彫刻ではあるまい。其手法宋元の藝術を思はせるものであつた。千佛嶺の佛龕は多くの佛像を收め、それ等は南方の佛教藝術の典型だと謂はれるが毀損著しくして足を停めしむるものがない。

南京の日本旅館の主人は東京者で其性がきさくである。夜倶に出で秦淮に船を浮べて後茶館に妓を聘した。秦淮の季節はもとより夏であり、今溝渠に繋がれた多數の船は賭博場(麻雀)である。夜十時を過ぎると巡警が來て其場から稅金を徴集して行く。

妓館で歌ふ唄は山歌と稱せられる種類が主である。多くは月亮一齣(ユエランイチヨウ)で始まる。其調悲愁であつて、亡國の恨を印象す

る。一國會議員が愛妓と倶に新築大百科店の裡の旅舍に投じ、夜半の火事に狼狽するといふのが去年からの流行歌であつた。

此邊に製紙業が多いと見えて、其原料たる皮紙樹が到る處に植つてゐる。略わが國の桑樹の如くである。又楊柳が多い。此地では水楊柳（枝垂れる）と水柳（枝垂れる）とを別ち呼んでゐる。

又夕方或街區を通ると門前で人が黄色の紙を燃してゐた。そしてそれが紙錢であることが分つた。嘗て長沙の市で、紙店にその紙を堆く積み込み、又丁稚どもが、それへ鏨（たがね）で孔を開けてゐるのを見て、用途を疑つたことがあつたが、今にしてその疑が氷釋したのである。新齊諧や聊齋志異を見ると、紙錢を燃やす風俗の事は屢々出て來る。紙錢のうちには、銀錠（インチン）と稱して、金銀紙を以て、昔の馬蹄銀を模したものもあつた。

鎭江には日本人の經營する旅館なく、碼頭の萬全樓に宿したが、意外の暮靄の裡に、漸く黄色の燈の輝き出す焦山島を看す景色は格別であつた。

此地は金山寺味噌の本家の金山寺がある。又甘露寺がある。乾隆帝はその寺の壁に天下第一江山の題字を大書したが、これだけは決して支那流の誇張ではない。

蟹は此地の名物である。それを酒に漬けたのをば醉蟹（ツオエヘア）と云ひ、日本でも數奇者は珍重する。その一つ二つが、華潔な陶皿の上に載れればおつでこそあれ、此地の料理で註文すると、破れ皿の上に十も十五も積んで出し、異臭の爲めに頓と食慾を減ずる。

蘇州は東洋のヱネチヤ、一水一橋悉く是れ繪であり詩であり傳説である。今更めかしく一々之を説明するのも野暮であらう。たゞ此地で、支那雜學の大家葉徳輝先生を尋ねたことを附記して置かう。先生の家は曾家巷麥仁里に在り。わ

たくしは此家で、陶淵明の研究家橋川時雄氏に會ふ筈であつたが、氏未だ至らずして、ゆくりなくも主人と筆談することになつたのであつた。

虎丘、寒山寺、楓橋のことは諸種の案内記に譲つた方がりこうであらう。唯留園の事は一言する必要がある。此庭園は構造全體には煩瑣でいやな處があるが、其部分部分には捨て難いところがあつた。まづ公開の庭園として、南方趣味のものは、是れを以て白眉とするであらう。

鎭江から汽車で上海に出で數日滯留し同胞諸君と會した。北京在住の日本人と較べると、多くはまだ年が壯いので、骨董に手を出す者は少なく、又さう云ふ物も當地には少い。それで人々の趣味が別方面に向ふ。そのうちでも良い圖書館を作ることにはみんなが力を盡くしてゐた。最近某英人の藏書が競賣に出た時それが或る有力者の出資でその圖書館に落ちたといふことに對して少からぬ誇を有してゐるやうである。

「或英吉利人が嘆息して曰つた」と一人がわたくしに物語つた。「今上海に居る英人は墮落してゐる。昔なら、あんな藏書を日本人の手に落すやうな事はなかつたのだ。」

上海から杭州に往き、有名な西湖の湖畔に一宿した。翌日は曇り日であつて、舟を傭つて湖上の名所を廻ると、水上の山影の裡に雷峯塔の影もまじり、全く誂へ向きの風景であつた。此古塔は一兩年前匪徒の毀つ所となつた。

西湖の水は清いが、此事南方の支那に在つては甚だ珍らしい。それは湖水に産する「西湖藻」の作用に由ると云ふことを、當地で發行してゐる日本の雜誌で讀んだ。

わたくしは上海から一旦北京に引き返し、そして天津から船に乘つて神戸へ歸つた。いよいよ支那と別れるといふ段になると、さすがに物悲しい氣持がした。船が神戸に着くと、船でも棧橋でも淸潔であると感じた。港の小船の板はてらてらと拭かれてあり、そして小ざつぱりとした服裝をした靑年が、立派な靴を穿いてその上ではたらいて居る。日本の生活は中々金がかかると感じた。日本人の費消するものは必しも日本に產するものではない。靴を穿き毛を着る爲めには大きな金額を外國に送らねばなるまい。

一週間ばかり神戸にぶらぶらしてゐたが、日本人の生活は、豫期に反して、わたくしの好感をそそらなかつた。わたくしの心にはいつの間にか支那を愛する感情が湧いてゐた。そして偶然狹い南京町の店頭に、家鴨のひものや、腸詰や文旦などのごたごたしてゐるのを眺めガラスの扉に久しく見慣れた支那文で、近く新鮮の鴨子（ヤーツ）が到着したなどといふ張紙のしてあるのを見ると、ゆくりなくもなつかしい感情が起つて來た。

東京へ歸つて、わたくしは支那から持つて來た材料を整理した。支那で一都會に入ると、わたくしは必ず寫眞を取り寫生圖を作り、彫刻は之を拓し、佛藏は其平面圖を作り、極普通なのと珍らしい草木とは搾葉にした。そして東京に歸つてからは雲崗の石佛寺の記錄を作つた（「大同石佛寺」）その後、人の爲めに支那古傳說を譯し（「支那傳說集」）、大同以外の事に就て記錄を作るに及ばずして西洋に渡つた。そしてそこに止まること三年半にして日本に歸つて來ると、寓居は震災に失はれて、支那から持つて來た材料は皆灰燼に歸してゐた。今度改造社がわたくしの朝鮮支那に關する雜稿を出版してくれるといふので、そのうちの一文として、支那南北の曾遊を記せんと欲しても、唯一卷の日記があるのみで、他に之が參考にすべきものは何もない。然しこの旅行記がないと、右の書の內容に脈絡の缺する憾みがあるので、甚だ氣が引けるが、急いでこの稿を作つたのである。

虚弱者を強健化す

ブルトーゼ

ブルトーゼは入大醫學博士の御推奬と且帝國大學病院、赤十字社病院其他各府縣立病院等に於て盛んに御採用を蒙りつゝある最も理想的補血強壯增進劑にして人體肝臟中に含まるゝ鐵白蛋白と同性同態の人工集成したる液狀製劑なり併して左記特長を有す。

一、芳香美味にして我國民固有の嗜好に適し口に快く婦人子供も亦愛す。

二、絕對に副作用なく能く造血機能を亢進し新陳代謝を旺盛ならしめ食慾を增進す。

三、速かに同化吸收され赤血球を增加し精力を旺盛ならしめ身體榮養上強力なる作用を呈す

故に急性慢性貧血病、萎黃病、腺病及び結核其他諸疾患より來る榮養不良並に衰弱、神經衰弱、病後恢復期姙婦、授乳婦、産後、虛弱羸瘦者等に顯著なる効を奏す。

種類及賣價

補血強壯榮養增進劑	單味ブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓	大瓶 一月分 金三圓
神經性疾患特効劑	アルゼンブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓五十錢	大瓶 一月分 金三圓五十錢
腺病質特効補血強壯劑	ヨードブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓三十錢	大瓶 一月分 金三圓六十錢
健胃補血強壯劑	キナブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓五十錢	大瓶 一月分 金三圓五十錢
呼吸器系疾患特効劑	グアヤコールブルトーゼ	小瓶 半月分 金三圓八十錢	大瓶 一月分 金五圓五十錢

實費各地藥店

說明書進呈

發賣元

本舖 藤澤友吉商店

大阪市東區道修町二丁目（振替大阪一七四一番）

東京支店 東京日本橋區本町四丁目

京城支店 京城府西小門町四十二

山本有三著

嬰兒殺し

定價貳圓
送料十七錢

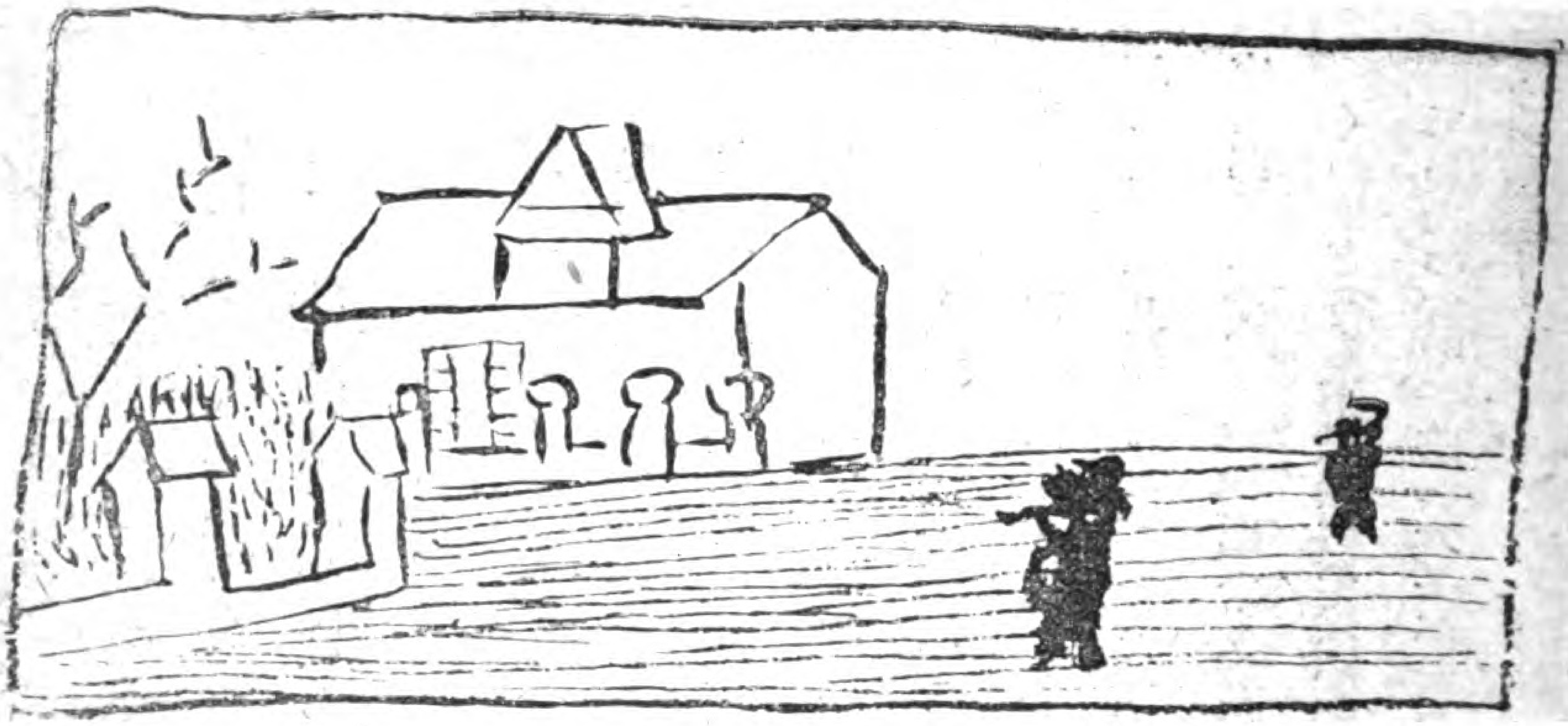
第七版

天才戯曲家として一作を出すことに讀者の血を躍らし、そしてその核心をシッカと把握して離さないのは山本氏の戯曲である。氏の人生へ對する愛着、舞臺に對する細緻の觀察は篇中の何人をも躍らし泣かさずにはおかない、此書に收められたる「坂崎出羽守」は目下帝都で大問題となつています。徳川時代の犠牲的結婚をいかに深刻に說かれたか、權力と愛慾の葛藤を明快に解剖した近來比なき名戯曲

内容

津村教授
嬰兒殺し
生命の冠
女親
坂崎出羽守

發行所 改造社
東京市芝區愛宕下町一ノ一
振替東京八四〇二番



戯曲

雲の彼方へ

正宗白鳥

人物

庄三郎(二十七歳)
卯之助(二十五歳)
おしほ(二十歳)
ある男
ある女

時代

寛文の頃　初夏

場所

豊後のある村

(作者曰く。姉崎博士の「切支丹宗門の迫害と潜伏」を讀んでゐた時にふと浮んだ空想を、多少補綴して書いたもので、無論、歴史あるひは傳説上に根據があるので

はない。この一卷の書より得た以外には、迫害時代に關係のある智識をも殆んど有つてゐないのである）

（一）

時は七ツ時を過ぎたころ。

村はづれ。道祖神の小祠がある。そこには大きな鈴が垂下つてゐる。古草鞋が幾つも掛けてある。あたりには樹木が可成り茂つてゐる。

脚絆や甲掛けを着け野良働きの身裝(みなり)をしてゐるおしほが、野菜物の入つた畚(ふご)を側に置いて、頭に被つてゐた手拭を取つて、後向きで祈願をしてゐる。

そこへ、道中差しを一本差した庄三郎が旅姿をして、感じを籠めてあたりを見ながら入つて來る。おしほ足音を聞きつけ、振返つて見て驚く。

庄三郎　オヽ、おしほか（懐つこさうに云つて近寄つて）四五年會はないうちに、すつかり大人(おとな)になつたな。容色も大層ようなつたぞ。ハヽヽヽ。もう獨身(ひとり)ぢやあるまいな。お前のやうないゝ女子(おなご)の匹偶(つれあひ)になつた果報者は誰れぢや。

おしほ（極り惡さうに）若旦那樣は人が惡うおなんなすつた。お歸りなさると、早々御戯談を仰有つて。

庄三郎　ぢや、まだ何處へも嫁に行かないんか。お前のやうな容色のいゝ女子(おなご)を、村の若い者が今まで打やらかして置くのはどうも不思議ぢや（小祠の方へ目をつけて）しかし、お前は今其處で拜んで居つたやうだが、どんな願を掛けてゐたのぢや。若い女子が幸の神(さいのかみ)に願掛けをするのは、大抵分つてゐるぞ。

おしほ　何を仰有います？。わたくしは肩休めに休んで居りましたのぢや。

庄三郎　それはまあどちらでもいゝ。言譯をせいでもいゝよ。しかし、おしほも幸の神を拜むやうじや安心ぢや。此方でも御禁制の宗門のお調べはます〳〵嚴しうなつたであらうから。

おしほ　上方でもお調べが嚴しいので御座いますか。此方では、幸ひと、この二三ケ月はお召捕りになつた者が御座いませんのですけれど、今年のお正月お飾り下しの晩には、それは大騷ぎで御座いました。この門田村だけでも十人も一度期に代官所へお呼出しになつて、罪が重いとかで、皆んな、女房子も一しよに長崎送りになりました。

庄三郎　それは誰れと誰れぢや（せき込んで訊く）

道祖神の小祠の側に腰をおろす。おしほも腰をおろす。

おしほ　九郎右衛門どんに、鬼松どんに、桶屋の孫四郎に、豆腐屋の彦兵衛爺さん（指を折つて數へる）それから。……

庄三郎　彦兵衛が擧げられたか。あれがキリシタンで。……（驚きのあまりウヽンと唸つて）それでお處刑になつたのだな。あの年齡で。

おしほ　あの爺さんは、葛木村でお召捕りになつた人の伯父さんだと云ふので、最初にお調べを受けました。爺さんは、お佛壇の中に異人の佛様の繪像を掛けて拜んで居たので、言拔けが出來ませんでした。それに、爺さんは剛情を張つて、どんな拷問に會うても、お上へお詫びをしないので、とう〳〵長崎で焙殺されたさうで御座います。あの人のいゝ何時もニコ〳〵してゐたお爺さんが御法度破りの恐ろしい人であつたとは、わたくしにはどうしても思はれないので御座いますわ。……その外には。……（と、新たにまた指を折つて數上げやうとする）

庄三郎（相手の言葉を遮つて）もういゝ〳〵。不吉な名前をお前の口から一々聞かされなくつてもいゝよ。おれの身内

に掛合ひがなけりやそれでいゝのだ。……おれの家の者はみんな無事に暮して居るのだらうな。

おしほ　皆様お丈夫で御座います。米良の御親類のお家では、花の咲いた時分、大旦那様が本卦返りのお祝ひを盛大になさつて、此方からも皆様お揃ひでお出掛けになりました。その時はわたくしも米良へお手傳ひにまゐりました。

庄三郎　さうか。それはよかつた。祝ひ事があるやうなら結構ぢや。卯之助もこの頃は丈夫なんだらうな。

おしほ　あの方もお變りは御座いません。時々大野川へ魚釣りにお出でなされて、澤山お釣りになつた時には、わたくしどもへもお裾分けをして下されます。

庄三郎（微笑して）あんな不器用な奴に魚が釣れるのかい。不思議なことだなあ。……しかし釣りでも慰みにやつて居ればいゝことぢや。旅へ出ると、一番おれの心に掛るのは卯之助のことなんだが（感慨を籠めて獨言のやうに云ふ）

おしほ　それはどういふ譯で御座いますの？（相手の顔を見上げて訊く）

庄三郎　あれの身體には疫病がうつり易いんでな。

おしほ　でも、近年流行病はないので御座います。

庄三郎　ハヽヽ。無いと云うても、流行病の根はなか／＼絶えさうぢやないな。卯之助は生れつきが珍らしい物好きだから、どうかした機會で、魔が差したやうに自分から進んで疫病を脊負込んで來ないとも限らないと、おれは旅にゐる間にも、何よりもそれを心配してゐたのぢや。たび／＼夢にも見て、目が醒めて汗びつしよりになつたこともあつた。

おしほ　ホヽヽヽ（無邪氣さうに笑つて）それは、卯之助様がバテレンの魔法に掛つて誑かされるとお思ひになるので御座いますか。……まあ、阿房あしい。……卯之助様はキリシタンのお宗旨は薄つ氣味が悪いとよう仰有つて居られ

した。

庄三郎　本當に薄つ氣味が悪い。お上もお手數が掛るだらうが、あゝいふ者は一日も早う根こそぎに無くならんと、世の中が陰氣でいけない。(氣持を變へて) いや、お前に此處で會つたので、おれも安心して家の閾が跨がれるよ (立上つて) 晩にでもお父ちやんに話しに來いと云ふて呉れ。

おしほ　畏りました。

庄三郎　これから忙しうなるな。まあ、無理をせんやうに働けよ。

　庄三郎出て行く。おしほはその後姿を見送つたが、直ぐに立たうとはしないで心安げに休息してゐる。やがて、道の一方に何かを見つけたので、慌てて立上つて畚を脊負つて行きかけたが、また思返して、笑ひを洩らして小祠の後へ身を隱す。

　釣竿や魚籠を持つた卯之助が、同じくらゐな年輩の、粗服を着たある男と入つて來る。

卯之助　お話の面白さに、知らん間に此處まで歸つて來ました。うつかりしてあなたに無駄足を歩かせましたな。此處でお別れをせにやならない。(足を留める)

ある男　口下手な話をよう聞いて下された。萬事にかない給ふ天地の御作者の御名譽の事(神の奇蹟の事)や廣大なるお慈悲は、なかなか一朝一夕にはお話し盡されません。あなたが明日の日にもまた釣魚にお出掛けなさるやうなら、時刻さへお知らせ下されたら、わたくしは、釣竿を持つて今日の場所へまゐつてお待ち申ませう。眞賀村にはまだ四五日は逗留して居りますから、あなた方が聞いて下さるなら、何處へでもまゐります。何日の夜廿三つ時に、どこの森の中で會ひたいと仰有れば、間違ひなく其處へまゐります。八つ時の晝休みにどこの田の畔で、お茶を飲みながら聞きた

いと仰有れば、その時刻に其處へまゐります。

卯之助　そのうち聞かせて頂くかも知れませんが、當分家の中の用事が手離せませんから、釣魚も暫く止めなければなりますまい。……いろ〳〵お話をして頂いたのにお禮もしないでお氣の毒ですな。……ぢや、此處で（會釋して別れようとする）

ある男（殘惜しさうに）御法の道理をあなたのやうに熱心に聽いて下さるのが、わたくしどもに取つては、金銀にも替へがたい謝禮になりますのぢや。これでお別れするのはお名殘惜しいが、それでは、さつき差上げた寫し物を、明日とも云はず、一時も早うよく讀んで下され。それは、年若な女子の心の手本にするためのお話の一つぢやが、あなたの心に天地御作者の明りの差す手蔓にもなりませうぞ。

卯之助（懷中へ手を入れて）いや、あれはお返しゝませう。何の氣なしに頂いたのだが、大切な書き物を疎末にしちやいけないから、お返しゝます。

嵩の薄い書き物を取出して、相手に渡さうとしたが、ある男は兩手を垂れたまゝで受取らない。何かを念じてゐるやうに目を凝して卯之助を見詰める。卯之助は見られるのを氣味惡く感じながら、默して立つてゐる。おしほ小祠の後からそつと顏を出して二人の樣子を見る。

卯之助　ぢや、これでお別れします。お大事に。

さう云つて、ある男に背を向けて行きかけたが、ふと、おしほを見つけたので驚いて足を留める。

ある男は天を仰いで、口の中で何か云つてゐるやうに、口をモグ〳〵させてゐたが、間もなく、今來た方の道へ向つく出て行く。

おしほ小祠の後から、怪訝な顔して姿を現はす。

おしほ　あの人は何をする人で御座いますの？

卯之助（ある男の行つた方を見てから、おしほの方へ目を向ける。詰責するやうな口調で）お前はどうしてそんな所にゐたのぢや。

おしほ　肩が疲れたから一休みして居りました。あなたよりも一足早うお兄様が此處をお通りになりました。上方からお歸りになつて。

卯之助　なに、兄が歸つて來た？

おしほ　それよりも、今の人はどうした人で御座いますの。わたし、一度もお見掛けしたことのない變な方だと思ひました。

卯之助　ちつとも變なことないぢやないか。あたり前に髮を結つて、あたり前の衣服を着て。……川の土手で會つて道連れになつたゞけじや。……それよりもお前は兄貴に何か話をしたのかい。

おしほ　お兄様はあなたの事を心配していらつしやいました。

卯之助　おれの身體が弱いといふことか。

おしほ　いゝえ、（無關心な返事をして、相手の懐に挿んだ紙片に目をつけながら）さつきの方からお貰ひになつた御本は何で御座いますの。若い女子の心のお手本になるお話が書いてあると仰有つたが、どんな事が書いてあるのでせう。わたくし讀んで見たうなりました。

卯之助（當惑して）こんな者はお前の見るものぢやないよ。

おしほ　女子の心のお手本になるといふお話を、何故わたしが讀んぢやいけないんでせう。貧乏な百姓の娘は身の敎へになる本なんぞ讀まないでも、牛か馬かのやうに野良へ出て働いてさへ居ればいゝと、あなたは思つていらつしやるんでせうか。

卯之助　こんな者は詰らないよ。それよりも、お前には、もつと讀易くつて身の爲めになる本を貸してやらう。

おしほ　そんな言抜けを仰有つて、あなたはまだその御本をお讀みにならないのじや御座いませんか。今此處で讀んで聞かせて下さいまし。

おしほ、卯之助の懷へ手をやつて、書き物を取出さうとする。卯之助拒んで突離す。おしほころぶ。

おしほ　(涙ぐんだ聲を潛めて)それはバテレンの魔法を書いた御本じや御座いませんの?。上べはあたり前の人と違はないでも、あの方の目はたゞの人の目とは思はれません。どういふ譯のあるお話か、わたしにはよう解りませんけれど、あなたも感心して聽いていらつしやつたぢや御座いませんか。

卯之助　(あたりを見廻して)魔法なんかの事が書いてあるものか。疑ふのなら讀んで聞かせてもいゝよ。しかし、お前も邪推を廻しておれの迷惑になるやうなことを云つちやいけないじやないか。

おしほ　(起上つて)あなたの御迷惑になることを世間へ言觸す女だと、わたしを思つてゐらつしやるの?わたしだからこそよかつたけれど、外の人が聞いてゐたたら、あなたのお身の上に恐ろしい疑ひが掛るかも知れないぢやありませんか。

卯之助　ハヽヽヽ。お前もなか〳〵苦勞性だな。おれはどんな魔法にもかゝる人間じやないから安心しろ。いや、おしほの魔法だけは別じやが。……おれの目には、呂宋から渡つて來たバテレンよりもお前の方が恐ろしいよ。ハヽヽヽ。

おしほ　そんなことを仰有つて（物思はしげに）わたしは若旦那様のお心の中がよう分りません。身の程も忘れて、思つてはならない人を思つたことをおしほは後悔することもあるので御座います。

卯之助　詰らないことを云ふものぢやないよ。おれは大名のお姫様とお前とを取替えつこする氣にもなれはしないのじや。家柄だの身分の相違など、世間で云ふやうな事はおれには何でもないことだと、よう云つて聞かせて居るぢやないか。もう少し辛抱してゐて呉れ。兄貴が戻つて來たのなら丁度いゝ。折を見てお前の事を兄貴によう話して見よう。

おしほ　さつき、この幸の神を拝んで居るところをお兄様に見つけられて、何を祈つとるのだと揶揄はれました。……わたしは、親兄弟にも迂濶に話せることぢやないし、神様にお頼みする外はないと思つて、此處を通るたんびに、幸の神様に、自分の心の中で思うとることを打開けて居ります。どうぞ卯之助様がお心變りをなさらないやうに神様のお力を借して下されと、さつきも手を合せて拝みながら、口の内で云うて居りました。

卯之助（笑ひながら）さう云うて拝んでるところへ兄貴が遠方から戻つて來たのだから、お前の願ひを神様がお聞屆けになつたのかも知れないな。

おしほ　それはどうで御座いますやら。それよりも、さつきお連れの方の仰有つたことが、わたしには氣掛かりになりますのぢや。お話の譯はよう分りませんし、何だか怖いやうにも思はれましたけれど、わたしに力を添へて下さるものになら、何にでも縋りつきたいと思はれてなりませんの。

卯之助（あたりを見廻して）向うから誰れか來るらしいぜ。今日はこれでお別れとしようか。おれは一歩さきへ歸らう。

おしほ　その御本はわたしに見せて下さいませんの？

卯之助　お前はこれを魔法の本だと云つて居りながら、讀んで見たいのか。これに觸ると手が爛れるかも知れないぜ。

おしほ（空想に驅られてゐるやうに）若い女子の心のお手本になる話。……わたしのやうな卑しい者もさういふお手本になつたら、あなたにいつでも愛想を盡されない女子になるかも知れない。

卯之助躊はずにサツサと出て行く。おしほはなほ空想に驅られてゐたが、やがて思直して、畚を肩に背負つて行きかけると、誰れかに呼掛けられたやうな氣がして、足を留めて、あたりを見廻はす。

「たしかにあたしの名が聞えたのに」と、獨言を云つて、耳を澄ましたが、其處にゐるのを氣味惡く感じたやうにスタ〳〵と出て行く。

（二）

その後數日を經過したある夜のこと。

土藏の二階。卯之助の居室。板の間に本箱や文庫が雜然と置かれてある。疊二疊ほど敷かれて、そこに支那風の机が置かれてゐる。

庄三郎と卯之助とは、行燈の光に淡く顏を照らされながら、對座してゐる。

暫く自分の感じに耽つて默つてゐたあとで、庄三郎が口を開く。

庄三郎　いや、危いところぢやつた。おれもおぬしがキリシタンの嫌疑を受けて拷問にかけられとる夢を見たりしたものぢや。もうその外には疑ひを受けるやうな書類も繪像も持つて居らんのだらうな。

卯之助　うん、何もない。惜しいことだが皆んな、今年の正月の騒ぎの時に燒いて灰にしてしまふた。なに、萬が一、役人どもに見つけられたにしても、キリシタン御信心はいたしませんと云うて、デウスの繪像でも踏んで〳〵踏躙つて、南無阿彌陀佛を喉の破れるまでも唱えたら、疑ひが晴れるのは極つとるのだから、先走りをして、あの面白い奇妙な繪像や、不思議な文字の並んどる異國の書物を灰にするには及ばなんだのぢやが、おれは臆病なのぢや、

庄三郎　大膽不敵も事による。おぬしもそんな詰らない好奇心は止しにするがいゝ。世の中には讀む者見る者が多いのに、御禁制の書籍を集めるには及ぶまい

卯之助　ところが、二三日前に偶然こんなものが手に入つた。（寫し丼をした數葉の綴本を机の上から取つて兄に見せて）これには異國のローマで、昔々、さる高貴な女子が、キリシタン信心のために、あらん限りの荒拷問を受けても屈服せいで、蟲の息になつても經文を唱へたといふ話が書いてある。おれはこれを讀んで落涙をした。あの本箱に仕舞つてあるどの書物でも、この薄つぺらな寫し書ほどにおれを感動させたものはないのぢや。これに比べると、論語や孟子は砂や石ころを詰込んだやうな書物ぢや。

庄三郎（怖々手に取つて、行燈の方へ寄つて）女子の話を讀んで落涙する奴があるか

卯之助　女子の話ぢやから尚更おれは感動したのかも知れない。おれにはその女子の美しい顏が、花をあざむき月をねたむと云つた姿が、目の前に見えるやうに思はれるのぢや。おれが燒棄てたサンタマリアの繪姿がその女子の色身となつて夜中の寢醒めに見えるのぢや。………まあ、かういふところを讀んで見い。（兄の持つてゐる綴本のある所を指差しゝて）「ゼススに對し申しては、このはかなき露の命を一たび捨つべき事は物の數にもあらず。叶ふに於ては、千度百度も捨つることこそあらまほしけれ。かへす〳〵恐れ玉はされ。如何なる苛責打擲の中にても、ゼスス離れ玉ふ

べからず。辛勞のやみは過ぎて、やがて悅びの明ぼのとなるべし」……一介の女性が骨を碎かれ血に染められても、辛勞のやみが過ぎて、悅びの明ぼのゝ來るのを信じて樂しんで居たのぢや。

庄三郎　それは安信ぢや。愚夫愚婦の安信ぢや。（その續きを口の內で讀み續ける）

卯之助　おれも安信ぢやと思ふ。しかし、兄貴。おぬしは上方で學問もしたであらうし、いろ／＼な名高い人にも會つたであらうが、悅びの明ぼのをおぬしに說明して吳れたものが一人でもあるか。あるまい。聖賢の本を讀んでも無駄なことぢやと、おれは思ふよ。

庄三郎「嗚呼強き御勘忍かな。さても恐ろしき責めかな。御せ中は打擲にて破れ、御骨も顯はれ玉ふ程なり。御胸下り火炎に燒け玉ひ、すみになり玉ふ程なり。さても驚くべき强さかな。眞に天魔鬼人までも肝をけし、たましひを失ふ程なり。是程の大い苦痛を受け玉へども、少しも弱り玉はず……」（書中の記事に心を忘れたように、聲を出して讀んだが、ふと氣ついて恐怖に打たれて、綴本を下へ置て）こんな者は一刻も早う燒いてしまへ。おぬしは大切にした繪像までも灰にしたと云ふぢやないか。

卯之助　幾度も讀んだあとだ。どうにでもするがいゝ。

庄三郎、綴本に行燈の火をつけて、燃えだしたのを板の間に投げ出す。

卯之助　千何百年か前にローマの國で火あぶりにあつた、マルチルの美しい姫が、日本の豐後で、も一度火あぶりになつたやうなものぢや。ハヽヽヽ（淋しく笑ふ）

庄三郎　大きな聲ぢや云はれないが、おれもお上のキリシタン虐めはあんまりひど過ぎると思うて居る。彥兵衛のやうな七十にも近いお爺さんを、火あぶりだの磔刑だのと、そんなむごい目に會はさないでもいゝぢやないか。……しか

し、おれ達は掛合ひさへつけなければ、お上のお考へに難癖をつけるに及ぶまいて。おぬしも軽はずみな口を利いて、詰らない疑ひを受けないやうにして呉れ。近年のやうに宗門のお詮議が厳しうなつたら、どこにどんな風俗をした公議の隠密が居るか知れないんだから。……兩親はまだ丈夫なんだし、おぬしが親の側に居つてくれりや、おれは安心して、また京へ上つて二三年修業して來ようと思ふ。二三年が五年十年になつてもいゝやうに、今度は父上に譯をよう話して、おぬしに家督を繼がせて、おれは脱籍して氣儘に暮したいと思うとる。おれのやうな鈍物は聖賢の學問をしても、大した發明も出來やせんが、まあ、やりかけたことはやつて見よう。おぬしも同意して呉れるだらうな。

卯之助　望んで居ることなら何でもやるがいゝ。おれが同意をするもせんもあつたものぢやない。しかし、學問をして名前を賣つて、何處かの大名に抱へられたいと今も思ふとるのかい。どうせ林家の向うを張つて、天下のえらい學者になれりやせんぜ。

庄三郎（不快を現はして）馬鹿にするなよ。四五年別れてゐた間に、おぬしは人間が變つた。

卯之助　馬鹿にするんぢやない。惡う思はんやうにして呉れ。おれもたび〱、家を脱走して京大阪か、江戸までも行つて見たいと思ふたことがあるんぢや。

庄三郎　おぬしが？。何のために？。おれの眞似がしたうなつたのか。

卯之助　うんにや、違ふ。おれは聖賢の學問して、學問を賣つて大名から扶持を貰はうとは思はない。道春點の論語一冊讀んだゞけで、おれは聖賢の學問がいやになつた。家業をぢつと守つて上べを大人しうして、公方様が勝手に極めた世の掟てに逆らはないで、代官様の前で頭を下げとりや、一生白い飯を食べて生きて居られるおれが、何を苦しん

で砂を噛むやうな聖賢の學問を極に、大名に仕へて窮屈な思ひをする氣になるものか。

庄三郎　（呆れて）おぬしの言葉は亂心者の言草ぢや。聖賢の學問を習ふのは、扶持を取るためぢやない、人間の道を知るためぢや。そのくらゐなことは、おぬしには分つて居つた筈ぢやが。……

卯之助　おれの壽命はあと三十年か四十年ぢや。おれの通り道がどつちへ曲つてゐてもいゝよ。………しかし、おれは兄貴の考へに楯付きやしないから、おぬしはおぬしの好きな學問を、京大阪はおろか、唐(から)へでも渡つてやつて來るがいゝ。

庄三郎　おれの心配は杞憂ぢやなかつた。おぬしは何時の間にか御禁制の宗門にかぶれて居るんぢやな。（憂はしげに云ふ）

卯之助　さうかも知れない（淋しい聲で云ふ）

おれは、燒棄てた書類を讀んだ時や、時々噂話に聞かされたバテレンの行狀や說法を、獨りで考出した時には、論語なんかにはどの隅を搜しても見當らないものが出て來ておれの胸を打つのぢや。本當のおれの生命(いのち)のことが考へられてならないのぢや。三十年や五十年、飯を食つてお上に年貢を收めてモソクサと生きてゐるのは「あだなる浮世の夢」ぢやと思はれるのぢや。本當のアニマがあるものなら、そのアニマの正體を知りたいのぢや。………こんなことも一人で考へて居るばかりで、口へ出して云ふのは今夜がはじめてゞ、兄貴にこそ遠慮なく打明けられるのだが、おれがこんなことを云ふのを誤解して心配しなくつてもいゝぜ。………おれは道春點の論語の前に匐ひつくばれないやうに、舶來のデウスを拜めないのぢや。磔刑(はりつけ)臺の上から夕燒の赤い空を見て、その空の向うにはハライソがあると云うて、喜んで死んだキリシタンの氣持にはおれはなれないのぢや。だから、親兄弟がおれのために巻添へを喰つて辛

い目に會ふ氣遣ひは決してないよ。おぬしは安心して、また京へでも、江戸へでも行つて、好きな聖賢の學問をやるがいゝ。

庄三郎　さうか。……おぬしが物好きに心の中で何を考へてゐようと勝手だが、秘密で怪しい奴に會つて居るのぢやあるまいな。おぬしが日當りのいゝ廣々とした母屋から離れて、こんな薄つ暗い土藏に籠つてるのも、おれには變に思はれるが、今燒棄てたあの寫し物が偶然おぬしの手に入つたといふのも、おれの腑に落ちない。まさか道傍に落ちてゐたのを拾つた譯ぢやあるまい。

卯之助。ハヽヽ。すつかり白狀しようか。

　さう云つたが、少し躊躇する。庄三郎は不安を現はして目を据ゑて弟の顏を見つ詰める。

卯之助　おれにも秘密がある。御禁制の神佛を秘密で拜むのは、有難味が格別なのであらうが、世間や身内に秘密で好きな女子に會ふのも面白いものぢや。どうせおぬしには打明けようと思うてゐた。おれが獨りで靜かな所で學問をしたいと、兩親に我儘を云うて此處で寢起きをするのは、時々好きな女子に會ふためなんぢや。

庄三郎（呆れながらも稍々安心して）おぬしが邪宗信心をすると云ふよりも、もつと意外ぢや。それでその女子は誰れぢや。

卯之助　作右工門の娘ぢや。

庄三郎　おしほか。……それで分つた。あの子は先月幸の神を拜んでゐたが、さういふ譯があつたのか。……あの子は不思議に容色がいゝが、おぬしはおしほと緣組みが出來るとは思うてはゐまいな。一時の慰みものにするつもりなんだらうな。

卯之助　うんにや。おれはおしほと夫婦にならうと思ふた。

庄三郎　それで両親や親類が承知すると思うて居るのか。馬鹿な。……米良ではおたつかおゆきか、二人の従妹のどちらでも娶つて呉れと云うて居るのを、おぬしは頑なに斷つとると聞いたが、さういふ秘密があつたのか。両親はおぬしが二十五にもなつてまだ獨りで居るのを苦に病んで居られるが、おしほのことを聞いたらどんなに吃驚なさることか。

卯之助　両親が、家名や世間體を氣にして、作右エ門に金でもやつて二人の仲を裂かうとしたら、二人は手に手を執つて驅落ちをするか、奥澤の森で首をくゝるくらゐな決心はしとつたのぢやが。……しかし、もう濟んだことぢや。おしほはもういやになつたよ。両親がちつとも氣がつかない間に、おれの戀ひはいろはからゑひもせずまで濟んだ譯ぢや。

庄三郎　どうせ家へ入れることの出來ないものを、早う思切つたのはいゝが、それではおしほが承知しまい。

卯之助　だからおれも當惑しとつた。兄貴が戻つて來てくれたのはおれには助け船ぢや。兄貴がおしほに會うて、何とかうまい言譯をして、おれを思切らせるようにして呉れ。おれはどうあつてもおしほがいやになつたのぢや。

庄三郎　おしほも可愛相に。……容色はよし、氣立てもよさゝうだから、もつと身分がよけりや、家の跡取りの嫁にしてもいゝんぢやが。

卯之助　可愛相にも思はれるが、おれはこの頃おしほが怖うなつたのぢや。

庄三郎　あんな柔しさうな女子が、なぜ怖い？

卯之助　いや。怖い。女子といふものは見掛けによらない怖いものぢやと、この頃おしほに會ふたびにおれは思はれ

だした。……だから兄貴に頼む。近いうちにおしほに會うて何とかうまい手段で思切らせるやうにしてくれ。

庄三郎　面倒な役目だが、おれが引受けなきやならないな。……（ふと、聞耳立てゝ）おれを呼びに來たな（と呟いて階子段の方へ行つて階下をのぞき）おれに用事があるのか。……今直ぐ行かう（と云つて、元の座へ戻つて）ぢや、今の件は改めて相談しよう。もう夜が更けたのに、父上はおれに何の用があるのであらう？

庄三郎出て行く。卯之助はさつきから興奮した話に疲れたやうな様子で、座を立つて、開放されてゐる窓の外を覗く。やがて、何物かを見つけて、困つた顔して元の座に戻つたが、また立上つて階子段の側へ行つて、階下の方へ聞耳を立てる。

「おしほか。……入つて來てもいゝよ」と、聲を潜めて云つて、元の座に戻る。

ある男入つて來る。この前とは違つて、黑衣を着け、頸に神符を掛け、コンタツといふ念珠を持ち、態度が神々しい。

卯之助、驚愕と恐怖の感に打たれる。

ある男　先日は失禮しました。あのまゝでお別れするのはいかにも殘念ぢやで、暗い夜道を踏んで、眞萱からお訪ねすることにしました。

卯之助　わたしのことがどうして分つたのです？。

ある男（微笑んで）それは天地の御作者のお導きで自から分り申した。暗い夜道も天上の光が導いて下さつたゝめに、足を踏み迷ひもしません。

卯之助　それは遠路御苦勞で御座いましたが、わたくしに何の御用がおありなさる？先日の話の續きを聽かせようと思

つていらつしやるのですが。

ある男、庄三郎の坐つてゐたところに坐り、燈火の光で卯之助を正視しながら、口の内で何か祈つてゐる。卯之助は相手の目を避けるやうに伏目になる。

ある男　慈悲廣大な天上の御主は、かねがねあなたの上にお目を留められて居られまする。先日大野川の土手で、わたくしがお目にかゝつたのも、我々は偶然のことゝして、輕卒に見流しさうであつたが、決して偶然ではない。最上の御智恵を持ちたまふデウスのおはからひでありますぞ。あの時差上げたアナスタジヤ姫の物語はお讀みなすつたでせうな。

卯之助　よく拜見しました。感歎して落涙いたしました。

ある男　なる程。(喜んだやうに)姫の御作業に感歎なされたか。天上の御主が、豐後一國のうちでも、あなたの上に格別にお目を留められたほどある。有難いことぢや。千人萬人のゼンチョのうちに、特別にあなたをお撰びになつて、天上のクロリヤをお見せになつた。豐後一國の領主にならせられるよりも千倍萬倍の御恩惠ぢや。

ある男、感激して天を拜しようとする。伏目になつてゐた卯之助、ふと顏を持上げて焦燥の思ひを現はす。

卯之助　それで、あなたはわたくしにどうしろと仰有るんです？(詰るやうに訊く)

ある男　わたくしは、あなたのやうな御聰明な方にかうせいと命令する力は有つてゐないのです。天上のお主のお使ひとして今夜おたづねしました。(右手を上げ、人指を立てて)今デウスは慈悲の目をもつて天上からあなたを見てゐらせられる。

おしほ、階子段から顏を出して、ある男の樣子を見たが、驚き慌てゝ顏を引込める。

卯之助　お說法はもう充分です。早速お引取り下さい。……最上のお智惠の持主も卯之助については見込ちがひをなすつたと、歸つてあなたの神樣へ御報告なさい。(激しく云ふ)

ある男、悲痛な感じを現はす。

卯之助　しかし、あなたがいつまで眞萱に滯在して、嚴しい掟を潜つて宗門を擯められようとも、わたくしの口からは決して人に洩らしやしません。あなたが今夜此處へお出でになつたことは二人だけの間の秘密にして葬りませう。

ある男　二人だけの秘密では濟みますまい。天上から慈悲の御目を曇らせて見てゐられる。あなたにはそれが見えないのぢやな(薄氣味の惡い笑ひを洩らす)……わたくしは、この世の掟を毛頭恐れては居らない。あなたが人に洩らさうとも訴人しようとも、それはあなたの心のまゝぢや(座を立たうとする)

卯之助　まあ、お待ちない。あなたの御姓名は何と云ひます?。御生國は何處です?

ある男　それを訊ねて何になさる?わたくしは決して隱さうとは思はないが。

卯之助　わたくしの生涯のうちの大きな事件の一つだから、覺え書につけて置きたいんです。

ある男　この世の人の覺え書に姓名を殘すのは無用なことぢやが、たつて望まれるのなら云つて置かう。わたくしの日本名は天野半之進ぢや。父も祖父も島原の城に籠つて戰死してしまつた。

な。

卯之助　ぢや敗軍者の御子孫ですか。(ふと興味を覺えたらしく)それでは幼い時からあなたの生涯は悲慘だつたのですな。

ある男　悲慘と思ひなさるか。終りなき生命を玉はつてゐる者を悲慘と思ひなさるか。(苦々しさうに云つて)原の城の敗軍を敗軍と思うて居るのは、物の上べしかよう見ない軍記作者や、蜉蝣に等しいゼンチョどもの云ふことぢや。惡

人どものために磔木にかゝらせ玉ふたゼスキリシトは、「我すでに世に勝てり」と仰せられた。原の城の敗軍者も「すでに世に勝てり」と互ひに歌うて、一群のアンジョに迎へられて、勇ましうハライソの門へ入つたことが、あなた達にはお分りにならんのぢやな。勝利者のつもりの寄手の軍勢の凱歌は、天の耳には亡者どもの泣聲も同様ぢや。……そればかりぢやない。徳川家光はじめ板倉重昌も松平信綱も、インヘルノの薪となつて、焰の消える終りもなく燃えて居るのが、あなたの目には見えないのぢやな。(厳に云つて)ゼスキリシトがお召しになる。わたくしはこの居室にお暇しなければならない。

ある男、十字を切つて、影の如く出て行く。

卯之助茫然として見送つたが、やがて、魔術に打たれたやうに、くら／＼として倒れる。

おしほは上つて來て、驚いて、介抱する。「若旦那様どうなさいました。氣をしつかりお持ちなされ」と、呼掛ける。

卯之助起上つたが、變つた所は見えない。

おしほ　もうおよろしいんですか。どうなさいましたの？

卯之助　お前は今來たのか。さつきから來て居つたのか。

おしほ　少し前にまゐりまして、階子段の側に隠れて、あの恐ろしい方がどうなさるかと、そつと見て居りました。

卯之助（顔を曇らせて）お前は隠密か隠し目付見たいに、おれの心を捜らうとしてゐるんだな。先日は道祖神の小祠の後でおれとあの男との立話を立聞きして居つたし、今夜は今夜で、おれの方で約束もしないのに突然にやつて來て、立聞きをした。

おしほ　若旦那樣は邪慳な事を仰有います。……今夜は來いと呼んでも下さらないのに、押つけまがしくお目にかゝりに來たのは、惡う御座いましたけれど、何であの方とあなたとのお話を立聞きしたいために來るものですか。どなたが來てゐらつしやるか、ちつとも存じませんのでした。

卯之助　聞いたものは今更咎め立てしたつて爲方がないが、あれは何でもないのだよ。

おしほ　でも、何だか恐ろし相な方ぢや御座いませんか。あなたはあの方の魔法に當てられてお倒れになつたのぢや御座いませんの？

卯之助　お前はさう思ふのか。さう思ひたきや思ふがいゝ。

おしほ　わたくし、今夜は先日の御本の話を聞かせて頂きたいと思うてまゐりました。若い女子のお手本になることを承つて、自分の心もそのやうになりたいと思ひますの。

卯之助　あれは大昔の南蠻のお大名の美しいお姫樣の話ぢや。

おしほ　さういふ貴い方の眞似は、水呑百姓の娘には出來ないと仰有るので御座いますか。

卯之助　さういふ譯ぢやないが。……おれは今夜は氣持が惡いのだから、氣の毒だが歸つて呉れないか。南蠻のお姫樣のお話は今度會うた時にでも話すことにしよう。

おしほ　歸れと仰有れば歸りますわ。(拗ねたやうに見せて)でも、あの方がまだそこらにゐさうに思はれて、暗い夜道が怖う御座いますわ。

卯之助　おれは今夜は誰れとでも口を利きたうない。後生だから、おれを一人で此庭に放つて置いてくれ。

おしほ　それでは、わたくしお暇いたしますわ。(不承々々に立ちかけて)……あの、お兄樣にわたくしのことをお話し

なすつたのでせうか。

卯之助　兄貴はお前に會ひたいと云うてゐた。……今夜はもう何も訊かないでくれ（煩ささうに云ふ）――

おしほしよ〳〵と出て行く。

（三）

深夜の森の中。月光淡く樹の間を照らす。犬が一匹何かを嗅ぎつけたやうに樹間をうろついて、やがて出て行く。

卯之助が先に立ち、庄三郎を連れて入つて來る。

庄三郎　何年か來ない間に此處も木がよう茂つたやうぢやな。子供の時分には、この邊に狐が鳴くと云ふので怖がつてゐたものぢや。今は今でそんな秘密が行はれてゐるのなら、この森はよつぽど不吉な場所なんぢやな。木を切倒して開懇して畠にでもするといゝ。

卯之助　そんな面倒なことを言出すものはないな。この近在の草つ原でも、開懇したら米の作れるところはいくらでもあるのぢやが、そんな事を企らむものは一人もないよ。代官所へ願ひ出るのが第一煩いんだからな。いゝ事惡い事、どちらにしても役人どもには關合ひをつけないのがいゝ。觸らぬ神に祟りなしぢや。

二人は樹間に腰をおろす。

庄三郎　さう云へば、眞夜中にこんな所で、ヒソ〳〵話をして居るところを、役人どもに見つけられたら、謀叛の相談でもしとるやうに思はれるだらう。おぬしは物好きぢや。おれを引張り出してこんなところへ連れて來て。

卯之助　いや、この森の秘密は誰れにもまだ見破られないのぢや。……おれは、狐が人間を誑かすとは思はないし、妖

怪變化がこの世界に存在しとるとは信じないから、夜中でも、退屈したり、眠れなんだりした時分には、獨りで此處へ遊びに來ることがあるのぢや。此處に寢ころんで、樹の間から空の星でも見て居ると、心が澄んで、世界に自分一人が生きて居るやうに思はれることもあるのぢや。それで、昨夕も、村の者の寢てしまつた時分に、家を出て此處へやつて來たのぢやが。おれは驚いた。繪圖で見て覺えてゐる妖怪が　此處を歩いてゐても、からは驚かなんだであらう。……おしほが例の變な男の前に跪いてゐるぢやないか。その男は指で空を指して何か云うて居つた。おれは總身に水をぶつかけられたやうに感じて、後も振向かないで逃げ出したのぢや。

庄三郎　おぬしに奇妙な本を呉れたといふ男か。

卯之助　その男ぢや。まだこの界隈をうろついて、自分の宗門へ人を引張込まうとして居るらしい。しかし、おしほが、狙はれて居るのは意外ぢや。

庄三郎　昨日話した通り、あの子はおぬしとの關係は、これまでとの緣と諦めたと、おれに向つて素直に云うて居つたぜ。おれの拵らえ言を眞に受けて、おぬしを思切ると奇麗に云切つたので、おれの方で却つて不憫になつて涙が出さうになつたが、あの子も腹では泣いて居つたのぢや。それでバテレンの說法でも聞いて、心の中の悲みを晴さうとするのだらうが、あんな素直な可愛らしい女子がバテレンの敵宗門に洟はれて、いつか憂目を見るやうになつちや可愛相ぢやなあ。

卯之助　なあに、おしほはおぬしの思うて居るほど素直な女子ぢやないよ。おれはあの子のためにひどい災難に會ひさうに思はれてならないんぢや。　あいつ、おれが嫌つたと知つたら、おれが邪宗門の仲間に始終會つてゐるやうに肩觸らして、斷念もしかねないと、氣遣つてゐたのぢやが、あいつが不思議なハメで宗門に凝りだしたのなら、なほ

更、おれの身に災難がかゝつて來さうに思はれる。例の變な男は先日の晩おれを打負かして、勝利者らしい面をして行きやがつた。あの男がおしほの肩を持ちだしたらおれはたまらない。二人の人間に呪はれちや、おれは無事でゐられさうでないよ。

庄三郎　おぬしは此間の晩の廣言に似合はない意氣地なしになつたな。何もおぬしがキリスタンに改宗して、連名帳に血判をも捺した譯ぢやあるまい。キリシタンの證據になる紙切一つも持つてゐるのぢやあるまいし。……

卯之助　それはさうだが、おしほが邪宗の嫌疑を受けて糺問されると、おれの名が出る。おしほがおれを抱込まうとしたら、どんな口でも利けるんだ。たとへ、言譯が立つにしても、あの女子と一しよに代官所の地べたへ土下座させられちや、おれもみじめぢやや。

庄三郎（恐怖を現はし）だから、おれが云はんこつちやない。假りに嫌疑を受けたら、おぬし一人の災難で濟むことぢやないよ。何にも御存知ない兩親をはじめ、一家一族も卷添へを喰ふぢやないか。

卯之助　例の變な男が、今におぬしの上に天罰が落ちるぞと云はぬばかりの目付をして行きやがつたが、あの男がおしほを手馴つけたのは、おれの頭に天罰の落ちる前觸れ見たいなものぢや。（思詰めたやうに）おれは一刻も早うおしほを、あの男の手から取戾さにやならない。おれは昨夕からそのことばかり考へて、一睡も出來ないんだよ。

庄三郎　取戾すというてどうするのだ。一たん絕緣の言渡しをして置きながら、も一度縒を戾さうと云ふのか。………（憤りを現はして）どちらにしても、おぬしはおれ達一家の上に災難の種を播いたのぢや。おれが旅にゐた間の心配は杞憂ぢやなかつた。夜の明けるのを待たないで、直ぐにも家へ歸つて兩親にお話しなければならない。

卯之助　まあ待つて呉れ。兩親に話しても驚かせるばかりで何の足しにもなりやしないぜ。……兄貴一人の知慧を借り

ようと思うて、わざ〳〵此處へ連れて來たのに、さう手輕に見棄てられちや困るよ。

庄三郎　おぬしはたとへ御詮議を受けても申開きが立ちさへすりやそれで濟むことぢや。一時の恥を忍めば濟むことぢや。おれを見い。血を分けた弟が天下御禁制の宗門に掛合つたと噂が立つたら、おれの立身の道は、一生涯塞がつてしまうのぢや。一度穢れたおれの名は生涯拭ふことが出來なくなるのぢや。

卯之助　それはおれにもよう分つて居る。無實にしても一度不淨な糺問を受けたものゝ兄弟を、どこの領主も大名も取立てゝ吳れるものか。島原落城以來ます〳〵厳しうなつた天下の御禁制には、上に立つ奴もみんなおぞ毛をふつて、領内にキリシタンの臭ひのするのも恐れて居るやうな時世ぢやないか。

庄三郎　それが分つてゐながら、おぬしは一人の兄を日陰者にしてしまふつもりか。

卯之助　それを氣遣つて居ればこそ、おぬしを今夜此處へ連れて來た?。いゝ知慧はあるまいか。都へ上つて學問をして來たおぬしの腹からいゝ知慧を絞り出せないものか。一生の浮沈の場合ぢや。

庄三郎　………(苦しみながら考へる)

卯之助　おしほの生命の根を絶つ外にどうにもしようがあるまいな。(獨言のやうに云ふ)

庄三郎　(訝りながら)何を云ふ?

卯之助　おしほをこの世から無いものにするのぢや。おれ達が三十年か四十年心安う生きるために、おしほを、一刻も早うキリスタンの好きなハライソとかへ送出すのぢや。おれはおぬしに賴んでおしほを此處へ呼出して貰ひたい。

庄三郎　おぬしは恐怖のために氣が狂うたか。何の罪科もない若い女子を………

卯之助　罪科もない者が、燒かれたり突かれたり蟲けら同樣に鏖殺しに會うてるのが今の時世ぢや。聖賢を氣取つて人

一人の生命を取るのに惡闘々々するには及ぶまい。……兄貴はさう思はないか。勝手に人間をつくつて苦しみを與へるデウスほど殘酷なものが、外にあらうか。あれほど可愛かつたおしほが、いやで〳〵たまらなくなつたのも、デウスが世にあるのならデウスの所爲ぢや。おれのせいぢやない（聲が高くなる）

庄三郎　大きな聲を出して、誰れかに聞かれたらどうする？

卯之助（ふと耳を傾けて、小聲で）おぬしは足音が聞えないか。落葉の音が幽かに聞える。……月があれだけ上つてゐると昨夕と同じ時刻ぢや。今夜にも呼出さうと思うてゐたおしほが、此處へ自分からやつて來たのは天の助けぢや。

卯之助、庄三郎を無理に引張つて奥へ入る。

さつきの犬が地べたを嗅ぎながら、ノロ〳〵と入つて來て、二人のゐたところに足を留める。そこへ、おしほが何かを搜すやうに、あたりに目を留めながら入つて來る。犬が彼女を見て吠立てる。おしほ犬を追ひながら行きかけると、ある男現はれる。おしほ平伏する。

ある男　わたくしは急いで來たのだが、あなたを待せて濟まなんだ。

おしほ　わたくしも今來たばかりなので御座います。宵からまんじりともせいで、お約束の時刻におくれないやうに、家を脱出てまゐりました。

ある男　わたくしも昨夕からあなたのことばかり氣に掛つてゐた。それで、今夜は無理を押して此處へ來ることは來たが、わたくしはもう眞萱には居られなくなつたのです。身の危いのを恐れはせんが、わたくしには、この世で天主の御教へを廣める大事な役目がまだ盡きて居らんので、明日にも外の土地へ行かねばならんのです。

おしほ（失望したらしく、）不思議な御縁で折角お目にかゝつたのに、もうお別れしなければならんので御座いませうか。

ある男　しかし、今夜お會ひ出來たのは人間業ではないんです。あなたもお喜びなさい。………それで昨夕お話したことはようお解りなすつたのであらうな。

おしほ　有難い御教へで御座います。いたらぬわたくしをもお仲間のはしに入れて頂ければ、何よりの仕合せだと思ひます。

ある男（微笑して）ゼンチョの家に育つたあなたが、僅か一二度御教を聞いたばかりで、その決心が出來たのは、天主の厚いお惠みぢや。わたくしがこの御近所を立退いても、與惣には、わたくしの仲間が二三人はあるのだから、その人達にあなたのことをよう話して置きませう。

おしほ（跪いて拜しながら）わたくしは、御威光の强い天主様に一命をも差上げます。あなた様の御恩も決して忘れはいたしませんが、お別れに、大事なお願ひをいたしたいので御座います。不悧と思うてお聞屆け下さいますでせうか。

ある男　何です？遠慮なく云うて見なされ。（柔しく）

おしほ　あなたの持つていらつしやる魔法の極意をお授かりいたしたいので御座います。

ある男　魔法とは何の事ぢや。

おしほ　あなた様のやうに、人間業では出來ないことが自由に出來ますやうに……

ある男　愚かなことを云ふ人ぢや。天主のお心のまゝにアニマも色身もまかせることを知らないで、人間の及ばぬ力を

得ようとするのは、悪魔天狗の心ぢや。・・わたくしは悪魔のお使ひぢやない。あなたは昨夕わたくしがあれほど詳しうお話したことが、まだお解りにならないのぢやな。

おしほ　それではお仲間に入つても、人間の力の及ばない力を授けて頂けないので御座いますか、

ある男　わたくしは魔法使ひぢやないよ。

おしほ　それでも、先日の夜、卯之助様をお睨みになると、あの方は氣絶なさいました。

ある男　氣絶したかせんか、わたくしの知らないことぢや。

おしほ　わたくしはお見違へしました。それが眞實なら、あなたは怖い方ではありませんわ。怖いのはお上の御法度で御座います。……わたくしは、これでお暇をいたします。

おしほは、詰らない顏して、碌に挨拶もしないで逃げるやうに出て行く。

ある男、落膽した様子で、ちがつた道を取つて出て行く。

庄三郎、卯之助、森の奥から、蜘蛛の巣など拂ひながら入つて來る。

卯之助　天主のお使ひも見じめなものぢや。おしほに肱鐵砲を喰はされたやうなものぢや。

庄三郎　これでおれも安心した。しかし、おしほは何のために魔法を覺えたがるのだらう。まさか、おぬしを呪殺さうとするのぢやあるまいな。

卯之助　どうか分らないよ。………さあ、歸らう。

氣拔けのしたやうな態度で出て行く、庄三郎隨いて行く。

（四）

（二）と同じ土藏の二階。夜。

おしほが晴やかな顔して上つて來たので、卯之助はどう取扱つたらいゝかと迷つてゐるところ。

おしほ　お學問のお邪魔になるので御座いませうか。

卯之助　おれは先日から身體の加減が惡うて、誰れにも會はない。外へも出ないのぢや。お前は今夜何か用事があるのか。

おしほ　先日の御本のお話を承りたいと思ひまして。

卯之助　南蠻のお姫樣の話を聞きたいと云ふのか。

おしほ　心のお手本になるお話だと仰有つたぢや御座いませんか。

卯之助　そのお姫樣は魔法使ひぢやないよ。

おしほ　（笑つて）若い女子の心のお手本になる方が、魔法使ひである譯は御座いませんわ。それはわたくしでもよう分つて居ります。

卯之助　さうか。そんなによう分つて居るのなら、強いて聞くには及ばんぢやないか。………魔法を覺えて男を呪はうとしたために、却つて自分が火焙りにされて死んだのぢや。

おしほ　あなたは御戯談を仰有る。心のお手本になる方が、そんな筈はないぢや御座いませんか。

卯之助　なあに、世の中には意外なこともあるものだよ。………お前はこの頃夜はよう眠れるのか。

おしほ　田植がはじまつて、一日働通しに忙しいんですもの。夜眠れないやうではたまりませんわ。
卯之助　それはいゝ。おれは恐ろしいことばかり目について、この頃眠つかれなくつて困るよ。
おしほ　どんな恐ろしいことを御覧なさるのでせう。先日の方がまだ此處へ訪ねていらつしやるのでせうか。
卯之助（相手の顔を訝しげに見て）あの男は此處へは來ないが。……まだ夜になるとこの邊をうろついてゐるのぢやないか知ら。
おしほ　さう云へば、見馴れない變な人が、毎晩この村をうろ〳〵して居ると、今日の晝休みに噂をしてゐた人が御座いました。今にお役人の目に留つたら、またお調べがはじまつて、今年の正月のやうな騒ぎが持上るかも知れないと、みんな心配して居りました。わたくし、噂を聞いたゞけでもぞつといたしますわ。
卯之助　お前を殺さうとしてゐるものもあるかも知れないからな。
おしほ　そんな恐ろしいことは仰有らないで下さいまし。わたくしは、村の人の誰からも恨みを受けた覺えはないし、悪う思はれたことさへないので御座いますから。
卯之助　お前はさう信じてゐるだけ仕合せだな。キリシタンの信者が、死んだ後でハライソへ行けると信じてゐるやうに仕合せぢや。……さう云へば、兄貴が先日お前に會つて何か云つたさうだが。
おしほ（少し萎れて）それはお兄様の仰有ることはよう承りました。お兄様の仰有ることは御無理では御座いませんから、何とも申上げませんでしたけれど、あなたのお心が昨日と今日で手の裏返すやうにお變りにならうとは思はれないので御座いますわ。
卯之助　おれもお前の外の女子を思うて居る譯ぢやなし、お前に別れりや一人ぼつちぢや。

おしほ　お兄様の御意見を承つたあとで、わたくしは父にも母にも、これまでのことを一切打開けました。
卯之助　打開けたら親爺は怒つたらうな。
おしほ　いゝえ。小言一つ云ふでもなし、おれにまかせて置けと申しました。
卯之助　ぢや、お前の親爺から直かに、おれの兩親か兄貴に話しがあるだらうが、老人どもはどうにでも勝手に話をつけるがいゝ。だけど、お前はおれに隱しちやいけないぜ。
おしほ　あなたに何も隱してゐることは御座いませんわ。
卯之助　いや、大事なことを隱してるんだらう。（責めるやうに訊く）
おしほ（當惑しながら）餘計な御心配をおさせ申して、お身體に障つちやいけないと思つて默つて居りましたけれど、この土藏のまはりに毎晩變な男が立つてゐると、噂をしてゐるものが御座いました。ほんとうでせうか。そのためにあなたが毎晩お眠りになれないのぢや御座いますまいか。
卯之助　おれの訊くのはそんなことぢやないよ。お前は昨夕も一昨夕も、奥澤の森の中で、あの男に會うて、魔法の傳授を頼んだらう。
おしほ　なぜ、そんなことを仰有るの？。わたし思ひもつかんことで御座いますわ。魔法だの、奥澤の森だの。わたし、考へても怖い。……あなたこそあの方の魔法にかゝつていらつしやるんぢやないでせうか。
卯之助　隱したつて駄目ぢや。兄貴を連れて來れば分ることぢや。兄弟一しよで見たことを、お前は魔法の所爲にして言拔けようと思ふのか。……魔法なんかあるもんぢやない。あの男が森の中で、人間は魔法など使へないと云うたのを、お前も聞いた筈ぢやないか。あの時、お前の心をよう見た。ふて〱しい奴ぢや。さあ云へ。眞實のことを。

卯之助は、ふと興奮して、おしほに摑みかゝらうとする。おしほ相手を拂退けて階下へ驅下りる。

卯之助も階下へ驅下りかけたが、ふと踏留まつて、元の座へ倒れるやうに戻つて、努めて心を落着けようとして、目をつぶる。

目を開けると、おしほと同じやうな顏した女が、古代ローマの裝ひをして窓の側に月光に照されてボンヤリ現はれる。卯之助啞然として見詰める。

その女「此御主に思ひ替へ奉るべき至寶、何國にあるべきや。此御前にては、金銀珠玉も灰ほこりの如し。只偏に此君ばかりを望み奉るなり。汝達のをどす所の苦しみをば物の數とも思はず、命を捨てんこと露ちりよりも更に思はず。命を數多持つに於ては千たび百たびも捨てんことこそ本意なれ。われを美麗なりとの御褒美も、皆以て御迷ひなり。花をあざむき月をねたむよそをひとても、あだなる夢の浮世ぞかし。御いとま玉はりて御望みの如くはからひたまへ」

その玲瓏たる聲に、卯之助聞惚れる。

卯之助　それはあの男から貰つた本の中にあつた言葉ぢや（獨言のやうに云ふ）あなたは何のためにこんな所へ來たのです？。

その女　あなたはわたしがあなたの目の前に現はれるのを望んでゐたではありませんか。

卯之助　あの話のなかにあつたアナスタジヤ姫のやうな美しい女子を、先日うち空想してゐたが、それが自分の目の前へ出て來ようとは思はなんだ。……愚夫愚婦の迷ひとばかり思つてゐたキリシタンの魔法はあることなのか。

その女　わたしは、千何百年以來、あなたのやうな人の前には、何度となく現はれてゐるのです。

卯之助　わざ〱わたしの前へ現はれて、わたしをどうしようと云ふんです。

その女　それはわたしの知つたことぢやありません。百年後にも、千年後にも、人間がこの世界に生きて動いてゐるかぎりは、わたしは、あちらの窓こちらの窓へ現はれなければなりません。わたしが受けた運命に泣いた人もあります。喜んだ人もあります。

卯之助（怖々側へ近づかうとして）アナスタヂヤ姫がおしほに似て居る。

不思議さうに云つて、そちらへ心が惹かれて行くとゝもに、その女の影は消える。そして、彼れが振向くと、庄三郎が立つてゐる。

卯之助　兄貴、今のを見たか。

庄三郎　今のと云つてなんだ。

卯之助　今までゐた不思議な女を。

庄三郎　おれは、今おしほに起されて飛んで來たのぢや。おぬしがバテレンの魔法にかゝつたと云つて、おしほは心配して居つた。そんな馬鹿なことがあるかとおれは云つて置いたが。

卯之助　おれは魔法に掛つてる。今も千年前の女子に出合ふた。……おれはキリシタンにでもなる。デウスでも拜む。明日の日代官所で拷問に合つてもいゝ。何よりも眞苗へ行つてあの男を直ぐに呼んで來て、このおれの身體を魔法から解いて呉れ。

庄三郎　おぬしは亂心したか。心を落着けろ（卯之助の手を執つて下に坐らせる）

卯之助　おれは亂心してやせんぞ。昨夕奥澤の森の中へおぬしと二人で行つたとおれは思つてゐたが、あれはおれが魔法にかゝつて、有りもせんことを獨りで思つてゐたのぢや。おぬしは昨夕夜中に森の中なんぞへ行つた覺えはないの

だらう。

庄三郎　おぬしはどうかして居る。おれはおぬしに誘はれて、薄氣味の悪い森の中へ入つて行つて、おしほが變な男に合つて、魔法の傳授をせがんでるのを見たぢやないか。

卯之助　おぬしも魔法にかゝつてるのぢやな。行きもしない森の中へ行つたと思つたりして。……聖賢の學問をした人間がバテレンの魔法にかゝつたのか。

庄三郎　馬鹿を云つちやいけない。

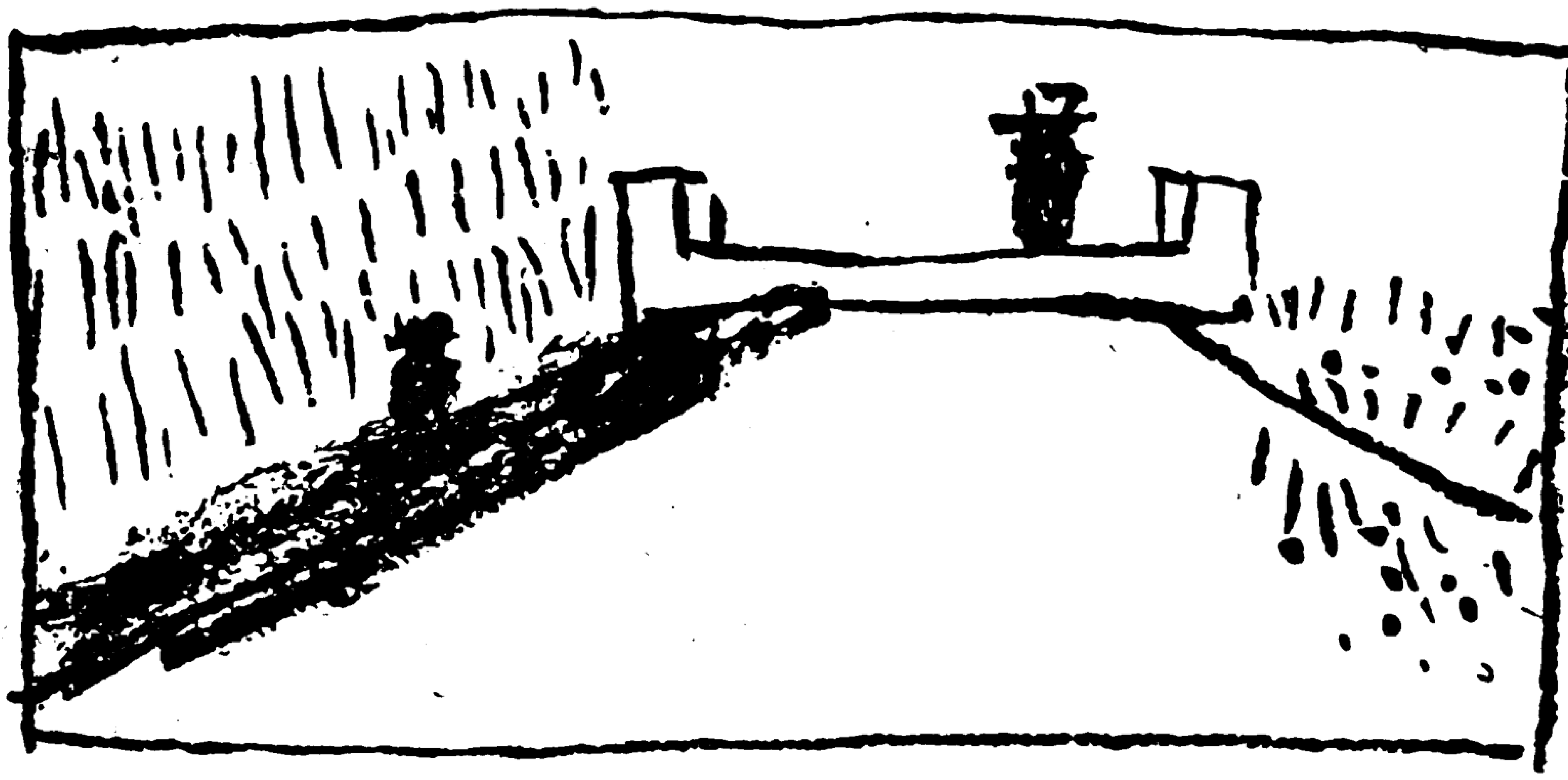
卯之助　おぬしこそ馬鹿ぢや。魔法にかゝつてゐながら、自分で氣がつかないのが。……眞實からあの男を呼んで來られなけきや、此處で手を合せてお頼みせい。デウスを拜め。ゼススキリシトを拜め。バテレンを拜め。マルチスになつた豆腐屋の彦兵衛を拜んで、魔法から觧かれるやうにお取做しをたのめ。おれは手を突いておぬしと一しよに拜む。

卯之助、空を見て手を突いて屈從の意を現はす。

庄三郎　みぢめなざまぢや。全體こんな土藏に獨りでゐるのがいけないのだ。

庄三郎歎息する。

をはり



戯曲

手（一幕）

前田河廣一郎

時

十九世紀の初め、ある秋の夕刻

處

アメリカ奴隷賣買船の船腹（航海中）

人

奴隷賣買人

米人。肥滿した、陰險な男。鍔廣の黒の中折、赤い胴着、長靴、葉卷。革帶から頭を擡げてゐる二挺のピストルを、赤毛の生いた手で愛撫する習慣がある。

船長

瘠せた皮肉な饒舌家。潔癖と懶怠といふ二つの矛盾性に苛まれる男。諾威人。

水夫頭

海のやうに氣まぐれな獨裁性をもつてゐる。黒みがかつた服裝。

　單純な船乘。米人。逞ましい筋骨。

大工

　駝脊の老人。飲酒癖がある諾威人。

若い番人

　黒白混血兒。憂鬱な、懷疑的な、虛榮心に富んだ弱い青年。他に比して顏色が蒼白である。

水夫（多數）ボーイ（少數）

　雜色白人。

黒い手の持主（多數）

　アフリカから買はれた黒奴の群、鐵鎖につながれてゐる。半裸體のまゝ、一組四人づつ、嚴重な錠の卸りた檻の中に幽閉されてゐる。

舞臺

大型帆船の下甲板を縱斷した斷面圖の一部である。

正面、３４５６７と五つに區分された檻が並んでゐる。その鐵柵の白ペンキは汚れてゐる。檻の前に古風な船ランプが二つ釣るされてある。大きい眞鍮の錠が各房に掛つてある。

左手、檻『３』を斜に切つて、上甲板への昇降口があり、眞鍮の欄干と階段の一部が急角度を見せてゐる。階段の上にも、釣ランプがともつてゐる。その前方は壁、規則書のやうなビラが貼つてある。壁に隣つて、上甲板の事務長室へ通ずる舷階があるが、階段は二つ位しか見えない。そこからも灯がぼんやり射す。

右手、檻『７』を斜に切つて、中二階めいた厨房へあがる階段がジグザグな線を描いてゐる。別に欄干はない。その階段と檻との間は、通路（パッセージ）になつてゐて、水夫部屋、大工部屋、倉庫などへ通ずる心。階段の前方は船の二重底へ降りる扉になつてゐて扉と階段との間の隅に小さな粗末な寝臺が一つ据ゑてあり、その上の壁には、種々な鐵鎖や網などが、折れ釘に掛けてある。厨房と思はれる場所からも、明るい光が流れ注ぐ。――これらはすべて、暴風雨が激しくなるにつれて、全體に動揺する。

船體に切られる波濤の音、鐵鎖の響、人間の理解力を絶した奇怪な叫喚と低聲の断續で幕があがると、舞臺中央に、若い番人と、彼を革の鞭で毆ぐらうとしてゐる殘忍な奴隷賣買人とが、發見される。若い番人は恐れを含むで、鞭の屆く限りから遁れ出ようとして、罷れたまま焦心つてゐる。

無數の黒い手が、正面五つの檻から、外へむかつて突出されてゐる。或る手は、柵の錠を捻ぢ切らうとする風にガチャガチャ云はしてゐる。

奴隷賣買人（鞭を威嚇的に扱いて）やい、半黒（ムラト）！ 手前、よくも俺の大事な品物を、この鞭で毆ぐりやがつたな。鞭は威嚇のためだけに備へて置くんだと、あれだけ口を酸つぱくして云つて聽せたのを、手前わざと知らん振をしてるんだな。さア今日こそは許して置けねえ。

船長、手に青い鸚鵡の籠を下げながら、昇降口の階段を降りて來て、少時、二人の光景を眺めてゐる

若い番人　旦那、もう致しません、許して下さい。もう決して致しませんから。

鞭正に彼の脊に加へられんとする刹那、船長大きい咳拂ひをする。

船長　エルサレムの王一疋の蚤を探がすかね、えーーと、ゼンキンさん、若いダビデが又何ぞ失策りをしでかしましたかい？

若い番人（船長にすがりついて）船長さま、御助け下さい。私は、もう氣が狂ひそうでならないのです。私の手は黑くありませんか？　どうぞ御覽下さい、黑くはなつてゐないでせうか？………手です、私の手が？

奴隷賣買人（船長へむかつて、多少體裁を繕ひ）この通りです。この白黑の猾犬奴が、どんな港の梅毒に犯されたものか、自分の手が黑くなつたと云つちやあわしの大事な黑ん坊の手を毆ぐりよるのですよ。御覽んなさい、「4」の檻の一人の奴は血塗れな手をしてゐますよ。あの一本々々が二十弗からするのですからな。

若い番人　旦那。船長さま、御願ひです、たつた一日でいいから、私をここから上甲板へ出して戴けませんか。私はとても恐ろしくて、夜も眠ることが出來ません。あれです（正面無數の黑い手を指す）、あれが、私の頭にいつぱい塡まつて、船の中が手だらけに見えるのです。――この鍵は御返しします、どうぞ、御情けですから一寸でも海を見さして下さい。お天道樣を拜まして下さい。（泣く。帶から一束の鍵を取出す）

奴隷賣買人　この半黑（ムラト）は全くの恩知らずでな、船長。こいつは、わしがアラバマの泥溝（どぶ）ん中から拾ひあげてやつたことをもう忘れてるんです。（鍵を持つた番人の手を足蹴にする）やい、痩せ犬、手前は吼えるときに吼えさへすりあ、それでいいんだ。默つて、あすこの隅で番をしとれ。

（鸚鵡の聲喧しく鳴き出す。胴着のポッケットから葉卷を取出して船長へ薦める）いかが？　まだ、午後のドッグ・ウオッチは濟みませんか？　昨晚は凄ごく敗かされましたね。

船長　私は骨牌どころぢやないのですよ。どうやらもう一と搖れやつて來そうなんです。（若い番人にむかひ）あ、御

前、これをどこぞ暗らい處へ釣るして置いてくれ。どうもこの貴婦人がヒステリーを起こすと、船がとかく陣風線（スコールライン）へ乘り入れたがるやうだ。不思議なもんですね、こんな敏感な鳥はありませんよ。

若い番人再び鍵束を帶へ納めて鸚鵡の籠を隅の寢台の上へ置いて自分も掛ける。

奴隸賣買人　鳥が天氣を云ひあてる、又ですか、貴方の御伽噺が？（ペッと唾を吐く）

船長（忌々しげに對手の唾を吐く態を見遣つて）御伽噺――にはちがひありませんな。一切が御伽噺でなくて何でせう？　貴方がかうやつて黑ん坊をメデュウサの眼球のやうな金貨で遠くから買つて來て、アメリカ内地へ賣り込む、その忌々しい船を私達一同が傭はれて港から港へ引張り廻はす、ときには巨萬の富をもつた貴方もどうともすることの出來ないやうなサイクローンがやつて來る――良い御伽噺ですな。だが、ゼンキンさん、この鳥を馬鹿になすつちや不良ませんぜ、神樣が世の中の創成（はじめ）に人間よりも一日早く拵へたのが鳥ですからな。私達、左様、（皮肉に）貴方などといふアメリカ人は神樣が何日目に拵へたものか。もし、ほんとに神樣といふものが生きてゐたなら、或ひは私達なんぞのやうなやくざ者を未來永遠に拵らへずに濟んだのかも知れませんてな。

奴隸賣買人（苦笑）いや、船長、貴方もそのバイブルの御話さへしないと、立派な博奕打になれるんだがね。

勁風の音と共に船體徐ろに動揺しはじむ。水夫等の騷ぐ聲が上甲板に響く。

船長（耳を峙てつつ）やつ、こりあ、とうとうほんものらしいわい。（昇降口へ退りながら）ゼンキンさん、今夜はすこし御用心なさい、ジョナを呑んだ鯨ぐらゐには荒れるかも知れませんよ。（去る）

雨の音、波濤の響。恐怖に怯えたやうな黑い手はげしく欄を搖かす。

奴隸賣買人（背後を振り向き）やかましい、ゴリラ奴！　前脚を引込めろッ！（小脇に抱えた鞭を揮つて、床板を發矢

と打つ。黒い手、消える。鐵鎖の音。)おい、半黒(ムラト)、晩飯を忘れるな、彼奴等を騒がせたら貴様の罪だぞ。そろそろ寒くなるから、毛布の用意もしてやるんだ。さア、鞭だ。(鞭を投り出して、事務長室への階段へ去る)

水夫頭　(上甲板から叫ぶ。姿は見えない)總員上へ！(右手奥から水夫達の應ずる聲がする)

若い番人　(立ちあがる)又暴風雨だ。――ああ、嫌だ、嫌だ、何とかしてこの船底を脱け出す工風はないかな！(柵の方を屹と瞶める。黒い手は出てゐない、しかし、彼は鞭を取りあげる)おい、手を出すな、御前達の手は俺の魂を地獄へ引擦り込むのだ。(檻の中はし――んとしてゐる)何だ、氣のせいか。俺はほんとにどうかしてゐる。

水夫多數、防水着に身を固めながら、右手からどやどやと昇降口の階段へ去る。布を引裂くやうな勁風の音。船體一としきりはげしく動搖する。若い番人、呆然として寢臺に掛ける。舞臺だんだんに暗くなる。薄明のうちに、正面五つの檻がひとりでに開いて、三十人ほどの黒人一樣に巨きい手を差し伸べて、寢臺の方へ肉迫して來る。若い番人不圖頭をあげた途端に、自分を包圍した黒い手の列を見て鞭を振りあげて彼等を亂打しようとする。無數の黒い手は、犇々と彼を押包むで、見る間に彼の喉を締めてしまふ。彼の昏倒したさまを見遣つて、黒人達快げに白い齒を剝いてげらげらと嗤ふ。舞臺除々に明るくなる。光もとの明るさに復すると、籠の鸚鵡の聲に氣がついて、番人はつと起きあがる。檻にはやはり錠が下りてゐる。

若い番人　何を見たのだ。俺はまだ生きてゐたか、ああ、恐ろしいことだ。――俺はいつか、きつとあんな目に會ふにちがひない。俺は、俺は――

水夫等濡れ鼠になつて、索具ロープ帆布などを抱へどやどやと昇降口から下りて來る。

水夫の一　十年ぶりだな、こんな暴風雨(しけ)は。

水夫の二　俺は帽子を奪られた。

水夫の三　俺はトップスルの羽搏きで海へ落つこちるところだつた。

水夫の四　風が廻つたら事だぜ。

水夫の五　ああ空腹(ひもじ)くなつた。

若い番人　――俺は裏切つてるのだ。（獨白）

　水夫等去る。

若い番人　俺はあいつ等と同じ人種でありながら、自分では白人のやうな顔をして、あいつ等の番をしてゐるのだ。恨まれるのも無理はない。一體、俺は黒人なのか、それとも白人なのか？　俺の父親もきつとあんな風に、奴隷買ひにアフリカから買はれて來たにちがひない何故黒く生れなかつたか？　その方がどんなに幸福(しあはせ)だつたか知れあしない。默つて世の中を知らずに、鎖につながれたまゝ、買はれた主人のところで棉の花でも摘むでゐる方がよつぽど樂だつたらうに、俺は憖ひ白人の社會へ生み落されてしまつたのだ。その癖、俺は白人ぢやあない。白人の皮を着た黒ん坊――さうだ、それが俺なのだ。そして、俺は、黒人からも、白人からも恨まれてゐる。

　雷鳴がはげしくなる。檻の中の呻吟と奇聲が一としきり騒がしくなつて、無數の手再び柵の外へ露はれる。

若い番人（思はずよろよろと檻の方へ近づいて行つて）おお、兄弟、俺を恨らまずに置いてくれ！　俺は君達よりもずつと慘めな人間なんだ。意氣地のない半端物だ。口惜しい、口惜しい。俺はこんなに口惜しいのだが、誰に仕返しをしていいかわからないほどの意氣地なしだ。

　水夫等再び右手奥から昇降口へ駈けあがる。上甲板に船員の騒ぐ聲が暴風雨に交つて聞える。黒い手焦燥的に騒ぐ。

若い番人　あれは皆俺の仇敵なんだ。――――だが、俺は、この俺もやはり仇敵の血を受けてゐる。俺はもう君達を鞭打つことは出來ない。（檻の中の黒人總立ちになつてワイワイ口々に何やら罵り出す）ま、待つてくれ、待つてくれ！俺はどうすりあいいんだ。俺には何も出來ないんだぞ。よくわかる――――君達は鎖を解きたいんだらう、この錠を捻ぢ切りたいんだらう。君達の眼は血走つてゐる。甲板へ出て、人間らしく波と鬪ひたいんだらう。自由な空氣が吸ひたいんだらう。よく俺にはわかつてる。しかし、白人は强いぞ。あのピストルを忘れたか。君達にこの船が運轉出來るか？　白人は君達の知らないいろいろなことを知つてるぞ。あの御天道樣を、小さな金の器械で三つにも四つにも分けることさへ出來るんだよ。君達は白人の乘切らうとしてゐる海を知つてるか。君達には白人の眞似さへ出來ないんだ。待つてくれ、騷がないでくれ！　兄弟、靜かに！

奴隷賣買人（姿は見えない）若僧、又、騷々しいぞ。晩飯を食はしてやれ！

若い番人　はい、はい。（手で檻の方を制しながら、右手厨房への階段をあがる）

大工（右手奥より出て來る。醉つてゐる。）漏りはねえかな？　この分ぢや二重底の栓を拔いて少し重りをつけんと危ねえぞ。（その邊をじつと檢査する。若い番人去る。）や、廻るぞ、廻るぞ、まるで獨樂のやうだ。はてな、こんな龍卷のやうな旋回ははじめてだが。木目が繩のやうによれよれに見えるは。――――（立停まる）いや、待てよ。こいつは奇怪しい。は、はア――――やつぱり利いて來たのかも知れねえぞ。晩飯前の一杯は、さすがに利きが良いわい。（蹌々とよろけながら檻の方へ近寄る。船の傾動を支へようとして差し出した手を『5』の檻の手が犇と摑み寄せる。大工爭ふ）誰だ、誰だい？　お、例のか？　、離せ、冗談はよしてくれ！（黒い手、左右から彼を抱きよせ、ぴつたり柵へ吸ひ寄せる）く、く、黒ん坊だ――――助けてくれ！

若い番人、急いで大きいバスケットを抱へながら厨房から駈け降りる。大工の近くに落ちてある鞭を取りあげると、いきなり黒い手を目がけて亂打する。大工ほうぼうの體で檻を離れる。―

若い番人（大工を抱へながら）きつとこんなことになるとは思つてゐたんだ。怪我はありませんか？（大工頷く）ああ、困つたもんだ。ちつとも眼を離せあしない。

大工（番人から身を捥ぎ去り、昇降口の方へ駈けながら）た、大變だ―――い、助けて――い！（去る）

若い番人（檻に向ひ）兄弟、どうぞ騒がないでくれ、頼む、あの鬼のやうな旦那が來ると、大變だからな。腹が減つたんだらう。よし、わかつた。今やるから、騒がないでくれ。（次第に激昂する）ああ、わかつたよ、わかつたよ。騒ぐなと云つたら、騒がずに居てくれ。おい、兄弟、騒ぐなツ！默れ、默れ、默れツ！（鞭を取あげて、檻から檻へとびしびし亂打して廻はる）ええ、畜生ツ、黒ん坊！（正面檻を目がけて、狂人のやうに鞭を打卸ろす）この手だ！この手だ！

奴隷賣買人、事務長室の階段より姿を露はし、じつとその場の光景を眺めて立つてゐる。

奴隷賣買人（徐ろに）その手は金だ！

若い番人（夢中で）金が何だ。この黒い手だ！この黒い手！

奴隷賣買人（つかづかと進み、若い番人から鞭を奪ひ取るといきなり厨房の階段の方へ突き倒す）畜生ツ！馬鹿ツ！牝犬の子！うぬは、一體、何してやがるんだ！（若い番人慄然として縮みあがる）よくも、よくも手前は、作商品を疵物にしやがつたなあ！さア、牛黒（ムラト）、うぬの手を出せ、手を出せ！（鞭を構へる）

若い番人（逃げながら）旦那、私は何も惡くはないんです。あいつ等大工さんを締め殺ろそうとしたんです。……私は、私は何も惡るいことをしてはゐないんです。……

奴隷賣買人追ひ廻はす。上甲板には『ブルワークだ！　ブルワークだ！』といふ聲がする。黒い手、二人の爭ひを見て、血に渇したやうにの柵の間から露はれる。船體の動揺益々はげしくなる。若い番人水夫部屋の方へ逃げ込む。奴隷賣買人追ひ駈ける。

船長と水夫頭（昇降口から濡れて降りて來る）二重底の栓を開けなくつちや。

水夫頭（右手前方倉庫への扉へ近づく）船長、鸚鵡が死んでゐますよ。（去る）

船長　何？――鸚鵡が！（駈け寄る）おお、死んだか、死んでしまつたか！　どうして死んだらう？　可哀そうな奴だ。……この船で、俺を慰めてくれるのはこのボーレイだけだつたのだがなあ。（寢台へ腰を卸ろす）御前の方が先に參つたか。ボーレイ、俺を殘して行つて、御前はどうするつもりだ？　人間を愛することが出來なかつた俺は、お前だけを愛してゐたのだつた。あゝ暴風雨だ、この憎い暴風雨めが、お前を殺ろしちまつたのだ！

大工挫れるやうに階段から駈け降りる。怖わ怖わ檻の前を迂回して船長の前へ出る。

大工　船長、暴風雨帆（ストームセール）も、もう駄目ですよ。

船長（立ちあがる）何？　あれも駄目か？……氣壓はどうだ？

大工　バロメーターは七百二粍です。

船長　よし、最後の努力だ。すべての艙口（ハッチ）を嚴重に閉鎖して、流れるまでだ！

奴隷賣買人に追はれた若い番人悲鳴をあげながら逃げ戻る。息を喘ませながら、奴隷賣買人よろめきよろめき梯

を振つて來る。若い番人、船長の方へ走つて來る。すがりついた番人を庇ひながら、船長沈痛な面持で追跡者に面接す。

奴隷賣買人　船長、その猾犬を渡してくれ！

船長（決然と）ゼンキンさん、乘組員の成敗は、私に任して戴きたい。

奴隷賣買人（苛立ち）な、何ッ？　そいつは俺の——俺が拾つた奴なんだ。何をしようと俺の勝手だ。それでも貴方はこの俺に楯をつくといふのか！

船長　船中に於ては、私が主權者です！　貴方は單にお客としてこの船に乘込んでゐるに過ぎない筈だ。

奴隷賣買人　こ、この船を持つてゐるのが誰か、貴方は知つてゐるだらうな？

船長　航海中の法治權と所有權とは、全く別な問題です。

水夫頭倉庫から露はれる。船體の動搖稍緩和する。奴隷賣買人、一歩退いて、ピストルを擬す。

奴隷賣買人　俺は一生に一度も他人に命令を受けたことのない男だ。あア、君達はこれから俺の絶對命令に服するか、どうだ、このピストルの筒先と篤と相談して返事をするんだ。（一同手をあげる）

水夫等濡れたまま一團となつて昇降口から降りて來る。奴隷賣買人　彼等の方へもピストルを向けやうとして一歩退く途端に、檻『5』から差し伸べられた手によつて羽掻ひ締めにされる。二つのピストルぽろりと捥ぎ去られて、床へ落ちる。

奴隷賣買人　（藻掻きながら）こ、こらツ、離せ！　船長、船長助けてツ！

黒い無數の手、犇々と彼の身邊に絡らみつき、蜘蛛の巣に封ぜられた蜂のやうに身動き一つさせない。一同呆

――（　手　）――

して見まもる。

奴隷賣買人　（絶叫）船長助けてッ！

水夫頭　（船長へ）どうします？

船長　（靜かに）私は神の存在を信じない。だが、人間といふ御伽噺だけは信ずるよ。この御伽噺の世界では、人間が人間を賣買することは禁じてある筈だ。それは約束を外れた取引だ。賣られた人間が、賣つた人間を、何かの方法で復讐するといふことも時にはあり得ることだ。

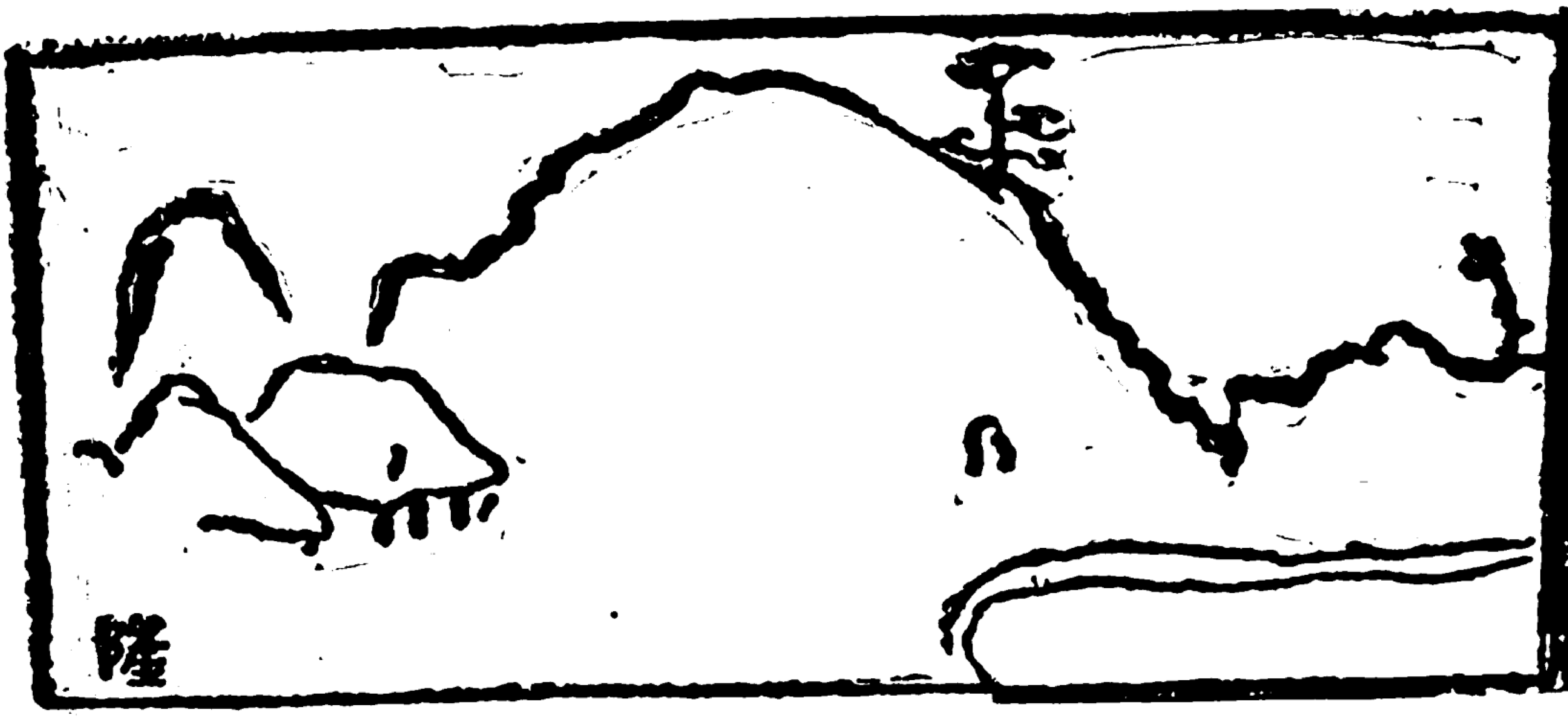
一同急き込んで、檻の方へ驅け寄らうとする。船長、兩手を擴ろげて彼等を制す。

船長　（大聲）待てッ！　私が、この船の船長であることを知らないか？　さア、みんな、こつちを向けッ！（乘客の方を向く）それで、私達の任務は、先づ第一にこの非常な颶風帶を遁れることだ。次には、私の最愛の鸚鵡を手厚く葬ることだ。――

奴隷賣買者、姿は一同に遮ぎられて見えないが、薄氣味の惡い檻の中の笑ひ聲と共に、彼の鍔廣の帽子が、一同の頭上へ飛んで來る。次に、赤い胴着の半分………若い番人、感極まつて泣く。

船長　（冷靜に）――それから、一人の男を、御伽噺の海へ深く深く沈めることだ。

（急劇に幕）



一年間

宇野千代

1

女學校を卒業したとき、同級生の中に二人か三人東京の學校へ進んで行くものがあつた。英子は自分の境遇がそんな事を望めないので、初めから諦めて居たが、何となく淋しかつた。東京の學校へ進んで行く人たちのうしろには、眼に見えない銀色の光明がさして居て、自分は遠くの方からそれを見て居なければならないやうな氣がした。

英子は心の中で、絶えず、さあ遣らなければならない、と呟いた。そして、あの人たちが東京の學校を卒業するまでの三年か四年の間に、自分は誰にも知られずにそれらの人の先きくゞりをして遣りたいと思つた。國語の先生は博學で感じの柔い人であつた。英子はその先生が獨學で今の地位をかち得た事を知つて居たので、或日、その先生の宅へ行つて、自分も中等教員の檢定を受けたいからその指導をして貰ひたいと言つた。

すると、子供のやうな眼をした先生は、少し伸びかゝつたあご鬚を撫で乍ら、大人が子供を揶揄ふときのやうな笑顏をして、

「大丈夫かな、自分で遣るのは三倍も骨が折れますよ。」

と言つた。

英子は熱心に、自分の固い決心を示した。先生は同じやうな笑顏をして英子の言ふ事を聽いて居たが、軈て、机のひき出しから印刷した小冊子をとり出し、うちへ歸つてこれを寫しておおきなさいと言つた。

英子はぼうつと兩頰をほてらせ乍ら、うちへ歸つて行つた。その樂しい目的が英子の氣持を少しづゝ膨らませ輕くさせた。英子はへんにそは〳〵して、一日中、明るい縁側に机を出して、先生から借りて來た試驗の參考書の目錄を寫した。增補徒然草、大鏡詳解、新選萬葉集、——英子はぼうつとなつて机から眼を上げた。明るい天氣だつた。先刻から、つい軒下のブリキの雨樋に雀が巣をかけて居ると見えて、何か藁きれのやうなものをくはへては二度も三度も出たり這入つたりした。雀はまた出て行つた。風が吹いて、そこから白い鳥の羽が舞ひ乍ら英子の眼の前へ落ちた。もう櫻が咲いただらう。英子はぼんやりさう思つた。彼女は疲れて、一つ二つ三つ四つと、今寫した參考書の數を鉛筆のさきで數へ初めた。九十七冊あつた。

「ほう!」

と英子は聲を上げた。眼の前に、それらの參考書が山のやうに積み上げられたのが浮んだ。英子は机から離れた。すると、自分の目的が前よりももつと遠いところへ逃げて了つたやうな氣がして心細かつた。

それでも英子は、夜になると三日も四日も續けて先生のところへ難しい國文の解釋を訊きに行つた。先生は、晝間の

課業に疲れて、英子が熱心になる事を惧れるやうな、あの笑ひを湛へた眼でじつと英子をみつめた。この先生は、妻と大ぜいの子供とを町から五六里へだてた在へ置いて居て、土曜日になると、そこへ歸つて行くのが樂しみであつた。英子はその事を忘れて、土曜日にも行つた。先生は留守であつた。英子はほつとした。自分のせいではなく稽古が休める、それが何となく嬉しかつたのだ。夜櫻を見に行く町の人たちの中へ混つて、ふら／＼と川端の方まで歩いて行くと、美しい揚げ花火が見えた。英子は解放せられたやうなのんびりした氣持になつてうちへ歸つた。そして寢床の中で、檢定試驗の事ではないほかの事をいろ／＼に考へ乍ら、蒲團一ぱいに足を伸ばして寢た。

それから、月曜日になつても、英子はもう先生のところへ行きたくなくなつた。そして止めた。五月になつて、前から頼んで置いた在の小學校の教師のあきがあると言ふ知らせが來たので、英子はすつかり新しい氣持になつてその用意を初めた

町から長い竹藪にそうた一本堤を小半里も歩いて、橋を渡ると、直きにその小學校があつた。英子は、女學校のとき穿いた袴をもう一度縫ひ直し、風下の方へひら／＼とその袴の裾をひるがへし乍ら、橋を渡つた。橋番の爺さんは、白い紙を切つて作つた橋札を英子に渡し乍ら、じろりとこの若い女先生の顔を見た。そして、その後姿が向ふの杉垣の間に吸ひ込まれるのを待つて、後に居た連れ合ひの婆さんに話しかけた。そしてこの婆さんの口から、新しい先生の噂が村中へ傳はつた。

英子の受持は、尋常二年の女生徒であつた。黄色や桃色やさま／＼な色をした三尺帶をひら／＼させ乍ら、遠くから驅けて來て、「先生！」と言つて甘つたれたり、英子が廊下を通ると、ついと硝子戸の蔭に隠れてはにかみ笑ひをしたりする女の子たちを英子はどきどきし乍ら眼許りで可愛がつた。この、十八になつた許りの先生は、初めて教壇に立つ

「皆さん！」と、眞面目な顔をして、この子供たちを呼びかけたときから、自分が何となく先生のやうな氣がして來た。彼女は、女學校に居たときよりも、もう少し裾長く袴を穿いた。英子の姿は、そのために非常に丈高く見えた。

英子は立派な教育者になりたいと思つた。何かよく解らなかつたけれども、小使の爺さんから十人あまり居る男女の教員、それに、痩せて胡麻鹽の鬚の濃い校長とを加へて、廣い校庭の片偶に建てられたこの雨ざらしの校舍の中に或る空氣を感じた。教員室では英子は一番低い地位だつたので、一番端しの机に腰を下して、その空氣を胸一ぱいに呼吸した。そして、自分の次々に腰を下して居る教員を、一人一人と追ひ越して行くやうな地位をつくりたいと言ふ事を、ぼんやりと望んだ。英子は熱心に教案を作り、教課を調べ、兒童心理學を勉强した。軈て、子供たちは、かきつばたの剪り花を根もとから紙にくるんで持つて來て呉れるやうになり、唱歌のときには、英子の方へ向けて燕の子のやうな口をあけてせい一杯に唱ふやうになつた。

2

或る日、午の休み時間に英子が小使部屋のそばを通りかかると、誰かの聽き馴れない聲がして、

「今度見えた女先生は、仲々別嬪ですね、」

と言つて居た。丁度そこは二階の教員室から下りる階段の裏側になつて居て、何時となく教員たちの寄り集つて無駄話しをする溜りのやうになつて居た。英子はもうそこへ來かかつて居た。自分の事が話題になつて居るのを知つても、引返せなかつたので、ぼうつと紅くなり乍ら足早やに行き過ぎた。そこの人たちの顔が見られないやうな恥しさを感じた。すると英子をみつけて、そこに腰を下して居た一人の男が立ち上つた。そして、親しみのあるおどけた笑顔をし

て、

「おう！」

と聲を上げ、何かものを言ひかけさうなそぶりを示した。英子は狼狽てて體をそらした。その男は町の本屋の若い主人で、教科書の賣上げ金を取りに來て居たのであつた。色の白い、女のやうな顏乍ら、眼に、見逃がせない狡るさがある。英子は、その男があばたのある年上の妻を持つて居る事や、町の藝者との噂が絶えないと言ふ事を聞いて居た。何となく氣が許せなくて他の女先生たちのやうにその男に近づくのを憚つて居たのであつた。――あの男は自分の事を笑つたのであらうか。さうだ、笑つたのだ。英子は誰も居ないところで、そうつと自分の顏を思ひ浮べた。あの男の言葉には、どこか卑しい調子があつた。英子は鏡を見るのが可厭だつたので、朝、頭髮を結ぶときにも手水盥の底にうつるぼんやりした影をたよりに櫛を動かすだけだつた。色が黑く、おでこの蔭に眼だけが大きくみひらいて、どこか畸形的な感じのする顏が、ぼんやりと英子の眼に浮んだ。男の言葉は不思議な力をもつて英字の胸に刻みつけられたやうに見えた。

その夕方、うちへ歸つて風呂へ這入つたとき、英子は裸のまま流し場に立つて、ぴつたりと扉を閉さした。そして、仄暗い一分芯の豆ランプの光りの中に、そうつと鏡を立てた。塗り椽をつけた小さな古鏡は、ことこと音を立てて顫へた。そとは風があつた。風のたびに、焔は小さくはためいた。英子の顏はその仄暗さのはためく中に、思ひがけない陰影を見せ深い彫りを刻んで、古い油繪のやうに浮び上つて來た。大きな瞳がもの問ひたげに彼女自身を見詰めて居るのであつた。

これは誰であらう。英子は自分に訊いた。そして、もの珍しげにじつと自分の顏を見詰めた。彼女の唇は少し笑つ

た。すると、思ひがけなくも微かな笑窪が現れて、唇が子供のやうにあいた。英子は嬉しげに笑つた。これは自分なのだ。

するど、つい今しがたまで、自分を卑しめたのだと思つて居たあの男の言葉が、今耳もとで聽いたやうな鮮やかさで繰り返された。それと一緒にあの男のいたづらしい笑ひにつれて糸切り齒の金がちらりと光つて消えた。英子はびつくりして、自分の考へを拂ひのけた。誰かが、洗ひ場の扉のそとに立つて居るやうな氣がしたが、扉をあけると冷い風が吹き込んだだけで、誰も居たのではなかつた。

英子はそは〳〵して探し初めた。脱いだ着物をのせておく棚の隅に、もう幾年となく使はないで夏になるとてんか粉の代りになる母の白粉があつた。小さな兒の足でつくつた昔の刷毛は、白粉にまみれて轉がつて居た。慌しい氣持が英子の胸を流れた。鏡の中の顏はもう笑つては居なかつた。英子の瘦せた胸は大きなうねりをつくつて、ほうつと深い呼吸をした。白粉のうす甘い匂ひが、どこか見えないところに眠つて居た英子の感情をよび醒したのであつた。英子は幼い手つきをして、その白粉を鼻のあたまにそうつと刷いた。すると、うすぼやけた鏡の中の顏は芝居に出るおどけ者のやうに、白粉のついたまま悲しい表情をして笑つた。

「これは、あたしなのだ。」

英子の瘦せた裸の胸は、またほうつと深い呼吸をした。――その夜、英子は長い間眠る事が出來なかつた。

明くる日から、英子はなんとなくぼんやりして居るやうに見えた。教室はへんにだだつ廣く感じられ、子供達の同じ顏は幾つにも幾つにも見えた。英子が讀本を讀んで居ると、その同じ顏をした子供の一人が立ち上つて、

「先生!そこはもうお讀みになりました。」

と言つた。

英子は眠くなつて、本を讀むのをやめた。そして、ノートを出させて、同じところを繰り返し繰り返し書き取らせ乍ら、自分はぐるぐると黒い机の間を歩き廻つた。子供たちは机にはりついて、ときどき、そうつと眼を上げては先生を見た。そして、小さい欠伸をして、かたりと鉛筆を置いた。英子はちらと音のする方を見た。然し、何にも見たのではなかつた。教室の窓から軒を越えて、青い空と遠い山とが見えた。あの山の遠いこと。英子は窓をあけてそとを見た。地續きの石屋では長閑な唄の聲がきこゑ、庭に轉がつて居る澤山の墓石が陽をうけて白く光つて居た。もの干竿には若い衆のメリヤスシヤツが風に吹かれて搖れて居た。あの唄はどんな男の聲だらう。——

窓を離れて子供たちの方へ歩み寄ると、いま離れたその窓の下で、誰かが自分を待つて居るやうな氣がした。一時間は終りのない時間のやうに長かつた。英子のぼんやりさは直ぐ子供たちの心の上に反射した。カンカン、カンカンと乾いた木板の音が響き渡ると、子供たちは最早や先生を惧れずに、ドヤドヤと教室から出て行つた。そして、黄色や桃色や草色の三尺帶をひらひらさせ乍ら、運動場の眞ん中へ驅けて行つた。

いまはもう、その可愛しい帶の色が英子には何となくうるさかつた。自分は如何かしたのであらうか。英子は吃驚して自分の心に訊ねた。彼女は疲れたやうな氣がした。思ひ出してオルガンの前に腰を下して、疳高いマーチの一節をひいたが、その音は英子のあたまの上をつつぬけて消えて行つた。教案の綴ぢ込みは、いつも白いままで殘つた。

この退屈さに連れて、反對に、英子の顔はいきいきと輝き初めた。長い袴の裾は風に縺れてひら〳〵と橋の風下を吹いた。橋番の爺さんは、直ぐうしろに坐つて居た連れ合ひの婆さんを振り返つて言つた。

「あの先生は、だんだん別嬪になつた。」

3

軈て夏になつた。

母一人娘一人の英子のうちでは、長い間の習慣からどこへも出る事はなかつた。夜になると、この町にある小さな糸取り工場の女工たちは、白い浴衣を着て赤い帶を結んで、英子のうちの開け放たれた格子戸の前を、笑ひ乍ら縺れて歩いた。中學生たちは大人びたなりをして、女たちの後からついて歩いた。遠くから尺八の哀れな節が情をこめて聞えて來た。英子はひとり、格子戸にすがつて長い間きき惚れた。それを吹いて居る見知らない男の姿が思ひ浮んだ。或夜は裏の蜜柑畑の蔭から、誰か口笛を吹いて居るのが聞えた。英子はもの蔭に隱れて胸を慄はせ乍ら、その聲を待つた。口笛は毎夜續いた。裸足のままで椽側から下りて行つたなら、直ぐその男の白い着物が見えるだらうと思はれた。蚊帳を吊つて了ふと、母はがたがたと音をさせて雨戸を繰り初めた。そして、

「若いものは恥を知らぬ。」

と呟くやうに言つた。

英子はいつか讀んだことのある小說のさまざまな場面をひとりで思ひ描いた。自分が若しその小說の中の女であつたならと言ふ事を、つい今あつたことのやうに思ひ描くのが好きであつた。夕方、裏のたんぼ道で月見草の花を摘んで居ると、今にもどこからか逞しい腕をした男が來て、彼女の體を抱きかかへてどこかへ連れて行くのではあるまいかと思つたりした。たんぼの向ふには、隣り村へ續いて居る白い道が帶のやうに浮いて居た。どこかで夜遊びをして來たらしい中學生が、帽子をま深かに冠り、提灯のない自轉車を走らせて行くのが、白い月光の中に影繪のやうに見えた。英子

は何故ともなく、ぶるつと一つ身慄ひをした。自分もどこかへ行つて見たかつた。自分が若し、あの自轉車の曲つて行く一本道の坂のところに立つて居て、わつとおどかしたなら如何であらうと思つた。英子はそのときの中學生の顔を想像して自分がおどかされたやうにびくびくした。

母は馬のやうな呆けた顔をして、靑い杉の葉の蚊燻しを燃やして居た。そとから歸つて來た英子の顔を見ると思ひついたやうに、おおと言ひ乍ら、起つて一枚の葉書を持つて來た。

「今日、これが來て居た。」

それは、もう長い間思ひ出した事もないあの國語の先生のところから來たのであつた。

「あのとき借した文檢の參考書の目錄を返して貰ひたい。あれは自分のところにも一つしかないので困つて居る。」と書いてあつた。英子はその事を思ひ出した。そして、あのときから、もう三年も四年も經つたやうな氣がした。あんなことがあつたのだ。だが、あれは何の役にも立ちはしなかつた。英子はさう思ひ乍ら机のひき出しや戸棚の中を探したが、目錄はどこにも見當らなかつた。英子は途方に暮れた。すると今まで感じたことのない不貞腐れたなげやりな氣持が湧いて來た。何方にしてもあの先生に會ふことは出來ないやうな氣がした。二月三日經つた。もしか先生に逢ふかも知れないと言ふ事を惧れて、ずうつと廻り道をし乍ら村の學校へ通つた。恥しさうに、首をうなだれて歩いて行つた。

夏休になると、東京へ行つて居た友だちが、光る靴を穿いて町のステーションへ着いた。英子はなほさら恥しさうに首をうなだれて歩いた。けれども、もう、それらの友達を羨しいとは思はなかつた。負けないやうな偉いものになりたいとは思はなかつた。ただ、その友だちに逢はないやうに廻り道をしてそつと歩いた。

秋になつて、町の祭があつた。

母はそのときの間に合ふやうに縫つて置いた赤い帶を、英子のうしろに廻つて結んで遣つた。そして笑ひ乍ら、

「このごろ、馬鹿にのつぽになつたねえ、」

と言つた。英子はその言葉から輕い非難の意味を汲み取つたやうな氣がした。このごろ、もうずうつと、母に離れ母に明かせない氣持で暮して居たやうな氣がした。

「どれ、ほんの一寸で好いから、白粉をつけてごらんよ。もうお前くらゐの年ごろには、お母さんなぞ、好いお嫁さんであつたのに、」

と、母はまた笑ひ乍ら言つた。そして、白粉の箱を持つて追つて來た。遠くから、町の太鼓の音が響いて來た。英子は面白がつて逃げ廻つた。母は諦めたやうに、椽側のところに立ち留つて、そこからもう追つて來ようとはしなかつた。英子は、蜜柑畑の眞中にひとりで立つて、ぞうつと寒いやうな氣がした。堪らなく淋しかつた。母は知つて居るか知ら、——まあ、何を母が知つて居ると言ふのであらう。

軈て支度がすんで、母と娘は祭の赤い團扇を持つて踊り場の方へ見に行つた。狹い町の中を人が一ぱいであつた。お互ひに押し合ひ乍ら、みな、どこへ押されて行くのか知らずに居るやうな樣子であつた。同じやうなおどけた表情をした顏だけが、うようよ、うようよと動き廻つて居るやうに見えた。英子は立ち留つた。何時の間にか母にはぐれて居た。母の姿は人波にもまれてどこにも見えなかつた。英子はほうつと溜息を吐いた。もう長い間。母からはぐれるのを待つて居たやうな氣がした。自分は如何したのであらう。英子は吃驚して自分に訊いた。

家々の軒につらねた赤い提灯が一ぱいに光りを投げて、その照り返しの中に男も女も醉つぱらひのやうな赫い顏をして居た。英子は こんな人達を見た事がなかつた。誰かが、手をあげて自分の肩に觸れさうな氣がした。何かおどけ

た事を話しかけさうであつた。英子はもう、物賣りのかん高い聲も太皷の音も聞かなかつた。祭はただ一つの聲になつて、わあん、わあんと英子の耳もとで怒鳴つた。英子は呼吸をはづませ乍ら歩いた。すると　その數限りない祭の雜音の中から

「杉田、杉田、」

と言つて居る聲が、信じられないほどのはつきりさで耳に這入つた。そんな筈がない、こんなところで自分の姓が呼ばれる筈がない、英子はさう思ひ乍ら、その聲の中から、しやぼん玉の泡がたつてゆくやうたもやもやしたものを感じた。そして、前よりももつと急いで歩き出した。アセチレン瓦斯の青い光りが　綿菓子の眞鍮の車の上を這ひ、赤い海ほうづきの上をなめた。

「杉田は十八かい。ほんたうに十八かい。」

あの同じ聲が言つた。廣いひろい誰も居ない野原のやうである。そして、その聲は內證ばなしの聲のやうにか細いのに　何とはつきり聞えた事であらう。さう、私は十八、英子はもつと急いで歩き乍ら　心の中で答へた。

何時の間にか町外れへ來て居た。英子は何となく祭りを怕れた。そして、人通りの消えた裏通をぐつたりなつて歩いた。母は如何したらう。英子は、自分が少しも母を探さうとしなかつたことをぼんやり思ひ浮べたが、それはずつと前にあつた事のやうに少しも氣にならなかつた。町の方は黑い屋根が影繪のやうに列んで、その上がぼうつと黃色く明るい。祭りは英子のそばから逃げて行つた。英子は、その黃色い明るい灯の方に向いて、「おう、」と聲を上げた。すると、誰かの聲がそれに應じて英子を呼んだやうな氣がした。英子は立ち留つた。直ぐうしろから誰かの足音がついて來るのを聞いたのであつた。

「杉田さん、杉田さん、」

英子は、自分がその聲を待つて居たやうな氣がした。今まで感じた事のない惧れが胸に湧いた。男は直ぐそばに立つて居た。そして、英子の腕にさはつて、何か言つた。英子は跳び上つて聲を立てた。そして、一散に、氣狂ひのやうになつて走り出した。祭りの灯の屆かない空には、まん丸い月が出て居た。月の光りは白い一筋道をてらした。遠くから、自分の家の黒い板塀とその外に喰み出して居る橙の木の枝とが見えた。英子はそこまで驅けて來たとき、死んだやうになつて板塀に張りついた。そして激しい呼吸をした。すると不思議にも、あのとき見もしなかつた男の顏が自分の眼に浮んで來た。色が白く、瞼ははれぼつたく垂れ下つて、針のやうに細い瞳が笑つたのまで見えた。英子は、その男の觸つた片腕が自分の肩から離れて、見る見る、蜂に刺されたやうに膨れ上つて行くやうな氣がした。

4

男から手紙が來た。封を切ると、巾の廣いリボンのきれが疊の上に落ちた。リボンには、赤いインキで「心」と書いてあつた。「よし、この町を流れて居る錦川の水がさかさまに流れやうとも、私の愛情は變りません。」と書いてあつた。英子はそれを懷にして、在の學校の方へ歩いて行つた。いつもと同じやうに、橋番の爺さんは白い紙を切つた橋札を流し乍ら、英子の顏を見た。何と、呆けた馬のやうな顏だこと。橋の下の水はさんさんと音を立てて流れた。「よし、この水がさかさまに流れやうとも、私の愛情は變りません。」英子は見えない男に向つて、その同じ言葉を呟いた。眼の中が熱くなつた。風上から秋を含んだ空氣が英子の胸高い袴を吹き上げては過ぎた。英子は眼を閉ぢた。すると、教員室へ上つてゆく埃つぽい階段と、てんとう虫のやうな數知れない子供たちの頭とが見えた。英子はそれを拂ひ

のけるやうにして、ゆつくりと片腕をさし上げた。その片腕は重かつた。そして見る見る、蜂に刺されたやうに膨れ上つて行くやうな氣がした。

間をおいて、男から又手紙が來た。「貴女はきつと來るでせう。毎夜、夜が明けるまで私は起きて待つて居ます。このお寺の栞り戸は、貴女のために開けてあるのです。」英子は、空氣の中を漂つて居る蟲のやうになつて、學校へ行きうちへ歸つた。夜は、そのお寺を夢に見た。そして、暗い蜜柑の木の繁みに向いて、眼に見えない男に呟いた。「私はきつと行くでせう。そのお寺の栞り戸は、私のために開けてあるのです。」

それからまた、男から手紙が來た。「貴女はきつと來るでせう。私は、貴女のために貴女の來べき日を定めませう。○月○日午前一時。貴女に逢はなければ私は死にます。」

英子は白い石のやうに押し沈默つて、學校の方へ歩いて行つた。朝禮式が始まつた。一心に見てゐると、無數のてんとう蟲の塊りのやうに見える子供たちの黒い頭が、すうつと遠くの方へ遠くの方へ逃げて行つた。英子はぼんやりして、不思議だなあ、と心の中で呟いた。すると、そのてんとう蟲の塊りはだんだんと眼の方へ戻つて來て、赤い黄色い三尺帶をひらひらさせ乍ら汽車ごつこのやうに長く續いて敎室の中へ隱れた。英子ははつとした。そしてまた、白い石のやうに押し沈默つて自分もその後から續いた。敎室の硝子窓から、裏の石屋の物干し竿の白い股引が風に搖れて居るのが見えた。土の上には、花崗石のかけらがこぼれてきらきらと光つてゐた。石屋の若い若い衆は、角刈の頭を傾け芋蟲のやうに丸くなり乍ら、こつこつと石を刻んで居る。そのうしろに、もう出來上つた墓石が幾つも幾つも、まるでほんたうの墓場のやうに立ててあるのまで、一心に見て居ると、それがだんだん小さくなり遠ざかつて行くのであつた。不思議だなあ、と英子はぼんやり呟いた。それをよく見知つて居たやうな氣がしたからである。これと同じやうな澤山

の墓石が、あの男の居る紅葉谷の奥のお寺の墓場にあつたことを思ひ出したのであつた。英子は子供のとき、學校の先生に連れられてそのお寺の境内にある樟腦の林を見に行つた。暗い枝の下の、樟腦をつくる小さな家から、白い煙が空の方へゆるく立ち昇つて居た。子供たちは、その煙の出る小さな家の中へ汽車ごつこのやうに長く續いて這入つて行つた。「皆さん、」先生がさう言つた。子供たちは、粉藥のやうな白い粉を小さな指のさきにつけて嗅いだ。「皆さん、これが樟腦ですよ。」先生がさう言つた。英子は、その先生は自分であつたと思つた。石屋の物干し竿の白い股引は死んだやうに動かない。英子はそのとき男に會ひに行かうと決心したのである。

5

その夜、英子は黒い毛糸の房の下つた毛布にくるまつて、裏の雨戸から脱けて出た。母の事は、今の英子にとつて何の考へのたしにもなりはしないのだ。夜はもう冬に近い。英子はただ一つの事しか考へては居なかつた。谷に這入る道は、どこからか清水の湧く音さへ聞える靜けさであつた。英子は夢の中で通ひ馴れたその道を眞つ直ぐに進んだ。深い杉の木立の間に縞になつて、仄白い空が見える。道は去年の枯葉と腐つた苔で、ともすれば足をすくはれる。英子は宙に浮んで歩いて行くのであつた。歩き乍ら、まだ見ぬお寺の暗い廊下と、そこを歩く自分と男と、二人の白い裸足の上に明滅するうす明るいぼんぼりとをはつきり眼に見た。だが、英子はぎくつとして立ち居つた。栞り戸が開いて居ない。朽ちた山門は閉ざされて、まつ黒な庫裡には灯も見えないのであつた。

英子はぼんやりと佇んで、その暗い庫裡の軒を見上げた。小さい鐘と小さい槌がさげてある。これで叩くと誰か出て來るのであらうか。すると、暗い眞夜中の空氣をゆるがして、かあああん、と高くか細く鳴りひびくその聞えない音に

おびえて、英子はぞつと身顫ひした。眠つてゐた或るものが眼をさましたのだ。英子はもう一度、開かれてない栗り戸を見た。この眞夜中にここまで歩いて來たのは自分であらうか。ここに立つて居るのは自分であらうか。——あの手紙は嘘なのだ。あの男が、この寺に居ると言ふ事さへ嘘なのかも知れない。英子は、名狀し難い惧れのために、立つてゐる足がふるへた。何といふ暗い恐しい道であらう。その道の中へさかさまに、英子は足をふみ出した。町の巡査の、赤い横筋のある提灯。鐵板のやうに黒い重い空。英子は、去年の朽葉の上にぬめり乍ら、往きと同じ、然し今は恐怖にみちた道を歸つて行つた。

そののち、男からは何も來なかつた。英子は、たはむれに試された自分を知る事は出來なかつた。そして、失はれた自尊心はもう一度燃え上つては來なかつた。英子は、顏も知らないその男を忘れなかつた。橋を通ると、下を流れる水は、昔と同じやうに日に照り、さんさんと音を立てて流れて居た。そして、音を立て乍ら、「さかさまに流れようとも、」と言つて居るやうに見えた。英子の古ぼけた袴は、風にふかれてよれよれになつた。夜、うちの格子の外を行く口笛と下駄の音は、自分を嘲笑つて居るやうに聞えた。

英子はもう身仕舞ひをしなかつた。學校へ行くと、子供たちの小さな欠伸と汚れた顏とを、ものうげに見た。なをざりにされた教育。もう一度、つばめのやうな口をあけて唱を唱ふ子供たちを樂しむ事は出來なかつた。英子は悲しい惻い眼でそれを見た。

冬になつて、ちらちらと雪が降つた。英子のよれよれになつた袴の上に降り、櫛のとほらない髮の上に降り、顏の上に降り、そして溶けた。傘をささない英子は、馬鹿のやうになつて雪に濡れた。橋番の爺さんは、つい後で猫と一緒にこたつであたつてゐる連れ合ひの婆さんを振り返り、

あの先生は、馬のやうに呆けた顔になつた。」

と言つた。

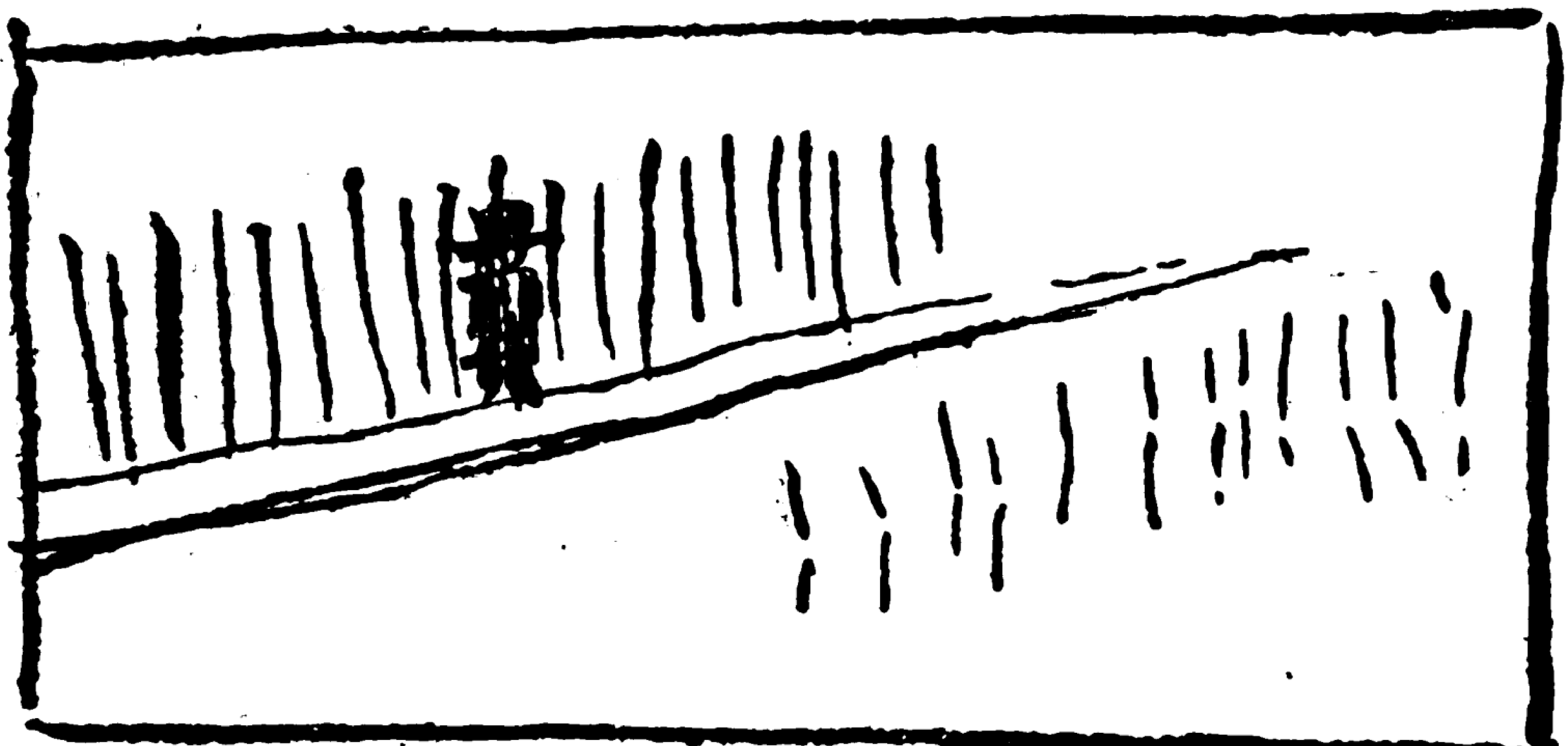
軈て、町の公園の櫻の蕾がふくらんで來た。公園の堀のまわりに青竹の新しい柵が出來た。そして、馬糞紙に色を塗つた自轉車競爭のビラが町の角々に貼られた。その日になると、英子は老つた女先生のやうにだらしなく袴の裾をひきずつて、鼻汁をたらした二人の子供に兩の袂をひつぱられ乍ら、堀の柵にもたれてその競爭を見た。だんだらのメリヤスを着たのり手が玩具のやうな自轉車の上にしがみついて、めだかのやうに柵の中をすくつて行つた。春の懶い午であつた。英子の眼には、見物人の中の爺さん婆さんしか見えなかつた。自分の側の鼻汁を垂らした子供しか見えなかつた。ごうん！と午の鐘が鳴つた。英子は白い霞の中を透して鐘の鳴る方を見た。すると、あの紅葉谷のお寺の境内に、高い丸太のやぐらが組んであるのが見えた。やぐらの上に人が二人、男と女と立つてこつちを見て居た。あれはあの男ではあるまいか。英子はぼうつと赧くなつた。秋のあの夜の事を思ひ出したのであつた。すると、自分の想像の中で見た暗い廊下とそこを行く自分と男の裸の足と、その指さきに明滅するうす明いぼんぼりの灯とを丁度この眼で見たやうにはつきりと思ひ出した。あれは夢だつたのだ。――

花が咲けば、春休みであつた。英子は休みになる前の日、誰にも遲れてひとり學校の門を出乍ら、そつと後を振り返つた。すると、合圖のやうに、小使部屋の小さな障子に明りが黄色くぱつと點いた。そして、その黄色い障子が明いて、頭に毛のない小使の爺さんがよたよたと歩き出した。酒を買ひに行くのだ。――硝子の燗壜が玉のやうに光る。そして、明け放たれた障子の中に、紙でつくつたランプのほやが、風に動くのが見えた。

「お休みになつて、好いのね、」

英子は立ち留つて、何となく爺さんの近附くのを待ち乍ら言つた。爺さんのうしろから、白い猫がついて來て、廣い運動場のまん中で一寸立ち留つた。すると、爺さんは歯の生へて居ない不思議な赤さをもつたはぐきを出して笑つた。それが薄暮の中で、どこかいたづらな感じで英子の眼に映つた。酒屋へ行く別れ道に來た。爺さんは體をかはすやうにして、何か言ひ乍ら英子の肩にちよいと手を觸れた。寒い、す早い感情が英子の背中を走つた。だが、爺さんは杉垣を曲つて行つた。その綿で膨んだ袖なしの後姿を、英子は眼を閉ぢて感じた。すると自分が、汚い蚯蚓のやうな氣がした。げんげの咲いた田圃は暮れた。英子はちよいと袴の裾をつまみ上げた。そして、若しあの爺さんがここまで、戻つて來るだらうかとぼんやり考へ乍ら、肩をすくめた。

見えない霧の中で、汽車の汽笛が鳴つた。英子はその方へ向いて、「ボー」と小さく叫んだ。そして、溜め息をし乍ら道端の草の中へ誰にも見られないやうにしやがんだ。(完)



その八年間

千家元麿

父が亡くなると私の一家は永年東京に居住して來たのを解散して、父の郷里へ一家擧つて移住する事になつた。妹の四子もその時學校を卒へて田舍へ行つた。出發の光景は今も忘られない悲しいものだつた。その時私の母だけが生みの子供達と別れて、東京に殘つた。足が惡くて起居が不自由な妹が、良い人手が無くて困つて居たので、手扶けと云ふ名目で丁度母の所置に困つてゐたのでそこに預けられる事になつた。母の生家は再三な火事に遭つて不運續きで零落したので、母は歸る所がなかつた。その時から八年經つて、最近私はこの母を失つた。遂に母は田舍へ行つた子供達にも會へずに亡くなつて終つた。母の死は實にアツケなかつた。電話を掛けてゐる最中に卒中の發作が起つて三時間位で絶命した。私は郡部に住んでゐたので電報の配達も一日遲れて屆いて、翌日馳けつけたがもう瞑目したあとであつた。父の亡くなつた時母は未だ達者だつた。併し父に死別れ、又子供にも別れてからその八年の間に彼女は深い悲しみを味へに味へ、辛棒して、老ひ衰へて行つたのだ。一體

私の父は晩年が不幸であつた。可成莫大な負債が出來て、その整理と生活に追はれて、余生を安樂に送る暇もなかつた。始終債鬼の訪問に窘しめられてゐた。流石溫厚の父も、妙に疑ひ深くなつたり、不機嫌になつて母にまで當り散らすと云ふ工合だつた。母はその不幸な家庭の中で、澤山の子供の世話をしたり、又父の心配を少しでも輕るくしやうと骨を折つて居た。自分では粗末な着物を着て、女中か何かの樣に働いてゐた。父が亡くなつた時は別居して居た。私が危篤の電報に狼狽して、長い道のりを、もう電車も停つて居たので、俥に揺られて馳けつけた時、父はもう絶命してゐた。いつもの居間に、電燈は消され、白木の燭臺に蠟燭を灯して、未だ棺が來ないので、白い床の上に瞑目して横つてゐた。夜陰の靜かさがしめやかに室内を悲しく包んでゐた。顏をかくした白布をとつて見ると、私は胸が塞つて歔欷した。父は急に老けたやうに頰の肉が落ちて乾びた一人の老人に變つて硬直して居た。臨終の苦悶の烈しさを語つてゐた。その急激の變化は私を驚かし悲しめた。私は濟まない氣がした。如奈ほど自分を愛してくれた父で有つたが、その刹那ほど感じた事はなかつた。私の愛は燃へた。生きて居た時には背つてそんなに燃へなかつた愛が、その時に成つて高まつた。何と云ふ矛盾だらう、父を思ふと不愍で堪らなかつた。父があれ程、希望してゐた家族を安全にして死ぬ事は實現されなかつたのだ。父は自分が死ねば母やその子供達が寄る邊がなく成ると思つてゐた。苦しく終つたその努力と慈愛に滿ちた心が私を泣かした。しかし父はその側に最愛の息子が涙で暮れてゐるのも、もう識しない不動の寂しい姿で天を見てゐた。

私は父と最後の交渉に就いて思ひ出した。父は十一月から年越の用意に四國の方へ旅行して居た。父は邊僻な地方を書をかいて廻つて金をつくつた。それが三十人近くの家族を支へて居る唯一の收入であつた。年に二回位づゝ中國地方から九州の方も廻つた。老年の父が家族を離れて、不便を忍んで淋しい村々で書を書いて、何里も俥に乘つて峠を越へ

たりして往く事がどんなに淋しく佗びしかつたか、父はその旅行にいつも私を一緒に連れて行きたがつた。併し私は父と共にする旅を厭がつたものだ。父が供につれて行つたSと云ふ老人が、濱松の旅館で、矢張り腦卒中で死んだので、急に旅を廢めて歸つたのはこの前の旅行の時であつた。そんな事があつたので今度の旅行を家族は心配した。併し父は約束をきめて四國へ出かけた。その旅で父は風邪に罹つて、豫定より早く歸つた。私は父の歸京を待つて居た。私は是非暮に必要の金があつた。それを貰ひたかつた。母から父の歸つた知らせがあつたので行くと父は咽にシップをして居た。依賴を話すと、豫定より早く歸つた爲め、思ふ程の金が入らなかつた事を話した。然うして三十日迄に考へて置くから來いと云つた。約束の日に出かけると、來客で、待たされた。正月が近づくので、喜んで居る弟妹達と話して遊んだ。彼らが寢てから母の部屋で父を待つた。父は札を手にして來た。約束通りの金をくれた。その時父は「M。今度は御約束通りあげるが、來年はむづかしい、なるべく儉約してくれ」と云つた。これが眞となつて了つた。然うしてその年の暮に會つたのが父との最後に會つたことになつて仕舞つた。私は當時世間にも知られてゐない文學志望の青年で父から月々仕送りを受けて暮してゐた。私は養を受ける人を失つて狼狽した。こんな敬虔である可き場合に生活の事等に心を勞するのが卑しい事に思へ乍ら、自活する自信のない、氣の弱い自分は、將來が突然闇にとざされた氣がした。私には用意もなかつた。自分の仕事で獨立して行ける自信も、又仕事で生活する願ひも抱いてゐなかつた。父が永く生きてゐて呉れて食ふに困ら無い樣にして呉れるものと運命を信じてゐた、父の死は霹靂のやうなものだつた。萬事窮した氣がした。私は誰かの保護を受けるよりないと思つた。

併し父の死は私ばかりではなく、內山家全體のものを闇に陷入れた。親類は集つて來て會議を開いた。整理中だつた莫大の負債の償還の方法や、遺族の將來、生活の方針に就て額を集めて一室で相談した。誰も父の死が知れ渡ると債權

者が雲霞の如く押し寄せて來はしないかと心配した。併し幸に一人として父の死が新聞に通告されてからも來るものはなかつた。不思議に思つた程、來なかつた。香奠をもつて弔問に來た債權者はあつたが、返濟の請求をその場合する無慈悲のものはなかつた。中には何萬の借財の棒をひいて默つて手紙で證文を送つて寄越した人もあつた。そんな事も、父に同情が集つてゐる氣がして自分達は嬉しかつた。そんな風に母は父に死なれると、子供達とも別れるより余儀なくされて了つた。又母に別れなければならない子供らの心には誰も同情した。然うして今では永遠に、然う、田舍へその弟や妹達が出發してから八年目に遂に母も、父のあとを追つて沒くなつたので、その時別れた切りになつたのだ。あの悲しい停車場の別れが最後になつたのだ。達者にして居てね、達者でと祈つた弟や妹達が、學校を卒へれば又東京へ出られて母に會へると樂しんだ弟や妹が、その母にも今はもう永久に會へなくなつて了つたのだ。母も彼等の成長とその再會とを樂しみに東京で暮らして居たのだ。どんなに子供達が心を碎れて了ふ事だらふ。此世で最も樂しい母との再會が不可能に終つた事は、それだからこそ八年の永い月日も田舍にゐられたのではなかつたか。

淚！淚！
あゝ永遠の別離の淚！
最早愛もなし
死したるものに。
思ひ出は寂しく
あゝ我をくるしむ
辛き世なるかな

死なんかな、むしろ死なんかな
あゝ我が身を泣かしめるよ死の痛ましきこと

○

悲しい。別れの日
近づき來る。
哀れ、曾つては
樂しく一つ家に
起き伏も自由に
兩親のもとにありし子等
會ふ可き時も定らず
母に別れて遠く行く
悲しい日こそ近づけり
口々に云ふ
「御達者に、御達者に」

○

湧きかへる涙よ
あゝ父よ、母よ

愛と情の溢るゝばかりなりしは
かの雨の降りそゝぐ如く
地を濡らし訪るゝ如く
思ひ出は夜になれば
來りて我が心に雨とそゝぎ
悲しき音を立つるなり
きかずやその音のしめやかに
慰むる如く、
悲しめるものにその母のより添ふ如く
音たてゝ降る暗い雨のしらべよ
想ひ出の繁き泪よ
おゝ母の涙よ雨よ、母の涙よ
優しい母の跫音よ
降りそゝぎ、さては過ぎゆく
悲しき雨よ、思ひ出の雨

家では荷づくりが初つた。遠い田舍へ運ばれる多くの荷はこも包みにされて行つた。學校を退學した弟妹達は、その引越の混雜の中で無邪氣に騒いでゐた。あとで聞いたが母はその荷作りにも困つたさうだ。それは子供達の衣類が多く

は質屋へ入つて居た。それは父も知つてゐる事で、母は、親類のもの達から、子供の衣類を持つて來て見せろと云はれた時、言を左右にして置いて、すぐその晩こつそり家をぬけ出して、彼女の義兄が埼玉の方にゐるのを汽車で尋ねて行つた。彼女はその途中も只その衣類を其の日の内に質受けして揃へて見せる樣にしなければならないのでその事のみに氣を勞つて居た。義兄は母に金を借してくれた。母は大喜びですぐ一番列車に乘つてその金をもつて歸りに妹の家に立寄つて、用事を賴んで晩までに屆けてもらうようにして家へ歸つた。併し晩に成つても妹が來ないので、その時ばかりは、いつも怒つた事のない母も待ちくたびれて怒つたさうである。でも無事に衣類は揃つて、早速行李につめて、いつ呼ばれて檢分されてもい丶樣にして安心した。

悲しい出發の日は近づいた。

その日は二月の雨の降る日で、涙に濡れた皆んなは、嚴肅な淋しい氣持で集つた。出發をき丶傳へて意外な多くの見送り人があつた。心からの同情心で集つた人々ばかりであつた。

小さい弟や妹達は汽車の窓から首を並べて出した。人々は囁き、その運命の變遷に嘆息した。

プラットホームに最後まで自分と母が殘つた。汽車はうしろを見せて、愛する者達を隱して了つた。母は默つて祈るやうに去りゆく汽車に御辭義をした。私と母は電車で家へ歸つた。今迄全く人氣ない家の中、そこへ歸つて來ると犇々と孤獨を感じた。「あ丶」「あ丶」と云ふよりなかつた。自分と母だけだ。二人限りだ。ほかのあの幼ない愛しいものはもうゐない。然して明日は自分達も別れ〳〵に住んで寂しく暮すのだ。「いつ又御會ひ出來るでしようね、私は、」と母は泣くのであつた。淋しく氣のぬけた、生命のない空氣が二人を取り圍んだ。どこへ眼をやつても慰みの無い空虛さを感じた。空虛だ。この沈默！且つては愛と美に輝いて居た家、今はあばらやよりも悲慘な家に老いた母と自分の二人が、

死が破壊した殘骸に殘つて居る氣がした。

「あなたにも明日は當分お別れね、併しあなたとは又ちよい／＼御目にかゝりませうね」と母は慰める樣に言ふのであつた。

「僕も行きますよ」と私は頷いて答へる。

翌朝十時頃二人は家を明け渡して行く事にした。矢張り寂しかつた。昨日に變らず淋しかつた。家の奥の方はしんとして、もう戸も開けなかつた。淚がこもつてゐた。どこにも淚が、思ひ出の淚が、懷しい痛しい影がこゝに、かしこに、至る處に、哀れ氣に痕をとゞめて居た。無情のものも心を反映してゐた。只臺所だけが戸を開けて、天氣の日の光がさし込んでゐた。寂しい陽の光りだつた。衰へた冬の日のやうに黃ばんでゐた。女中も少くなつて居た。殘つて居る女中も明日はどこへ他の主人を求めて行く事か、臺所へ出てゐると、そとから悄々として入口に頭を出したのは未だ家が澁谷に移らない前に牛込の方にゐた時分、出入して、家のものゝやうに、永年のなじみの俥屋の親方であつた。

「御くに樣、今度はまあ、何とあなた樣には申し上げて御悔みしていゝか私にはさつぱり分りません。あんなにいゝ旦那樣でしたのに、こんなに早く御亡くなりになるなんて、夢にも思ひはいたしません。それにまあ、あなた樣はこちらに御殘りださうで御座いまして、私は、もう御子樣が御可愛相で御可愛相でならねえんです」と彼は齒の拔けた口でぶちよう法にさう云つてそこでメソ／＼と泣いたのであつた。

「△△屋さんにも古い御なじみで向ふにゐた頃は隨分御世話になりましたね。御子さん達もいゝ御なじみでね、よく／＼じいやじいやつてなついてゐらつしやつたわね。△△屋さん、何事も諦らめませうよ」と母は感慨無量と云ふ風に云つた。

「又これも永らく御厄介になりましたが、今日は御暇いたしますので荷物を頂戴に上りました。」と淚を拭き乍ら言つた。

「あゝ御常さんにも永く御世話になつてね、今度はどちらへか矢張り御奉公なさる」と母は御飯焚きの常と云ふ若い田舎者の女中に聞いた。伸屋の親方が彼女の叔父で、彼の世話で家へ來て居た女であつた。

「いゝえ、もうこれは奉公いたさせませんで、すぐ國へ歸しますつもりです」と親方はさう云つて

「をい、荷物はこれとこれかね、車につむからね」と女に云つた。ここには古い葛籠と柳行李とふろしき包みが出してあつた。

自分は一足先きへそこから表へ出ると庭には屑屋が二三人來て、そこに山のやうに積んである勝手道具類を、しやがんで、手に手に品物をしらべてゐた。母は名殘が惜しいのか中々出て來なかつた。漸つと出て來て「御待遠さま」と云つた。母は泣いてゐた。二人は門の方へ廻つて出た。そこは玄關の前の庭…母はぼんやり何か考へて居たが、「一寸、待つて下さい、一寸忘れたから」と云つて又あとへ引返へした。私は待つて居た。永かつた。行つて見やうと思つたが廢めた。私は寂しい庭に立つてゐると、涙がひとりでに流れて庭へ落ちるのであつた。空は晴れて澄んだ美しい靜かな朝であつた。併し私の心はおどらなかつた。どこまでも靜かな、うつろな靜かな空だつた、靜かな地面だつた。然うしてこの日の光りをどこで皆んなは見てゐるか、どこで眼を覺ましたか、今日の夕方にはもう遠い國の不案内ななじみの無い淋しい土の上に皆んな立つてゐるのだなと思ふと心が苦るしく張り裂ける樣であつた。母が來てくれるといゝと思つたが、永かつた。實に永かつた。私は心の內で「いつまでも、ゆつくりゆつくり名殘ををしんでゐらつしやい」と叫んだ。もう二度と此家にも來られないのだ。私もそこらを見廻した。よく記憶して置くやうに。そんな事が何にもならないと思ひ乍ら、矢張り、心に留めて置きたくて、玄關を見たり、玄關のそばの窓の戸の閉じられてゐる母の部屋へ眼を遣つた。母が來た。前屈みになつて顏を横にかくして、

「さあ行きませう、御待遠樣」
然うして門を出ると二人の見知らない婦人が一人は毛深いボアを卷いて、下品な何か厭な感じのする婦人が
「一寸あの伺ひますが、此所のお家は御引越しですか」と呼びとめて聞いた。
「はい」と母があと戻りして答へた。
「あの御貸しになるんでせうか」と重ねて聞かれて、
「さあどうで御座いませう、多分御貸しになるでせう、實はこちらの主人が亡くなりまして國の方へ轉じましたので、こゝの管理なさる方は」と母は饒舌り出した。自分はぢれつたくなつて、早く早くと思つた、厭な奴につかまつたと思つた。用がすんだらしく母は來た。
「もう借りやうと云ふ人があるのですね、すぐ塞がつて仕舞ふわね」と云つて歩いた。
「どこかで御別れに御茶でも飮んで行きませう、どうせ夕方までに伺へばいゝのだから」と云つた。
二人は歩いた。小學校が見へた。運動場にはワヤ〳〵と子供が放課時間で群ふて鬨の聲をあげて戯れてゐた。
二人は默つて佇んだ。
「あんな御兒さん達は幸福ね」と母は云つた。
それから四年經つて圓子が母の供をして上京した。義理の母の三人目の娘が嫁づいて居るY家へ來た。私の義理の姉妹は四人ゐた。二人が東京にゐて、長女はMの方に、三女はその母のゐる田舍に居た。母が父の死後田舍に暮してゐるのに同情して東京にゐる姉妹達とそのMにゐる姉達と相談して、母に東京見物に上京する樣に、それにはY家に滯在するのが一番都合が好いので、Y家から母を呼び迎へた。それで妹の圓子も憧れゐた上京が出來た。Mの方の塞姉の姉も永

く田舍に暮してゐるのを淋がつて居たが家庭が嚴格で何かの機會がなければ上京出來ないので、その母が上京する事に骨を折つて、自分もY家から呼ばれて上京した。圓子の上京は母をどんなに喜ばせたらう。別れてから子供に會ふのは之れが初めてであつたから母は雀躍りして喜んだ。圓子も母に會へることを喜んだ。自分は母から知らされて圓子が家に來てゐる事は知つて居たが、Y家へゆく氣にはなれなかつた。一體自分は父の居る時分から親類へ顏を出さない方だつたが、父が亡くなつてからは尙ほ引こみ勝ちで誰にも會ふのを好まなかつた。で圓子に會ひたかつたが訪ねて行かずに居た。圓子は東京に居た時からY家の義兄や姉とは氣が適つて、よく泊りに來いと呼ばれて喜んで出かけた。外の姉妹にはそんな事はなかつた。その子供達にも馴染みで、圓子は慕はれて居た。外交官で、長く外國へも行つてゐて、萬事洋風の趣味で、氣さくな明るい家庭であつたのが、圓子の快活な氣象に適つてゐた。彼は腹異ひのその姉を愛していつも賞めてゐた。滯在は永くなつた。

ところが私は突然、圓子が亡くなつた電報を受け取つた。私は驚いた。譯けが分らなかつた。母へ電話を掛けると、Y家へ行つて居ると云ふので、Y家へ電話をかけると、取次ぎが變つて、家扶らしい男が出て、私に向つて悔みをのべた。そうして圓子がA病院へ入つてゐた事を知り、そこで亡くなつて、今夜そこで通夜をする。病室は四號室だと敎へられた。私は狼狽して、病院へ行つた。

まるで夢のやうであつた。兄弟の中でも、體格も優れて丈夫で性質の明るい、快活で陽氣なあの生命の喜びに滿ちてゐた圓子が死ぬとは意外だつた。子供の時から誰も圓子の憂ひの無い朗らかな顏や氣象を讃めて彼女の將來はきつと幸福だと云はれて居た、その妹に突然この不幸があるとは意外の事だつた。電車にはもう燈火がついて居た。青山の墓地下を電車が通つた、三聯隊の裏門下のところから、墓地の方へ坂を上つたところ、ここに私の弟の墓があつた。十一二年

前に情死をした弟の墓があつた。私は電車がそこを通る時、妹も其處へ葬られるのだと思つた。弟と云ひ、妹と云ひ、如奈して俺の兄弟はこう不幸なのだらうと思つた。電車を降りて病院へ往く道は寂しかつた。私は古くその病院へ來た事があつたが、何處が正門か忘れてゐた。正門より手前の、小さい黑い門の中に、ガラス戸の建物があつた。覗くと殺風景の板の間で、隅に卓子が置いて有つて其の上に電球が淋しく埃つぽい室を照らしてゐた。私はこゝで聞いて見れば分ると思つて、

「若し若し」と硝子戸の外から奥へ聲をかけた。出て來たのは小僧のやうな黑い洋服を來た小さい年寄りだつた。

「A病院の四號室へ行くのは何處ですか」と私はきいた。

「それはこの先の正門から御入り下さい」と教へてくれた。

私は禮もそこそこに又馳ける樣にして歩いた。正門を入つて砂利の廣場を建物の方へ歩いた。廣場の中は寂しかつた。空を見たら、濃い星が疎らに、暗く高い繁りした何かの林の上にちらばつて居た。病院らしい汚い埃つぽい玄關へ着いた。そこには下足箱が並んでゐて、病院の字を染めぬいた法被を着た下足番が箒で、三和土を掃いて居た。埃が白く佗しく電燈の光の中に湧いた。

「四號室はどこですか」と私はその男に訊ねた。

「四號室は、そりやあ、その先きの廊下の下をくゞつて、向ふの建物に行つて聞くといゝ」と云つた。私は禮を云つて教へられた方へ急いだ。暗い殺風景な渡り廊下の下をくゞつて行つた、併し私の眼がボンヤリしてゐたのかどこにも建物が眼につかなかつた。進んで行くと、建物の裏の空地へ出た。そこに大きな煙突が聳へて、釜か何かあるらしい錬瓦の物置きのやうな建物があつて、その横手にコークスの殼を積んだ山があつて、側に葉の落ち盡した枝の多い大き

なポプラが四五本聳へて居た。炊事場か浴場のやうな建物だつた。私はどつちへ行くのか、そこへ來て初めてはつきりきいて來なかつたのを悔んで、四邊りを見廻して佇んだ。丁度月が昇るところで、寂しい月が、煙突の陰から遙かにのぼつて、その光りにそこらが照らされて明るく、しんとしづまり返へつて、右手の建物の平たい屋根が白くくつきり庭に低く連らなつて見へた。私は月をボンヤリ眺めた。夜は清らかに廣らかに見へた。あゝこんな廣い世界に、私は今、妹の死骸に會ひにこんなところへ來て居るのだ。それに妹はもうあの遠い〳〵大洋のやうな遙か無限の中に消えてしまつたのだと思つた。星がいやに靜かに、廣い空に明るくきらめいてる。數が少ないので空が廣く見へて尙ほ寂しく淸らかであつた。何時頃だらう、もう遲いにちがひない。私は氣が顚倒して居た。所嫌はず歩き廻つて見た。すると一棟、ガラス張りの病室が見へた。側へ近附いたが入口が分らない。どこかに大きい入口がある筈だが、自分の行つたところは入口がある方の裏らしく、大きな四角の窓が月光に照らされて並んで、その窓の下に芝生があつて、一寸した草花が生へてゐた。私はその芝生の中へ、石の低い柵をまたいで入つて、建物について角の方へ曲ると、そこに岩丈な大きな扉が締つて居るのにぶつかつた。崩れかけた三和土の段を昇つてその扉を押すと難なく内に開いた。扉を細目に開けて内部を覗くと、白い扉の室が並んだ前を眞直ぐに廊下だつた。私は下駄をぬいで中へ這入つた。病室の黑い番號札を見ながら進んでゆくと左手の方のガラス戸を透かして、その廊下が左へ曲つたところに白衣の看護婦の溜りがあるのが分つた。そつちへ行かうとする時一人の看護婦が、自分の方へ何か患者のところへ持つて行く途中らしく、消毒用の洗面器を手にして歩いて來た。私は「四號室はどこでせう」と叫ぶやうに訊いた

「あなた何と御尋ねなのです」と看護婦は仰山に驚いた。

「四號室です」と私は繰返へした。

「四號室、何の四號室で御座います。それより一體何處から御入りなすつて、」
「其處からです」と私はうしろの入口を指した。
「まあ、消毒なさつたのですか」
「いゝえ」
「こゝは傳染病の病室ですよ」
私は吃驚した。私は急に恐怖して入口の方へ引返した。うしろから、
「若し若し、困りますね、」と叫んで居る聲がきこえた。その聲で溜りの方にゐた看護婦が此方へドヤ／＼來たらしく、その方へ向つて同じの看護婦が、
「あの方消毒しなくていゝのでせうか」と叫んでゐるのが耳に入つたが、私は下駄をつゝかけると芝生に飛び下りて、一目散に先刻行つた玄關の方へ渡り廊下の下をくゞつて、あとも見ずに走つた。そこで時間をとつてゐるのがもどかしかつたのだ。私はもう氣が顛倒して了つて居た。頭の中は千々に亂れて居た。自分の不幸さが悲しかつた。妹の死を知つてからもう余程時間になるそれで居て、妹の死體にも未だ會へないのだ。私はこの病院のどこかの室で母や親類のものが集つて、通夜して居る光景を頭に描いた、そこへ私は迷つてゐるのだそれでゐてその室が分らないのだ。母も私がこんなにして尋ねあぐんでゐるのを知らないのだ。と思ふと妹の死が痛ましく思へて、私は一人で泣けて來た。私は亦初めの玄關へセカ／＼と辿り着いた。玄關では番人が下を向いて自棄に鐵骨の黑い靴の泥落しを動かして居た。
「一寸あの四號室は此方らしいのですが上つていゝでせうか」と私は不親切にされはしないかと思つて氣臆れがし乍ら尋ねた。

「泊るんですか」
「さあどうなるか分りません」
「泊らないなら、もう時間が切れるから早くしないと締めて仕舞ふよ」と下足番は叮嚀でなかつた。私は悲しくなつた。私は急いで入口を入つた。
「下駄は持つて行つて下さい」と後ろから注意されて私は三和土にぬいだ下駄をとり上げて歯の方を二つ合はせてかゝえるやうにして冷たい廊下を素足で踏んで行つた。廊下は廣かつた。兩側に病室らしい大きな扉がつゞいて居た。併し暗くて番號札が見へなかつた。これだけの廊下の兩側の番號札を見て行く時間はどの位かゝるか知れない。それに番號札がどの室にもかゝつてゐなかつた。そこらは患者のゐない室なのだらうと思つた。併しこの建物はどの位廣いか分らなかつた。薄暗い大きな廊下と廊下の四辻へ出た。どつちを見ても廣い同じ程度の天井の高い廊下が、先きは見へない位、遠くまで續いてゐて、人の影はまるで無い。私は弱つて了つた。凄い感じがして來た。これで時間が遅れて玄關の戸を締められたら、どうしやうと思つた。どこかに受付か何か有るのだらう。併し晝間だけあつて夜は無いのかも知れない。看護婦の溜りがある筈だ。私はどつちへ行けばいゝのか其の暗い四辻で迷つてゐた。と向うから看護婦が靜かに音もなく暗い廊下をそろ／＼と歩いて來た。私はその方へ進んだ。近づいて見ると可成の年輩の、永年こゝに務めて經驗のあるらしいどこか品のいゝおばあさんだつた。私はどんなに嬉しかつたらう、懐しかつたらう。この人が私を妹に會はしてくれるやうな氣がした。私は帽子をぬいで、叮嚀に「四號室はどつちでせうか」と聞いた。
「四號室、と、誰方を御尋ねです」
「實はY家のものが居りますので、患者が昨日亡くなつたので、今夜通夜をしてゐる筈なのです」

「Y家、はてね、では多分もう御遺骸は御家の方へ御歸りになつたでせう、病院では絶對に通夜はいたさないので、若し未だこちらに御遺骸がありませば、死亡室にある筈です。たしか今朝御引取りになつたと思ひますが、念のため、この先きの看護婦室で御きゝ下さい。死亡室ならそこで御案内いたしますから」

私はさては四號室は死亡室のきゝ誤りだつたのだなと思つた。それにしても病院で通夜すると云つたのはどうしてだらふ。電話をかけた後にあれから死骸を家の方へ運んだのかしら、それとも死亡室に未だ置いてあるのかしら、さうとすればずい分冷淡すぎて可笑しい。私は教つた方へ廊下を進んだ。いくつも廊下を曲つて、漸つとそれらしい、一ヶ所燈光が白く靜かに廊下へ射したところへ來た。ガラス戸で室の内部が見へた。私は中を覗つた。卓子が澤山あつて、若い看護婦が五六人、ガラス戸の外の私に氣がつかず、各自思ひ〳〵の仕事をして居た。試驗管のやうなものを洗つて居たり、机に向つてペンを動かしてゐたり椅子についたもの、歩いてゐる者――暗い處ばかり通つて來た眼にその若い女の集つた明るい室は溫く明るく幸福さうに見へた。私は彼女達と妹は同い年頃だつたと思つた。皆な若い幸福さうな顏に見へた。暗いだゞ廣い病院の中の此の一室ばかりが春の樣に美しく陽氣にすら見へた。私は一寸硝子窓の外に立つて用事を訊くのを躊躇してその光景に見惚れてゐたが、コツ〳〵と硝子戸を叩いた。と一人の看護婦が私の方を見てハツと驚いた表情をして手にもつた試驗管を卓子の上に置くと扉口の方へ向いて歩いて來た。私は幅を立てゝ扉の開くのを待つた。扉は開れて看護婦は何用かと彼の前に立つた。

私は、譯を話し、死亡室へ案内してくれと頼んだ。看護婦は室へ入つて鍵をもつて出て來た。もう一人の看護婦があとから出て來て「△△さん一緒に行かなくていゝ」と聞いた。恐くはないと云ふ意味らしかつた。「大丈夫よ」と彼女は言つて、

「多分もう御宅へ御引取りになつたと思ひますが」と云ひ乍ら私の先きに立つて歩いた。私は帽子を手にしてあとから従いて行つた。寂しい廊下を幾曲りもしてゆくと、私は妹もこの道を死骸となつて運ばれて行つたのかと思つて、涙ぐましい滅入つた氣持になつた。それにしても可笑しいのは、こんな晩に妹の死骸ばかり此處にあつて、母も他の人もゐないのは如何うしたのだらうと術つた。軈て暗い廊下の隅のペンキ塗りの汚い扉の前に來ると、看護婦は「こちらです」と云つて歩みを停めた。然うして鍵を錠に突きこんでギイと廻した。扉は靜かに開れた。がそこは空つぽで何も無かつた。私はゾッとして内を覗いた。その寂しさ、見たところ小さい物置きだ、死骸の物置!

私は禮を述べて又看護婦ともと來た道を引き返へした。然うして看護婦と別れると淋しい廊下を駆けるやうにして玄關へ來た。玄關の扉はまだ開いて居た。下駄を履いて門内の廣場へ出ると月が白く夜も大分更けたらしく星が高いところで小さく光つて薄い雲が動いてゐる。涙が眼ににじみ、悲しさが胸に集つて、ぢれつたく心慌しかつた。飛ぶやうに急いで再び電車に乘つて、私はそこから麻布の叔父の家へ廻つた。行きつくと叔父夫婦も留守だつた。國子の事でY家へ行つてゐると取次の女中が言ふので、電話をかけて母の所在を知り度いと告げ、Y家へ電話をかけて貰つた。母はそこにゐて、すぐ彼に來いと云ふので、私は救はれた氣がした。私はそこから數丁離れたY家の門前へ行つた。ところが大きな門は厳しく堅く戸締りがされて居た。いくら押して見ても開かなかつた。私は門をあつちこつち押したり引いたりして見た。私は今電話をかけてあるのに門を開けて置いてくれないのに悲しく腹が立つた。大きな聲を出して呼ぶのも可笑しいので、どこかに入口が有りはしないかと塀を廻つて、入口を探したが、それらしい所も無く私ははたと當惑した。私はがつかりして靜まり返つた邸内の方を往來に佇んで見た。今迄怺へて來た悲哀が、一度に發した。何と云ふ幸薄い兄妹だらう、死んでも何かく遮るものがあつて、見る事が出來ないのか、と私は思つた。然うしていつそもう歸

つて了はふと思つた。併し母が居る事が分つてゐるので、今に誰か出て來るに違いないと思つて、塀のところを歩いて居ると、古い塀が盡きて、そこに新しい板圍ひをした普請中の外圍ひらしい塀があつた。一帶に藁で包れてゐた。そこにくゞり戸があつた。くゞり戸も藁でつゝまれてゐるので一寸判らなかつた。戸に觸れるとすぐ内で鈴がけたゝましく鳴つた。然うして犬の吠える聲がした。私は內へ入つた。そこは庭で、邸が木立の彼方に黑くしづまり返つて建つて居た。とすぐ家の扉の開く音がして人の出て來る足音がした。それは母であつた。

「矢張りさうだつたのね、さあどうぞ」と母は迎へに來て呉れた。私は母のあとに尾いて行つた。そこで私はY氏夫婦に會つた。そこは新しく建てた室で十二疊位の部屋に、妹の棺が置れて居た。私はY氏に妹が世話になつた禮をのべた。Y氏は油繪をやつてゐる話をした。然うして圓子の肖像を一枚描いたのが鎌倉の別莊にあると云つた。彼は急に書生を呼んで「君、氣の毒だが明日Kへ行つて圓子さんの肖像をかいたのを持つて來てくれ給へ」と命じてゐた。十一時近く私と母は邸を辭した。晩いので妹の家へ泊る事にした。二人は電車へ乘つた。小雨が降つてゐた。電車を下りると雨は晴れた。靜かな道を二人は濕つぽい夜氣に濡れて行つた。突然に母は

「あなたには御話ししなかつたが、圓子さんの御亡くなりになつたのには、可愛相な理由があるのよ」と云つた。

「どんな理由」と私はゾツとして訊いた。

「實は圓子さんは姙娠して居たのよ」と母は聲を潜めた。「盲腸炎で亡くなつたと御ふれしてあつたのですが、つわりのひどいので亡くなつたのよ」と母は言ふのであつた。

自分は驚き乍らその相手の男が何者だらふと思つた。朧氣ながら私はその男が見當がつく氣がした。しかしまさかと思つたが矢張りそのYであつた。私は事の意外なのに凄い氣がした。然うして母は靜かに歩き乍ら圓子が死ぬまでの事

を話した。

それを訊くと、圓子が姙娠したので初めてYとの暗い關係が知れて、つわりが烈しいので入院したが、それから親類中で圓子を憎んで、廢籍するとか又は、姉達は、圓子に死んで謝罪しろとか、烈しい漫罵を頻に加へた手紙を寄越した事をきいた。私は聞いて居る内に悲憤の涙が流れた。自分は母に

「何故僕に知らさなかつたのです」と不平を言つた。殘念に思つた。一寸した誤ちを犯したものを皆んなで寄つてたかつて責め殺したもの丶やうに思つた。その呪はれた子供と共に圓子が死んでしまふ事を望んだにちがいないと思つた。

母は「Yさんも皆んなからさん〴〵叱られて油を、絞られたでせう、しかし男さんだから、まあ平氣なものですが、圓子さんはそれは自分に十分落度があつたから、勘忍してゐらつしやつたが、何を言つてゐると云ふ腹もあるらしかつたわ。だがまあ圓子さんは死んだ方が幸福かも知れない、その兒が生れて生きてゐて御覽なさい。それこそ又ゴタ〴〵しますわ、それでYさんは病院へも來る事を禁じられて終つてね、とう〳〵會ないで終つたのですよ。それに可愛想に、私も惡い事をしました。丁度、御亡くなりになる時、用があつて家へ歸りましたの、看護婦も大丈夫だと云ふし圓子さんも大へん工合がい丶から行つておいでとすゝめて下さつたので家へ歸つたの、その留守で急に容體が變つて御亡くなりになつたの、で私も遂にお會ひ出來ずにしまいました。看護婦が行つて見るともうすつかり御顏色が變つてゐるので吃驚して、醫者を呼んで來て、さあ、注射をするやら大騷ぎしたが、間に合はなかつたさうで、私へ電話がかゝつて行つた時はもう御亡くなりになつた跡でした。」と云つては母はその時家へ歸つた事を深く悔んで話した。私は何か妹が粗末にとり扱はれた氣がして不愉快だつた。

「まあ家に日記がありますから讀んであげて下さい」と母は云つた。私達は妹の家へ歸つた。主人は旅行中で留守だつ

た。妹と母と三人で、圓子の話で更かした。私は母から日記をかりて、二階にのべられた床へ行つた。私は日記を見た。それは圓子がYに愛を感じて、煩悶してゐる時から、その愛が報いられた迄の感想風の日記であつた。私は讀み乍ら、泣いた。不愍な、不幸な戀に身を誤つた圓子の爲めに泣いた。罪を責める氣にはなれなかつた。むしろ同情が强く湧いた。

翌日私は母とY家へ告別式に行つた。棺の上に、Yの描いた圓子の油畫の肖像が飾られてゐた。

Yは風邪で引籠つてゐると云つて會はなかつた。私も强いて會ひたくなかつた、私は初めて圓子の死顏を見た。これは生きてゐる時よりも美しく見へた。哀れな戀に生きて、烈しい苦悶から、解脱したやうに、凉しい哀れな顏をしてゐた。私は深い感動に包れて棺の前に立つた。その日に燒場へ運び、翌日納骨に行つて、私は義姉に會つた。義姉は共に妹の家へ來た。その時私は義姉からYが圓子ばかりでなく、その時上京した一番上のMの姉と戀して、親類で悶着が起つてゐる話をきいた。母もその話は初めてゞ驚いた。然して母の上京するのをすゝめたのは兄とMの姉が逢ふためであつたのだ。圓子は上京しなければよかつたと思つた。私は圓子が何も知らなかつたのを寧ろよかつたと思つた。翌日、青山で淋しく埋葬した。Yも來た。私はYとは話さなかつた。母はYと何か話してゐたが、Yが少しの愛でも圓子に抱いて居てくれたら嬉しいと思つた。僕が八年位の間に父も亡くなり、母も亡くなり、圓子も亡くなり、私は世の中の淋しさを深く感じる。



狗が疲れてゐる

廣津和郎

一

『あの……ギンコウの事でお出でになりました』

未だ物馴れない、來たばかりの女中が、かう取次いで來た。

『ギンコウの事で？』

自分は首を傾げた。銀行の事とは何んだらう。若しかすると不渡りでも出てゐるのではないかと直ぐ考へたが、併し不渡りでも出てゐるのであれば、A社の會計のSから、何とか自分のところに電話か何かで前以て話がある筈だ。

『どんな人？』

『洋服をお召しになつてゐらつしやる方で。――一寸玄關口までお出で下さいといふ事でした』

自分は立つて玄關に行つて見た。すると、K雜誌社のK君が立つてゐた。

『おゝ、K君だつたのですか。さうですか』

『原稿を頂きに上つたのですが、未だお出來にならないでせうか?』

『原稿を?』と自分はぐつと詰つて、もぢもぢしたが、腹の中では、女中が『ギンコウ』と『原稿』とを間違へた事がへんに可笑しかつた。そしてその可笑しさが、自分の返答につまつた氣持を、少し輕くさせてゐてくれたが、併しK君の顏に當惑の色が見えると、自分は心がはらはらして來た。『未だ實は……その……題材はきまつてゐるんですが、どうも』

『一枚もお出來にならないんですか?』

『實はよく眠れないんでね。こなひだから毎晩々々眠らないんです。併し昨夜はよく眠れたのです。ですから、今日は書けます。屹度書けます』

『あの……實は全部が印刷所に行つてゐるので、あなたのが出來ないので締切れないんですが……』

溫厚なK君は自身の靴の爪先を、ステツキで無意識に輕く突きながら、俯向き勝に呟やくやうにかう云つて、一寸自分の顏を見上げ、それから直ぐ俯向いた。彼自身の當惑さうな色と共に、恐縮してゐる自分に同情するやうな色を、同時にその眼に浮べてゐた。

『今晩中には書きます』

『どうぞ。──Sさんが一昨日になつて書けないとお投げ出しになつたので、若しあなたまでがお出來にならないやうですと、途方にくれる次第なのです』

『屹度書きます、屹度』

自分はさう答へながら、一昨日此處にやつて來て、藝妓を呼んで騷いで歸つたSの事を思ひ出した。

『どうしてもK雜誌の小說が書けないので、投げ出して東京に出て來たんだ』とSは急に鎌倉から東京へ出て來た氣持を、こんな風に說明してゐた。『書けないのぢやあなくて、要するに書く事が何もないのでね』

『書く事が何もない!』と自分はSの言葉を鸚鵡返しに繰返した。『それや實際ほんたうだ。自分だつて書く事が何もない』

自分は何となくをかしくなつて、笑ひ出した。――ほんたうに書く事が何もない。頭の中があつけらかんとしてゐる

……

『どうぞよろしく。アテにしてゐますから』K君はさう云つて、しほしほとしながら歸つて行つた。

自分は二階に上つて、机の前に坐つたが、扨てと思つてペンを握つて見たが、おいそれと直ぐに好い考が浮んで來るわけのものではない。それで『ギンコウ』と『原稿』との今の話を又思ひ出して、原稿用紙の上に、『ギンコウ』といふ字と『原稿』といふ字とを、いくつもいくつも徒ら書してゐた。

自分の今ゐる此家は、新橋驛附近の或待合で、自分はもう約四十日ほど前から、此家に來てゐる。別段藝妓遊びをするためではない。原稿を書くためである。かう云ふ商賣を開いたばかりの、未だ馴れない此家のおかみさん――自分及び自分の友人達は、この人をおかみさんと呼ばずに、奧さんと呼び慣らしてゐる――は、自分に藝妓を呼ぶ事を勸めもしないし、自分も亦別段藝妓を呼んで見たい氣もしないので、四十日の間に未だ一度も女を呼んで見ない。――丁度そのおかみさんが馴れない女中に手傳つて、自分の晩飯をはこんで來てくれた。

『ほんたうにお氣の毒ですね。お書けになれないところを、ああ云ふやうに催促されて』

『いや、催促する方が尙氣の毒ですよ』と自分は云つたが、陰氣な、困つた顏を見せるのがイヤだつたので、自分は女

中に向つて、

『原稿とギンコウとの違ひは面白かつたね』と云つて、笑つてしまつた。

『御免下さいまし。――ギンコウの事と被仰つたやうに聞えたものですから』

『いや、君が悪いのでは少しもないよ。唯ギンコウと原稿との違ひが、僕には面白かつたんだよ――尤も僕だけの面白さなんだがね』

自分はAと云ふ出版社を小説を書く傍らやつてゐたが、それが地震前からずつと失敗つゞきで、地震後は殊にその經濟狀態がひどかつたものだから、始終銀行の交換に苦しめられた。殊に昨年の後半期はそれが烈しかつた。手形の交換を間に合はせるために、泥棒をとらへてから繩をなふと云ふあの諺のやうに、手形が銀行にまわつてから、その金をこしらへるために小説を書いてゐると云つたやうな事が始終だつた。二日置き、三日置きにその交換がある。そのために始終原稿を書いてゐなければならない。自分は意志的な人間ではないが、衝動的な元氣を少し持合はせてゐるので、『泣言を云はずに、やつつけろ』と云つたやうに自分で自分の心持を引立てては、一生懸命に働いてゐたが、併し、本心決して平氣でゐたわけではなかつた。『銀行』と聞くと、又かと思つて、ぞつとしないでは居られなかつた。――それで今も、『ギンコウ』と聞いて胸に不安を覺えた所以なのである。ところが『ギンコウ』でなくて『原稿』の間違ひだつたので、自分にはそれがとても可笑しく感ぜられたのだが、そんな可笑しみが何も知らない他人に通ずる筈はない。それだものだから、自分が『ギンコウ』と『原稿』とでひとりで笑つてゐるのを、おかみさんと女中とは不思議さうに見てゐた。

二

晩飯を濟ましてから、自分は又机に向つたが、やつぱり書けさうな材料が浮んで來なかつた。原稿用紙とぢつと睨みつこらをしてゐると、自分の頭が蕊の蕊まで疲れ切つてゐるといふ事だけがはつきりしてゐて、その他の事は何も浮んで來ない。かと思ふと、何か一心に題材を考へてゐるつもりで氣を無理にはりつめてゐる中に、ふと疲れた頭の中に、今朝方都新聞で讀んだ讀者から記者へ相談する欄の一つの記事が浮んで來た。それは五十三になる老婆が、今まで十數年ひとり息子を育て上げるのに一心になつて働いて來たが、近頃その息子に嫁を貰つた。さうしたら、急に淋しくなつて來た。息子と嫁とは二人とも自分を大切にして、孝養をつくしてくれる。それだのに自分は淋しい。一體自分はどうしたらいいだらう。――かう云つて記者に相談してゐるのである。ところがそれに對して記者はかう云ふやうに答へてゐる。――それはあなたがお息子を育て上げるために今まで緊張してゐられたのが、今になつて急に安心されて氣持がゆるんだためです。あなたに『仕事』がなくなつたためです。併しあなただとて五十三なら未だ働ける年ですから、お嫁さんに手傳つて家事の事をなさい。そして休息の時だと思つて休息なさい。その中、來年にでもなればお孫さんが生れます。さうしたら、あなたには今までと違つた、新しい一つの仕事が出來て來ます。それまでのところは保養と思つて休息してゐらつしやるがいい。親戚知己を御訪問になるもよろしからう。物見遊山をなさつたり、名所舊蹟をおまはりになつたりするのもよろしからう。……と。

自分はそれを思ひ出すと、この記者の答へがへんに氣に入つた。さういふ淋しみを五十三の老婆が訴へるといふのは、昔には稀らしい。そんな風な淋しみは老人になると、昔から人間は感ずるものなんだらうが、大概はそんな事は口に

出して云はないものである。それを云ふところが、而も新聞に相談してやつたりするところが、この老婆が少し新しいのかも知れない。そしてこんな事を相談して來る老婆には、この記者の答では滿足出來ないのかも知れない。それだのに、自分にはその老婆をいたはるやうに、噛んでくくめるやうに、今にお孫さんが生れるから、それまで休息してゐらつしやいと云つてゐるところが氣に入つた。——實際こんな風にしか答へようもないだらうけれども。殊に『親戚知己を御訪問になるもよろしからう。物見遊山をなさつたり、名所舊蹟をおまはりになつたりするのもよろしからう』といふのが氣に入つた。『面白い』と自分は後腦に兩手をかつて呟いた。『面白い。人間の生活といふものは、何處かに可愛さがある。とても悲しい可愛さがある』

自分はさう呟きながら、仰向けにごろりと疊の上に臥そべつた。『面白い、面白い』と臥そべりながら又呟いた。が、頭はじいんと底鳴りをしてゐるやうに疲れてゐる。自分は疲れてゐるなと考へた。さうしたら、急に今度は氣が重くなつて來た。『何が面白いものか』と突然に忌々しくなつて來た。——そんな老婆の淋しみも面白くなければ、記者の答だつて面白くも何ともない。

『それより原稿を書かなければならないぢやないか』

苛々して來た。

こんなに變な事に面白がつたり、かと思ふと、その反動見たやうに、急に苛々したりして來るのは、どうしても頭の衰弱だ。——近頃は確に腦神經が衰弱してゐる。

『ままよ、散歩にでも出かけてやれ。K君には氣の毒だか、散歩でもして、氣を紛らして來てやれ。今晩中に書き上げると云つたつて、夜中に印刷所があるわけではない。今晩中だつて、明日の朝だつて同じ事だ。明日の朝までに半分で

も出來て、それを印刷所にまはさせて置けば、後の半分が正午までで大丈夫だ。朝間に合ふものなら、正午まで待つたつて間に合ふに違ひない。正午まで待つて間に合ふなら、午後二時だつて間に合ふに違ひない。午後二時まで間に合ふなら、午後三時だつて間に合ふに違ひない。午後三時なら、午後四時、午後四時なら午後五時……午後五時になれば、印刷所は間もなく閉ぢる。印刷所が閉ぢてしまへば、翌日の朝にならなければ印刷所は開かない。だから翌日の朝でも間に合ふ。朝で間に合へば、正午でも間に合ふ。それから午後二時、三時、四時、五時、その又翌日の朝、正午、午後二時……等、々、々』

から考へて來ると、間に合ふと間に合はないの、正確なけじめは一體何處にあるのだらう。朝と正午とか、正午と二時とかのやうに、時間の合間があると、間に合ふ合はないのけじめが多少つきさうに思へるが、一體時間といふ奴は、一秒、一秒の連續だ。それだから、この一秒に間に合つたものは、次の一秒にだつて間に合ひさうだ。從つてその次の一秒だつて間に合ひさうだ。……こんな事を、自分は時々食ひ過ぎと胃病とについても考へる。飯の食ひ過ぎでも、例へば一杯の茶碗の飯粒が幾粒あるかは知らないが、若干粒あるとする。普通三杯ですむ飯を四杯食べたら食過ぎになる事は解るが、三杯の飯に、もう一粒食つたつて、さう胃の腑には影響がなささうだ。三杯と一粒で影響がなければ、それにもう一粒食つても影響がなささうだ。更にもう一粒食つても影響がなささうだ。更に一粒食つても、更に更に又一粒食つても……かうして考へて行くと、食ひ過ぎと食ひ過ぎでないとのけじめは一體どこの一粒にあるのだらう？ それを一粒食へば食ひ過ぎで、その前までは食ひ過ぎでないと云つたやうな一粒がどこかにあるに相違ない。………

だが、一體こんな考が何になるのだ。俺の頭は絶えず餘計な事を考へすぎてゐる。こんな考のために、俺の頭は疲れて、ゆるんで、へとへとになつてゐる。朝起きると晩まで、こんな益にもならない連絡のない事ばかり考へてゐる。―

ー『氣を附け！』から自分に向つて怒鳴りつけなければなるまい。『しつかりしろ。阿呆！』と。

自分の右の手はこめかみのところで、ネヂをひねるやうな形をした。時計のやうに頭にかけるネヂがあつたら、と自分はよくさう思ふ。さう思ふ心持が、いつか手に傳はつて、自分の右の手は、コメカミのところで、ぎい、ぎい、とネヂを卷く手附をするのである。

『散歩だ、散歩だ。散歩の外に仕方がない。藝妓とお喋りする興味が少しでもあれば、こんな時は藝妓をよんで酒でものむといいのだが、藝妓とお喋りしたい慾望もないし、自分には酒が少しものめない。だから、散歩の外仕方があるまい』

自分は帽子を手にして立上つた。

三

散歩と云へば銀座だ。東京ではさしづめ銀座の外仕方がない。それに新橋驛のわきからだと、銀座までは譯はない。自分はアッシのステッキを持つて、ぶらぶら銀座の方へ歩いて行つた。梅雨期らしいじめじめした肌さわりではあるが、そして空が一面曇つてはゐるが、併し雲はかなり高くて、そして薄い。降りさうもなさうなのが心丈夫だつた。新橋の方から尾張町の方へ歩いて行つたが、丁度初夏の夜の銀座は人の出盛りで、夜店のある右側のペエヴメントは、明るい灯の間に、人の姿がうようよしてゐる。自分はそれで左側のペエヴメントの上を歩いて行つた。何の興味も湧いては來なかつた。

E――といふ喫茶店に腰をかけた。そこは男ボーイの、電燈が非常に明るい店で、割合にアイスクリームがうまい。

自分はアイスクリームを注文して、それを一匙々々ゆつくり食べた。と突然、『J・O・A・K・こちらは東京放送局であります』が始まつた。何とかいふ醫學博士が子供の衛生といふ事について講演を始めた。が、語尾の『であります』だけが、はつきりしてゐて、他の言葉は、よほど耳を澄してゐなければ聞き取れない。――で、自分は耳をすまして、最初の方を一寸熱心に聞いたが、『子供は第二の國民であります。だから子供の健康は、日本の未來に關係します』と云ふ言葉と、それから、解り切つた寢冷えの話とか、どうして腹を丈夫にすべきかとか、そんなやうな話だつたので、聞く事を止めた。――大體醫者の話と云ふものはいつでもさうだが、彼等ほど、一般の人間が、自分達の身體の事を少しも知つてゐないやうに思ひ込んでゐるものはない。熱があつたらば、發汗劑をのめとか、腸が停滯したら、下劑をかけろとか、灌腸をしなければならないとか、その又下劑はヒマシ油が一番好いとか、そんな事までも、一般の人間が少しも知らないとでも極め込んでゐるやうな物の云ひ方をする。いや、不衛生よりも衛生の方が、人間の健康のためになるといふ事さへも、一般の人々が知らないものと思ひ込んでゐるのではないかと思はれるやうな顔付で語る。

自分は喫茶店を出て、又とぼとぼ歩いて行つた。取留めない、益にもならない考が、尚もつづいて行つた。三四人の洋裝の娘達が、つやつやした頬をして、にこにこ笑つてお喋りしながら歩いて行つた。

日本の娘達は、
大根のやうな足をして、
眼をなくして笑つてゐる。

こんな文句が自分の唇に上つて來た。洋裝をした日本の娘達を見て、外國人がどんな印象を受けるだらう、と云つたやうな、益にもならない考が、自分の頭を又襲つて來た。

『やあ』

突然聲をかけた人間があつたので、吃驚して自分は立止つた。見ると、身長の高い木戸が自分の前に立つてゐた。

『やあ』

自分は此處で木戸に逢つたのが嬉しかつた。所在ない自分の頭を持扱つてゐたので、今此處でこの親しい友達に出會つた事がうれしかつたばかりではない。自分は彼にもう三ケ月も會はなかつた。だから彼に會ひたい氣が丁度してゐたところだつた。

『兎に角、お茶でも飮まうか』

『うん、實は今アイスクリームを飮んだばかりなんだが、併しウウロン茶位なら飮んでもいいな』と丁度ウウロンが直ぐ近かゝつたので、自分は云つた。

二人はウウロンに這入つて行つた。非常に空いてゐた。隅のテーブルに腰をかけて、ゆつくり話すのに丁度よかつた。

『時に何は？』

『うん、あれか』と木戸はうなづいて、『實に弱つてゐるよ。實際どうしていいか解らないでゐるよ。兎に角、家を持たせてゐるが、併し極端なヒステリイでね。近頃は益々ヒステリイが高じて來てね。――夜なんか外に飛び出すんだよ。

死ぬと云つてさ。ヒステリイだから、ほんとうに死なないとは限らない氣がして、捨てて置くわけに行かないものだからね。僕が後を追つかけて行くんだよ。往來の人は振向くし、實際恥しいよ。でも仕方がないから追つかけて行くと、君、井戸に片足など入れかけてゐたりするんだよ』

『かなはないな』

『かなはないよ』木戸は暗い顔をして、一寸俯眼になつて、考へてゐたが、『僕はそれで方々の井戸をかぞへて見たんだがね、その家の附近――つまりN町附近は、どうも井戸が多過ぎるよ』

『ははは』と自分は、重苦しい話の間に、際どいところで一寸ユウモラスな觀察を挾む木戸のいつもの癖に、或快感を感じた。『さういふ間に、井戸の數などをかぞへてゐるところは、君らしくつていいね。併し東京に未だその古井戸があるもんかなあ』

『さう思ふだらう。僕だつて平生は古井戸なんかに氣がつきはしなかつたんだがね。ところが、さういふヒステリイに苦しめられると、氣のつかないでいい事に氣がつかなければならなくなるんだよ。そんな風に止むを得なくなつて、氣がつき始めたんだが、數へて見ると、割にあるもんだよ。殊にあのN町附近は、昔の屋敷町なので、餘計にあるんだね。――併し實際弱つたよ。僕は精根つきたといふ感じがあるよ。一層自分が肺病にでもなつてしまへばいいと思ふよ。肺病にでもなつたら、もう自分に負擔する力がないと云へば、それで何とか片がつきさうな氣がするからね』

『…………』

『それでなければ、洋行してしまはうかとも思ふんだ。一年なり二年なり外國にでも行つてゐれば、何とか自然片がつくやうになるだらうと思ふんだ。――そして洋行するなら、從兄の奴が、金を出してもいいと云つてゐるんだよ』

『……』

自分は木戸の顏を見た。木戸はこの一年ほどの前からその女との關係が出來てから、すつかり痩せてしまつてゐた。顏色も惡く、色艶がなくなり、髯の剃り跡などが、へんに病的に靑黑くくすんでゐた。そしてこの前會つた時から今日までの三ケ月の間に、尙又げつとりと痩せてゐた。——品行方正といふよりも、學校なども優等生で、何事にも平均の取れた、圓滿な常識の持主で、如何なる人生のワナにも陷らない事を誇とし、又誰から見ても、この男だけは安全にこの人生を航海して行くだらうと思はれてゐるやうな男だつたのに——おお、たとひどんなに平凡にでもいいから、波瀾なく、その一生を過すといふだけの事が、何といふむづかしい一つの仕事なのであらう！といふ事を、自分は彼の生涯に突如として起つた今度の出來事を見ると、つくづく考へる。——彼は昨年から、一人の女と知合つた。すると彼の常識と彼の修養とに拘らず、彼はぐんぐん深みへ陷り込んで行つてしまつたのである。若くして結婚し、今まで兎に角、それ程の波瀾のない家庭の主人公として暮して來たのが、今度の女の事件が出來てからは、がらりと變つてしまつたのである。いや、がらりと變つたといふ事は、適當でないかも知れない。だが、尠くとも、彼は今までの一切の平靜な生活を顧みる餘裕を失つてしまつたのである。自分の家庭も、世間體も……

『そして君のフラウは？』

『うん、それが張合がないんだよ。僕は一切の事を秘密にしてはゐられない質だからね、僕は女房の前に告白したんだよ。ところが、彼女は何も云はないんだ。唯默つてゐるだけで、何ひとつ云はないんだ』と木戸は茶を一口飮んで、『石のやうに沈默してゐるんだよ。何か意見を述べさうなもんだと思つても、全然無表情な顏をしてゐるんだよ』

木戸が茶をのんだのを見て、自分も、女給が持つて來たのを、そのまま忘れてゐた茶碗を取上げた。茶は生温くなつ

てゐた。

『併しこのまま此生活が續けられて行き得るものかどうか解らない。僕には神經が痛むだけでもやり切れない。――その女が三角關係はイヤだと云つてヒステリイを起す。と云つて、僕は女房を離緣するわけには行かない。僕の女房がどこかで幸福に暮せる見込が立てば、僕は女房と別れてもいいと思ふ。併し到底幸福にくらせる質の女ではない。さう思ふと、やつぱり僕があゝして置かなければならない。それにそのヒステリイの女だとて、僕が結婚して幸福になれるやうな女ではないんだ。――僕はどうしていいか解らない。僕は寅年なんだが、やつぱり年まはりなどといふものはあるもんだと思ふね。僕の一とまはり前の寅が、有島武郎氏なんだ。輕井澤の心中事件などを考へると、人事ではない氣がする』

『おい、冗談ぢやないぜ、そんな下らない事は考へるなよ』と自分は態と笑ひ聲を出して、おどけたやうにかう云つたが、心は木戸の性格を考へて、それを彼の今の言葉と對照して見ながら、暗くなつてゐた。

木戸の話は世間にない話ではない。さらにあり過ぎる程ある話だ。人間は開闢以來、さういふ事件を繰返してゐるのだ。それだから、その出來事だつて、木戸の心の持ちやう一つによつて、どんな風にでも解決出來ると云へない事はない。――いや、木戸の心の持ちやうによつて、その二人の女の調和も取れて行かないものではない。そんな事は人によるとやつてゐる。又妻と別れて、片一方の女と同棲してしまへないものでもない。或は又その女と別れて、再び妻のところに歸つて行けないものでもない。調和をさせて行くか、或は一方につき他方を捨てるかする外に解決のしようはない。そんな解決は、かういふ場合に立至つた人間は、みんなやつてゐるのだ。事件は簡單なのだ。――けれども、木戸に取つてはそれが簡單でなくなるといふ事も自分にはよく解る。自分は學生時分から、彼と親しくつき合つてゐるが、

その時分から、この人生に少しもすれてゐない彼は、今でもやつぱり少しもすれてゐない。彼にはいづれの女をも捨てる事が、その女を不幸にするものとしか思へないのだ。人間にはそれ自身の生活力、生命力があつて、木と同じに、他に植ゑられたら一時は衰弱するが、いつの間にか生命を取返して、やつぱり呼吸し、生活して行くといふ事が考へられないのだ。――自分は彼のさういふ考へ方、感じ方について、十分敬意を持ち、同感を持つと共に、彼のさういふ事のため心を消耗させて行くのを見るのは、又痛ましいやうな氣がする。併し成行きにまかせるより仕方があるまい。やつぱり見まもつてゐるより仕方があるまい。實際又、こんな事といふものは、はたの氣持でどう出來るものではない。

『併し經濟的方面もなかなか大變だね』と自分は、彼の感情の苦痛の訴へから、話題を轉換させるために云つた。『二軒の家を持つのは、なかなか大變だらう』

『ああ、隨分大變だよ。毎月よくやつて行けるものだと自分で思ふよ』

『さうだらうね。併しこいつはお互にさうなんだから、仕方がないよ。併し金のないといふ事が、東京では恥辱にならないから、割に樂だね』

『それはさうだ、ほんたうにさうだ。東京といふところは、それは好いね』と木戸は一寸笑つて、『併し僕などよりも、君は尙大變だらう』

『ああ、大變でない事もないね。』

『君は負擔が多いからね』

『ああ、併しそんな事は仕方がないからね。誰だつて、自業自得なんだもの』

自分は前にも一寸書いたやうなA出版社の失敗のために、自分としてはかなり重荷な負債を背負つてゐた。一寸小說

の原稿料では、返して行く事が出來さうもない程度のものだつた。――併しそんな事は、考へればやり切れなくなるが、その程度の負擔のある人間が、世間にはざらにある事を考へると、泣言など云ふ氣にはなれない。
『それに困つた時には、困つた事が次々に起つてね。僕の妹がどうしても良人と別れると云つて歸つて來てしまつたんだよ。最初その良人のところに行くといふ時は、僕等の反對を權はず行つた縁にね。――その良人はとても善人なんだ。とても善人で、おどおどして、正直者なんだが、そこが最初妹を引きつけて、やがて妹を飽きさせた點かも知れないがね。――とても頼りとならなさうな感じはあるんだが』と木戸はいろいろな負擔が、一時に心を壓して來るのを、一寸訴へるやうな眼付をして、『僕は今親父が生きてゐてくれたら、どんなに好いかと思ふね。もつとも、僕の親父も善人であつたばかりで、現實的にどういふ力も持つてはゐないが、併し親父が生きてゐたら、僕は親父にかう云つて訴へたいんだよ。「お父さん、ほんたうにいろいろ困ります」つて。さう云つたら、親父は「まあよし、まあよし」と云つてくれるだらうと思ふんだ。「まあよし、まあよし」とね。僕は唯さう云つて貰ひたいんだ。實際親父の外にはないからね。僕が怒つたやうな顔をして、「いろいろ困ります」と云つても、「まあよし、まあよし」となだめてくれるのはね』
『ははは』と自分は笑ひ出した。この舊友の話は、自分に涙を流させるか、笑はせるかどちつかだ。自分は今涙ぐみたくはない。そんな事はあまりに困る話だ。だから笑つてしまつたのだ。『君の話は、俺には苦手だね。君の話は俺に里心をつかさせるからね。俺は後を見ずに、故郷を見ずに、前へ、前へと歩いて行かうとしてゐる放浪者なんだ。それを君の話は、俺の後髮を引くからね』
自分は再び笑ひ出した。木戸も笑ひ出した。けれども、笑つてゐる間に、彼も自分もセンチメンタルになつて來た。
十五年前の、彼の端麗な學生服の秀才姿が、笑つてゐる間自分の眼先にちらついた。自分は、この十五年の間に、互に

隨分いろんな事があつたものだねえ、と云はうと思つた。が、今の場合さういふ言葉は、自分の心には益々苦手だ。
そこで、

『紅茶を』と女給に云つた。

お茶が來た。自分はてれ隱しにそれをひと息に飮みほした。飮みたくもないのに飮んだので、腹ががばがばした。

笑つた後で、木戸はしばらく默つてゐたが、ふと思ひ出したやうに、

『あのCね。彼はたうとうほんとうに發狂したさうだよ』

『さうかね。やつぱりほんものになつたかね?』

このCといふのも我々の學校時代の友人の一人だつた。Cは或政治家のひとり息子でその政治家が死んだ後、母の手で育てられた。佛教信者の母は、ある寺を貰つて、剃髮して、子供の成長を待つた。子供がえらくなりますやうにと、毎朝佛樣に祈つてゐた。――その子供に對する女らしい、狹い愛情と野心とが、始終Cを突ついてゐたに違ひない、毎朝狂氣のやうに、えらくなりますやうにと子供の事を佛樣に祈つてゐる母を、若し我々が自分の母に持つたから、こんなやり切れない事はないだらう。『えらい』とはどういふ意味のえらさかは知らないが、子供がえらくなるやうにと狂氣のやうに祈られたら、我々だつてへんになつて來る。

『やつぱり母親が惡いんだね』と木戸は云つた。

『ああ、やつぱり母親が惡いんだよ』と自分も云つた。けれども、『えらさ』がどふいふつもりであるか、彼女自身の剃髮も、そのわけのわからない子供の立身榮達を佛樣に祈るためであるのか、所謂『尼』になつてもと云ふ奴なのか、そんな事はよく解らないが、併しその母親の野心がどんな種類のものであつても、それだけ熱心に望みをかけてゐた子供

に、たうとう發狂された彼女の身の上は、同情しないではゐられなかつた。

『それからね、〇ね、あれはたうとう肺が惡くて立てなくなつたよ。子供や細君が氣の毒でね』

『……』

『それからね……』

『もう止さうよ。そんな話は、もつと違つた話をしようぢやないか。もつと明るい話をしようぢやないか』

『うん、さうだね』

木戸も自分の氣持ちに氣がついたらしく輕く笑つて、そしてもうそれ以上いろいろな事を語らなかつた。

二人は往來に出た。ペエヴメントの上には、洋裝した日本の娘たちが、三三五五打ちつれて、笑ひ興じながら、幾組も幾組も通つて行く。

『こんなのはどうだい？』と自分は笑ひながら、さつき木戸に會ふ丁度前の瞬間に口吟んでゐた文句を又口吟んで見た。

日本の娘達は、
大根のやうな足をして、
眼をなくなして笑つてゐる。

『どうだい、こんなのは詩にはならないかね』

『そんなのは詩にならないよ。君の頭では詩が出來ないよ』

『さうかな、出來ないかなあ』

省線に乘る木戸と自分は、新橋驛で別れた。

四

自分は未だ歸つて机に向ふ氣が出ないので、新橋と土橋の間の橋の側にあるつり堀に行つて鯉を釣つた。つり堀と云つても、四つ針で引つかける引つかけ釣である。魚の口に針を引つかけて、魚があふあふ苦しがつてゐるのを見るのは、決して好い氣持はしない。併し最初は可哀さうでも、釣り始めて見ると、どうかしてつり上げてやらうと云ふ氣になつて來て、一寸の間可哀さうなのを忘れてしまふ。自分は一番大きな鯉に引つかけた。四百匁位あらうといふ奴である。自分は實はこの引つかけ釣はそれが始めてではなかつた。自分は先日から、散歩の序でに度々このつり堀にやつて來て、この殘酷な遊びを試みてゐたのである。そしてこんな事は自慢にはならないが、自分はかういふ種類の遊びにかけては、妙に上達が早い。自分は此處ではもう先方から商賣にならないと云つて、斷られる種類の名人格になつてゐた。いや、恐らく自分がそこに來る客の中で、一番この遊戲が上手だつたかも知れない。――自分は釣つた魚を持つて歸らない約束の下に、そこで釣る事をゆるされてゐた。――で自分は四百匁ばかりの鯉に引つかけながら、かなり得意で、その鯉の荒れるままに、糸をゆるめたり張らしたりしてゐた。大きな鯉は糸を切らうとして、桶中を荒れまはつた。自分はそれを次第々々に弱らせて、たうと動かなくなつたところを、引揚げにかかると、その時、引つぱられた魚の口が引つつれてのびて行くのを見た一人の男が、自分の後から、

『ああ、鯉もやり切れないな』と云つた。

『そんな事を云つてはいけない。そんな事を云つてはいけない』自分はいきなり竿を水の中に投げ込んでしまつて、後を振向きながら云つた。『可哀さうな事はよく解つてゐるんですよ。それを我慢して釣つてゐるんだから、さういはれると、一遍にもう釣れなくなつてしまふ』

自分はさう云ひながら、そこに立つてゐる洋服姿の五十位の紳士の顔を見て苦笑した。鯉の唇の引つぱられてのびた感じが、一遍に自分の身内に傳はつた。自分はぶるぶるつと身震ひした。

『いや、どうか私などにはお構ひなく釣つて下さい』

『いや、釣らない方がほんたうなんです。釣らない方がほんたうなのです』

自分はてれ隠しに、にやにやと笑つて見せた。そして金をその店のかみさんに渡すと、逃げるやうにそこを立去つた。自分の釣るのを好奇的な眼付で見てゐた澤山の人々が、物足らなさうな顔をして、この突然の釣竿の放棄者の顔を、不思議さうに見てゐた。

自分はそこから新橋の停車場の前を通つて、烏森の方へ行きかけると、そこの小さい神社の縁日だと見えて、夜店や見世物小舍が並んでゐた。その中に小さな小舍で、犬の藝當を見せてゐる小舍があつた。

未だ歸つて、机の前に坐る氣のしない自分は、その小舍の中に這入つて見た。自分は子供の時分に、かうした見世物をよく見た事がある。自分は二十數年前に見たかうした種類の見世物が、今も尚、何處に棲息してゐるものか、かうしてかういふところに現れるのを、何となくなつかしいやうに思つた。

犬は五匹しかゐなかつた。それは支那種の犬らしい、毛のぼやぼやと長い、短い耳の一寸垂れた、白黒の斑犬で、どこか狆に近い種類のものだつた。色の黒い一人の男が、一本の棒を持つて、その犬共を指揮してゐた。

それは地面から三尺ばかりのところに、竹の輪がぶら下つてゐて、その輪を犬共は、順々に、飛んで拔けると云つたやうな藝當だつた。

『太郎、次郎、三郎、五郎、さうら、みんな順々に整列した、整列した』と指揮の男は大きな聲で怒鳴ると、犬共は身體の大きさの順に、空地の端に一列に並んだ。『此處に御覽に入れまする藝當は、空中は何とかの筒拔け！』と大きな聲で云つたが、それが餘り早口なので、何の筒拔けと云つたのか、よく聞きとれなかつた。それから犬に向つて、『さあ、太郎さんから、順々に始めたり、始めたり！』

すると、犬は順々に、ちよこちよこ、ちよこちよこと駈けて行つて、身輕に、ぽんと飛び上つて、その輪の中を拔けては、又前のところに歸つて行つて、一列に整列する。それは無邪氣で可愛らしい藝當だつた。すると、最後の一番小さい一匹、つまり五郎と呼ばれてゐる犬が、自分の番が來ても、駈け出して行かないで、そつぽを向いて、ぽかんと突つ立つてゐた。

『さあ、五郎さん、又お怠けが始まつたか。皆さん、この犬は大の不勉强家でして、時々かうして駄々をこねます。――そら、五郎さん、五郎、こら、五郎！』

指揮者の聲がだんだん荒々しくなつて來ると、『五郎』は指揮者の顏を、上眼使ひにちらりと見た。そして哀願するやうに、耳を下げ、尻尾を下(した)さがりに、氣のなさゝうに一寸振つた。――その樣子に見物人がどつと笑つた。

『五郎、こら、早う、早う』少しあはて氣味の指揮者は、お國訛りを出して、怒つたやうに怒鳴つた。そして手にしてゐた指揮棒を心持振り上げ加減にして見せたので、『五郎』は指揮者の顏から指揮棒に、ちらりと眼をくれて、それから厭々さうにちよこちよこと駈け出した。けれどもその駈け方が餘りのろのろしてゐるので、輪の下まで行つても、ぴよ

んと飛び上る動勢がついてゐないのか、上を見ただけで、輪を飛び拔けずに、そのまま戻つて來てしまつた。――そこで見物人が又どつと笑つた。

『五郎、お前は何といふなまけ者だい。こら、ちやんと飛んだり、飛んだり……』

指揮者は再び棒をふり上げた。そこで『五郎』は再びちよこちよこと駈け出したが、どうしても飛び上る氣がしないのか、又輪を見ただけで、そのまま戻つて來てしまつた。

『五郎、ふざけるな……畜生！どうしても飛ばない氣なら、かうしてくれるから』

指揮者は一二歩『五郎』の方へ進みよつて、今度はほんたうに打ちさうな氣配で、棒を高く振り上げた。『五郎』はそれを見ると、もう絶體絶命といふやうな顏をして、ちよこちよこと今度は少し元氣を出して駈け出し、ぴよいと輕く輪の中を飛び拔けた。――見物人はわつと笑ひながら拍手した。

『あの犬は疲れてゐるんだ』と自分はそれを見ながら考へた。『多分夕方から、ああして飛んでゐるのだらう。厭なのも無理はない。厭なのも無理はない！』

自分は飛ばうと思へば飛べないことはないのに、イヤでイヤで莫迦らしくてならないので、その力を出し惜しみてゐる、この藝當についてハリのない犬の氣持を考へると、をかしくもあり、いぢらしくもあり、又頬笑まれもして來た。――その身體つき、顏つき、眼つきに、それが如何にもはつきりと、デリケエトに出てゐる。今はもう午後十時だ。五時頃からこの小舍がかかつたとして、五時間もあんな事をやつてゐては、疲れもし、莫迦らしくもなるのは無理がない。

自分はその小舍を出て、自分の宿である待合の方へ歸つて行きながら、『犬が疲れてゐる』と呟いた。

自分の今の氣持と丁度同じやうに、あの犬の氣持は疲れてゐるに違ひない。どうしてものつぴきならないドタン場まで行かないと、あの空中の竹の輪を飛び拔けようとしない。――けれども、結局飛び拔けたから愉快だ。自分も一つこれから歸つて、竹の輪を飛び拔けようか。もう最後のドタン場だ。どうしてもかうしても、最後の空中飛躍を試みなければならない。

自分は疲れた犬と疲れた自分とを、冗談めかしく並べて考へながら、宿の方へ歸つて行つたが、机の上の原稿用紙を考へると、だんだん冗談にしてはゐられない氣持になつて行つた。(十四年七月)

編輯だより

◇夏はいい。しかしいろ〱のことが放縦に流れる恐れがある。食、性のことに於てことに然りである、人間がある理想を貫行するに一ばん大事なことは慾望の制御であり、整理である。

◇自然にしたしむことが、どれだけ頭腦を簡淨にし、どれだけ肉體、精神の力を蘊蓄することか、試みに汝の最愛するものと二ケ月を別離せよ。別離して邪念に堪え、自然の快適を、自然そのままにおとなしくうけ入れよ。または天帝の打下ろす苦難と絶えず打戰つて見よ。直截に云へば夏は斷じて異性を遠離せよ。そして月下に瞑想せよ、赤熱に汗せよ。煙草か、酒かの一つをやめよ。のんでも大思案にたへ得るやうに心がけよ。

◇社交は旦那ばかりのもので、後には淋しい家族がのこされている。しつこい一度の會食をやめれば一家で「更科」の團欒ができる。脂肪よりあつさりしたものにしたしめ。しかしあまり肉體を働かす人には無理なことではあるが。夏は『祖先まつり』の時である。故郷の山川に老ひませる親たちに茗茶一服まゐらせる夏の朝である。

◇俳味のないものには驚天動地の仕事はできぬ。慾でからまる政客に何の溜飲の下がる大が遂げられやう。俳句はつくれても俳の眞髓に徹することの出來ぬ現代の俳人たちである。俳は餘技ではない、全生命のあらはれとしての俳である。全生命より阿堵物をありがたがる、大家の俳人では俳道が泣いてしまう。

◇達磨は俳道はわからぬにしても俳味はある。義一に至りては市井の賈人である。政治界が熙趣味に逆轉したことは嘆はしい。城山の西郷は俳材としてはまづいが『武村の吉』は俳材として上乘である。『乾坤一擲』の大壯圖の裡にはさびしい秋風がみちみちておる。一家離散の姿が見えすぎるほど見えておる。

◇『武村の吉』となる俳の心があつてこそ明治の大革新ができた。

◇世の變り行く相は藝妓にもよく反映する。昔は「地位や名譽に」云々と江戸俠の一部のいい所を見せたものだが、近時は人間といふ大事なものをおき忘れて人爵とか金ばかりを狙つておる。狙ふといふ字から才扁だ、人間でない所を狙つたものの末路は蕭條たるにきまつている。政黨總裁にも才扁を狙ふものではない。

◇ふり返つて――自分はあの仕事をした――と微笑する位の仕事は一度は誰人もやるべし。この微笑の合作で世は進化する。復、ふりかへれば政治家の仕事なぞは生命の短かいさびしいものだ。

◇今秋本社より雜誌『自然科學』が發行される。そして當分一ケ年四回のつもりだ。斯界に於ける世界的權威たらしむべく編輯監督も第一人者を選ぶ。詳細は九月號の本誌で發表する。

◇それから第二次の現代代表短歌集も九月一日發行する。白秋、晶子、空穗、牧水、夕暮、善麿の六氏が選ばれた。

◇本誌に連載された『女工哀史』が同じ名で、單行本として發行された。六百枚以上の雄篇である。著者は小學だに卒へぬ十五六年間紡績工としての悲壯なる體驗者である、數十萬女工が牢獄以上の壓迫と、豺狼以上の男工の誘惑とを如實に目擊した人だけにその文字が句々血に泌んだものだ。我國の勞働記錄として無二の文獻。

◇尙文壇の一大收穫であつた、谷崎潤一郎氏の『痴人の愛』が發行された。これも七百枚の一大長篇であり、同氏が二ケ年間の努力を

傾けた力作である。芥川龍之介氏の『支那游記』も八月早々發行される。その他トロツキー原著『革命と文學』は茂森氏によりて譯出された。文壇人にはいい讀みもの。

◇末弘嚴太郎氏『法窓閑話』の一著が七月下々本社より發行される。

◇社會科學は八月號に至りいよ〳〵充實して來た。今中次麿、ヴヰルブラント、高橋誠一郎、高田保馬、瀧川政次郎、平野義太郎、田中耕太郎氏等が堂々轡を並べて執筆し、他の群雜誌を拔くこと數等。殊に『著書解題』には鈴木義男氏以下の新鋭が之を擔當してゐる。

◇『改造』の九月特別號の論文欄は近來になく雄篇大作が登載され、創作も精選せる力作が見られる。幸田露伴氏は數年來の思索になる大作「蒲生氏郷」を本誌九月號に執筆すべく信州へ赴いた。伊達政宗との對陣が面白く見られるだらう。

◇本稿締切りに米國オレゴン洲で猛烈な排日運動が起り邦人の死傷、損害夥多ありとの報が飛來した。我國でも我慢に我慢は重ねているのだ。腹背に同時に敵を受けつつ我國は多難である。內には不景氣と戰ひつつあるのだから神經衰弱にかからぬやうにしたい。

◇と思ふと、天の一方には日英同盟が形を變へて再現するとの噂が立つ。華府會議の將來はどうなる。

失業痛苦の體驗記錄
――原稿募集――

空前の經濟恐慌は我國にも百萬の失業を生みました。そして續々增加の形勢があるのは經世家の深く憂とする所です。本誌は玆に見る所あり、失業者の深刻なる體驗の記錄を募ります。左の項御一讀を願ひます。

枚　數　四百字十五枚以下
原稿には封皆に失業體驗記錄應募と記載すること

締切期日　八月卅一日

發　表　十月號『改造』誌上で　します。發表の分には稿料を呈します。原稿は一切返還せず。

『改　造』編　輯　局

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	増大號共郵稅不用
壹ケ年	拾壹圓廿錢	増大號共郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾四年七月廿日　印刷納本
大正拾四年八月一日　發　行

（價八十錢）

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯發行兼印刷人　平田貫一郎
東京牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所
東京芝區愛宕下一ノ一
改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

岸田劉生著

圖畫教育論

菊判美本
三色判廿九葉
凸判四葉入

定價參圓五拾錢
送料二十三錢

圖畫教育の一大革命著

畫壇の巨擘岸田氏が藝術教育を根本的に革新する意味にて書いた一大名著である。現今の行詰れる學校の圖畫教育は本書を得て暗夜に燈火を得たやうにその目標を摑み得たと共に一般の家庭に於ても玆に兒童に對する藝術教育、圖畫教育の確固たる一大信念を明示された。殊に第二章「我子への圖畫教育」に於て著者が第一章に於て説ける理論を實地に適用したる詳細なる實驗論は、眞の美とは何ぞや、圖畫教育は何を目標とすべきか？如何にして兒童を其目標に導くべきかを會得せしめるに充分である。學校教師は勿論吾が子の情操教育に注意する父兄は一本を是非備へて下さい其の圖畫教育に一大革命を惹起すべきは信じて疑はない。

（内容概回）第一章圖畫教育私見（イ）圖畫教育の目的（ロ）圖畫教育の方法（ハ）兒童作品の審査標準に就て（ニ）描畫用材の批評。第二章我子への圖畫教育。（挿畫五十四面）

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二


涼を趁ふて海に山に
避暑旅行の御用意は三越呉服店
海に、山に避暑旅行の好季節さなりました。三越では其の御用意の爲め、品が良くて、値段の廉い、御携帶に便利な旅行用具を初め、新製の海水浴用品、登山用具、食料品、お子様用品、新刊圖書等、悉く取揃へました。快適な避暑旅行には三越の品を御奬め申します
◆島に關する展覽會……（八月一日より同十五日まで）
越
東京
三越呉服店

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

株式會社秀英舎印刷